

国指定史跡

武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書

I

—史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査—

〔遺構編〕

平成 28 年 3 月

国分寺市教育委員会

序

武蔵国分寺跡（僧寺地区）は、武蔵国分尼寺跡と一体で（指定当時は国分寺跡関係の建築物群として指定）大正11年に国の指定を受けた史跡であり、東京都指定史跡東山道武蔵路などととも、国分寺市の主要な遺跡として、また古代武蔵国の歴史を知る上で重要な遺跡です。

国分寺市教育委員会では、歴史遺産と自然環境に恵まれた史跡を「歴史のまち国分寺」のシンボルとして、周辺の都市化から保護、保存し、史跡公園として整備・活用するための環境整備事業を推進しています。

広域学術調査として行った寺域確認調査の成果をもとに、昭和62年から平成2年にかけて策定した保存管理計画、整備基本構想、整備基本計画に基づき、平成4年度より尼寺地区を対象に事前遺構確認調査と整備工事を行い、平成15年度4月に国分寺市立歴史公園 武蔵国分尼寺跡として開園を迎えました。

引き続き、僧寺地区の保存整備事業を行うため、平成14年度に現況にあった僧寺地区新整備基本計画を策定しました。これに基づいて平成15年度より保存整備事業の一環として、主要遺構の確認調査を国庫および東京都の補助事業として実施することとしました。

調査の実施は、国分寺市が史跡武蔵国分寺跡の広域学術調査や史跡保存整備に伴う調査、並びに市内所在遺跡の各種開発に伴う緊急調査等を行うために設置した国分寺市遺跡調査会があたりました。

調査にあたりましては、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導、ご助言を賜り、また地元住民をはじめ関係各位のご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

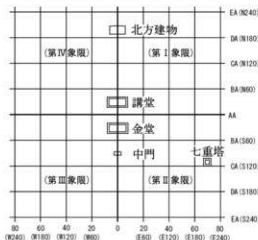
国分寺市教育委員会

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市に所在する国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡（僧寺地区）の史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査報告書の第1分冊で、遺構の成果をまとめたものである。今後、第2分冊として遺物編（平成29年度）、第3分冊として総括編（平成30年度）を順次刊行する予定である。
2. 史跡保存整備事業は、文化庁の「国宝重要文化財等保存整備費補助金」事業の採択を受け、事業費の1/2を国、1/4を東京都および国分寺市がそれぞれ負担した。
3. 事前遺構確認調査は国分寺市教育委員会職員が調査担当者となり、発掘および報告書作成にかかる諸作業は国分寺市遺跡調査会へ委託した。発掘調査は平成15～24年度、記録図面・写真等の整理作業は平成25・26年度、報告書の印刷は平成27年度にそれぞれ行った。
4. 発掘調査、記録図面・写真等の整理作業および本書の編集・執筆は、国分寺市教育委員会ふるさと文化財課の中道誠が担当し、課員がこれに協力した。なお、平成27年度在籍のふるさと文化財課職員は以下の通りである。
課長兼文化財普及担当係長 島崎進一、文化財保護係長 松本 徹、同係員 中道 誠、寺前めぐみ・福田信夫・吉田澄音・鈴木誠治・田中恵美・米村 創・石井秀和、文化財保護担当係長 諸橋広光、史跡係長 依田亮一、同係員 野中太久磨・増井有真・中元幸二・島田智博・中野 純
5. 本書の作成にはMicrosoft®Word®・Excel®、Adobe®Illustrator®・Photoshop®・Indesign®の各ソフトを用いた。
6. 本書にかかる記録図面・写真等は、一括して国分寺市教育委員会で保管している。
7. 発掘調査の成果については、これまで各年度に刊行してきた調査概報の他に、一部は各地の遺跡発表会・研究雑誌・武蔵国分寺跡資料館だより等でも公表してきたが、本報告をもって現時点での正式報告とする。なお、調査概報や成果の概要をとりまとめた市の刊行物には、以下に掲げたものがある（国分寺市教育委員会および国分寺市遺跡調査会による書籍）。
福田信夫・中道 誠 2006『武蔵国分寺跡発掘調査概報 32—史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区） 保存整備事業に伴う事前遺構確認調査 平成15・16年度—』※南門南方（加籠地外）、中門東、塔跡2の調査および地下レーダー探査による予備調査。
中道 誠 2008『国指定史跡 武蔵国分寺跡—平成17・18年度 保存整備事業に伴う事前 遺構確認調査—』
※中門、塔跡2および周辺、金堂前面の調査
中道 誠 2009『国指定史跡 武蔵国分寺跡—平成19年度 保存整備事業に伴う事前遺構 確認調査—』
※塔跡1西方、中門、金堂前面、南門の調査
中道 誠 2010『国指定史跡 武蔵国分寺跡—平成20年度 保存整備事業に伴う事前遺構 確認調査—』
※南門、金堂前面、講堂、中核部区画北辺の調査
中道 誠 2011『国指定史跡 武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡—平成21年度 保存整備事業に伴う事前遺構確認調査—』
※講堂、金堂の調査
中道 誠 2012『国指定史跡 武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡—平成22年度 保存整備事業に伴う事前遺構確認調査—』
※金堂、鐘樓の調査
中道 誠 2013『国指定史跡 武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡—平成23年度 保存整備事業に伴う事前遺構確認調査—』
※鐘樓、経蔵東、金堂・講堂堂間の調査
依田亮一 2014『国指定史跡 武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡—平成24年度 保存整備事業に伴う事前遺構確認調査—』
※中核部区画施設の調査
太田和子・増井有真 2015『見学ガイド 武蔵国分寺のはなし』（増補改定版）
国分寺市教育委員会 2015『国分寺市制施行50周年記念 国分寺の今昔』国分寺市
武蔵国分寺跡資料館 2010～2013『発掘調査の窓 国指定史跡武蔵国分寺跡の調査 VOL.1～13』『武蔵国分寺跡資料館だより』
創刊号～第13号
8. 報告書作成にあたっては関係機関や多くの方々にご協力、ご教示を賜ったが、本書では割愛し、総括編（平成30年度）に掲載する予定である。

凡 例

- 武蔵国分寺跡では、僧尼寺の広大な範囲を統一して調査するため、僧寺の伽藍中心軸線を基準に、金堂心の北 26.276 m の中軸線上の点（コンクリート埋設）を座標原点とする局地座標系を用いている。僧寺中軸線は、真北から $7^{\circ} 07' 01''$ 、磁北から $0^{\circ} 37' 01''$ それぞれ西偏する。また、本文中および遺構配置図表示（グリッド）の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表す。最小の発掘区は 3×3 m とし、その南と西に接する基準線に与えた記号の組み合わせにより呼称する。東西基準線はアルファベット 2 文字で表す。1 文字目は原点を A として 60 m 毎に以下 B・C・D・…とふり、2 文字目はその内を 3 m 毎に 20 区に分け A～T までふる。南北基準線は数字で表す。原点を 0 とし、以下東西とも 3 m 毎に 1・2・3・…とふる。このようにして発掘区を呼称すると、中軸線 AA と 0 に接する区を除き、4 つの象現に同一名称があることになるので、調査地区の記号に象現を入れ MK（武蔵国分寺跡の略）I～IV と呼んで区別する。本報告では中心点からの距離を N・S・W・E で表し、併用する。



第 1 図 調査基準線の設定

- 調査における写真記録は、原則 2 種類の 35 mm フィルム（カラーポジ・モノクロネガ）とデジタルカメラを併用して行った。また、場合によっては中判フィルム（モノクロネガ）にて記録した。
- 図面については、全体図は 1/100、遺構配置図は 1/20、断面図は 1/20 で記録している。
- 遺構は遺跡をとおしてほぼ発見順に連続番号を付し下記の遺構記号を冠して表示した。
SA 塼・柱列 SB 掘立柱・礎石建物 SD 溝 SF 道路・通路 SK 土坑
SI 竪穴建物 SX 特殊遺構 P 小穴・小柱穴
- 遺構の基本的なスクリーントーンの指示は以下のとおりである。なお、カラー図面や特殊な遺構等において個別に示しているスクリーントーンは各凡例による。

	III b 層		III c 層
	柱穴跡		硬化面
	IV・V 層		カク乱
- 遺構図面の縮尺は逐一スケールバーで示した。また、いずれも特記のない限り図面上が座標北である。

目 次

本文目次

序	i
例言.....	iii
凡例.....	iv
第1章 調査に至る経緯と調査の経過.....	1
第2章 遺跡の位置と環境	4
1. 位置と地理的環境.....	4
2. 周辺の遺跡と歴史的環境.....	6
第3章 遺跡の概要	9
1. 調査のあゆみと現状.....	9
2. 武蔵国分寺の概要.....	11
3. 層序.....	16
第4章 検出された遺構	17
第1節 伽藍中核部の調査	
1. 金堂地区.....	17
2. 講堂地区.....	23
3. 鐘楼地区.....	29
4. 経蔵地区.....	31
5. 堂間地区.....	32
(1) 中門・金堂間	32
(2) 金堂・講堂間	33
6. 中門・伽藍中核部区画施設地区.....	36
(1) 中門・区画南辺	36
(2) 区画南東	43
(3) 区画南西	45
(4) 区画北西	46
(5) 区画北辺	48
第2節 伽藍地内の調査.....	49
1. 塔地区.....	49
(1) 塔1 (SB223塔)	49
(2) 塔2 (SB224塔)	52
(3) 塔2周辺 (SB224塔周辺)	57
(4) 塔周辺 (予備調査).....	58

2. 南門地区	58
第3節 伽藍地外の調査	60
1. 塔地区南方	60
2. 南門地区南方	60
第5章 結語	61
引用・参考文献	65
報告書抄録	281
奥付	

挿図・表目次

第1図 調査基準線の設定	iv	第9図 推定付属諸院の位置	13
第2図 史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）事前遺構確認 調査調査地点位置図	3	第10図 基本土層図	16
第3図 国分寺市の地理的環境	4	第11図 伽藍中核部の既往調査区	18
第4図 遺跡の位置	5	第12図 武蔵国分寺跡（僧寺地区）全景（南から）	67
第5図 国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡 主要伽藍等配置図	7	第13図 武蔵国分寺跡（僧寺地区）全景（東から）	177
第6図 武蔵国分寺の構造と名称	11	第1表 史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）事前遺構確認 調査調査経過一覧	2
第7図 武蔵国分寺変遷図	11		
第8図 尼寺主要遺構全体模式図	12		

図面目次

図面	67 ~ 176
図面 1 金堂地区 講堂地区 昭和31年度調査全体図	
図面 2 武蔵国分寺（僧寺地区）遺構配置図	
図面 3 金堂地区 遺構配置図	
図面 4 金堂地区 トレンチ断面図1	
図面 5 SB217 金堂礎石建物	
図面 6 金堂地区 トレンチ断面図2	
図面 7 金堂地区 基壇版築土	
図面 8 金堂地区 基壇外装	
図面 9 金堂地区 雨落石敷構築土	
図面 10 金堂地区 北面階段・南面階段	
図面 11 講堂地区 遺構配置図	
図面 12 講堂地区 旧トレンチ断面図A・B	
図面 13 講堂地区 旧トレンチ断面図C・D・E	
図面 14 SB218 A講堂礎石建物（創建期）	
図面 15 講堂地区 礎石建物（創建期）礎石据付痕跡	
図面 16 講堂地区 創建期基壇・掘込み地業版築土	
図面 17 講堂地区 創建期基壇外装（西面）1	
図面 18 講堂地区 創建期基壇外装（西面）2	
図面 19 講堂地区 創建期基壇外装（南面）	
図面 20 講堂地区 創建期基壇外装構築（東面）	
図面 21 SB218 B講堂礎石建物（再建期）	
図面 22 講堂地区 再建期基壇・掘込地業版築土	
図面 23 講堂地区 再建期基壇外装（北面）	
図面 24 講堂地区 再建期基壇外装（南面）	
図面 25 講堂地区 再建期基壇外縁構築土1	
図面 26 講堂地区 再建期基壇外縁構築土2	
図面 27 講堂地区 再建期南面階段	
図面 28 講堂地区 再建期北面階段	

- 図面 29 幢竿遺構模式図
 図面 30 SX319 幢竿遺構
 図面 31 SX311・317 土取り遺構
 図面 32 SX318 土取り遺構
 図面 33 SX352 地業遺構・312 不明遺構
 図面 34 鐘樓地区 全体図
 図面 35 鐘樓地区 断面図
 図面 36 鐘樓地区 南側石列・基壇・掘込地業
 図面 37 経蔵地区 全体図
 図面 38 堂間地区 中門・金堂間 遺構配置図
 図面 39 SX302・303・304・305・306 幢竿遺構
 図面 40 SX307 粘土層
 図面 41 中門・金堂間東 遺構配置図
 図面 42 堂間地区 金堂・講堂間 全体図
 図面 43 金堂・講堂間3・4区 遺構配置図
 図面 44 金堂・金堂間1・3区 SF12 通路遺構
 (石列検出状況)
 図面 45 金堂・講堂間1・2・5・6区 遺構配置図
 図面 46 SX324 幢竿遺構
 図面 47 SX325・326・327 幢竿遺構
 図面 48 中門および区画南辺 全体図
 図面 49 中門地区 遺構配置図
 図面 50 SB216 中門礎石建物
 図面 51 SB216 中門礎石建物門(礎石掘え方互敷き状況)
 図面 52 SB232 中門掘立柱建物
 図面 53 SA10 掘立柱塼
 図面 54 SA33 掘立柱塼
 図面 55 SA10 掘立柱塼 1～4
 図面 56 SA33 掘立柱塼 1～5
 図面 57 SD397 溝
 図面 58 SD194 溝
 図面 59 SD197 溝
 図面 60 SX249 築地塼
 図面 61 中門地区 その他の遺構1 SD398 溝
 ・SD410 溝・SK3282・SK3335
 図面 62 中門地区 その他の遺構2 SK3439・SX279
 ・SX292
 図面 63 区画南辺 遺構配置図1
 図面 64 区画南辺 遺構配置図2
 図面 65 SA33 掘立柱塼1
 図面 66 SA33 掘立柱塼2
 図面 67 SX249 築地塼1
 図面 68 SX249 築地塼2
 図面 69 SA32 櫓列
 図面 70 SD194 溝
 図面 71 SD194 溝
 図面 72 SD396 溝・SD197 溝
 図面 73 区画南辺 その他の遺構 SK3273～SK3275
 ・SK3283
 図面 74 区画南東 遺構配置図
 図面 75 SA33・36 掘立柱塼
 図面 76 SD194・425・426 溝
 図面 77 区画北東 遺構配置図
 図面 78 区画南西 遺構配置図
 図面 79 SD259 溝 SA35 掘立柱塼
 図面 80 区画北西 遺構配置図
 図面 81 区画北西 平成24年度調査区
 図面 82 SA12・34 掘立柱塼 SX336 築地塼
 図面 83 SD424・423 溝
 図面 84 SX337 特殊遺構
 図面 85 区画北辺 遺構配置図
 図面 86 塔地区 調査概略図
 図面 87 塔地区 塔1周辺遺構配置図
 図面 88 塔地区 塔1 基壇版築土
 図面 89 塔地区 塔1 SB223 塔礎石建物 SD413 溝
 SX30 幢竿遺構
 図面 90 塔地区 塔2周辺遺構配置図
 図面 91 塔地区 塔2 SB224 塔礎石建物
 図面 92 塔地区 塔2 SB224 基壇・掘込地業版築土1
 図面 93 塔地区 塔2 SB224 基壇・掘込地業版築土2
 図面 94 塔地区 塔2 SB224 基壇・掘込地業版築土3
 図面 95 塔地区 塔2 SB224 版築構築状況図
 図面 96 塔地区 塔1・塔2重ね図
 図面 97 塔地区 SX282～284 幢竿遺構
 図面 98 SK3381 土坑 SX269 幢竿遺構・SX270 柱穴
 図面 99 SK3263・3264 土坑
 図面 100 SSK3254～3258・3260・3266・3276 土坑
 図面 101 SK3265・3277～3279 土坑
 図面 102 SX268 不明遺構
 図面 103 塔2周辺遺構配置図1
 図面 104 塔2周辺遺構配置図2
 図面 105 塔地区 地下レーダー探査1
 図面 106 塔地区 地下レーダー探査2
 図面 107 南門地区 遺構配置図
 図面 108 南門地区 SB215 南門礎石建物 SX316 橋脚
 図面 109 SD23 溝
 図面 110 SD410 溝 SX315 硬質面
 図面 111 伽藍地外

図版目次

図版..... 177 ~ 280

図版 1	金堂地区 1	図版 42	講堂地区 22	図版 82	中樞部区画施設 14
図版 2	金堂地区 2	図版 43	講堂地区 23	図版 83	塔地区 1
図版 3	金堂地区 3	図版 44	講堂地区 24	図版 84	塔地区 2
図版 4	金堂地区 4	図版 45	講堂地区 25	図版 85	塔地区 3
図版 5	金堂地区 5	図版 46	講堂地区 26	図版 86	塔地区 4
図版 6	金堂地区 6	図版 47	講堂地区 27	図版 87	塔地区 5
図版 7	金堂地区 7	図版 48	講堂地区 28	図版 88	塔地区 6
図版 9	金堂地区 9	図版 49	講堂地区 29	図版 89	塔地区 7
図版 10	金堂地区 10	図版 50	鐘樓・経蔵地区 1	図版 90	塔地区 8
図版 11	金堂地区 11	図版 51	鐘樓・経蔵地区 2	図版 91	塔地区 9
図版 12	金堂地区 12	図版 52	鐘樓・経蔵地区 3	図版 92	塔地区 10
図版 13	金堂地区 13	図版 53	鐘樓・経蔵地区 4	図版 93	塔地区 11
図版 14	金堂地区 14	図版 54	鐘樓・経蔵地区 5	図版 94	塔地区 12
図版 15	金堂地区 15	図版 55	堂間地区 1	図版 95	塔地区 13
図版 16	金堂地区 16	図版 56	堂間地区 2	図版 96	塔地区 14
図版 17	金堂地区 17	図版 57	堂間地区 3	図版 97	塔地区 15
図版 18	金堂地区 18	図版 58	堂間地区 4	図版 98	南門地区 1
図版 19	金堂地区 19	図版 59	堂間地区 5	図版 99	南門地区 2
図版 20	金堂地区 20	図版 60	中門地区 1	図版 100	南門地区 3
図版 21	講堂地区 1	図版 61	中門地区 2	図版 101	伽藍外
図版 22	講堂地区 2	図版 62	中門地区 3	図版 102	昭和 30・40 年代の調査 1
図版 23	講堂地区 3	図版 63	中門地区 4	図版 103	昭和 30・40 年代の調査 2
図版 24	講堂地区 4	図版 64	中門地区 5		
図版 25	講堂地区 5	図版 65	中門地区 6		
図版 26	講堂地区 6	図版 66	中門地区 7		
図版 27	講堂地区 7	図版 67	中門地区 8		
図版 28	講堂地区 8	図版 68	中門地区 9		
図版 29	講堂地区 9	図版 69	中樞部区画施設 1		
図版 30	講堂地区 10	図版 70	中樞部区画施設 2		
図版 31	講堂地区 11	図版 71	中樞部区画施設 3		
図版 32	講堂地区 12	図版 72	中樞部区画施設 4		
図版 33	講堂地区 13	図版 73	中樞部区画施設 5		
図版 34	講堂地区 14	図版 74	中樞部区画施設 6		
図版 35	講堂地区 15	図版 75	中樞部区画施設 7		
図版 36	講堂地区 16	図版 76	中樞部区画施設 8		
図版 37	講堂地区 17	図版 77	中樞部区画施設 9		
図版 38	講堂地区 18	図版 78	中樞部区画施設 10		
図版 39	講堂地区 19	図版 79	中樞部区画施設 11		
図版 40	講堂地区 20	図版 80	中樞部区画施設 12		
図版 41	講堂地区 21	図版 81	中樞部区画施設 13		

第1章 調査に至る経過と調査の経過

天平13(741)年の詔により鎮護国家の招来を目的に諸国60余国に建立された国分寺は、僧寺(金光明四天王護国寺)と尼寺(法華滅罪寺)が併置され、国府とともに地方統治のための重要な機関であった。

武蔵国分寺跡は江戸時代末期より文字瓦等の出土で注目され、明治36年の重田定一及び柴田常恵の実地踏査成果をもとに、大正7年の沼田頼輔、さらには大正9年の東京府嘱託高橋源一郎等による追従調査によって遺構の良好な保存が明らかになり、大正11年10月12日に「史蹟名勝天然記念物保存法」による国の史跡指定を受けるとともに翌年の12月13日に当時の国分寺村が管理者に指定された。

史跡の指定範囲は、実地踏査成果をもとに地上観察によって確認された礎石および古瓦の集中する地域を取り込む形で選定されており、指定面積は約94,181.7㎡である。また、指定直後の現状調査にもとづいて礎石の残存する僧寺の金堂・講堂跡と塔跡の一部約5,019㎡が指定の翌年に国有化されている。

武蔵国分寺跡の発掘調査は昭和31年に始まり、昭和33・39～41・44年と断続的に行われてきたが、尼寺跡の住宅化を契機に昭和39～41年まで行われた発掘調査では僧・尼両寺域の計画配置が想定されるなど多大な成果を上げている。

この間、昭和40年から史跡公園化を目標に指定地の公有化事業が始まるとともに翌年に市議会において「史跡公園促進特別委員会」が設置され、文化庁の指導のもとに昭和46年から3ヶ年計画で環境整備第1期工事として僧寺跡中核部の9,963㎡を対象に工事が実施された。ところが、市立第四中学校建設に端を発する武蔵国分寺跡の広域保存をめぐる混乱のさなか史跡整備の方法が問題となり、保存運動の争点の一つになったことから、整備工事は最終の昭和48年予定の金堂基礎復原工事を中断し、翌年、整地及び案内板設置等の工事を行い区切りをつけた。

武蔵国分寺跡の広域保存をめぐる混乱は、昭和49年に国分寺市の武蔵国分寺跡保存基本方針表明を受けて終息したが、以後、この方針を基に文化財課の新設や学芸員の増員、あるいは武蔵国分寺遺跡調査会による広域調査の開始、さらには整備計画策定委員会の条例設置(昭和54年)による史跡整備・博物館建設計画の策定着手などの努力が払われてきた。その中で、史跡整備は昭和49年に開始された第1期調査(寺地・寺域確認を目的)が昭和60年度に終了したことで武蔵国分寺跡の整備・保存に向けての準備が整い、市長総合計画に基づいて昭和62・63年に保存管理計画、平成元年に整備基本構想、平成2年に整備基本計画を各々策定した。この過程で、史跡指定面積は3回の追加指定等によって平成2年度末現在で約103,211㎡(僧寺は80,585㎡、尼寺は22,626㎡)であることが明らかになった。

整備基本計画では、歴史遺産と自然環境に恵まれた武蔵国分寺跡を「歴史のまち国分寺」のシンボルとして多角的に活用できるように、史跡公園と(仮)郷土博物館を一体的に整備すること、整備のイメージを「国分寺崖線の緑を借景とし、壮大な武蔵国分寺の伽藍をイメージした史跡公園」及び「広く市民に親しまれるふるさと公園」とすること、伽藍が最も整った段階を整備の設定年代とすること、等を整備方針の基本理念とし、さらに整備の各部計画では、史跡指定地全域を僧寺跡の4地区と尼寺跡の2地区の計6地区に区分し、各地区の立地条件、特色を生かした整備を行うこと、実施時期はとりあえず尼寺のほぼ全域と僧寺の中心地域を短期整備計画の対象地として平成4年からの予定で尼寺跡、僧寺跡の順に進めること等、が提示された。

整備基本計画に基づき、公有化の進んだ尼寺地区を対象に平成4年度から平成7年度まで史跡保存整備のための事前遺構確認調査に着手した。平成9年度から整備工事を開始、平成14年度に完了し、平成15年度4月に「国分寺市立歴史公園 武蔵国分寺跡」として開園するはこびとなった。

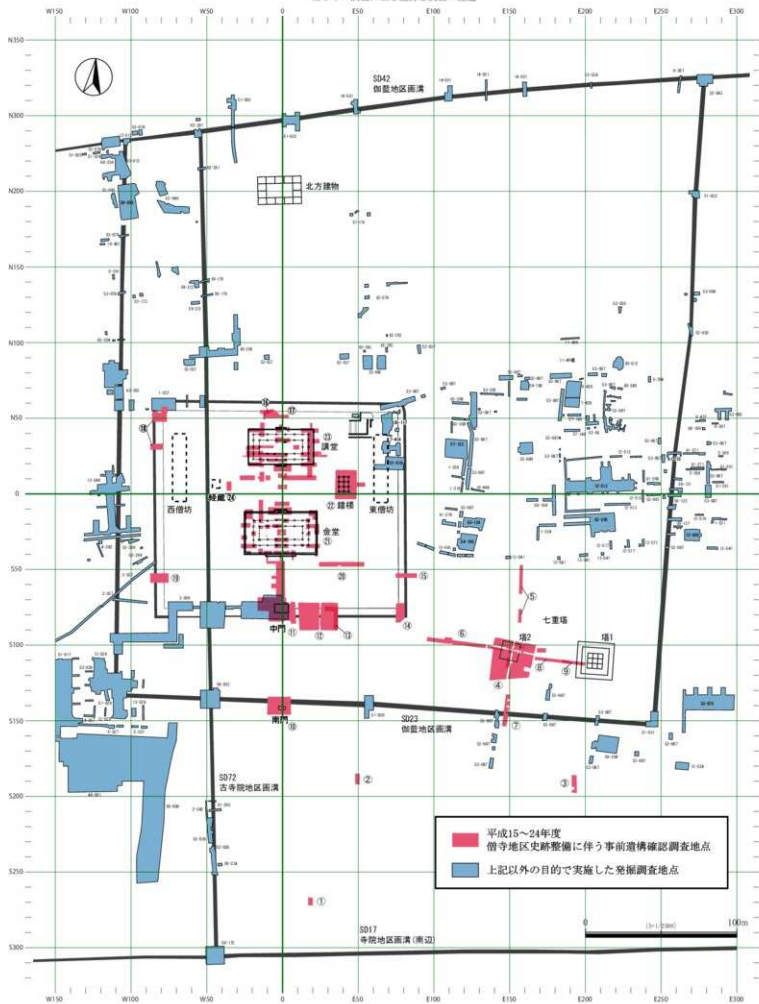
尼寺地区に引き続き、僧寺地区(指定面積は平成15年度末現在、約100,846㎡)の保存整備事業を行う

予定であるが、平成2年に策定された整備基本計画より10年が経過し、この間において、史跡追加指定による整備対象地区の拡大、七重塔南方地区における宅地公有化の進展、西国分寺地区における東山道武蔵路の都史跡指定と保存整備事業の実施、尼寺地区保存整備事業の実施等、新たな状況に変化した。これらに伴って、整備基本計画を見直す必要が生じたため、僧寺地区の保存整備着手に先立って、保存管理計画、整備基本構想、整備基本計画（平成2年策定）に立脚し、平成15年に史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）新整備基本計画を策定した。

僧寺地区保存整備事業にあたり、整備工事に先行して整備基本設計及び実施設計のために事前遺構確認調査を行うこととした。発掘調査は平成15～24年度の10ヶ年実施し、その内容は次の通りである（第1表・第2図）。なお、本報告書の作成にかかる遺構図面・写真等の整理および原稿執筆、編集作業は、平成25・26年度に実施した。

地点番号	調査年度	調査回数	地区	調査地点	面積(㎡)	調査期間		主な調査成果	備考
						開始	終了		
①	570	南門地区	伽藍外(南門南方1)	15.80	20031211	20040107	中遺棄と想定される不明物り込みを確認。		
②	570	南門地区	伽藍外(南門南方2)	21.00	20031216	20040219	溝を確認。		
③	570	塔地区	伽藍外(塔南方)	34.20	20031222	20040116	小穴を確認。遺構密度が薄い状況が判明。		
④	570	塔地区	塔1・塔2間	16.20	20040114	20040205	柱穴を確認。		
⑤	570	塔地区	塔2	32.20	20040226	20040319	新たな地層遺構、柱穴、土坑、小穴を確認。	全5調査区	
⑥	570	区西施設地区	区西南辺(中門東)	58.00	20040119	20040301	中核部区西施設南辺(願立柱脚・築地塀・溝)を確認。昭和33年調査区を確認。		
⑦	578	区西施設地区	区西南辺(中門東)	445.60	2004818	20050331	願立柱脚から築地塀への建替えを確認。	570次調査(15年度)の継続及び調査区の拡大	
⑧	578	塔地区	塔2	609.80	20040701	20050331	新たな地層遺構が塔跡と判明。願立柱脚、土坑を確認。		
⑨	578	区西施設地区	区西南辺(中門東)	445.60	20050601	20060331	願立柱脚から築地塀への建替え、築地塀の願込地層を調査。大溝は3時期を確認。	578次調査(16年度)の継続及び調査区の拡大	
⑩	603	中門地区	中門	344.15	20060202	20060322	中門全体の規模、構造を確認。昭和40年調査区を確認。	市道南3号線下部分の調査	
⑪	578	塔地区	塔2	389.78	20050601	20050905	塔2の願込地層の規模、構造を確認。願立柱脚を確認。	578次調査(16年度)の継続	
⑫	603	塔地区	塔2西辺南	56.76	20050822	20060316	遺構を確認。		
⑬	578	塔地区	塔2	597.06	20060706	20070315	取壊し出土の土師器より、塔2は9世紀前半以降の築造であると判明。願立柱脚を確認。	578次調査(16年度)の継続	
⑭	603	塔地区	塔2西辺南				伽藍地区西南辺南辺を確認。		
⑮	603	塔地区	塔2西辺西				溝、柱穴、土坑を確認。		
⑯	603	塔地区	塔2西辺北	255.52	20060731	20070331	板状礎石跡、土坑、柱穴を確認。		
⑰	603	塔地区	塔2西辺東				小穴や不明物り込み、昭和30年調査区を確認。		
⑱	603	中門地区	中門	405.30	20070302	20070322	中門と中核部区西施設南辺との接続部の構造を確認。	603次調査(17年度)の継続及び調査区の拡大	
⑲	603	堂聖地区	中門・金堂間	131.93	20070302	20070309	土・盛土層判。		
⑳	625	堂聖地区	塔1	16.76	20080116	20080331	同位置での塔1の再建を確認。塔西側に願立遺構を確認。昭和30・40年調査区を確認。	603次調査(18年度)の継続及び調査区の拡大	
㉑	625	中門地区	中門	273.11	20070719	20080331	新築の礎石建物から願立柱脚への建替え、規模、構造を確認。中核部区西施設南辺(願立柱脚・溝)を確認。	603次調査(18年度)の継続及び調査区の拡大	
㉒	625	区西施設地区	中門・金堂西	152.69	20070820	20080331	願立柱脚を確認。多数の小穴、柱穴群を確認。	603次調査(18年度)の継続及び調査区の拡大	
㉓	642	南門地区	南門	186.00	20080314	20080327	土・盛土層判。		
㉔	642	南門地区	南門	184.08	20080631	20090205	南門の規模、構造を確認。南門北側に走る伽藍地区南側から小穴の連続状遺構を確認。	625次調査(19年度)の継続及び調査区の拡大	
㉕	642	堂聖地区	中門・金堂東	86.83	20080728	20081106	小穴や不明物り込みを確認。遺構密度が薄い状況を確認。		
㉖	642	伽藍中核部	講堂	374.25	20081106	20090331	新築建物から再建建物への増築を確認。再建基礎を初め1世紀末以降の掘り込みを確認。昭和31年・40年調査区を確認。		
㉗	642	区西施設地区	区西北辺	13.86	20081205	20090331	中核部区西施設北辺(願立柱脚・溝)を確認。願立柱脚から築地塀への建替えと想定。		
㉘	650	講堂地区	講堂	494.60	20090515	20100331	新築建物から再建建物への増築を確認。建替えの際に東西に1間ずつ増築していることを確認。建物、基礎の規模、構造、階段設置に伴う整地土を確認。また、基礎層以下は土層。	642次調査(20年度)の継続及び調査区の拡大	
㉙	650	金堂地区	金堂	181.00	20100210	20100331	土・盛土層判。		
㉚	655	金堂地区	金堂	471.12	20100507	20110331	建物・基礎・願込地層、南北間段及び柱床敷の規模、構造を確認。階段と南辺は補修された痕跡を確認。	630次調査(21年度)の継続及び調査区の拡大	
㉛	655	堂聖地区	金堂・講堂間	28.00	20101220	20110331	跡状遺構・大規模な土取穴を確認。		
㉜	655	願込地区	願込	250.27	20101220	20110331	土・盛土層判。礎石面付け状況を確認。		
㉝	672	願込地区	願込	366.60	20110715	20120330	礎石規模・構造。基礎の規模・構造。願込地層規模・構造を確認。	655次調査(22年度)の継続及び調査区の拡大	
㉞	672	中核部地区	中核部区西施設北辺	70.29	20111119	20120210	中核部区西施設北辺(願立柱脚・溝)を確認。	642次調査(20年度)の継続及び調査区の拡大	
㉟	672	経蔵地区	経蔵東	668.28	20110904	20120330	金堂北側で通路遺構。講堂南側で願立遺構・大規模土取穴。経蔵東側で整地層を確認。	全5調査区	
㊱	680	金堂地区	金堂	41.48	20120614	20130228	金堂南側段・南門石敷の範囲を確認。	市道南2号線下を含む、655次調査(22年度)の継続及び調査区の拡大	
㊲	680	区西施設地区	区西北西	99.34	20120614	20130228	中核部区西施設北辺(願立柱脚・築地塀・溝)・伽藍地区北西隅。大規模不明物り込みを確認。願立柱脚から築地塀への建替えと想定。	522次調査区(元年度)の継続及び調査区の拡大	
㊳	680	区西施設地区	区西南西	73.80	20121116	20130228	中核部区西施設南辺(願立柱脚・溝)を確認。		
㊴	680	区西施設地区	区西南東	98.98	20121127	20130228	中核部区西施設東辺(願立柱脚・溝)・伽藍地区南側段を確認。願立柱脚から築地塀への建替えを想定。		

第1表 史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)事前遺構確認調査 調査経過一覧(平成15～24年度)



第2図 史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)事前遺構確認調査 調査地点位置図(平成15～24年度)

第2章 遺跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

武蔵国分寺跡は東京都国分寺市西元町一帯に所在し、東山道武蔵路を挟んで東に僧寺跡、西に尼寺跡がある。

国分寺市は、人口約12万、面積11.48km²あり、都心からJR中央線で30分前後という東京近郊にあって、急激な都市化の波を受けている多摩地域の小都市である。市の位置は、北緯35°42′、東経139°28′で、東京都のほぼ中央にあたり、東は小金井市、南は府中市、国立市、西は立川市、北は小平市に隣接する。

市域は関東平野の南西部に位置する武蔵野台地上にある。西の関東山地・多摩丘陵から、東の東京低地に至るまで西高東低の断面を示すなかで、市域の海拔標高は、55～92mを測る。武蔵野台地は青梅市付近を頂点として扇形に形成された国内最大級の洪積台地で、北東を荒川、北西を荒川支流の入間川、南を多摩川の各河川と沖積低地により範囲を画されており、東西50km、南北20kmを測る。台地は古多摩川が形成した河岸段丘で、台地の大半を占める高位の武蔵野段丘と、その縁辺にあってより低位の立川段丘とに分かれる。海成層（上総層群）を基盤として、武蔵野段丘面では、武蔵野礫層、武蔵野ローム、立川ローム、表土（黒色土）の順、立川段丘面では、立川礫層、立川ローム、表土（黒色土）の順に堆積している。

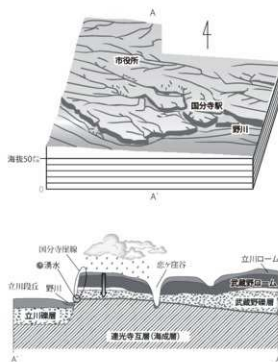
武蔵野段丘の南縁は立川段丘との比高差最大20mの段丘崖であるところの国分寺崖線となっている。崖線は武蔵村山市残堀付近から始まり、国分寺跡付近で高さ10mとなり、二子玉川へと続く古多摩川の側方浸食崖である。崖線は、立川、国立、国分寺市域を北西から南東へとほぼ直線的に通過するが、国分寺市西元町四丁目付近を起点に、小金井市前原付近を最奥部として、府中市浅間山をコンパスの軸として円弧を描くように、大きく湾曲して浸食されている。

武蔵野段丘上には古多摩川の名残川が形成した開析谷が幾筋も見られる。国分寺市恋ヶ窪付近から北西方向に奥深い谷が二筋あり、崖線の手前で会する。

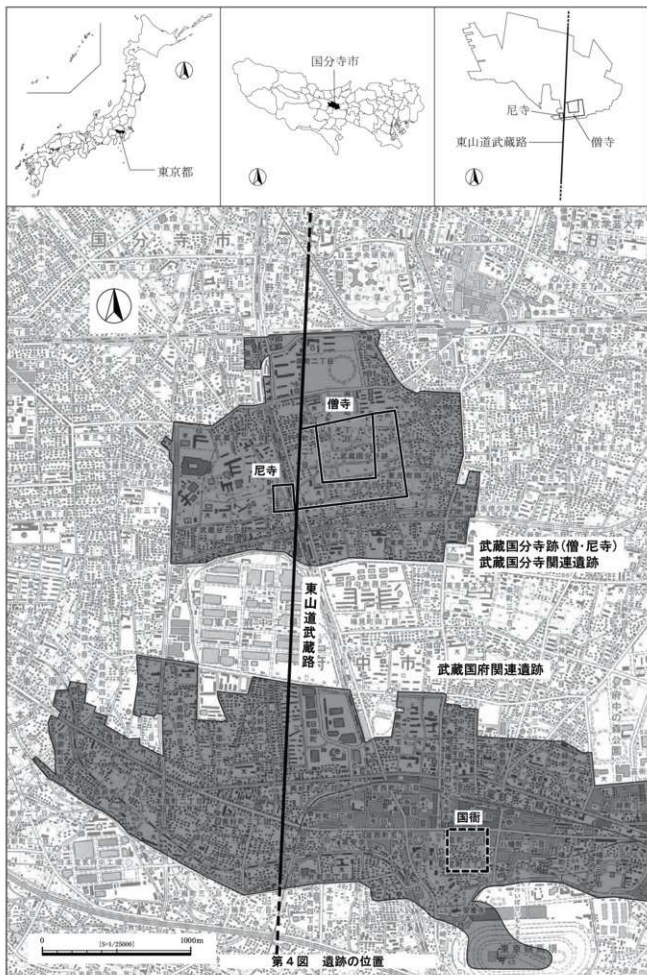
JR中央線国分寺駅と西国分寺駅間の北、日立製作所中央研究所構内の湧水群が野川の源である。野川は、崖線直下の湧水をさらに集め、およそ20km立川段丘上を東流して多摩川に注ぐ。

立川段丘上にも崖線に沿って野川の支谷がある（黒鐘谷）。国分寺市西元町四丁目（黒鐘公園）付近を源とし、現国分寺の裏山や、おたかの道湧水園の北側の崖線下、真姿の池の湧水群を集めて、東元町三丁目の不動橋付近で野川の本流に加わる。

国分寺、府中、小金井周辺の立川段丘面には、いくつかの細長い凹地が認められている。このうちの 하나가西元町付近から始まり、府中市幸町、東京農工大農場、天神町、浅間山を経て、野川へと弓なりに続いている。東京農工大農場から東方では、地表面態で凹地の北に比べ南が1m以上低く、小崖が形成されている。凹地を挟んで礫層の上に乗るローム層に差が認められ、立川段丘面(TC)をte1面とte2面とに区分出来るという(松田隆夫・大倉利明1988「立川段丘と凹地地形について—府中市周辺の立川面の区分について—」『府中市郷土の森紀要第一号』所収)。te1面の規模は東西6km、南北2kmで、



第3図 国分寺市の地理的環境



第4図 遺跡の位置

ちょうど東西に長い木の葉状を呈する。

僧尼寺は立川段丘上、te1面の崖線寄りに主要伽藍を置き、寺院地は武蔵野段丘の縁辺を取り込み、およそ東西900m、南北550mの周辺集落分布域範囲におさまる。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

野川流域には旧石器・縄文時代遺跡が多く分布する。市内では多摩藪坂、熊ノ郷、殿ヶ谷戸などの旧石器時代遺跡、多喜窪、八幡前、恋ヶ窪、羽根沢、恋ヶ窪東、恋ヶ窪南、花沢西、花沢東、本町（国分寺村石器時代）などの縄文時代遺跡が知られている。市外では、尼寺西方の府中市武蔵台遺跡が旧石器時代から縄文時代にかかる大規模な遺跡である。国分寺跡の下層には、多喜窪遺跡（早期、中期）をはじめとする旧石器・縄文時代遺跡が重なる。僧寺東方の立川段丘上に立地する八幡前遺跡（後期、加曾利B式期）を最後に縄文時代遺跡は消滅する。以降、奈良時代に至るまでの間は、ほとんど空白期である。唯一、弥生時代中期前半期の土器3個体が、武蔵野段丘上の花沢西遺跡より出土していて、野川流域における弥生文化流入期の様相の一端を示している。

立川段丘面の南縁は高さ10mほどの府中崖線によって沖積低地とに画されている。国分寺より約2kmの距離である。その縁辺には7世紀代に遡る自然集落が確認されている。以後、7世紀末～8世紀初頭に国衙が設定され、8世紀前半に成立したと考えられている。国衙推定地は大国魂神社境内及びその東方一帯の「京所」と呼ばれているところに位置し、国衙を取り巻く国府や街並は国衙の北側一帯に広がっていたものと推測されている。（府中市遺跡調査会1986『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅶ』）。

古代東山道武蔵路に比定される両側溝を有する幅12mの道路跡が武蔵国府の西方から僧尼寺間を貫いて北上し、小平市境まで約4.2kmが確認されている。北約10kmに位置する狭山丘陵東端の所沢市東の上遺跡において延長部が発見され、道路の築造時期について側溝並びに硬化面上出土須恵器の年代観から7世紀第3四半期と報告されている。

国分寺崖線の崖線には、内藤新田横穴墓（内藤1丁目、1基）、多喜窪横穴墓群（西元町2・4丁目、2基）が確認されている。真姿の池上横穴墓（仮称、西元町1丁目、1基）なども道路工事で発見されており、さらに多数の横穴墓の存在が予測される。この内、内藤新田横穴墓は副葬品などから8世紀、多喜窪横穴墓群の内の1基（西元町2丁目）は緑釉唾壺の出土から10世紀に改葬されたものと考えられている。

また、崖線縁辺部において骨罌器6点が発見されている。内5点が武蔵国分寺跡寺地外北東地域（野川による開析谷沿い）、1点が西方多摩藪坂遺跡出土のもので8・9世紀代の年代が与えられる。

一方、武蔵国分寺の瓦窯は、国内西方の丘陵地に営まれた。武蔵国分寺より遠い方から、末野窯跡群（埼玉県大里郡寄居町、武蔵国分寺からおよそ60km）、南比企窯跡群（埼玉県比企郡鳩山町、同じく40km）、東金子窯跡群（埼玉県入間市、同じく20km）、南多摩窯跡群（東京都稲城市、八王子市、町田市、同じく5～10km、谷野窯跡・御殿山地区窯跡群・大丸窯跡・瓦谷戸窯跡）の4地域が知られている。

さて、中世、鎌倉街道上道はほぼ古代東山道武蔵路を踏襲したと見られるが、国分寺市域では西に150mほどずれ、尼寺伽藍を貫いて、北方台地に切り通しを残している。伝鎌倉街道に沿って中世の遺構、遺物が発見されている。武蔵国分寺跡、伝祥応寺跡、塚跡、恋ヶ窪庵寺跡、恋ヶ窪遺跡などである。

武蔵国分寺跡の各地点からは地下式横穴、道路跡、溝跡、土坑などの遺構や陶磁器、板碑、石臼、古銭などが出土している。その年代は大略14世紀後半～15世紀中葉に集中しており、鎌倉時代のものは僅かである。この内、尼寺付近では、尼寺寺城北辺部の瓦溜め群や寺城西辺部の地下式横穴3基、溝跡1条、土坑1基、寺城南辺部の推定鎌倉街道跡など比較的集中している。

伝祥応寺跡は北方切り通しの西側台地上にあり、昭和44年に小規模な試掘調査が行われた。平安時代以前と思われる遺構は確認されず、遺瓦も少なく、板碑が数点出土した。確認された礎石はいずれも中型で、しかも3個しか見つからないため建物の復元は出来なかった。また、伝鎌倉街道に面して、旧建物の三方を囲んでいたという土塁状のものは、堅固に積み上げたものではなく、僅かに平安時代の瓦や土器片を含んでいた。本遺跡の性格・内容についてはなお不明であるが、出土した板碑などから鎌倉時代末から戦国時代にかけて一堂形式の寺院が営まれたものと考えられ、近年明らかになった本多良雄家文書によれば、江戸時代享保年間、国分寺村に火破して廃寺となっていた深川海福寺末寺の黒金山祥応寺を本多新田に引寺したものであることが知られ、本遺跡が祥応寺と呼ばれる禪宗の小寺院であったことが推察される。

切り通しの対岸に塚跡がある。『東京府史蹟勝地調査報告書』において、方形封土と古瓦の出土から、「国分寺に關係を有する一種の土塔」とされて以来、土塔と呼ばれてきた。昭和44年の調査で、洪武通宝1枚と瀬戸灰釉瓶子が出土し、塚基底部から縄文時代の埋甕4基と平安時代の竪穴住居2軒が検出され、室町時代の造営で伝祥応寺との関係で理解される遺構と位置付けられるに至った。

恋ヶ窪寺跡は、尼寺の北方約900m、JR中央線西国分寺駅の南側に位置する。数次に及ぶ調査の結果、古代～中世の礎石建物跡、掘立柱建物跡、崩跡、土坑墓、火葬墓など三期の変遷でとらえられる遺構群が発見されている。この内、二期（13世紀末頃）においては、伝鎌倉街道に東面する伽藍を有する時宗系または禪宗系の寺院として再建されたものと想定されている。

伝鎌倉街道は恋ヶ窪寺跡の北約200mで谷をわたり、再び武蔵野段丘上を北上する。この恋ヶ窪谷は台地の奥で幅200～300mと広がっており、谷壁斜面下からは随所で湧水が見られ、野川の源流の一つになっている。この付近一帯には「恋ヶ窪」という地名が残されており、国分寺と並んで古くより集落が開かれ、中世、鎌倉街道沿いの宿場として栄えたという伝承があるが、その実態は明らかになっていない。最近の台地上の縄文中期の集落跡（恋ヶ窪遺跡）の調査において、地下式横穴1基が発見されるとともに、付近より13世紀末の常滑系壺などが出土しており、僅かながらその実相究明に一資料を加えることとなった。

引用・参考文献

- 福田信夫 1994 「II 尼寺跡の環境と既往の調査1 位置・立地と周辺の遺跡」『武蔵国分尼寺跡1』
 有吉重蔵 1986 「国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史 上巻』

第3章 遺跡の概要

1. 調査の歩みと現状

江戸時代末頃になると、内外の刺激によって科学的な探究心が高まり、江戸近郊の名所・旧跡を探訪することが広く行われ、武蔵国分寺跡は好適地として文人、史人、好事家などの識者が注目するところとなった。遺跡にとどまらず、文字瓦や古瓦を再利用した硯などの珍品に会ったことが、太田南敏『調布日記』や斎藤鶴磯『武蔵野話』、植田玉緒『武蔵名勝圖會』、斎藤月岑『江戸名所圖會』等により知ることができる。

明治に入り、重田定一は柴田常恵とともに武蔵国分寺跡の実地踏査を行い、初めて礎石の詳細な分布状況等が調べられ、帝國古蹟取調會の『古蹟』第2巻2号に「武蔵国分僧寺の廢址」として武蔵国分寺礎石配列図を掲載し、金堂・講堂・塔跡等の礎石の配列が明らかにされた。この調査が基礎資料の一つとなり、大正11年10月12日に武蔵国分寺跡は「史蹟名勝天然記念物保存法」による国の史蹟指定を受けた。その後、東京府が委嘱した稲村坦元・後藤守一により寺跡全般の詳細な調査（礎石・古瓦の分布、土壌の残存状況など）が行われ、「武蔵国分寺址の調査」『東京府史蹟勝地調査報告書』第1冊として大正12年3月に刊行された。

武蔵国分寺跡における初めての発掘調査は、日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会（石田茂作委員長）より昭和31・33年に行われた。昭和31年調査（第1次調査）は僧寺金堂・講堂の調査を行い、金堂基壇の規模・構造、講堂の基壇西側の増築が確認されるなどの成果があった。昭和33年調査（第2次調査）は、僧寺中門跡東側の中樞部区画施設、南大門推定地などが調査され、中樞部区画施設の大講や回廊の土壇と想定される遺構（平成16年度調査により築地塀の基底部と判明）、南大門推定地では礎石据え付け跡かと想定される掘り方が4基検出された。

その後、東京周辺の市街地化が進むなか、昭和38年後半に尼寺跡の指定地において無許可で宅地造成が行われる事態がおこり、これを契機として国分寺市教育委員会による緊急調査が昭和39年3月より、調査団顧問に石田茂作、団長団に久保常晴、内藤政恒、滝口宏、調査主任に松井新一、宇野信二郎、玉口時雄、坂詰秀一、岩崎卓也、大川清、長島健、前沢輝政、寺村光晴、坂井利明の諸氏が参加して以下の通り行われた。

- | | | |
|-----|-------------------------------|---------------------|
| 第1次 | 昭和39年3月17日～3月28日 | (尼寺尼坊跡) |
| 第2次 | 昭和39年4月29日～5月13日 | (尼寺金堂跡) |
| 第3次 | 昭和39年7月6日～7月24日 | (僧寺塔跡) |
| 第4次 | 昭和40年7月19日～8月30日 | (僧寺塔跡・金堂跡・推定鐘樓跡) |
| 第5次 | 昭和40年12月05日～12月26日 | (僧寺中門跡) |
| 第6次 | 昭和41年8月1日～8月18日・12月21日～12月23日 | (僧寺北方建物跡・中樞部区画施設跡等) |
| 第7次 | 昭和44年3月28日～4月8日・4月27日～5月8日 | (尼寺跡北方台上) |
| 第8次 | 昭和46年9月2日～9月26日 | (窓ヶ窪堂跡) |

僧寺跡では、塔跡・金堂跡・中門跡・推定鐘樓跡・北方建物跡（旧北院址）などの規模・構造が明らかにされ、塔跡の調査では元位置で再建が確認され、『続日本後紀』の塔再建記事と符合することが判明した。

さらにその後、昭和47年10月、国分寺遺跡地内に市立第四中学校の敷地が選ばれ建設が予定されたのを機に、曲折を経て広域学術調査を実施する常設の調査会が組織され、昭和60年度までの12年間でほぼ僧尼寺の寺域を確認することができた（第1期）。会長は、星野亮勝市文化財保護審議会委員長（昭和54年3月までは塩谷信雄市長）、調査団長に滝口宏、副団長に永峯光一、大川清、坂詰秀一、調査員は都・市の職員が主体となった。

この内、僧寺の寺域確認調査を以下に挙げる。

- | | | |
|----|--------------------|-------------|
| 4次 | 昭和49年11月25日～12月19日 | 寺院地南辺 11.8㎡ |
| 5次 | 昭和49年12月4日～12月25日 | 塔跡東方 456㎡ |

6次	昭和49年12月7日～12月18日	寺院地南辺	1.75㎡
7次	昭和49年12月19日～12月25日	寺院地南辺	125.5㎡
8次	昭和49年12月19日～50年9月17日	市立第四中学校（第二次）	3871.5㎡
10次	昭和50年5月23日～5月30日	寺院地南方	20㎡
17次	昭和51年5月21日～12月17日	市立第四中学校（第三次）	1353㎡
28次	昭和52年1月7日～3月15日	伽藍地西辺	200㎡
29次	昭和52年2月15日～3月18日	伽藍地南西隅	200㎡
30次	昭和52年1月20日～2月14日	伽藍地南辺	78㎡
31次	昭和52年3月10日～5月6日	伽藍地南東隅	60㎡
32次	昭和52年4月8日～4月27日	伽藍地東辺	38㎡
33次	昭和52年4月11日～5月4日	伽藍地北辺	99㎡
#	昭和52年3月22日～5月10日	伽藍地北辺	115.5㎡
38次	昭和52年4月4日～11月24日	市立第四中学校（第四次）	1234.2㎡
41次	昭和52年5月23日～6月9日	寺院地北方	88.375㎡
42次	昭和52年5月16日～5月24日	寺院地北辺	27㎡
#	昭和52年7月13日～9月26日	寺院地北辺	6.66㎡
43次	昭和53年2月13日～3月1日	伽藍地北東隅	80.36㎡
44次	昭和52年7月20日～10月21日	寺院地南辺	187.13㎡
112次	昭和55年11月10日～11月28日	寺院地南辺	22.288㎡
133次	昭和56年10月26日～10月30日	寺院地東辺	41.594㎡
135次	昭和57年1月13日～5月1日	寺院地西辺	290.7㎡
163次	昭和57年12月13日～3月9日	寺院地南辺	62㎡
164次	昭和58年1月7日～3月31日	寺院地南東隅	84㎡
165次	昭和58年1月10日～2月25日	寺院地南東隅	72㎡
175次	昭和58年4月4日～12月23日	寺院地南辺	144㎡
176次	昭和58年4月18日～7月28日	寺院地北東隅	65㎡
202次	昭和59年7月4日～60年1月16日	伽藍地南辺	147.75㎡
226次	昭和60年3月4日～10月3日	中塚部区画施設南辺（中門西）	282.315㎡
248次	昭和61年2月1日～3月31日	伽藍地東方	45.5㎡

昭和61年度からは、恋ヶ窪遺跡調査会と統合して新たに発足した国分寺市遺跡調査会により第二期調査として整備に先行する調査及び寺域確認補足調査が行われ、現在に至っている。

僧寺関係の寺域確認補足調査として次の調査が行われている。

250次	昭和61年3月10日～11月20日	講堂北西地域	247.7㎡
267次	昭和61年10月2日～62年1月31日	市立第四中学校（第五次）	971.8㎡
281次	昭和62年4月8日～5月13日	伽藍地北辺	36㎡
295次	昭和62年8月3日～12月7日	塔跡北方	390㎡
303次	昭和63年4月1日～11月30日	伽藍地西辺	152.9㎡
322次	平成元年7月11日～12月27日	中塚部区画施設北西隅	170.09㎡
360次	平成3年7月1日～12月27日	中塚部区画施設南辺（中門西）	560.1㎡
543次	平成13年9月12日～9月14日	伽藍地北辺	2.69㎡
551次	平成14年5月27日～8月30日	伽藍地北辺	117.25㎡

武蔵国分寺跡の僧寺地区は、国分寺市の南部に位置し、府中街道の東側、東八道路の北側にあって、国分寺崖線を背にした東西400m、南北600mの敷地が現在、史跡指定され、西に位置する尼寺地区とは鉄道の高架線や府中街道などで分断される形となっている。指定範囲は、伽藍地内面積のほぼ45%を占めるが、寺院地区画内は推定南大門跡から南辺区画溝に至る中軸線沿いの一部が指定されたのみとなっている。指定地内の土地利用としては、農地、公園が主体で、住宅、寺地などが含まれる。主要建物としては、金堂・講堂・中門・推定鐘樓・塔跡は公園として利用され、国分寺崖線上にある北方建物は現国分寺薬師堂と仁王門との間に、また推定経蔵跡や西僧坊跡は墓地内にあり現国分寺の寺地内に含まれている。

僧寺地区に先駆けて平成4年度から進められた尼寺跡の保存整備事業は、平成14年度に整備工事が終了し、平成15年度に「国分寺市立歴史公園 武蔵国分尼寺跡」として開園している。

2. 武蔵国分寺の概要

規模と構造 これまでの調査で明らかになった武蔵国分寺の構造は、僧尼寺を含む南辺の南北中軸線上の僧寺金堂に設計の中心を置き、中央部を占める僧寺が寺院地・伽藍地（寺域）・中枢部の三重に、南西隅を占める尼寺が伽藍地（寺域）・中枢部の二重にそれぞれ区画されている（第6図）。また、これらの周辺に集落が分布する寺地の範囲を含めると、遺跡の広がりには東西1.5km、南北1.0kmの規模に及ぶ。

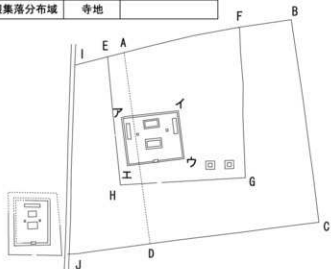
僧尼寺の中枢部を除く区域には、多数の掘立柱建物や竪穴住居の分布が確認されているが、それらの大半は寺の管理運営機関である「院・所」を構成する遺構群であり、政所院・太衆院、苑院・花園院、講（師）院、東院、修理院、中院等の付属諸院等の存在が考えられる。これらは遺構及び出土遺物の検討によって、大きく三期の変遷をたどったことが想定される（第7図）。

【創建期（第Ⅰ期）】 8世紀後半代にあたり、天平13年の国分寺創建詔発布直後に塔周辺を中心とする伽藍地で造営に着手したⅠa期、天平19年の郡司層の協力要請を受けての造営計画の変更と造営が終了するⅠb期（天平宝字2年以前）、以降のⅠc期に小区分される。Ⅰb・Ⅰc期は僧尼寺の金堂・講堂の創建段階に相当する。

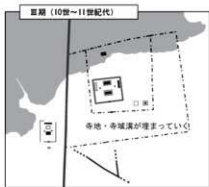
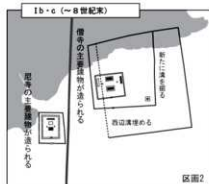
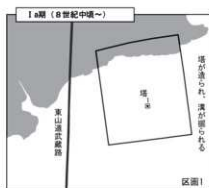
【整備拡充期（第Ⅱ期）】 塔再建（上限承和12年）を中心とする時期に当たり、僧尼寺の整備・拡充が行われた9世紀後半から後半代にあたる。

【衰退期（第Ⅲ期）】 寺院地及び伽藍地区画溝の埋没を契機として竪穴住居が伽藍地内に出現し、国分寺の存在意義が失われてくる10～11世紀代にあたる。

区画範囲	名称	区画施設(溝)名称
ABCD	古寺院地	古寺院地区画溝
IBCJ	寺院地	寺院地区画溝
EFGH	伽藍地	伽藍地区画溝
アイウエ	中枢部	中枢部区画施設
周辺集落分布域	寺地	



第6図 武蔵国分寺の構造と名称



第7図 武蔵国分寺変遷図

僧寺伽藍 僧寺の主要伽藍が考古学的に解明された経緯は、昭和31・33年の日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会（石田茂作委員長）による発掘調査で、金堂基壇の規模や講堂西側の継ぎ足し基壇の存在を明らかにしたのを嚆矢とする。その後、尼寺跡の無許可宅地造成を契機として、市教育委員会による昭和39～44年までの断続的な調査が行われ、中門・北方建物の規模や七重塔の再建、伽藍地（寺域）区画施設等が判明し、続いて昭和49年以降には寺域確認調査を柱として市に常駐調査組織（現国分寺市遺跡調査会）が設置され、中樞部区画施設の規模や伽藍地（寺域）区画の変遷等を解明すべく、市内の各所で調査が行われた。これらの調査によって、僧寺伽藍地（寺域）は幅2.1～3.0 m、深さ0.8～1.5 mの素掘り溝で区画され、その規模は北辺384.1 m、東辺428.3 m、南辺356.3 m、西辺365.4 mを測ることが判明した。

また、伽藍配置は、南辺の西寄り3分の1等分線を中軸線として、伽藍地区画に設けた南門、中樞部区画に設けた中門、中樞部区画内南側の金堂、その背後の講堂、中樞部区画外の北方建物が一直線に並び、金堂・講堂の両側には鐘樓・経藏（未確認）と東西僧坊が配される。

中樞部を区画する施設は掘立柱塼と素掘り溝で構成され、中門より両翼に延びて北へ折れ、東西僧坊を取り込み、講堂の背後で閉じる。回廊を有さず、僧坊等までを圍繞する特異な構成をとるのは、後述する尼寺も同様である。なお、僧寺の中樞部を区画する掘立柱塼は、Ⅱ期以降に築地塼へ建替えられている。中樞部区画の規模は東西約156 m、南北約132 mを測る。塔は中樞部区画の外に位置し、金堂の中心より直線距離で約220 m離れた伽藍地（寺域）区画の南東隅に存在する。

以上の伽藍を構成する主要の建物は、瓦葺き礎石建物で、特に金堂は間口7間、奥行4間の東西棟建物で、諸国分寺中最大級の規模を誇る。

尼寺伽藍 昭和39年に、史跡指定区域内で無許可の宅地造成が行われたことを契機として、市教育委員会によって昭和39～44年まで、断続的な調査が行われた。尼寺の伽藍については、それまで北方崖線上等広がる礎石・古瓦の散布地や、崖線下の立川段丘上の礎石・古瓦散布地（当該地）等が有力候補であったが確認は無く、不詳であったが発掘調査の結果、金堂と尼坊が南北に並んで確認され、当該地に尼寺伽藍が存在することが明らかになった。その後の平成4～7年に実施した史跡整備に伴う事前遺構確認調査では金堂・尼坊の規模や中樞部区画、中門、東門等の存在が判明した（第8図）。

これらの調査によると、尼寺伽藍地（寺域）は、幅2.1～3.0 m、深さ1.5 mの素掘り溝で区画されていたことが確認されたが、北辺は中近世の削平により残存していなかった。伽藍地南東隅および南西隅は調査で確認されていないが、概ね東西約150 m、南北推定160 m以上の規模を有する。

伽藍配置は、東西の二等分線を中軸線とし、伽藍地（寺域）区画に設けた南門（未確認）、中樞部区画に設けた中門、中樞部区画内南側の金堂、その背後の講堂（未確認）、尼坊が一直線に並びプランであったと考えられる。

中樞部を区画する施設は掘立柱塼（柱間2.4 m）と素掘り溝で構成される。中門より両翼に延びて、北へ折れ、尼坊の背後で閉じる。回廊を有さず、尼坊等までを圍繞する構成は僧寺と同一である。中樞部区画の規模は東西約89.1 m、南北約118.8 mである。中門



第8図 尼寺主要遺構全体模式図
（太田・増井2015より転載・加筆）

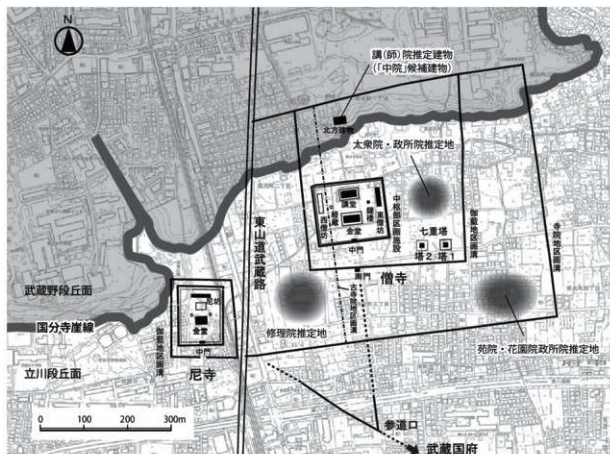
は僧寺と同じく2時期あり、中門基壇下から古期の堀柱穴が確認されたことで、当初は棟門で、後に基壇付きの八脚門へ建て替えられたことが判明した。

金堂の東方には棟門（柱間3.6m）が開き、伽藍地（寺域）区画溝に設けられた通路を経て東山道武蔵路へと接続する。中樞部区画内の金堂中央前面と尼坊南西・南東前面には、寺院空間を荘厳する各4本の幡もしくは輦の竿柱（いわゆる幡竿）の遺構が並んで検出されている。

なお、尼寺伽藍地北方の伝鎌倉街道の切り通しに東面して、三方を土塁で囲んだ平坦地に礎石・古瓦が散布する範囲は古くより祥応寺跡と伝えられてきた。近年明らかになった本多良雄家文書によれば、江戸時代享保年間、国分寺村に大破して廃寺となっていた深川海福寺末寺の黒金山祥応寺を本多新田（現在の中央線国分寺駅北口付近一帯）に引移したものであることが伺える。発掘調査の結果、礎石・古瓦の散布する範囲で特定の建物規模を確認することは出来なかったが、板碑や土師質土器が出土し、14・15世紀代にかかると推定される寺院であることが確認された。なお、その下層からは平安時代後期の堅穴住居の存在が確認されている。

付属諸院 国分寺をはじめとする奈良時代の寺院には、伽藍を構成する金堂や講堂などの主要堂塔のほか、寺の維持・運営に関わる種々の付属施設（諸院）が設置されていたことが各種の「資財帳」などをもとに明らかになっており、武蔵国分寺においても建物の規模や構造、共存する墨書土器などの検討からいくつかの施設が候補として挙げられる（第9図）。

【政所院・太衆院】 僧寺伽藍地内北東部、すなわち中樞部の東側、塔の北側地域では、大型で南北棟の掘立柱建物跡が並ぶ。これらはⅠ期からⅡ期へと長期間継続し、「納」・「東」の墨書土器が出土していることから、政所院・太衆院に想定される。ただし、他国の国分寺では、政所院は独立せず、太衆院の一部として機能していた事例が多い。



第9図 推定付属諸院の位置（増井2013より転載・加筆）

【苑院・花園院】 僧寺寺院地の南東隅地域は、寺院地南辺溝から北へ1町、同東辺溝から西へ3町ほどの範囲は、小穴や小溝などが僅かに確認されるのみで、遺構分布が希薄な地域となっている。このことから、南向きの日当たりの良いこの付近一帯が、苑院・花園院に想定される。

【東院】 尼寺伽藍地南辺溝より出土した須石器坏に、「東院」と書かれた墨書土器がある。その製品は9世紀中頃のもので、当該期に東院と呼ばれた施設が存在していたことが窺える。出土位置より尼寺の付属施設と考えられ、掘立柱建物が数棟まとまっている尼寺伽藍地内の東側地域が想定されるが、実態は不明である。

【中院】 法隆寺所蔵の「大菩薩藏經卷十三」の奥書に、承和14年(847)の紀年銘とともに「武藏国分寺中院僧最安」とあり、その存在が知られる。今のところ、中院の性格は全く不明であり、僧寺北方建物付近に想定する考えもある。

【修理院】 寺院地内西部地域では、9世紀前半～11世紀後半に至る掘立柱建物跡40棟、堅穴住居跡89軒等が発見されている。これらの遺構群は小溝で区画された中に整然と配置され、その中に鍛冶工房跡を含むことから営繕関係施設の修理院に想定される。

【講(師)院】 僧寺伽藍中軸線上の武蔵野段丘斜面に位置する桁行5間(長さ28.5m)、梁行4間(長さ18.4m)の東西棟礎石建物で、建物跡の北半は江戸時代に薬師堂を建てた際の整地によって埋められている。北方建物跡と呼称しているこの建物は、北院跡とも呼ばれ、出土した瓦から整備・拡充期(9世紀中頃以降)に建てられたものと考えられ、中軸線上の斜面の北と東を削って整地した面に建てられている。僧寺伽藍の全体を見渡せる立地から、寺の重要施設であったと考えられ、国分寺の附属諸院の中でも講(師)院と推察される。なお、北方建物の南下方にも基壇を伴う建物の存在が確認されており、この建物が国師(途中より講師)の院である可能性も考えられる。

東山道武蔵路 東山道武蔵路は、都と地方を結ぶ古代東山道の枝道(支路)の一つで、上野国から武蔵国府へと南下する幅約12mの直線道路である。『続日本紀』宝亀二(771)年十月己卯条には、上野国邑楽郡から武蔵国に至る間に5つの駅が存在すると記載されており、推定路線上において駅家の候補地が数箇所挙げられている。この古代道路を現在では「東山道武蔵路」と呼称しており、これまでの発掘調査によって国分寺市域を通過していたことが明らかとなっている。その推定路線は、北は小平市上水本町地区より市内へ入り、戸倉一丁目、東恋ヶ窪六・四・三丁目、西恋ヶ窪一丁目、泉町二丁目、西元町二丁目の各地区を縦貫し、南は府中市武蔵台地区へと抜け、市内での総延長は約3kmにも及ぶことが想定される。特に武蔵国分寺の寺院地の北方にあたる現在の泉町二丁目では、平成5年から断続的に行われた大規模な発掘調査により、およそ4時期にわたる変遷が明らかになっている。他の調査地点での検出状況を含め、次に4期の概略を示す。

【第1期】 側溝で区画された道路幅約12mを測る。国分寺市では従来SF1と呼称していた直線道路である。道路側溝は、底面の高さが一定でなく、所々で掘り残されたように分断されており、長土坑が連結するような形状を呈する特徴的な溝である。

【第2期】 第1期の両側溝の覆土上面に硬化層が認められる道路で、全体の道路幅は1期の12mを踏襲する。埋没途上の側溝に黄褐色～暗黄褐色のいわゆる関東ローム層土を充填して補修・改修しているのが特徴であり、市域では、北は西恋ヶ窪一丁目・東恋ヶ窪三丁目付近まで確認されている。なお、小平市・武蔵村山市域の一部でも同特徴をもつ側溝が確認されている。

【第3期】 新規の側溝で区画された幅約9～11mの道路であり、第1期の側溝と一部重複して検出されている。これまでの調査では、武蔵国分寺の寺院地区画溝以北、現JR中央線以南の範囲でのみ確認されている。

【第4期】 泉町二丁目では第1～3期路線から東へ逸れていく、波板状圧痕を伴う切り通し状の道路が確認されている。

各時期の年代に関しては、第1期の道路敷設の時期は所沢市東の上遺跡の側溝内出土土器の年代が指標となっており、7世紀第3四半期と考えられている。府中市域では8世紀中葉の堅穴住居跡が第1期の側溝覆土を切り込んで構築される状況が確認されているが、国分寺市域では第1期の側溝を切る遺構は確認されていない。また、道路という遺構の特徴上、路線上の全て側溝が同時期に埋まりきとも考えられず、武蔵国分寺の変遷Ⅱ期においても一部の側溝は埋まっていなかったと想定されている。東山道武蔵路第2期の時期については、小平市小川町二丁目地点の側溝覆土の火山灰分析によって、9世紀第3四半世紀頃の年代が想定されており、9世紀中頃に整備・補修された可能性が示されている。

なお、東山道武蔵路は宝亀2(771)年の武蔵国の東山道から東海道への所属替えにより、官道の役割を終えるが、その後も南北を結ぶ主要道路としての利用されていたことが各地の調査で確認されている。その一つとして第3期以降の道路が挙げられ、年代を示す資料は少ないが、道路面や周辺から出土する遺物の様相から、少なくとも10世紀後半までは道路として利用されていたと考えられる。

参道口 府中市栄町三丁目17番地に所在する。寺院運営上の諸施設を含む寺院地の外に、寺地と呼ぶ集落が展開する範囲があり、その南限を区切る施設として僧寺金堂跡から南に478m離れた位置で門柱状遺構が確認された。

門柱状遺構は3基確認され、いずれも共通した意図で一定期間に建て替えられている様子が判明している。その特徴は、①柱の太さが40～50cmほどで、柱間と柱径の割合が11分の1とほぼ一定していること、②柱は全て垂直に近く、内側に転んでいないこと、③東西の柱の上部は繋ぎ材で繋結されていたと思われること、④柱の上部が繋がっていたため柱の深さを調整し、東西同じ高さ、水平に合わせたことが想定されること、などがある。これらの特徴から復元される上部構造は、鳥居よりはむしろ、古代荘園図「額田寺伽藍並条里図」にみられるような柱の上部を水平な冠木で貫いた冠木門のような形式の門の可能性が高いと想定されている。

なお、門の直下には、武蔵国分寺僧寺推定中軸線上に延びる南北方向の道路跡(参道)が走り、幅2.2～3.0m、検出延長は28mを測る。また、門跡の南側では、武蔵国分尼寺方向に延びる斜行道路(幅2.4～3.0m、検出延長35m)とも合流し、進行方向の異なる2本の道路が交錯している。この道路はさらに南東方向へと伸び、武蔵国衙中軸から北上する道路と交わることが推定されている。このことから、武蔵国府と武蔵国分寺をダイレクトに繋ぐ道路網が存在したことが考えられ、国府と国分寺が都市的な計画のもとに道路・町割り整備されている様相が判明した。

当該地区より出土した遺物等から、9世紀後半以降に二本一対の門柱状遺構が3回にわたってほぼ同一の空間に建てられており、北方に位置する武蔵国分僧寺の参道標識としての性格が想定されている。なお、門の柱穴から10世紀前半のもの、道路周辺からは11世紀代後半の遺物も確認されている。

引用・参考文献

- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2002『武蔵国分寺跡調査報告』6 府中市埋蔵文化財調査報告第三〇集
 国分寺市教育委員会 2012『国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡 保存管理計画(第2次)』
 増井有真 2013「武蔵国分寺跡出土の『祝』墨書土器」『考古学の諸相Ⅲ』坂路秀一先生喜寿記念論文集
 太田和子・増井有真 2015『見学ガイド 武蔵国分寺のはなし』(増補改定版)

3. 層序

国分寺市域で用いる層位区分は、表土（I層）下の黒褐色土を、より黒色味が強い上層（II層）とローム層への漸移層である下層（III層）に細分している。そのため、黒色土をII層、III層以下をローム層にあって一般的な立川ローム層の区分とは呼称が異なっている。今回報告する調査区は武蔵野段丘面と立川段丘面とに存在するが、堆積土は下記のとおりほぼ共通した層序を示す。

【I層】 表土・近現代盛土および、耕作土。層厚30～50cm。

【II層】 黒褐色土。粒子が粗い。しまりはやや弱い。粘性は弱い。古代～中世の遺物を包含し、古代の遺構堆積土に似る。層厚約10～15cmだが、市内ではすでに削平されていることが多い。

【III a層】 黒褐色土。粒子はやや粗い。粘性はやや弱い。層厚約10～15cm。本来であれば、古代の遺構確認面であるが、II層と類似した土質からこの下層において検出することが多い。

【III b層】 暗褐色土。III a層より明度が強く、褐色味が強くなる。軟質で粘性やや弱い。III c層に近づくに連れて粘性が強くなる。縄文時代中期の遺物を包含する。層厚約30～40cm。

【III c層】 茶褐色土・暗黄褐色土。縄文時代早・前期の遺物を包含する。ローム層への漸移層で、赤色スコリアを多量に含む。層厚約10～15cm。

【IV層】 黄褐色土。ソフトローム。V層との境は凹凸が激しい。層厚約15～25cm。

【V a層】 黄褐色土。ハードローム。色調によってa・bの2層に分けられる。下層にいくに従い黄色味薄くなり灰褐色味を帯びてくる。漸移的に変化する。赤色・黒色スコリアを多量に含む。部分的にV b層と中間の色調を有する部分がV b層上部にある。

【V b層】 暗灰褐色土。ハードローム。色調はV aとVI層の中間。

【VI層】 暗褐色土。立川ローム第一黒色帯。スコリアは細かく、全体に粒子緻密。やや粘性を増す。

【VII層】 黄褐色土。黄色味が強く、明るい。VIII層へは漸移的に移行し、境界はやや不明瞭。削るとジャリジャリする（A T層）。

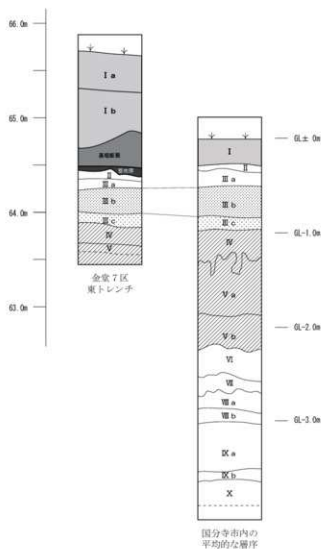
【VII a層】 褐色土。立川ローム第二黒色帯。VII層下部に似て、やや暗くなり始めるところから本層とし、削るとジャリジャリする。黒色・赤色スコリアを含む。

【VII b層】 暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。VII aよりさらに色調が暗くなる。粒子が細かく、緻密で粘性がある。黒色・赤色・青色・白色スコリアを多く含む。

【IX a層】 暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。VII bよりさらに黒色味増。粒子は細かく、緻密で粘性が強くなる。

【IX b層】 暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。成分はIX a層と同じで、粒子は細かく、緻密で粘性が強い。下部の5～10cmはX層の影響からIX a層より明るい部分もある。

【X層】 黄褐色土。粒子極めて細かく、緻密で粘性のあるローム土。



第10図 基本土層図

第4章 検出された遺構

第1節 伽藍中枢部の調査

1. 金堂地区

既往の調査 明治36年に重田定一らによって、表面観察による武蔵国分寺跡の礎石の分布調査が行われ、金堂と関連するものとして24個の礎石が報告された(重田1906)。大正11年に武蔵国分寺が国史跡として指定される際には、東京府が礎石等の分布調査を行い、金堂の礎石として19個を確認している(東京府1922)。そして、昭和31年度には日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会によって、初めての本格的な発掘調査が実施された(詳細は後述)。その後、昭和38年尼寺跡の史跡指定地内における無断現状変更による宅地造成工事が行われたことを契機として、国分寺市教育委員会は緊急調査を行い、その第4次調査として昭和40年度にも再び金堂跡の発掘調査が行われている。

昭和31年度の発掘調査では、12カ所に調査区が設定された(1～12区)。このうち、1区では北階段および基壇北面、2区では基壇北東隅、3・4区では基壇南面、5区では基壇南西隅、6区では基壇北西隅、7～12区では礎石および礎石下部の据付状況(2・4・3・4・4・2・4・4・5・1・5・2)をそれぞれ確認し、金堂建物に関わる礎石は、本来存在すべき36個のうち19個が残存していた。

調査の結果、建物は桁行7間(122尺(約36.2m) = 13 + 18 + 20 + 20 + 20 + 18 + 13尺)、梁行4間(56尺(約16.6m) = 13 + 15 + 15 + 13尺)、基壇は乱石積で、その平面規模は東西153.5尺(約45.5m)、南北尺89尺(約26.4m)と推定された。さらに、基壇の周囲には幅3尺の雨落石敷が巡り、基壇南面に建物中央間3間分、北面に建物中央間1間分の階段がそれぞれ設置されていることが想定された。掘込地業は、建物全体に及ぶ総地業を施し、その規模は東西142尺(約42m)、南北75.5尺(約22.4m)、深さ4尺5寸(約1.4m)を有し、ローム土と黒色土を交互に突き固める版築手法を用いていることが判明した。

礎石は根固め石を敷いた上に据え置かれ、根固め石の下部は壺地業を施し、石敷きと土との互層が5層確認されている。掘り方の形状は5尺四方の平面形を呈し、礎石面からの深さは5～6尺を測る。第5層の底面には杭の穴があり、その上に石を置いて閉じていた。この杭の穴は、礎石上面から深さ5～6尺まで基礎地業がされた段階で、建物位置を決めるために立てたものと推定されている。この段階で石敷第5層、次いで土層と石敷を互層に敷設する。第3層目の石敷に基壇の版築土層の一部が覆っていたことにより、石敷3層目までは基壇築成中に行われたと判断され、第2層の石敷から上部は掘り方を伴うことが確認された(日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会1956)。

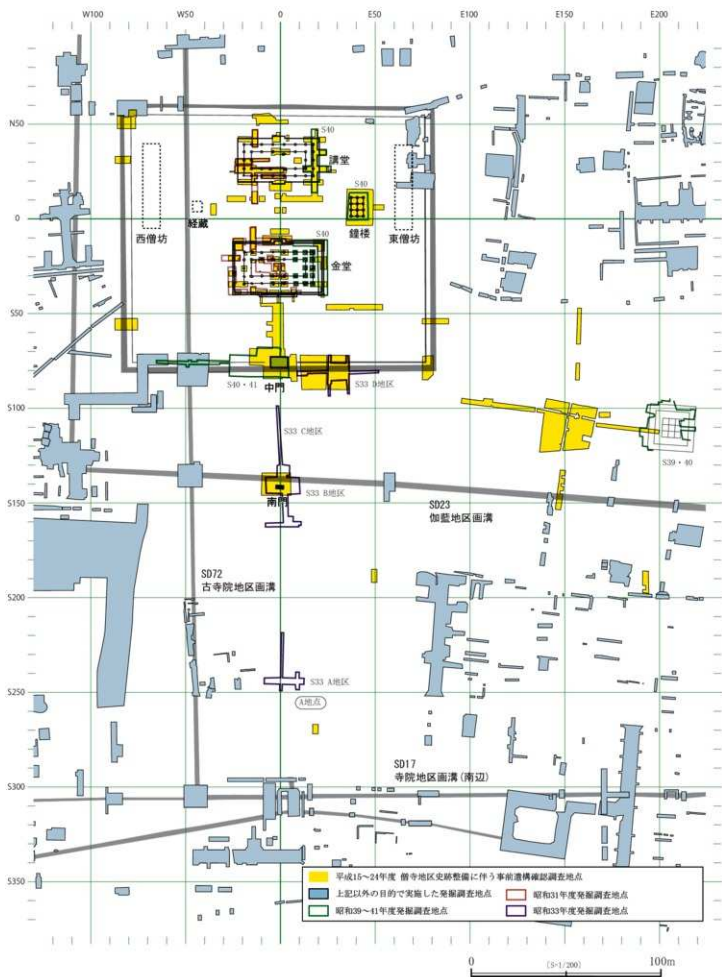
また、昭和40年度調査は、金堂跡の東側を主体に調査が行われ、6-1・6-2・6-4・6-5・7-1～5、8-1～5の礎石や礎石下部の据え付け状況、基壇の東面・北辺面が確認されている(国分寺市教育委員会1967)。

調査区の設定と調査経過 前述の一連の発掘調査の後、国分寺市では昭和47・48年度に環境整備の一環で、金堂・講堂基壇相当部分に基壇の高まりを示すための盛土工事を施工し、現在の姿に至っている。今次の史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査としては、金堂跡の調査を平成21・22年の2ヶ年、および平成24年度には南階段部分を中心に補足調査を行うこととした。

まず、平成21・22年度の調査では、主に以下①～⑦の課題解明を目指すために、昭和31年度調査区を中心として1～24区のトレンチを設定した(図面3)。

①建物位置・規模・礎石据え付け状況の確認。

②基壇位置・規模・構造の確認(基壇上面・須弥壇・基壇外装・雨落施設・掘込地業部などを含む)。



第11図 伽藍中核部の既往調査区

- ③北面階段の確認。
- ④僧寺伽藍中軸線を確定させる情報を得る。
- ⑤堂間通路などの未確認遺構の位置・規模・構造の確認。
- ⑥金堂造営時期の確認。
- ⑦基壇、基壇外装、建物などの改修・増築・再建の可能性の確認。

平成21年度は調査区の設定と周辺の測量を経て、表土の掘削（深さ約0.2m）を行った。翌22年度は引き続き人力掘削に移行し、所期の調査成果を得るために必要に応じて予定調査区の変更、および遺構の断ち割り（基壇・礎石据え付け掘方など）を随時進めた。その結果、基壇南側に取り付く階段の様相が不明確であったことに加え、基壇及び基壇外周を巡る雨落石敷の一部が南側の公道上に展開することが明らかになった。なお、公道南側の敷地は、後述するとおり平成19年度に調査を行っており、道路際に金堂基壇南面を飾る幢竿遺構が東西に推定4基並列する状況を確認しているため、幅員3.6mの現道範囲内で基壇・雨落石敷及び南面階段の出が完結していることが予測された。そこで平成24年度は、金堂南面階段の様相を追究すべく、基壇南縁中央部付近で11・24区を拡張し、新たに25・26区を加えた4カ所、基壇・雨落石敷及び南面階段の範囲を確定するために公道上に4カ所の調査区(27～30区)をそれぞれ設定して調査にあたった。**検出された遺構** 現地表下約0.3m～1.2m（基壇部分は昭和47・48年度整備盛土）で遺構確認を行い、SB217金堂の礎石やその据え付け痕跡、基壇外装、雨落石敷、階段、掘込地業などを確認した。

SB217 金堂（図面3～10 図版1～20）

AG～AM-西8～東6区に所在し、僧寺中心点の南17.0～34.8m、西19.4～東17.6mに位置する。SB217金堂建物は、桁行7間（東西約36.2m、122尺＝13尺＋18尺＋20尺＋20尺＋20尺＋18尺＋13尺）、梁行4間（南北約16.6m、56尺＝13尺＋15尺＋15尺＋13尺）の四面廂建物と推定される。建物の中軸線は、発掘前に想定していた伽藍の中軸線よりも西へ約0.3mに偏在する。基壇は河原石による乱石積基壇で、規模は東西約45.4m、南北約26.2mを測る。基壇の外周には、幅は約0.9～1.0mの雨落施設となる雨落石敷が設置される。基壇上面は磚敷きと想定されるが、今回の調査でその痕跡は確認されなかった。基壇高は場所によって異なり、基壇北東部分で約0.95m、基壇北面階段部分で約0.8m、基壇東面で約1.25mと推定される。階段は、基壇の南面と北面に階段が設置されていたことを確認し、北面階段は乱石積の階段で、幅はおおよそ建物中央間1間分、南面階段は部材が確認されなかったが範囲から幅がおおよそ建物中央間3間分であると想定されるに至った。基礎地業は、建物規模より広い範囲全体におおよそ深さ1.3～1.4mの掘込地業（総地業）で、版築の厚みは基壇を含めると2m以上を測る。さらに、礎石を据え付ける下方には壺地業を加えていることが確認された。以下、個別要素ごとに詳述する。

1 建物 金堂建物は、桁行7間、梁行4間の四面廂建物で、礎石や礎石据え付け痕跡、礎石下部の壺地業、基壇外装との位置関係などを考慮して以下のとおり推定される。

桁行7間 約36.2m＝122尺（13尺＋18尺＋20尺＋20尺＋20尺＋18尺＋13尺）。

梁行4間 約16.6m＝56尺（13尺＋15尺＋15尺＋13尺）。

屋根の軒の出は、建物側柱から基壇縁までの距離は、南面と北面で約4.8m、東面と西面では約4.6mを測り、雨落石敷の幅が0.9～1.0mであることを考慮すると、南北面で4.8～5.8m、東西面で4.6～5.6mの範囲と想定される。

2 基壇および掘込地業 基壇および掘込地業部は、昭和31年度調査により、基壇の東面（9区）、西面（4・5区）、南面（12・24区）、北面（5・6・7区）で断割りが行われ、4区と5区で掘り込み底面まで確認されている。それぞれの断面観察から、建物全体に及ぶ範囲全体を掘り下げ、その内部に土を埋め固め

て版築する掘込地業（総地業）であることを再確認した。今回の調査では、19区において基壇中央部の版築の状況を確認する目的で新たに1箇所の断割りを行った。

調査の結果、総地業の規模は東西42.0m、南北22.4mを測る。建物の範囲より東に約2.5m、西に約3.3m、南に約2.7m、北に約3.1m広く、後述する基壇範囲よりは狭い。掘込地業は整地層を切って掘り込まれ、深さは1.3m～1.4mを測り、掘り方の壁面は75～80度の傾斜で立ち上がる。版築は、底面にローム土主体層が20cm程度堆積し、その上層に層厚1～5cmほどの細かな版築が30層ほど施され、最上層は黒褐色土・黒色土の層厚約20～30cmの比較的厚い層が堆積する。最上層とその下層の細かな版築は、いずれの断割り部でも確認され、概略同様の工程で掘込地業が施されたと想定される。昭和31年度調査で版築層中から瓦片が出土しているが、4区旧トレンチ断面で瓦片を含む層を確認し、19区の断割りにおいて瓦片が出土した。なお、掘り込みの確認レベルは、東辺が標高約64.41m（9区旧トレンチ）、西辺が標高約64.7m（4区旧トレンチ）、北辺が約64.5m（7区旧トレンチ）、南辺が標高約64.7m（24区旧トレンチ）で、西と南が高く、比高差は東西で約30cm、南北で10～20cmを測る。これは後述するように雨落石敷の上面のレベルも相対的に西から東に向かって低く、旧地形が反映していると考えられる。

基壇版築は、次の2つの特徴がある。一つは、基壇周縁部の版築が外側に向かって下り傾斜し、水平に版築されていない状況が基壇の四周で確認された。もう一つは、マウンド状に土を積み、後から窪んだ部分に土を積み版築が、基壇西端から中央部にあたる4区、5区、6区、16区、20区の旧トレンチ東西断面で観察された。視認できる箇所が限られているが、南北側の断面ではみられず、高まりの平面形状としては南北に長い可能性がある。版築が高まる箇所は基壇西縁から柱列1の間、柱列2から柱列3の間、柱列4上にあたり、高まり部分と窪み部分の幅はともに5m程と推測される。版築工程は、掘込地業後にまず黒色土でマウンド状に版築し、その後、窪んだ部分にローム土・黒色土・黒褐色土等で版築を加え、さらにマウンドを高くして、再度、窪んだ部分に版築を行う。基壇東側の状況は断割り部が基壇外縁部の9区のみで詳細は不明である。マウンド状に土を積みあげる工法は、礎石下部で見られることはあるが、金堂では必ずしもマウンド部分が柱位置に合致せず、1・5・3・4の位置では窪み部分に当たり、今回確認された工法は別の要因と考えられる。

以上のとおり、基壇は全体を水平に版築していないので、版築土の様相は複雑だが、大別すると下層は黒色土、上層はローム土を主体とする。基壇中央部（19区）が最も基壇が良好に残存し、推定基壇高（標高65.7m）から20cmほど低いレベルでローム土の版築が確認された。基壇上面において床面や須弥壇に関わる痕跡は確認されなかった。

3 基壇外装 基壇外装は河原石を用いた乱石積基壇外装である（図面5・8）。基壇東面（8・9・10区）、南面（11・12区）、北面（6・7・8区）、北東隅（8区）において、再確認した。基壇西面では後世の擾乱の影響もあって、乱石積基壇外装の部材は残存していなかったが、4区の旧調査断割り断面に基壇外装を構築した痕跡が確認された。石の積み方は、基底となる河原石の長軸を基壇縁と並行に据え、その上は小口積みにしてほぼ垂直に石を積む。現状では基底となる石の上に2段積み重ねた計3段分が確認された。石の大きさは長軸が0.5m～0.7m程度である。基壇外装の構築方法は、基壇土を築いた後に基壇縁に沿って溝を掘り、白色粘土を含む構築土によって河原石を設置する。

4 基壇規模 基壇規模は、西面では乱石積外装自体が残存していないが、外装を構築した痕跡や雨落石敷、建物との位置関係から基壇縁を推定すると、東西約45.4m、南北約26.2mを測り、基壇は掘込地業よりは広い範囲に及んでいることがわかる。基壇高の復元は、礎石の高さなどから基壇上面を標高65.7mとし、基壇周囲の旧地表面を雨落石敷の天端高とした場合、基壇の北西部分（5区）では約1m、北面西側（6・7区）で約0.9m、北面階段部分（7区）では約0.8m、東面（9区）では約1.2m、南面（12・24区）

では約1.1m測り、場所によって基壇の高さが異なる。

5 礎石 礎石は今回の調査で19個現存することを確認した(礎石1-1～5、2-1～3、5、3-1・2・5、4-1・4・5、6-1・2、7-1、8-3)。この他に、昭和31年度調査で礎石8-2、昭和40年度調査で礎石7-4・8-2がそれぞれ確認されているが、現状は地中に埋まっており、これらを含めると基壇上に礎石は21個残存する。今回発掘した礎石は、原位置からやや東に移動している礎石2-5を除いて、原位置を留めていると考えられる。礎石8-3は、調査によって礎石が移動する危険性があったため、旧調査の埋め戻し土は全て除去せず、据付状況は確認しなかった。により根固石上に礎石が据え付けられているものと判断される。なお、昭和40年度に発掘された礎石7-4・8-2・8-3は、当時の記録写真によると、礎石8-3は根固石上に据え付けられたものと判断されるが、礎石7-4・8-2は原位置から移動し、また欠損している可能性がある。

礎石天端の標高は、最高が礎石1-4の66.04m、最低が礎石8-3の65.74mで、平均約65.89mである。

全体を確認できた礎石の平面規模は、礎石1-1が1.5m×1.2m、礎石1-3が1.2m×1.0m、礎石2-5が1.2m×1.0m、礎石4-1が1.6m×1.4m、礎石4-4が1.9m×1.2m、礎石8-3が1.3m×1.0mである。礎石は自然石(チャート)で、明瞭な加工の痕跡は見られない。

6 礎石据え付け痕跡 礎石は、円形の礎石据え付け掘り方を掘り、根固石によって据え置かれる。礎石1-1・1-3・1-5・2-5・7-1で礎石据え付け掘り方が確認された。規模は、礎石1-1が径2.4～2.5m、深さ0.3m、礎石1-3が径2.5～2.7m、礎石1-5が径1.2m以上、深さ0.3m、2-5が径2m以上、礎石7-1が径2.1mを測る。埋め土は砂礫や白色粘土、ローム土を含み、硬く締まり、遺物の混入は見られなかった。この他、掘り方は未確認だが、礎石4-5において白色粘土を含むにぶい黄褐色土の埋土を確認し、礎石4-1・4-4では、根固石によって礎石を据え付けた状況を確認した。なお、礎石3-4部分で確認された径1.8以上の円形状の掘り込みは、覆土は白色粘土を含む灰黄褐色土やにぶい黄褐色土で良く締まり、礎石据え付け掘り方と想定される。しかし、この掘り込みは旧調査の断割りによって壺地業との新旧関係は不明である。

7 壺地業 礎石据え付け位置の下部には、壺地業が確認された。壺地業の版築は、基壇版築土を方形に掘り込み、土と石敷き層を互層に突き固める。壺地業は今回の調査では、新たな断割りは行わず、平面プランの確認と旧調査で断割りをした断面(1-5・4-1・4-4)で確認する作業を行った。その結果、壺地業は1-1・1-5・2-5・3-3・4-1・4-2・4-4・5-1・5-2・5-5、8-1・8-4・8-5で確認された。なお、昭和40年度調査において、7-4・8-2などの壺地業が検出されている。1-1・3・5、7-1では、礎石据え付け掘り方により壺地業の平面プランが確認できなかった。しかし、1-1は礎石据え付け痕跡を一部断割りしその下層において確認し、1-5は5区旧トレンチ断面において礎石据え付け痕跡の下層に見られ、すべての礎石据え付け部分の下層には壺地業が施されたものと想定される。壺地業の掘り方の平面形はすべて方形基調で、3-4・4-1・5-1・5-5・8-5が正方形、4-2・4-4・5-2・8-1・8-4が長方形を呈す。確認面での平面規模は、長径約1.7～2.5m、短径約1.6～2.1mを測る。3-4は昭和31年度調査の掘り下げにより最下層となる5層目の石敷層を全面確認しており、掘り方の深さは1mを測る。

旧調査断割り断面により、4-4は上から3層目の石敷層まで、1-5は掘り方の北西隅がわずかに確認できるのみで、石敷層は未確認だが深さ0.7mの基壇版築土を切る一連の壺地業の掘り方がみられる。この他、平面プランの確認に留めた箇所においても、後世の擾乱部分により複数の石敷層が検出された。確認できた石敷層は、2-5・3-4・4-1が1層、2-4・5-2・8-3～5が2層、5-5・8-1が3層、4-2・5-1が4層である。いずれの壺地業も掘り方の平面プランが検出され、石敷層上に基壇版築土が覆う状況は確認されなかった。

3-4は昭和31年度調査報告によると、版築は石敷層と土層の互層で、石敷層を5層確認している。上から2層目の石敷では壺地業の掘り方が検出され、3層目の石敷には基壇版築土が一部覆っていることから3層目より下は石敷層ごとに、あるいは、2～3層ごとに基壇築成と並行して地業を行ったと想定された。こ

の点については、今回の調査では再確認することはできなかった。基壇築成と壺地業の作業工程については今後、再検証する必要がある。

8 雨落石敷 基壇の周囲には、雨落施設となる河原石を敷いた雨落石敷が確認された。基壇南面（1・12・24区）、東面（8・9区）、北面（6・7区）それぞれで検出されているが、北面以外は後世の攪乱によってその幅は明確ではない。なお、南面12・24区では、雨落石敷は史跡公有地外（現市道上）に及ぶことが想定される（図面5・9）。

遺存状況の良い基壇北面の状況を見ると、石敷幅は約0.9～1.0mを測る。敷設された河原石は0.1～0.2m程の大きさが主体だが、外縁部には約0.15～0.25mと比較的大きな石を配列し、その長軸を基壇縁に対して並行に据えている。石敷には石の他に、わずかに瓦や埴の破片がみられた。石敷面はほぼ平坦状を呈し、構築土中には瓦片などの遺物が多く混入している状況からは、後世に補修された可能性がある。

後述する階段部分については、雨落石敷が階段の外側を巡ることが確認されている。北面階段外周を巡る雨落石敷の内縁部は、長軸約0.5～0.7mと一際大きな河原石が設置され、その他の雨落石敷と様相を異にしている。北面階段外周の雨落石敷は南北幅1.0m、東端は残存していないが東西幅は約8.3と推定される。一方の南面階段の外周を巡る雨落石敷は、おそらく北面階段部分と同様に設置されたと考えられるが、後世に攪乱を受けており確認できなかった。

確認レベルは、東面が9区で標高約64.5m、10区で標高約64.4m、北西隅（5区）が標高約64.8m、南面が12区で標高約64.6m、24区で標高約64.65m、北面が6区で標高約64.7m、7区で標高約64.85mを測り、相対的に東側が低い。

雨落石敷範囲内には礎石大の石が2箇所で見つかり確認されている。一つは7区の北面階段西側で1.1m×0.9m、もう一つは8区の基壇東面で60～70cmをの自然石（チャート）である。なお、北面階段東側において石の破片の集中箇所が確認され、その位置から北面階段西側の石と関連する可能性がある。

9 階段 階段は基壇南面と北面にそれぞれ設置されていたことを確認した。南面は建物中央間3間、北面は建物中央間1間に収まる幅と想定される（図面5・10）。

南面階段は、旧調査範囲である11・24区と新たにその間の25・26区と道路上にあたる27～30区で調査を行った。いずれの箇所も後世の攪乱を受け、特に道路上調査区は大幅に壊されており、階段の部材等は検出されなかった。しかし、建物中央間3間分の範囲は、版築土が南へ張り出し、基壇南面を飾る乱石積や雨落石敷がみられず、当該部分に南面階段が設置されたものと判断している。その範囲は、おおよそ西端は24区で確認された雨落石敷より東側で、東端は11区で検出された乱石積基壇外装の河原石より西と想定される。階段部材は残っていないため階段規模は明確ではなものの、北面階段にみる階段の西端部と建物の柱位置との関係性を参考にすると、南面階段の幅は建物中央3間よりもやや狭く、約16.3mと推定される。階段の出については、後世の攪乱を受け調査区内では確認することができなかった。

基壇北面階段は、7区において河原石を用いた乱石積階段を再確認した。階段の踏石や構築材と想定される石、西端の積み石が確認された。規模は東端が残存していないので推定となるが、階段幅は約4.45mと想定され、建物中央間1間分よりやや狭い幅である。階段の出は約1.2～1.35m、段数は3段で、踏面（一段の幅）は約30cm、蹴上げ（一段の高さ）は約20cmと想定される。前述したとおり、階段の外周には雨落石敷が巡る構造となる。

踏石は、階段の1段目に長径約60～70cm、短径約30cmの河原石が3個、東西に並んで確認された。階段の出は、1段目の踏石の並びが基壇縁に対して東に向かってやや北に振れているので、最大で約1.35m、少なくとも約1.2mを有する。2段目以降の踏石は未確認で、2段目の踏石にあたる部分には構築材と想定される小振りの石が確認された。さらに、その南側には基壇縁にほぼ並行して約15～25cmの扁平礫が立て

た状態で据えられており、これを2段目と3段目の境と捉え、3段目の蹴上げの位置と想定する。1段目の踏石は短径30cm前後で、これを各路面とした場合、3段目の蹴上げ位置から基壇縁までの長さが約60cmであるため、踏石は4段目までであったことになる。階段の1段分の高さは、当該部分の基壇高が85cm程度と想定されるので、約20cmと推定される。なお、踏石1段目は基壇外周の旧地表面とほぼ同じ高さであり、実質、階段は3段で、踏石4段目の踏面から基壇上面に段差が1段ある形となる。

階段西端部は、階段1段目の石を含む長径30～50cm×短径20～30cmの河原石が5個南北に並んで確認された。これらは小振りな石の上に積んだ状況が見られるが、階段の下部が残存するのみである。階段幅は、東端部が残存していないので詳細は不明だが、階段西端と建物中軸線を基準に左右対称とした場合、約4.45mと想定される。

南面・北面階段部分の地業は、外側に向かって下り傾斜に積まれた基壇版築の上に、下層から比較的粘性の弱いロームブロックを含むローム土主体層、白色粘土を含む灰黄褐色土、白色粘土を多く含む褐色土層が共通して見られ、その上層には基壇版築土と類似したローム土主体層が堆積する(図面10)。これらは、基壇内外に延び、基壇外装設置によって切られるため、基壇と一体的に築かれたと考えられる。白色粘土を含む版築層は基壇東西面ではみられない特徴であり、また、基壇の外側に広がる状況から階段構築土の可能性が想定される。白色粘土を含む層を手がかりに、東西の範囲を確認したところ、南面では11区と24区、北面では7区で検出され、階段設置箇所に見られるが、北面階段の西端から西へ約5m地点まで、南面24区では調査区西壁まで延びており、南北面とも階段幅以上に及んでいる。特に、検出された北面階段の規模より広範囲に広がっているため、この点についてはさらに検証する必要がある、今回は階段部分の積み土の可能性を示すに留める。

今回北面階段の断割りを行った状況から、検出された階段は改作されたものと想定される(図面10)。上記の階段周辺の積み土の上層において、遺物が混入し後補と考えられる白色粘土粒を含む灰褐色土層が見られ、この層を掘り込んで階段1段目の石が設置されている。この層は階段北側の雨落石敷とさらにその外側に整地的に広がり、雨落石敷も階段と同じ頃に設置されたと考えられる。今回確認された階段の部材は、上記の階段周辺の積み土を掘りこんで設置されているが、その構築土は1段目の石を固定する土と類似しており、今回検出された階段は改作されたものと考えられる。なお、当初の階段の痕跡は未検出である。

金堂付近の整地としては、掘り込み地業に切られる白色粘土を含む黒色土層が確認され、造営当初の整地と考えられる。なお、この整地下層より、7区断割り部において掘り込みが検出されたが性格は不明である。基壇周囲では、白色粘土主体の層や白色粘土を含む層、遺物が混入する層などを複数の整地層が検出されたが、詳細を確認することができなかった。また、基壇上および基壇周囲に多数の検出した小穴の中には、基壇外装構築土の掘り込みで切られるものがあり、金堂建設時の足場穴の可能性が想定される小規模な柱穴を6区旧トレンチ断面で確認したが、詳細は合わせて今後の検討課題である。

2. 講堂地区

既往の調査 講堂も明治36年に重田定一らが表面観察による礎石の分布調査を行い、16個の礎石が報告されているが(重田1906)、大正11年に国史跡として指定する際に行った東京府による分布調査では、講堂礎石は9個を確認している(東京府1922)。そして、昭和31年度には日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会により、武蔵国分寺で初めてとなる発掘調査が金堂とともに行われた。この調査では講堂西側部分を対象に行い、基壇の構造や礎石とその据え付け状況、基壇増築の痕跡などを確認している(図面1)。調査の結果、建物の規模は桁行5間(95尺=約28m)、梁行4間(55尺=約16m)を測り、さらに基壇幅を東西

に広げて金堂と相似とし、桁行7間(13+18+20+20+20+18+13=122尺)、梁行(13+15+15+13尺=56尺)に拡張していることも明らかとなったが、基壇外装や雨落施設は検出されなかった。また、基壇増設後の掘り込みからは宋銭、塑像、銅製品残欠、ガラス片などが出土し、底面から円輪状の筒を固めた性格不明の遺構が検出されている(日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会1985)。

その後、昭和39～41年度の緊急調査の一環として市教育委員会による再発掘が行われた。調査の位置や内容の詳細は不明だが、調査の概略報告の掲載写真から礎石と瓦列が検出されたことが見て取れる(国分寺市教育委員会1967)。滝口1991では、講堂東側における基壇の増築と瓦列を確認したことが触れられており、調査時期は記されていないが、おそらく、これは昭和40年代調査の結果に基づく記述と思われる。しかしながら、史跡整備に伴い平成20年度に調査を行うまで、昭和40年代の調査状況や講堂東側における発掘調査の実態は明らかではなかった。調査を進めていく過程で検出された礎石や基壇外装が昭和40年代の調査写真に見えるものと同一であることがわかってきた。さらに、旧調査で設定したトレンチを再び掘り上げてみると基壇の断割りを行っていたようで、西側と同様に基壇の増築が確認されていたことも判明した。

調査区の設定と調査経過 平成20年度は、創建・再建講堂建物の位置、礎石の据え付け状況、基壇の位置や規模・構造の確認、さらに加藍の中軸線を確定させる目的で、昭和31年度の調査区と新たに講堂基壇の東側に1～5区の調査区を設定して調査を行った(第11図・図面11)。

その結果、創建時の基壇版築と基壇外装および掘込地業、再建時に基壇を東西に増築した地業の状況、創建・再建時の礎石やその据え付け痕跡を再確認した。なお、講堂の東側については、前述のとおり昭和40年代の調査範囲が確認され、今次の調査で設定した範囲と、偶然にも調査範囲がほぼ重なることとなった。

翌21年度は、前年度の調査結果を受けて、再建基壇規模および基壇外装の化粧材の確認、建物位置・規模の確認、および創建時建物の構造(切妻もしくは寄棟・入母屋)の確認、基壇南北面の階段施設の確認、創建時から再建時へ礎石据え直しの有無の確認、講堂の創建・再建時期の確認、僧寺加藍中軸線を確定させる情報を得る等を目的として、6～15区の調査区を設定した(図面11)。

検出された遺構 地表下約0.2m～0.8m(講堂基壇部分は昭和47・48年度整備盛土)で遺構確認を行い、SB218講堂、SX311・317・318土取り遺構、312不明遺構、SX319幢竿遺構、SK3344・3444～3446、SX352地業遺構、小穴多数などが検出された。また、基壇の周囲には焼土を含む地層が見られた。

SB218 講堂 (図面14・21 図版21～49)

AH～AN-西7～東5区に所在し、僧寺中心点の北22.6～39.2m、西18.5～東17.7mに位置する。SB218講堂は、創建時の桁行5間、梁行4間の二面廂の礎石建物から金堂と同規模の桁行7間、梁行4間の四面廂の礎石建物に再建しており、創建講堂をSB218A、再建講堂をSB218Bと呼称する。

創建講堂建物は桁行5間(東西約28.5m)、梁行4間(南北約16.6m)で南北二面廂の切妻造の屋根と考えられ、再建講堂建物は、桁行7間(東西約36.2m)、梁行4間(南北約16.6m)の四面廂建物で、屋根は入母屋造もしくは、寄棟造となる。基壇は、創建、再建ともに瓦積基壇であることが確認され、基壇規模は創建時が東西約34.4m、南北推定約22.6m、再建時は東西約42.4m、南北約22.8mを測る。階段は、再建時の構築土が、基壇の南面と北面で確認され、おおよそ建物中央間一間分の幅で設置されたものと想定された。

礎石は、地表に露出しているものと本調査区内で確認された比較的大きな破片も含め、基壇上やその周囲において12個確認された。すべて自然石(チャート)で加工の痕跡は見られない。基壇上には6個確認され、原位置を保つのは、SB218講堂B1・1・2・2・8・4に位置する3個の礎石である。ただし、2-2は割れており若干移動している可能性はある。

SB218 A 講堂

1 建物 創建講堂建物は、桁行5間(約28.5m)、梁行4間(約16.6m)の南北二面面の礎石建物で、建物位置や規模を確定する要素が少ないが、礎石据え付け痕跡と基壇外装の位置などから、以下のとおり推定される。

桁行7間 約28.5m = 96尺(18尺+20尺+20尺+20尺+18尺)

梁行4間 約16.6m = 56尺(13尺+15尺+15尺+13尺)

再建建物との相違点は、妻側(東西端)の各1間分の有無だけで、その他の柱間寸法は同じと推定した。建物側柱から東西の基壇縁まで約2.9mを測る。

2 基壇および掘込地業 創建時の基礎地業は、建物全体におよぶ掘込地業(総地業)である。掘込地業の規模は、東西24.8m以上、南北は25.6m以上、深さは創建基壇外装基底部の部材上面を基準にして約40~50cmを測る。東・西側は再建講堂基壇の増設により壊され、南側はSX311によって切られている。

掘込地業部分の版築は、基壇の版築土との区分けが不明確であるが、概ね、下層にみられる全体の層厚約50cmの黒色土・黒褐色土層と砂礫層の互層の版築層が該当する。これより上層の版築層が基壇部分と想定される。基壇版築土は下層からローム土主体層と砂礫層の互層(層厚約30cm)、黒色土層、白色粘土層が堆積する。白色粘土層は、最も遺構確認面が高かった基壇中央部(3・2・9区)で検出され、平面確認のみだが、創建講堂3・4礎石据え付け掘り方に切られており、創建時の基壇上層部と想定される。残存する層厚は約15cmである。この白色粘土層は、基壇上面の設えに関わるものと考えられ、埴敷きと想定される床面の構築材の可能性があるが、埴やその設置痕跡は確認されなかった。なお、白色粘土層上面に一部焼けたローム土が見られた。

昭和31・40年度調査を含めて基壇及び掘込地業版築内からは、瓦等の遺物は出土していない。

創建基壇は、瓦や河原石を基底に据えた瓦積基壇外装である。基壇東西面の外装は、再建基壇の増設に伴う掘込地業によって壊され、大半は失われて外装下部が残存した状況である。南北面は、再建時の外装設置に伴って、取り壊されたと考えられ、また、再建基壇外装が後世に一部を除いて抜き取られ、攪乱を受けているため、東西面以上に遺存状態は悪い。

基壇外装の痕跡は、昭和31年度調査によって報告された講堂西側の瓦列と同一のもので、これまで瓦積基壇外装とする認識には至っていなかった。今回、昭和40年代調査の再確認となった基壇東面では、一部、瓦片を含む南北に並んだ石の列が確認され、その旧調査時の検出状況は、さらにこの上に男瓦が積まれていた(図版103)。この南北に並ぶ瓦や石は、基壇の東西側ともに検出位置が創建基壇と増設した再建基壇の境に当たることや、再建基壇版築の下層から検出されていること、また、瓦を積んだ形跡が見られることから、創建時の瓦積基壇外装と判断された。これらの設置状況は、南北に創建版築を掘り込み、下層に礫や白色粘土、ローム土を含む黒褐色土、上層に白色粘土を多く含む粘性土を充填し、基底部の部材を設置する。この構築土は基壇の外側に向かって1.1m以上広がっており、基壇縁の外側の整地の役割を兼ねていたものと想定される。

今回の調査で、創建基壇外装は、基壇東面(5-1~3区)・西面(2区・3-1区・6区)と一部南面(10区)で検出され、東面5-1・2区と西面2・3-1区では旧調査による再建基壇版築の断割り部、東面5-3区と西面6区では基壇南北面の外装を抜取る攪乱断面において外装を確認した。その結果、創建基壇外装は場所によって、基壇外装に使用される部材は異なる様相を呈すことがわかった。

基壇東面の外装は、基底部に15~40cmの大きさの河原石が主に使用され、一部女瓦片が含まれる(図面17)。今回の調査では未確認だが、前述のとおり、昭和40年代調査時の確認状況から、基底部の石や瓦片の上に完形の男瓦が積まれていたことがわかる。基壇縁の方位は、伽藍中軸線に対して約10~20°西に傾く。

基壇西面の外装は、完形の男瓦もしくは女瓦片をいずれも凸面を上にして基底に据えている(図面17・18)。3-1区では、南北一列に並んだ完形の男瓦が6個体(内5個体は有段式)検出され、その上には再建基壇の掘込地業によってずれた女瓦りずれた状況が一部外装構築土を断割り、男瓦下層に他の部材が無いことを確認した。2区では一部破損しているがほぼ完形の2個体の男瓦(内1個体は有段式)とその南側に女瓦片が確認された。6区では、基壇北面を東西に切る攪乱断面によって観察したところ、基底から女瓦片を8枚重ねた状態が確認された。しかし、いずれも外装構築土中にあり地上部の瓦積ではないと判断される。基壇西縁の方位は、上記3カ所からおおよそ伽藍中軸線に対して約50°西に傾く。

基壇南面の外装は、中央(10区)において、再建瓦積基壇外装の内側で検出された(図面19)。一個体のみであるが、凸面を上にした完形の有段式男瓦が基壇縁に並行に、白色粘土を含む粘性土により固定された状態で確認された。

なお、基壇周囲には雨落施設は確認されなかった。

基壇の主軸方向は、伽藍中軸線に対してわずかに西に振れる傾向にある。基壇規模は、東西約34.4m、南北は不明だが、建物位置との関係から22.7m前後と想定される。

3 礎石及び礎石据え付け痕跡 礎石の据え付け痕跡は、A1-1～3・5、A2-1・2、A3-1・2、A3-4、A4-1・2・4、A6-2の柱位置で確認した(図14)。掘り方の平面形状は、いずれも隅丸形状を呈し、規模は最も遺存状況の良いA3-4で東西2.5m、南北2.6mを測る。覆土は3層に大別され、上層はローム土主体、中層は白色粘土やローム土を含む黒褐色土、下層は礫を含むローム土を主体で、下層は非常に硬くしまる。他には1-2・5には中層上に砂礫層の一部が見られる。いずれも後世に削平を受けており、A1-1・5、A2-1・2、A3-1、A4-1・2・4は、一部中層が確認されるが、下層のみ残存するものも少なくない。

礎石はA1-2で見られるが、再建時の礎石据え付け掘り方内に据え直されている。根固石は、A1-3、A3-2、A4-2で確認された。A1-3とA3-2は、再建に伴う礎石据付掘り方が平面確認では明確に検出されず、これらの根固石は創建時の所産と思われる。A4-2は根固石大の河原石がわずかに残存する。

SB218 B講堂

1 建物 再建講堂建物は、SB218 A講堂を建て替えたものである。桁行7間、梁行4間の四面廂建物で、礎石や礎石据え付け痕跡、基壇外装の位置などから、桁行7間(13尺+18尺+20尺+20尺+20尺+18尺+13尺=122尺=約36.2m)、梁行4間(13尺+15尺+15尺+13尺=56尺=約16.6m)と推定され、SB217 金堂建物と同規模である(図面21)。

軒の出は、建物から基壇外装までの距離が約3.1mで、これ以上となる。

2 基壇及び基壇外装 再建講堂の基壇は、建物を東西各1間分拡張するのに伴って、創建基壇の東西両側に基壇を増設している(図面11～13)。東西ともに建物を広げる範囲において南北に長い掘込地業を施し、この際、創建基壇の版築土および外装を切って掘り込んでいる。東側は5-1・2区の旧トレンチおよび5-3区の断割り部、西側は2・3-1区の旧トレンチで断面観察を行った。

基壇東側の掘込地業は、東西6.2m以上、南北27.6m以上の範囲で確認され、基壇規模より広い範囲に及ぶ。掘込地業の深さは、基壇外装基底部の塼の上面から約0.6mを測る。掘り込みの東西断面形状は底面から0.7～0.8mまでは逆台形状で、その上は緩やかに立ち上がる。西側の立ち上がりは基壇外装を設置するための掘り込みによって切られる。版築層は、下層が多くの礫や白色粘土、ローム土を含む黒褐色土層で、上層がローム土と砂礫層の互層を主体とする。版築内には瓦片が多く混入し、その他、炭化物・焼土粒が微量含まれる。上層は掘込地業から基壇まで一連の工程で版築される。版築層の全体の厚さは約1.2mを測る。

西側の掘込地業は、東西6.8m以上、南北24.2m以上の範囲で確認され、南北は調査区外に延ぶ。掘り込みの深さは再建基壇外装の塼上面から0.7mを測る。東西の掘り込み断面形状や版築工程は東側の掘込地

業と同様である。掘り込みの西側立ち上がり層は、再建基壇外装の構築により壊されている。東西の掘込地業は、創建基壇、SX317・318と重複し、これらを切る。

再建講堂の基壇外装は、塼を基底としてその上に瓦片を積んだ瓦積基壇である。基壇南面中央（10区）と北面中央（8区）で比較的良好な状態で検出され、その他、南西隅（7区）、南面（3-2区）で基底の塼を確認した。これら以外の基壇外装は、後世抜き取られていたが、その抜き取り穴の土を除去すると基底の塼が据えてあった痕跡が各面で確認された。なお、基壇南北面中央の外装は、薬師道等の南北通路として利用されていたため、外装の抜き取りが及ばず、遺存状態が良かったものと考えられる。

基壇南面中央（10区）と北面中央（8区）では、平面で東西に並ぶ瓦が検出され、それぞれその前面は階段の積み土が覆っていた。このことから、当該部分の外装は階段が設置されており、露出していなかった部分になる。いずれも階段の積み土を一部断割り、瓦積基壇を確認した。

北面中央部（8区）では、幅約0.5m、高さは約0.35mの規模で瓦積基壇が確認された。西側は後世に壊され、東側は調査区外に延びる（図面23）。部材の積み方は、塼を基底部としてその上に瓦片を積み上げる。塼は完形の長方形塼で、長軸を基壇縁に並行に据え、瓦片は塼の前面から5cm程度奥にずらした位置からほぼ垂直に積み上げる。積んだ瓦のほとんどは、正面に瓦の端面（小口面）を向け、側面や破断面を向けるものがわずかに見られる。使用される瓦は女瓦が主体で、男瓦や文様面を正面に向けた宇瓦もあり、瓦の端面に「父」とへら書きした文字瓦も見られる。瓦の積み方は、概略、下から凸面を上にして3枚重ね、その上に凹面を上にして1～2枚、次に凸面を上にして1～2枚を重ね、以後これを繰り返す。今回9～11枚の瓦を積んだ状況が確認された。

南面中央部（10区）では、東西幅約1.6m、高さ約0.3mの規模で瓦積基壇外装を検出した（図面24）。積み方は北面中央（8区）と同じ構造で、基底部の塼の上に瓦片を8枚程度積んだ状態を確認した。中には、押印「父」・「佳」の文字瓦（女瓦）が見られる。

これら以外に検出された外装の部材は、基底部の塼が、基壇南西隅（7区）に当たる1点、南面で2点（10区・3-2区）確認されたのみである。なお、3-2区の塼のみ長軸が基壇縁に対して直行する。

この他、部材は後世に抜き取られているが、基底部の塼を据え付けた痕跡が、基壇の南東、北東、南西隅（3-1・7・12～15区）で確認された（図面25・26）。12～15区では、設置した塼の形がわかる圧痕が平面的に検出され、3-1区や7区では、そこまで明瞭ではないが、外装の位置を想定できる状況であった。これらにより、基壇南東、南西隅が確定し、北東隅は外装抜き取り穴の土は除去せず、塼の圧痕は確認していないが、ほぼその位置を知ることができた。

基壇外装の構築状況は、5-3区a トレンチ断面では、基壇縁に沿って溝状に掘り込み、瓦片や礫とともに埋土を充填し、さらに、これを切って基壇外側に向かって浅く掘り込んで整地を施してから、外装を設置している（図25）。整地層は基壇周囲に広がり、上層の黒褐色土と下層は暗・灰黄褐色土は時期が異なる可能性がある。他の地点では、この工程は明確につかめないが、西面3-1区や東面5-4区、北面5-1区では外装設置に伴う掘り込みの埋土の上層や外装位置よりも外側に整地と考えられる粘性土が広がっている状況や整地時に掘り込みを伴う点は同様に見ることができる。これらの痕跡は平面確認でも基壇の四周で検出された。

以上の基壇外装の痕跡から、基壇の位置がほぼ確認できた。基壇縁の伽藍中軸線に対する傾きは各面で異なり、東面はほぼ並行し、西面は西に振れ、南北面はいずれも東に向かって南に振れるがその傾きは異なる。基壇規模は、東西は南東隅と南西隅の距離から約42.3m、南北は南北面中央で約22.8mを測る。基壇高（推定標高65.5m）は、基壇外装基底部の塼上面からの約85cm～1.2mを測り、南東側が高い。

3 礎石及び礎石据え付け痕跡 礎石B1-1・2・2・8-4が残存し、今回、B1-1礎石は未調査であるが、その位置から原位置を留めるものと想定される。礎石B2-2とB8-4は根固石上に据えつけられた状況が確認さ

れた。B8-4 礎石は上面が赤く、被熱したと思われる痕跡が見られる。なお、B2-2 礎石は割れており、わずかに移動している可能性がある。

礎石据え付け痕跡は、礎石 B1-2・3、B2-2、B3-2、B4-4、B5-2、B8-2・8-4 で確認された。B4-4 は今回新たに確認したもので、その他は昭和 31 年度と 40 年代の調査によって確認された状態で遺構確認を行った。

B1-2・1-3・8-2・8-4 は、基壇増築部分に新たに礎石を設置した箇所である。平面形は円形状を呈し、規模は長径約 1.2～1.7 m、短径約 1.0～1.4 m を測る。覆土はローム土を主体とする。B8-4 は根固石に礎石が据え置かれた状態で検出され、この他は根固石が残存する。

再建時の礎石据え付け掘り方は、平面形が円形状を呈し、方形状である創建時のものとは異なる特徴を捉えることができた。このことから、創建建物と柱位置が重なる B4-4 で検出された、創建の礎石据え付け掘り方を切る円形状の掘り方を再建時の礎石据え付け痕跡と判断し、講堂の再建にあたって礎石を据え直したと想定した。

創建建物と柱位置が重なる箇所では、平面確認のみであるが、B2-2・3-2・4-4・5-2 で再建時の礎石据え付け痕跡を確認した。いずれも創建時の礎石据え付け掘り方を切る。B4-4 礎石据え付け掘り方は、長径 2.4 m、短径 1.8 m を測り、平面形状はやや南北に長い楕円形状を呈し、掘り方中央に根固石が確認される。埋土はローム土や白色粘土を含む褐色土で、礫や瓦片を含む。B3-2 は根石周りにわずかに埋め土が残存するのみであるが、B2-2・5-2 においても創建時とは異なる掘り方が確認され、再建時に根固石や礎石が据え直されたものと思われる。一方、根石が残る柱位置 2-3 や 4-2 は 2 時期の掘り方が明瞭に検出されず、創建時の状態の礎石据え付け痕跡と想定される。礎石が残っていないので判然としないが、全ての礎石を据え直さなかった可能性がある。

4 階段及びその他の施設 階段の痕跡として基壇南面（10 区）と北面（8 区）で階段の構築土と想定される積み土が検出された。ともに瓦積基壇外装の前面を覆って積み土が施されており、基壇外装設置後に階段が造られている。階段の部材は、基壇南面（10 区）で 50 cm 前後の河原石が点在しており、これらが使用された可能性があるが、明確ではない。階段の規模は、積み土の残存状況から南北面とも建物中央一間分の幅と想定される。基壇南北面とも、今回の調査で一部断割りを行った。北面階段の積み土は東西 1.2 m、南北 2.3 m 範囲で確認され東側は調査区外に延びる。構築土は白色粘土を含む黄褐色土で瓦片が混入する。南面階段は東西 2.3 m、南北 1.6 m の範囲で確認され、白色粘土を含む暗褐色土で瓦片等が多く混入する。階段の北面の断割り部では階段の積み土の下層で砂礫の層が確認され、階段設置の基礎工事や通路の痕跡の可能性などが想定されるが性格は不明である。なお、雨落溝や石敷などの施設は確認されなかった。

SX311 土取り遺構（図面 31 図版 47）

AD～AG-西 6～東 5 区に所在し、僧寺中心点の北 11.0～19.0 m、西 16.5～東 18.0 m に位置する。SX311 土取り遺構は、講堂南面（3-2・5-3 区・10 区）に位置し、掘り込みの東端と南端、北端を確認した。3-2 区旧トレンチ断面において断面観察を行った。他に堂間地区金堂・講堂間 1・5・6 区において検出している。西端は未確認だが、東西 35.0 m 程度、南北 8.0 m の長方形を呈す。深さは 0.6 m を測る。覆土は白色粘土やローム土を含む黒褐色土で、人為的に埋め戻しと想定される。上層には講堂再建以降の整地層、SX352 地業遺構が確認され、SX319・324～327 輪竿遺構を切る。創建講堂の基壇版築を切り、再建に伴う整地層に覆われていることから、講堂再建に伴う土取り穴と想定される。

SX311 の下層遺構が多数検出しており、今後この点については別遺構の可能性も含めて検証を加える必要がある。

SX312 不明遺構（図面 33 図版 48）

AJ-7 区に所在し、僧寺中心点の北 26.8～31.0 m、西 17.0～19.7 m に位置する。講堂増築基壇を切る

掘り込みで、2区で検出された。昭和31年度調査により覆土が掘削され、宋銭（天聖元宝＝初鑄1023年、元祐通宝＝初鑄1086年）、塑像、銅製品残欠、ガラス片などが出土し、底面から円輪状の土を固めた性格不明のもの（輪形土製品）が検出されている。今回はこの断割り部により確認を行った。

旧調査埋め戻し土を掘り上げると、底面付近に砂で養生した輪形土製品が確認された。砂の上には昭和31年度調査で目印としていた日付入り石がのせてあった。覆土はローム土や白色粘土、焼けた土、礫を含む黒褐色土や暗褐色土で、瓦片や青銅製品片、宋銭がみられた。塑像やガラス片は今回確認されなかった。底面で検出された輪形土製品は、外径約1.1m、内径0.6m、厚さ約0.25mを測る。上面は大半が破損しているが内側が高い段差があり、内側の幅5cm、外側の幅5cmを測る。表面は被熱し、表層が硬く焼けている。被熱しているのは上面の表層のみで、側面や内部は白色粘土を含む粘質土の状態である。

SX317 土取り遺構（図面31 図版49）

AI～AK-8・9区に所在し、僧寺中心点の北24.5～32.0m、西22.0～26.5mに位置する。SX317は、講堂の西側（2・3-1区）で検出され、旧調査断割り部において断面観察した。東西は3.8m、南北7.4m以上、深さ0.7m以上を測る。覆土は白色粘土を含む黒褐色土である。規模、形状、覆土から講堂東側で検出されたSX318土取り遺構と類似する。

SX318 土取り遺構（図面32 図版49）

AG～AM-7～9区に所在し、僧寺中心点の北18.0～36.5m、東21.0～26.5mに位置する。講堂の東側（5-2・5-4・15区）で検出された。東西7.4m、南北18m以上、深さ50cmを測る。基壇に沿って南北に長い掘り込みと想定される。覆土は、白色粘土を含む黒褐色土である。SB218 B講堂の東側掘込地業に切られ、15区では上層に講堂再建以降の整地が覆っている。規模、形状、覆土から講堂東側で検出されたSX317土取り遺構と類似し、ともに講堂の建設に伴う土取り穴の可能性がある。

SX319 幢竿遺構（図面30 図版49）

AD・AE-6区に所在し、僧寺中心点の北11.1～12.5m、西14.8～16.2mに位置する。講堂前面において東西に6本並立する幢竿遺構のうちの西端にあたる柱穴である。これと組み合わせるSX324～327幢竿遺構は、堂間地区金堂・講堂間5・6区で述べる。SX319は2時期を確認している。SX319 Aが古く、SX319 Bが新しい。SX311土取り遺構と重複関係にあり、本遺構の方が古い時期の所産である。

SX319 A 平面形はSX319 Bに大きく壊されているため不明である。断面形については、掘り下げておらず詳細は不明だが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は2層に分層されるが、いずれもローム土を粒状あるいはブロック状に多量に含む黒褐色土を主体とする。

SX319 B SX319 Aの柱を抜き取り、ほぼ同じ位置に建て替えたものである。掘り方の平面形は長径1.2m、短径1.0mの隅丸長方形を呈する。断面形は掘り下げておらず不明だが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は5層に分層され、Ⅲb層を主体とする黒褐色土やローム土を主体とする黄褐色土などである。柱の抜き取り穴を確認した。

3. 鐘楼地区

既往の調査 当該地区は金堂・講堂跡の東側にあたり、現在、原位置を保つ礎石が1個地表に露出している。この鐘楼と想定伽藍中軸線を挟んで対称となる位置は、宗教法人国分寺が管理する墓地で、ここでも礎石が複数分布しており、経蔵跡と推定されている。今回の調査でも東側を鐘楼、西側を経蔵と呼称するが、遺構や出土遺物から建物の性格が特定されている訳ではない。なお、大正時代に東京府が行った礎石の分布調査でも、現在地表に見える礎石1個は確認されている。

その後、昭和40年度に市教育委員会は、建物範囲のほぼ全体におよんで発掘調査を行った（図版103）。

調査の結果、鐘楼跡は棟を南北に通す桁行3間、梁行2間の総柱建物であることが確認された。現在も地表に出ている礎石3-3は、この時に原位置を保っていることが判明し、その他11カ所で根固石などの礎石据え付け痕跡が検出された。調査は礎石据え付け痕跡が確認されたことをもって中断し、詳細は後に譲ることにして埋め戻し保存された（国分寺市教育委員会1967）。

調査区の設定 今回の調査では、鐘楼跡の建物位置・規模、礎石および礎石据え付け状況、基壇位置・規模・構造（基壇上面・基壇外装・雨落施設・階段・掘込地業）を確認する目的から、昭和40年度の調査範囲を包括する形で、東西約14m、南北約19mの調査区を当初設定したが、調査を進める過程で、東僧坊へとう通路状遺構の有無を確認するために、東辺中央付近に追加で東西6.5m、南北3.0mのサブトレンチを設定した。

検出された遺構 表土下約40～50cmから、昭和40年度の調査で遺構を保護する目的に敷いた養生ビニールが現れ、それを除去するとSB220鐘樓の礎石やその根固石、さらに建物の南辺部からは東西に並ぶ石列・瓦列が確認された。

SB220 鐘樓（図面34～36 図版50～54）

1 建物 鐘樓建物は、AA～AD-12～14区に所在し、伽藍中軸線中心点の北1.5～10.5m、東38.0～44.0mの位置にあたる。鐘樓建物は、桁行3間、梁行2間の南北棟の礎石建て総柱建物で、礎石や礎石据え付け痕跡の位置から以下のとおり復元される。

桁行3間 約9.2m＝31尺（10尺＋11尺＋10尺）。

梁行2間 約5.9m＝20尺（10尺＋10尺）

桁方向を基準とした場合、建物の主軸は伽藍中軸線に対して1°60′西に傾く。

2 礎石 調査の結果、礎石1-4・3-3の2個が確認された。礎石3-3は、現地表面に見えていた唯一の礎石で、周囲は根固石の検出レベルまで削平されていたが、礎石自体は根固石の上にはっきりと据えられた状態を再確認した。礎石3-3は原位置を留めており、その上面の高さは標高64.9mである。一方、礎石1-4は、後世の掘り込み部分に落ちた状態で出土しており、据え付け部から南西にずれており、原位置は留めていない。いずれも自然石（チャート）を使用し、明瞭な加工の痕跡は見られなかったが、礎石3-3上面は被熱の影響からか赤化している。

3 礎石据え付け痕跡 礎石据え付け痕跡は、礎石3-3を含め12カ所の柱位置すべてで礎石据え付け掘り方が確認され、根固石は1-3・2-4の2カ所以外で残存している。礎石の据え付け部分は、基壇確認面を精査すると、平面隅丸形状のプランで、5～6cmほどの一段深く掘り下げられた底面に、ロームブロックを多く含む黒褐色土・暗褐色土が充填された礎石据え付け掘り方と根固石の集石が現れた。平面隅丸形状の掘り方は昭和40年代の調査で意図的に掘り下げられた可能性もあり、これが建築時の造作であるのか否かは現時点では判然としなかった。礎石据え付け掘り方が不整形に残存し、本来の規模や平面形状は定かではないが、礎石の据え付け方法は、基壇を築いた後に礎石据え付け部分を浅く掘り、埋め土をして根固石により礎石を設置したものと想定される。

4 掘込地業 建物基礎地業は、昭和40年代の調査が中断した経緯もあり、必ずしも明らかではなかった。本調査の前まで、『武蔵国分寺図譜』（国分寺市教育委員会1967）に掲載された写真（図版103）に写る前述の平面隅丸形状の掘り込みから、僧寺中門や僧坊、尼寺尼坊と同様に、鐘樓の掘込地業は礎石下部のみ地盤改良する壺地業と想定されていた。しかし、調査を進めていくと建物南面の西側で昭和40年代の調査による南北の断割りトレンチ（Gトレンチ）が確認され、この断面観察により、建物全体に及ぶ掘込地業（総地業）と想定される掘り方南端と版築層が確認された。このため、建物基礎の規模・構造を確認する目的で、東西

南北と柱位置2-2にA～Fの6カ所にトレンチを設定して断割りを行った。この結果、鐘樓建物基礎は、建物全体に及ぶ範囲を面的に掘り下げ、その内部に版築を行う総地業であることが判明した。また、礎石下部には壺地業が施されていないことも確認された。

掘込地業（総地業）の規模は、東西約11.5m、南北約14.3m、確認面から深さ最大で約1.0mを測る。掘り込みの断面形状は逆台形状を呈し、底面から50～60度の角度で40～50cm立ち上がり、上部は緩やかな傾斜となる。版築層は、上層からA～Dの4層に大別される。A層は基壇版築土と想定され、ロームブロックを多く含む黄褐色土や暗褐色土の版築層が6層みられ、残存する層厚10cmである。B層は6層ほどからなる白色粘土を含む黒色土主体層で全体の層厚は約25cmを測る。C層は暗褐色土や黒褐色土を主体として20層ほど確認され、非常に硬く突き固められている。D層は、掘り込み底面に堆積するローム土主体の黄褐色土層である。遺物はB・C層から瓦片が出土した。掘込地業の外側にはB層と類似した白色粘土を含む黒色土の整地層が広がり、掘込地業はこの整地層を切って掘り込まれる。

5 基壇 基壇は、削平を受けており残存状況は良くないが、確認面で検出されたローム主体の上記A層が基壇版築土と考えられる。建物南面において、東西に並ぶ石とその北側に沿って瓦片が確認された。多くの石は後世抜き取られており、当初、石は列を成していたと考えられる。石列は、鐘樓建物から約2.7mに位置し、検出した石列の長さは6.8mを測り、その主軸は伽藍中軸線に対して1°60′西偏する。使用される石は、20～30cm大の扁平な河原石で、長軸を東西に向けて、立てて据え付けられている。瓦列は、南北40cmの範囲に瓦片が2、3枚程度重った状態で、石列の北側に沿って帯状に確認された。瓦片は女瓦が多いことや、凸面を上に向けたものが多いもの、並びや重なりに規則性は見出せない状況であった。

石列と瓦列は、基壇に伴う何らかの設えと考えられ、それぞれ、乱石積基壇外装や瓦積基壇外装の部材の可能性も考えられたが、検出状態からはいずれとも判断がつかなかった。

鐘樓建物からおおよそ2.7mは離れたあたりから、攪乱を受けている西側を除き、外側に多くの瓦片等が散布しており、この範囲の内側に基壇が設置されたものと推測される。瓦の出土範囲から想定される基壇規模は南面の石列の位置とほぼ一致している。このため、石列が見切り材のような形で基壇縁を示していた可能性は十分考えられる。南面の石列を基壇縁と仮定した場合、基壇の平面規模は東西約11.5m、南北約14.3mと想定される。また、この想定される基壇の東・南面では、基壇周りの整地や基壇外装の設置に関わる可能性がある掘り込みが見られた。この掘り込みは西面・北面は後世の掘り込みによって不明確であるが、基壇及び掘込地業の版築土を切る。覆土は白色粘土を含み、褐色・暗褐色・黒褐色土の粘性土で、瓦片が多く見られる。南面の石列・瓦列は、この掘り込みを切って設置されており、これらは後補の可能性が高い。

基壇高は明確ではないが、石列を旧地表面付近と想定すると約50cm程度と推定される。なお、調査範囲内では雨落石敷、階段の痕跡は検出されなかった。

4. 経蔵地区

既往の調査 経蔵地区は、金堂・講堂の西側に位置し、経蔵が位置する地点である。これまで未発掘であるが、現存する4個の礎石の配置やSB220 鐘樓との位置関係から、桁行3間、梁行2間の南北棟の礎石建ち建物の存在が想定されている。経蔵と関連する礎石群は、明治36年の重田定一らによる礎石等の分布調査によって7個の礎石が確認されたが、当時、この礎石群は僧坊跡と認識された。大正11年に国史跡として指定される際の東京府による礎石分布調査では、明治期に確認された礎石7個中5個が確認され、東西2間、南北3間の小建物と想定された。さらに伽藍中軸線を挟んで対称の位置に、極めて安定している1個の礎石があることから、この2カ所を鐘樓跡と経蔵跡に推定した。この経蔵地区の礎石群については、その後、太田静六や石村喜英らによって考察され、明治・大正期で確認された北端の1個の礎石を除き、東西2間、南北3

間の建物と推定された。

現在、経蔵建物は、宗教法人国分寺の墓地内に当たり、現存する礎石のすべてがその敷地内に収まっている。現存する礎石は4個確認でき、大正期に確認された5石のうち、一番北側のものは失われている。

調査区の設定 経蔵跡は、礎石等の分布状況から建物本体は史跡公有地外に位置しているが、その東側に隣接する公有地内において、経蔵の基壇やそれに関わる階段、雨落施設、掘込地業などを確認する目的で東西3m、南北6mの調査区を設けた。

検出された遺構 表土下約50～60cmで、遺構確認を行い、SB221経蔵の基壇周りの整地土と想定される土層が検出され、上層から黄褐色～褐色の粘質土層（①層）、白色（淡黄色）を主体とした粘土層（②層）、黒褐色土を主体とするしまりの良い土層（③層）の3層が確認された。白色（淡黄色）粘土層（②層）は、攪乱されているものの、調査区のほぼ全体で認められ、その上層の黄褐色～褐色粘土・粘質土層（①層）は、調査区の西側に広がって検出された。

本調査区内では経蔵跡の建物や基壇の版築土、外装、階段等は検出されなかった。ただし、ボーリング探査を行った結果、調査区西壁付近で掘り込みが確認され、その部分は非常に硬くしまっていることから、SB221経蔵の掘込地業の可能性を想定することができた。

5. 堂間地区

(1) 中門・金堂間

既往の調査 本地区は、伽藍中樞部区画内のSB217金堂とSB216中門間にあたる。SB217金堂とSB216中門の建物本体の調査は、前者が昭和31年度、後者は昭和40年度に実施されているが、本地区はこれまで未調査である。

調査区の設定 伽藍中軸線上における中門・金堂間の参道などの未発見遺構を確認するために、平成18年度に、伽藍中軸線を挟んで東西5.5m、南北24mの調査区を設定して調査を行った（図面38）。その結果、中軸線を挟んで左右対称に並ぶ、幢竿遺構SX302・303とSX304・305などを確認した。これらの幢竿遺構の対となる遺構を確認する目的で、平成19年度に、一部調査区を西側に拡張した。

また、伽藍中樞部内において金堂・講堂などと東僧坊を分割する区画施設の有無を確認する目的で、平成20年度に、中門・金堂間の東側に東西30m、南北3.0mの調査区（中門・金堂間東）を設けた（図面41）。

検出された遺構 中門・金堂間調査区は、地表下0.7～0.8mのⅢb層上面で遺構確認を行った。調査区東側は後世の南北の溝状掘り込みによって大きく削平されており、これを掘り上げて遺構確認を進めた。その結果、SX302～306幢竿遺構、SX308粘土層、多数の小穴・柱穴を確認、幢竿遺構は伽藍中軸線を挟んで東西に並ぶ二組を確認したが、参道にあたる通路遺構は検出されなかった。

中門・金堂間東調査区では、地表下約0.5～0.6mのⅢb～c層上面で遺構確認を行った。その結果、柱穴を含む小穴が確認されたが、伽藍中樞部内の建物を区画する施設は本調査区内では確認されなかった。

SX302・303 幢竿遺構（図面39 図版56）

BB-西1～0区に所在し、僧寺中心点の南61.1～62.9m、西2.4～東2.0mに位置する。金堂心より南に約35mの位置で検出された。SX302・303幢竿遺構は伽藍中軸線を挟んで東西に並ぶ。なお、西側拡張区では組み合う柱穴が確認されず、2本が並立する幢竿と考えられる。いずれも一部覆土の掘り下げを行い、1回の柱の抜取りを確認した。SX302幢竿遺構は、長径1.8m、短径1.5mの隅丸長方形で、深さは1.5mを測る。SX302の埋土の最下層上面で柱のあたりが一部確認され、柱の径は30cm以上と想定される。SX303

幢竿遺構は、後世の掘り込みによって削平され、長径1.5m、短径1.0mの隅丸長方形で、深さは0.9mを測る。SX303は明確に柱痕跡は見られないが、抜取り穴の底面は硬く締まっていた。確認された柱と柱の間隔はおおよそ3.0mである。埋土は、ローム土を主体とする黄褐色土やローム土を多量に含む黒褐色土で、柱抜取り穴は上層に白色粘土を多量に含む。遺物は瓦片が少量出土した。

SX304～306 幢竿遺構（図面39）

AP-西2～0区に所在し、僧寺中心点の南45.8～47.1m、西5.4m～東1.5mに位置する。金堂心より南に約20mの位置で検出された。当初の調査区において、SX304・305 幢竿遺構が検出され、これらと組み合わせる柱穴を確認するために調査区を西に拡張した。その結果、SX307 粘土層が検出されたが、調査区北壁際の掘削部分において、SX304とSX305の柱間隔に対応する位置で掘り込みがみられたため、一部SX307を掘り下げSX306の東半分を確認した。これにより、東端の柱穴は調査区外で未確認であるが、伽藍中軸線を挟んで東西に各2本、計4本が並列する幢竿遺構と想定される。SX305・306 幢竿遺構は平面での確認、SX304 幢竿遺構は覆土を一部掘り下げて断面観察を行った。

SX304 幢竿遺構は、東西0.6m、南北1.0mを測り、隅丸長方形を呈す。上面は後世の掘り込みにより削平されており、深さは他2基の確認面を基準とすると約0.9mを測る。SX305 幢竿遺構は、東西0.5m、南北1.3m以上、SX306 幢竿遺構は南北1.1m以上を測り、不整形な隅丸長方形形状を呈す。SX304・305 幢竿遺構は柱痕跡が検出され、柱の間隔は約3.4mである。

SX307 粘土層（図面40 図版56）

中門・紺堂間調査区北端の拡張区において金堂基壇南面から南に約8mの位置に東西約6.8m、南北約1.5mの範囲で検出され、東・南・北側は削平を受け、西側は調査区外に延びる。白色粘土主体とする粘土層で厚さは約10cmを測る。金堂や講堂基壇周辺で同様の粘土層が確認され、建物周りや区画内の整地の可能性がある。

（2）金堂・講堂間

既往の調査 金堂・講堂間は、昭和31年度調査において講堂建物本体ともに、講堂前面部分の調査が一部行われている。平成20・21年度（642・650次調査）に講堂地区として再調査を行い、その結果、昭和31年度調査では未報告であったが、講堂前面においてSX319 幢竿遺構や土取穴と想定されるSX311が確認された（図面11）。

調査区の設定 金堂・講堂間は、平成22・23年度に計6カ所の調査区を設定して調査を実施した（図面42）。金堂・講堂間の通路遺構等を確認する目的から、伽藍中軸線上において、平成22年度（655次調査）に金堂・講堂の中心より北側に、東西6m、南北3mの調査区を2カ所（1・2区）設定し、平成23年度（672次調査）にはSB217 金堂の北側に東西10m、南北3mの調査区（3区）を設けた。その結果、1区と3区において、金堂・講堂間を結ぶ南北の通路遺構SF12が検出された。また、平成20・21年度の講堂地区の調査において講堂前面で検出されたSX319は幢竿遺構の可能性が想定されたため、これに組み合わせる柱穴の確認およびSF12 通路遺構の確認も含めて、SX319の西側に東西10m、南北3mのトレンチ（4区）、東側に東西3m、南北3mのトレンチ（5区）、伽藍中軸線より東側の延長部分に、一部1区を含めて東西22m、南北4mのトレンチ（6区）を設定した。

検出された遺構 1区は、地表下約0.4～0.5mで遺構確認を行い、SF12 通路遺構、土取穴と想定されるSX311が確認された（図面45）。2区は、地表下約0.4～0.5mで遺構確認を行った。調査区の西側でローム土を基調とした土や調査区東側では白色粘土を含む黒褐色土の広がりがなど人為的な土の堆積が確認されたが、平面確認に留め、今後の調査に委ねることとした（図面45）。3区は、表土下40～60cmで遺構確認

を行い、SF12・13 通路遺構が検出された（図面 43）。4～6 区は、地表下 40 cm の暗褐色土層、および、地表下約 60～70 cm のⅢ a 層～Ⅲ b 層上面において遺構確認を行い、SF12 通路遺構、SX324～327 幅竿遺構、SX328・332 柱穴、SX311 土取り遺構、SX329～331 不明遺構、多数の小穴を検出した（図面 43・45）。

SF12 通路遺構（図面 42～45 図版 57）

AB・AC・西1～東1区に所在し、僧寺中心点の南5.1～7.9 m、西2.7 m～東0.7 mと北9.0～13.4 m、東2.0～4.1 mに位置する。SF12 通路遺構は、4本の石列を伴い、瓦や礫を路面とした金堂と講堂を結ぶ幅約4.15 mの南北通路である。4本の石列は、西から「石列A」、「石列B」、「石列B'」、「石列A'」と呼称する。石列や路面の検出状況から、外側の石列Aと石列A'、内側の石列Bと石列B'が対の関係にあり、路面を区画する形となる。金堂・講堂間3区において石列A・B・B'が検出され、1・6区では、この石列B'と石列A'の推定位置の北側延長で2本の石列（石列B'・A'）が確認された。

まず、3区での確認状況について述べる。石列は、石列A、石列B、石列B'の3本が確認された。石列Aは、15～20 cmの礫（河原石）、石列Bと石列B'は、10～15 cmの小形扁平礫が立てて埋め込まれ、南北に並ぶ。石列Aの礫は直立している状態のものは少ない。石列A'は、SF13の西側の掘り込みによって壊されているが、石列A-A'間には路面に敷いた瓦片・礫がわずかに残存し、通路の構築土も一部確認された。

これら3本の石列の主軸方向は、ほぼ並行し、石列B-B'間から求められる通路の中軸は、伽藍中軸線より約45 cm西に位置する。また、石列Aの南延長は金堂北面階段のほぼ西端にあたる。各石列間の幅は、石列A-A'間が推定約4.15 m、石列B-B'間は約1.48 m、石列A-B間は約1.3 mを測る。石列上面のレベルからSF12は、南北3 mの調査区内で約10 cm北側に向かって、低く傾斜している。

石材の設置は、路面に白色・淡黄色の粘土を敷いた後に、溝を掘って埋めている。断割りトレンチ内の断面観察から、石列A、B、B'ともに同時期に築造されたものと想定されるが、個々の礫が部分的に据え直された可能性は否定できない。

石列で区画された路面は、中央の石列B-B'間と、その東側と西側の石列A-B間と石列B'-A'間で様相が異なる2重構造となる。内側の石列B-B'間は5 cm前後の小円礫、瓦片を白色・淡黄色粘土の上に敷き詰めている。外側の石列A-B間は、石列B-B'間よりひとまわり大きい5～10 cmの円礫、瓦片を敷いており、攪乱されていて隙間が見られるが、当初は路面全体に敷設されたものと考えられる。

下部の構築状況として、大別3つの層が確認され、下層より、硬くしまった層厚約15～20 cmの黒色土、黄褐色土を基調とした層厚約数cmの粘土層、白色・淡黄色粘土層が堆積する。下層の黒色土層は、土師器や瓦片が数点出土しており、黒色土の地山を削り込んで地ならしなどを行った整地土のようなものと想定される。中層の黄褐色土層は、5 cmに満たない円礫・角礫が部分的に包含されている他、瓦も少量出土する。上層の白色粘土層上面には礫や瓦が敷かれ、路面となる。

1・6区で確認された2本の石列は、3区に比べ遺存状態は悪く、多くの石は失われているが、その検出位置や石列間の路面の状況から石列B'と石列A'に該当する。石列B'は3区で検出した位置よりも10 cmほど東で確認され、SF12の主軸方向が伽藍中軸線に対してわずかに東偏する可能性がある。

石列A'は、3区と同様に15～25 cm大の礫を立てて据えたものとそうでないものが見られる。石列B'の礫は15～25 cm大で3区の石列B'よりもひとまわり大きいが、扁平礫を立てる設置方法は同じである。しかし、ほとんどの礫は直立しておらず、倒れかけているものと思われる。

路面には礫と瓦片が見られ、石列B'の西側（石列B-B'間）は5 cm前後の小円礫を主体とし、石列B'-A'間は比較的大きな瓦片を主体しており、3区で検出された路面と同じ様相を示す。しかし、路面下部は土器や瓦の小片を含んだ暗褐色土によって構築されており、3区で確認された粘土層は見られず、両

地点における構築状況は異なる。本地点におけるSF12通路遺構は、下層にSX311土取り遺構があり、講堂の再建工事に降に設置されたものと想定される。このことが、両地点における検出状況の違いの大きな要因と考えられる。

SF13 通路状遺構 (図面 43)

AB・AC区-0・東1に所在し、僧寺中心点の南5.1～7.9m、東2.0～4.2mに位置する。SF13は、3区の調査区東側で検出され、幅1.5mの黒褐色土をベースとした南北の延びる硬化面で、この通路状遺構の東西両側は溝状の掘り込みが確認された。上面には瓦、礫が確認される。SF13は構成する土質から中世以降のものと想定される。なお、当該範囲には、国史跡指定を受けた大正11年当時、赤道(通称「薬師道」)が通っており、その前身の道の可能性がある。

SX311 土取り遺構 (図面 31・42・45)

AD・AG-西6～東5区に所在し、僧寺中心点の北11.0～19.0m、西16.5～東18.0mに位置する。1区・5区・6区で検出され、この他に講堂地区で確認されており、講堂の再建工事に伴う土取遺構と想定される。掘り込みの東端は6区と講堂地区、南端は5・6区と講堂地区、北端は講堂地区で確認され、西端は4区よりも東に位置すると考えられる。これらから、東西およそ35m、南北約8mを測り、平面長方形の大規模な掘り込みである。5区・6区において、下層遺構を検出するために、断割りを行った。確認面からの深さは50cm～60cmを測る。覆土は白色粘土を含む黒褐色土主体で人為的に埋め戻されたものと想定される。

SX319・324～328と重複関係にあり、これらをより新しい。また、講堂地区の調査ではSB218 A講堂創建時の基礎版築を切り、上層には講堂再建以降の整地層が覆う。

SX324～327 幢竿遺構 (図面 46・47 図版 58)

AD-西3～東5区に所在し、僧寺中心点の北10.5～11.4m、西10.3m～東15.5mに位置する。講堂建物から南へ約11.6m、基壇南縁からは約8.5m離れた位置で、東西方向に並んだ5基の柱穴を検出した。その位置や大きさから幢竿遺構と考えられ、これらは個別に調査した年度が異なるが、一連の遺構と考えられるため本節で一括して述べることとする。

幢竿遺構は、講堂前面に伽藍中軸線を挟んで左右対称に各3基ずつ並び、未調査部分を含めると計6本の柱穴で構成されると思われる。ちなみに、西側から数えて2本目のSX324は5区、4～6本目のSX325～327は6区、1本目は平成20年度調査(第642次調査)で検出した柱穴のSX319、3本目は未調査であるがSX324・325柱穴との間に位置するものと想定する。柱筋は伽藍中軸線に対して直行する。柱間距離は、東から順に約5.6m、6.2m、6.2m、6.2m、5.6mで、総延長は約30mを測り、ほぼ創建講堂の柱筋に対応して設置された状況がうかがえる。いずれの柱穴もSX311土取穴と重複しており、柱穴の方が古い。SX311は講堂再建に伴う土取穴であることから、これらの幢竿遺構は講堂創建時のものと考えられる。なお、各柱穴間においてボーリング調査も合わせて行ったが、掘り込みの存在は確認されていない。

SX324 幢竿遺構 重複するSX311を掘り下げて平面精査し、土層堆積状況を確認するため遺構の北側半分を半載した。平面形は長径1.3m、短径0.7mの隅丸長方形を呈し、深さは約85cmを測る。堆積土は11層に分層され、1層は柱痕跡、2～11層は柱掘り方埋土である。底面は凹凸に富み、壁は垂直に立ち上がる。

SX325 幢竿遺構 SX311をトレンチ状に掘り下げ、プランの把握のみを行った。平面は東西1.1m、南北0.9mの長方形プランを呈し、掘り方埋土と柱抜き穴を確認した。深さは30cm以上と推定される。

SX326 幢竿遺構 2時期の重複する柱穴である。SX326 Aが古く、SX326 Bが新しい。また、土取穴SX311と重複関係にもあり、同遺構よりも古い時期の所産である。本遺構もSX311をトレンチ状に掘り下げて、平面プランの確認のみを行った。

SX326 A 平面形はSX326 Bに大きく壊されているが、長径0.9m、短径0.7mの隅丸方形基調のプラン

と想定される。

SX326 B SX326 Aの柱を抜き取り、ほぼ同じ位置に立て替えたものである。掘り方の平面形は一辺径0.7cmの隅丸方形を呈する。柱抜き穴も確認したが、詳細は不明である。

SX327 榿竿遺構 3基の柱穴が重複し、古い順にSX327 A→SX327 B→SX327 Cと変遷する。さらに、土穴SX311とも重複し、本遺構の方が古い。SX311を掘り下げて平面プランの確認を行い、さらにプラン北東隅の一部を掘削して土層堆積状況の確認を行った。

SX327 A 平面形はSX327 B及びSX327 Cに大きく壊されており不明であるが、東西0.2m以上、南北0.8m以上の方形基調のプランで、深さは40cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

SX327 B SX327 Aの柱を抜き取り、建て替えたものである。掘り方の平面形は東西1.1m、南北0.8mの隅丸長方形で、深さは45cmを測る。断面形や底面の状況及び壁の立ち上がり等の詳細は不明である。

SX327 C SX327 Bの柱を抜き取り、建て替えたものである。掘り方の平面形は東西約0.6m、南北約0.7mの円形状プランを呈し、深さは30cmを測る。断面形や底面の状況及び壁の立ち上がり等の詳細は不明である。

6. 中門・伽藍中樞部区画施設地区

(1) 中門・区画南辺

既往の調査 中門地区・中樞部区画施設南辺地区は、昭和33年度に日本考古学協会によってSB216中門の東側、昭和40・41年度に国分寺市教育委員会の5・6次調査として中門および西側の区画施設の調査が行われた(日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会1965・国分寺市教育委員会1967)(第11図・図面48)。

昭和33年度調査は、中門が金堂と南門の中間に位置するものと推定して、その東側に調査区が設定され、その結果、東西溝(SD194・197溝)や回廊跡と想定された土壇跡等が確認された。中門建物自体は調査対象外であったが、土壇跡やこれに関連する溝の延長線上に中門跡を推定するに至った。なお、土壇跡は今回の調査でSX249築地塼であることが判明している。

昭和40・41年度の調査では、SB216中門およびその西側のSA10掘立柱塼やSD194溝等が検出された。SB216中門は、礎石下部の壺地業の痕跡を10カ所(3-3、4-3を除く)で確認し、そこから建物構造は正面3間9.4m、奥行2間6.2mの八脚門で、柱間寸法は正面2.9+3.6+2.9m、奥行き3.1m+3.1mと推定された。さらに、中門に取りつくSA10掘立柱塼は、柱穴24基、23間分が確認されたことも報告されている。

中門の西側では、昭和60年度(第226次調査)・平成3年度(第360次調査)にも調査が実施されている(小野本2010)(図面48)。第226次調査は、昭和40年の調査で検出したSA10掘立柱塼の13～20本目にあたる柱穴とSD194・197溝等を確認した。また、第360次調査では、第226次調査のさらに西側部分を調査し、昭和40年度調査で検出されたSA10掘立柱塼の22～25本目の柱穴を含め、新たに26～29本目までの柱穴を確認している。

調査区の設定と調査の経過 伽藍中樞部区画施設南辺は、中門の西側は既往調査により、掘立柱塼(SA10)とその外側に巡る大小2条の溝(SD194・197)が確認されている。しかし、中門の東側は、昭和33年度調査でSD194・197溝と想定される東西溝を確認しているが、掘立柱塼は未検出であり、さらに回廊跡と想定された土壇跡が確認されるなど、中門を挟んで東と西の区画施設は異なる様相を呈していた。

このため、今次の調査では、中門の東側における区画施設的位置・規模・構造などを再確認する目的から、昭和33年度調査地点に被せる形で区画南辺調査区を設定することにした。

まず、平成15年度には予備調査として、中門の東方約35m地点で、SA10掘立柱塼の延長部分と、その

南側の区画溝を確認すべく東西8.5m、南北4.5mのL字型の調査区を設定した。その結果、調査区東端で昭和33年度に調査した旧トレンチの痕跡が確認され、このトレンチを再度掘り上げて土層の断面観察を行い、区画溝南側の立ち上がりを確認しながら調査区を順次拡張していった。この結果、SD194・SD197溝と回廊跡と想定された土壇跡を再確認し、この土壇跡の下層にSA10掘立柱塼に対応する柱穴(SA33-12)を検出した。なお、土壇状の痕跡は、土塁もしくは築地塼の痕跡と想定した。

平成16年度は、区画塼・溝の規模・構造をはじめとして塼と溝の関係性を確認し、合わせて出土遺物を手がかりに区画塼の改作時期を明らかにする目的から、東西約25m、南北約19mに範囲を広げて調査区を設定した。なお、中門調査区における区画施設と比較検討するため、平成17年度も継続して調査を行った。

中門調査区は、SB216中門と中樞部を区画するSA10・33掘立柱塼、SX249築地塼、SD194・197溝等の位置・規模・構造を確認するために、平成17年度に、昭和40年度の調査地点を中心に東西20m、南北16mの調査区を設定した。さらに、SB216中門の全体の確認と中門の東側における中樞部区画施設の取り付け状況を確認するため、未調査である市道南3号線の道路上に東西6m、南北15mの調査区を設けた。平成19年度は、このうち道路部分を除いた調査区において、中門の造営時期、掘立柱塼から築地塼へ造り替えに対応する中門の建替え、中門に関連した周溝状のSD397溝、南面で確認された硬質面の性格と相互関係、SA10掘立柱塼における掘り方を連結する溝状の掘り込みの性格等を検討する目的で調査を継続した。

検出された遺構 中門調査区では、地表面下約0.9mの高さで、Ⅲa～b層上面で遺構確認を行った。検出した遺構は、SB216中門礎石建物、SB232中門掘立柱建物、中樞部区画塼のSA10掘立柱塼(柱穴1～4)・SA33掘立柱塼(柱穴1)、中樞部区画溝のSD194大溝・SD197小溝、東西溝のSD398、SB216中門の周りを巡るSD397溝、SB216中門前面のSX292硬質面、南北溝のSD410溝、多数の小穴、柱穴などである(図面49)。

区画南辺調査区では、地表面下約0.6mで検出されるⅡ～Ⅲa層および整地層上と、昭和33年度調査の南北トレンチ2本(中央旧トレンチ・東側旧トレンチ)、東西トレンチ1本(西側旧トレンチ)において土層の断面観察による遺構の確認作業を行った。なお、遺構の平面プランの確認は主に調査区北側の区画塼部分について行い、調査区南側は旧トレンチの土層断面観察により区画溝の位置や規模の確認を行った。新たにA～Eトレンチを設定し、SX249築地塼の下層遺構であるSA33掘立柱塼を検出し、AトレンチではSD194溝、BトレンチにおいてはSD194溝の南側の立ち上がりとしSD197溝の確認を行った。検出した遺構は、伽藍中樞部を区画するSA33掘立柱塼、SX249築地塼、塼の外側に並行するSD194大溝、SD197小溝、その他に塼の内側に並行するSD396溝や、SA32柱列、SK3273・3274・3275・3283土坑、小穴などである(図面63)。

SB216中門(図面48～51 図版60～68)

BF～BH1・2、10・11区に所在し、僧寺中心点の南73.2～79.4m、西5.3～東4.3mに位置する。SB216中門は、昭和40年度調査により、礎石建ちで正面3間、奥行2間の八脚門であることが確認されている。今回は、昭和40年度調査で検出された壺地業1-1～3、2-1～3、3-1～2、4-1・2・4に加えて、壺地業3-3、4-3の2基を新たに確認し、12カ所すべての柱位置で壺地業を確認した。

また、前身建物の有無、造営時期、壺地業の規模・構造などを確認するため、壺地業1-1・1-2・2-2の断割り調査を行ったところ、礎石建ち中門の前身建物の存在は確認されなかった。礎石は現存しておらず、根固石についても壺地業2-1でその残存かと思われる河原石の集石部は検出されたが、明瞭な形で確認はできなかった。

1 建物 建物は、検出された12カ所の礎石下部の壺地業により、桁行3間、梁行2間の礎石建ちの八脚門であることを再確認した。建物規模と柱間寸法は、桁行が10尺+12尺+10尺(=32尺=約9.5m)、梁行が10尺+10尺(=20尺=約5.9m)に復元され、正面中央を扉とする三間一戸の門と考えられる。今回、柱間寸法は、壺地業と東西に取り付く掘立柱塼の検出位置や、調査区内出土の隅切瓦の存在から中門

が奇棟もしくは入母屋造の可能性があるため、正面中央間を除き等間とした。

基礎地業は、柱位置下部の壺地業のみで、建物範囲全体に及ぶ掘込地業（総地業）は伴っていないことが確認された。なお、礎石据え付け面より上位は後世に削平を受け、基壇も未検出である。

2 壺地業（図面 51・52 図版 63～67） 壺地業は、12カ所すべての柱位置において検出した。壺地業は、平面プランは一辺が1.4～1.7m規模の隅丸方形を呈し、深さは0.9～1.1mを測る。底面は一辺1.3～1.5mで、壁はやや急な角度をもって立ち上がる。また、壺地業には版築を伴うが、その下層部には瓦敷きの層が1～2層確認されている。以下、個別に壺地業の様相を記す。

1-1 壺地業は、旧調査で掘り方西側を断削っており、この部分において、さらに掘り方底面まで版築土を掘り下げた。規模は、東西1.3m、南北1.7m、深さ、1.1mを測る。14層の版築層が確認され、最下層上面に瓦を敷いた層が1層確認された。

1-2 壺地業は、旧調査によりほぼ西側掘り方がほぼ半分掘り下げており、さらに版築土を4分の1残して底面まで掘削した。規模は、東西1.5m、南北1.5m、深さ1.0mを測る。版築層は16層あり、底面から2層目とその上層の版築面上に瓦を敷いた層が各1層確認された。

1-3 壺地業は、旧調査により掘り方南東隅を30cmほど掘り下げており、上層の版築層を5層確認した。規模は東西1.4m以上、南北1.4mを測る。

2-1 壺地業は、前述のとおり、比較的大きな河原石が点在していたが、これらが根固石である明確な痕跡は確認されなかった。規模は、東西1.4m、南北1.5mを測る。

2-2 壺地業は、本調査により掘り方南半分の版築土を底面まで掘り下げた。規模は、東西1.6m、南北1.5m、深さ1.0mを測る。版築層は12層を数え、最下層上面とその上層の版築面上で瓦を敷いた層が各1層確認された。

2-3 壺地業は、平面形が方形で、東西1.4m、南北1.4mを測る。

3-1～3、4-1～3 壺地業は、3と4の柱列間を南北に走る後世の溝状掘り込みより、一部壊されている。平面規模は、3-1が東西1.5m、南北1.5m、3-2が東西1.5m、南北1.5m、3-3が東西1.4m、南北1.6m、4-1が東西1.5m、南北1.6m、4-2が東西1.5m、南北1.4m、4-3は南半部のみ確認し東西1.6mを測る。なお4-3 壺地業は、南北の溝状掘り込みの壁の断面観察から、瓦が混入した層が7層ほど確認された。すべて瓦敷きの層であるかは不明だが、他の壺地業とは様相が異なる。

壺地業の版築層は、底面より1層目がローム土主体層、その上層は厚さ5～10cmのロームブロックを含む黒色土・黒褐色土層で、版築面上に礫や瓦などを入れた後で、土を被せて版築を行う工程を繰り返している。壺地業下層では、1～2層の完形の瓦を含む比較的密に敷いた瓦敷きの層が確認されるのに対して、上層では礫を主体に瓦片等がつき込まれるなど、上下層で版築方法に違いがあり興味深い。

瓦敷きの層は、断削りを行った1-1・1-2・2-1 壺地業すべてに確認され、1-1 壺地業は最下層のローム主体層の上面に1層、1-2 壺地業は下から2層目（下層瓦敷き）と3層目（上層瓦敷き）の上面に各1層、2-2 壺地業は下から1層目（下層瓦敷き）と2層目（上層瓦敷き）の上面に各1層が確認された。瓦敷きは男瓦が主体で少量の女瓦を含み、破片だけではなく、完形品の男瓦が多数使用されている。完形の瓦は割れているものの、凸面を上向きに一個体の形が識別できる状態で検出された。押し割ってから上層土を入れて版築したのか、版築の圧力で割れたのかは判然としないが、いずれにせよ、完形の状態のまま瓦を版築面上に敷き並べていたようである。ただ、瓦の敷き方に規則性は見出しがたく、瓦を敷く量も壺地業ごとに粗差がある。完形品の瓦は1-2 壺地業の上・下層瓦敷きと、2-2 壺地業の上層瓦敷きで多く見られ、1-1 壺地業と2-2 壺地業の下層瓦敷きは、破片が多い。瓦敷きには、1-2 壺地業の上層瓦敷きより、押印「中」が押捺される男瓦、1-2 壺地業の下層瓦敷きより押印「高」が押捺される男瓦と女瓦、ヘラ書き「橋」の男瓦、2-2

壺地業の上層瓦敷きより押印「中」の男瓦など創建期の瓦が出土する。なお、瓦は風化や磨耗が少なく、屋根に葺かれる前の未使用品の可能性が高い。

瓦敷きの上層の版築は、土を入れて版築し、その版築面上に石を1層につき20～40個程度置き、その後土を加えて版築するといった工程が繰り返される。石以外にも版築中から少量の瓦片や埴、須恵器片が出土している。

SB232 中門 (図面 52 図版 67)

BF・BH-東0～西2区に所在し、僧寺中心点の南73.1～78.3m、西4.7～東1.0mに位置する。SB216中門とほぼ重なる位置に確認された掘立柱建物である。検出された柱穴は1-1～3、2-1～3、3-1～3で、昭和40年度調査による断割り部により1-1・2-1・3-2の断面観察を行った。建物規模は、桁行3間約7.9m(2.4m+3.1m+推定2.4m)、桁行2間約5.1m(2.55m+2.55m)の側柱建物と推定され、東側柱4-3は未調査区で、4-1・2は後世の南北の溝状掘り込みにより壊されたものと考えられる。側柱建物であるが、検出位置や正面中央間が広く設けられている点から、門として機能した可能性が高く、側柱建物状構造の中門と想定される。柱穴の規模は、直径約0.3～0.9mの円形や楕円形状を呈し、1-2柱穴では深さ0.5mを測る。1回の柱の抜き取りが確認される。SB232はSB216中門の壺地業と重複関係にあり、SB216が古い。

SA10 掘立柱塼 (図面 53・55 図版 70・71)

BG-3～6区に所在し、僧寺中心点の南76.6m、西9.0～16.2mに位置する。SA10掘立柱塼は、SB216中門の西側に取り付く中樞部区画南辺塼である。昭和40・41年度調査で20基礎の柱穴を確認し、その後、昭和40年代調査範囲を含めた第226・360次調査を行い、SB216中門側から数えて28本目まで柱穴を検出した。しかし、今回、昭和40年度調査でSB216中門から1～3本目の柱穴を再調査した結果、1本目と2本目の間に新たに1基の柱穴が確認された。このため、新たに検出した柱穴をSA10掘立柱塼2柱穴として柱穴番号を振り替えて、これまでに確認された柱穴は1～29本目までとなった。なお、同じ中樞部区画施設の西辺塼であるSA35掘立柱塼の検出位置から想定すると30本目が中樞部区画掘立柱塼の南西隅に当たる。柱穴の平面形は一辺1.0m～1.5mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは90cm～1.2mを測る。塼の主軸は、伽藍中軸線にほぼ直行するが全体を通すと西に向かって約40°に北に振れる。柱間寸法は約2.4m(8尺)等間である。建替えの痕跡はなく、1回の柱の抜き取りが確認される。

今回検出されたSA10掘立柱塼1～4柱穴の4基である。柱間寸法は、既往調査結果と同じで約2.4m等間である。216中門の1-2柱位置からSA10掘立柱塼1柱穴までは約3.9mを測る。いずれも1回の柱の抜き取りが確認され、建て替えの痕跡は見られなかった。

1柱穴は、昭和40年代調査により掘り方全体を一段掘り下げている。その規模は東西0.9m、南北1.3mを測り、平面形状は南北に長い隅丸長方形を呈す。西向きの柱抜き取り痕跡が確認される。

2柱穴は、昭和40年代調査で掘り方全体を一段掘り下げ、南半分も断割っているため、残存する掘り方は北半分であった。さらに、その東側上層はSD410溝により壊されている。規模は東西0.9m、深さは0.6mである。掘り方底面のほぼ中央に柱痕跡が確認された。遺存状況は不良で柱抜き取り痕跡は未検出である。

3柱穴は、東西1.0m、南北1.1m、深さ1.0m、4柱穴は、東西1.1m、南北1.2m、深さ0.8mを測り、いずれも平面形はやや南北に長い隅丸方形を呈す。3・4柱穴は、それぞれを連結するように掘られた東西方向の溝状の掘り込みが確認された。この掘り込みは、5・6柱穴、7・8柱穴、9・10柱穴、13・14柱穴、15・16柱穴、23・24柱穴、25・26柱穴の間でも確認され、当初、柱抜き取り穴の他に地中梁の設置やその抜き取りに係る痕跡の可能性も指摘された。今回新たに3・4柱穴間の連結穴部分の断割りを行った結果、地中梁の設置やその抜き取り痕跡は確認されず、柱の抜き取り痕跡と想定された。2本同時に柱を抜き取る際に抜き取り穴が連結したものと考えられる。

3・4柱穴は、ともに柱を抜き取る反対側の埋め土に柱の痕跡が残り、柱の直径は3柱穴が約30cm、4柱穴が約36cmを測る。

SA33 掘立柱塼 (図面 54・56・65・66 図版 71～74・77)

BG-2～12区に所在し、僧寺中心点の南76.6m、東8.0～36.5mに位置する。SA33掘立柱塼は、SB216中門の東側に取り付く中樞部区画南面塼である。中門調査区の東側(道路上調査部分)において1柱穴、区画南辺調査区において2～5・10～13柱穴を確認した。

検出状況は、SA33掘立柱塼の上層にSX249築地塼の掘込地業が覆っており、昭和33年度調査東側旧トレンチの断面観察によって12柱穴を確認することができた。このため、その他の柱穴については、SX249築地塼の断割りを行って、1・4・5・10柱穴の北側半分、2柱穴の東側半分、3・13柱穴の西側半分のプラン確認を行い、11・12柱穴はベルトを残して全体を確認して掘り方底面まで掘削を行った。なお、12柱穴は、昭和33年度の断割りにより、東半部の掘り方下端のみ残存する。

主軸方向は、伽藍中軸線に対して直交せず、東に向かって約90°南に振れる。同じく東に向かって南に振れるSB216中門西側のSA10掘立柱塼よりさらに南に振れ、わずかであるが中門を挟んで主軸方向にずれがある。柱間寸法は、いずれも8尺(約2.4m)等間で、SB216中門4-2柱位置から1柱穴までは約3.9mを測る。

規模は、ほぼ全体を確認した11柱穴で、11柱穴は東西1.4m、南北1.3mの平面隅丸方形を呈し、深さは0.9mを測る。その他は、1柱穴が東西1.4m、南北1.2m、2柱穴が南北0.6m、3柱穴が南北1.2m、4柱穴が東西1.6m、5柱穴が東西1.4m、10柱穴が東西1.3m、12柱穴が南北1.4m、深さ1.0m、13柱穴が南北1.2mを測り、2柱穴は他の柱穴に比べて規模が小さい。

いずれも建替えの痕跡は無く、1回の柱の抜き取りを確認した。柱の抜き取り方向は、2・3柱穴が北、4・10・13柱穴が西、5・11・12柱穴が東と想定され、SA10掘立柱塼で確認された柱穴間を溝状に連結する柱の抜き取り穴は見られなかった。掘り方底面まで掘削した11・12では柱痕跡や礎板等も確認されなかったが、柱位置は設定したベルト幅40cm内に収まるものと考えられ、おおよその柱位置が判明した。

SA33掘立柱塼は、SX249築地塼とSK3282土坑と重複関係にあり、両者より古い。遺物は瓦片が少量出土する。

SA32 柱列 (図面 63・69 図版 76)

BF-3～7区に所在し、僧寺中心点の南73.5m、東10.8～21.4mに位置する。中樞部区画施設南辺地区の北西で検出された柱列で、SA33掘立柱塼の北約3.0m離れた位置にほぼ並行する。伴う柱穴は4基で、柱間寸法は西から3.2m+3.3m+3.3mである。規模は径0.5～0.7m、深さ0.2～0.25mを測る。

SX249 築地塼 (図面 49・60・63・67・68 図版 69・71～74)

BF～BH-2～12区に所在し、僧寺中心点の南74.4～78.8m、東7.2～36.5mに位置する。SX249築地塼は、SB216中門の東側に取り付くSA33掘立柱塼から建て替えられた中樞部区画南面塼で、昭和33年度調査において回廊かと想定された土壇跡である。西端はSB216中門東妻柱から2.8m東に位置し、中門と区画南辺調査区の間で後世の掘り込みによって一部途切れるが、東は区画南辺調査区の東壁まで延びる。SA33掘立柱塼の上層に沿って東西29.3m、南北幅最大3.7mの範囲で帯状に検出された。

SX249築地塼は、昭和33年度の東側・中央旧トレンチおよび新たに設定した断割り部(中門Cトレンチ、区画南辺A・C・Dトレンチ)において断面観察を行った。その結果、SX249築地塼の下層よりSA33掘立柱塼1～5・10～13柱穴を検出し、区画南面塼は掘立柱塼から築地塼への建て替えていること確認した。

検出された痕跡は、築地塼の基底部となる深さ40cmの掘込地業部である。SA33掘立柱塼の柱を抜いた後に掘込地業が施される。版築の最下層は共通して白色粘土粒を少量含む黒土色や黒褐色土層であるが、その上層は場所によって異なる様相を呈し、少なくとも3つの作業単位があったことが想定される(図面67・

68)。SA33-1～5柱穴上では4～8層の版築層が確認され、上層の暗褐色土層に女瓦や男瓦片が突き込まれる。これとは別に、SA33-10柱穴上を境にして西側（9柱穴上～10柱穴西半）と東側（10柱穴東半～13柱穴上）は作業単位が分かれ、西から東にの順に地業を施している。前者は中央旧トレンチ断面では8層の細かい版築が確認され、後者は比較的厚みのある3層の版築からなり、いずれも瓦を突き込んだ形跡はみられない。

築地本体部分は削平されているが、SD194溝（C期）やSD3968溝のローム土を多量含む覆土が築地塀の崩壊土と想定される。今回築地塀が検出されなかった中門西側においてもSD194溝やSD398溝に築地塀の崩壊土が堆積しており、中門東側と同様に掘立柱塀から築地塀への建て替えがあったと考えられる。SX249築地塀は、塀の内外に伴うSD194溝（C期）とSD396溝によって切られ、この間が築地塀本体の基底幅の最大値を示し、南北約2.1mを測る。

SX249築地塀は、SD194溝（C期）・SD396溝・SK3282土坑に切られ、SD397溝を切る。

SD194溝（図面49・58・63・64・70・71 図版70・71・74・75・78）

中門西側はBG～BJ-2～5区に所在し、南77.4～85.5m、西7.3～16.5m、中門東側は、BH～BJ-2～12区に所在し、僧寺中心点の南77.3～87.6m、東6.2～36.5mに位置する。中樞部区画施設の南辺溝で、SA10・33掘立柱塀の外周を巡る大溝である。これまでに昭和33年度、昭和40年度、第226・360次調査で確認されている。南東隅における調査は区画南東で後述する。

中門付近におけるSD194溝は、昭和40年度調査で検出されているが、その範囲は必ずしも明確ではなく、今回、改めて溝の範囲を確認した結果、中門の前面は土橋状に掘り残されていることを確認した（図面49）。中門の西側の溝は、中門調査区南西で東端と北端を確認し、中門の東側の溝は道路調査区で西端と北端を検出した。SB216中門妻柱から西側溝が約2.2m、東側溝が約1.6mの位置でそれぞれ立ち上る。

区画南辺調査区内では昭和33年度調査に3本のトレンチを入れて断割り調査が行われ（中央・東側・西側旧トレンチ）、中央旧トレンチでは溝の底面まで確認されている。この覆土の様相から、A期～C期に区別できる。なお、SB216中門の西側の溝についても、第226次調査によって同様の変遷が確認されている（小野本2010）。

SD194 A A期は壁断面の土層観察によると、上面幅2.7m、底面幅1.9m、深さは1.5mを測る。SA33掘立柱塀の塀心より溝心までの距離は約4.6mである。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積で上層に微量の白色粘土粒が含まれる。底部は0.1mほどローム土を貼って底面を形成する。この特徴は寺院地及び伽藍地区画溝と共通する。底面は格子状の掘り方が確認され、これは第226次調査区においても同様の形状が見られ、溝を掘る作業単位を示すものと想定される。遺物は断面観察により少量含まれている。

SD194 B B期は壁断面の土層観察によると、上面幅4.5m、底面幅2.5m、深さは1.4mを測る。A期の北側の立ち上がり部分を削って掘り込まれ、底面はロームブロック主体土により形成する。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積で白色粘土粒が少量混入する。瓦片が少量出土する。

SD194 C C期は壁断面の土層観察によると、上面幅5.9m、底面幅1.5m、深さは1.0mを測る。覆土は多量のローム土や白色粘土を含み、6層に細分されるが、ローム土の混入具合により2層に大別される。特に上層はローム土を多量に含み、SX249築地塀の崩壊土と想定される。遺構確認面で検出されたSD194溝の範囲はほぼC期にあたる。溝の南端については、中央・東側旧トレンチと区画南辺調査区の南西隅の断割り断面（Aトレンチ）で確認し、幅が6.4m～9.9mを測り、SB216中門近くは幅が広がる。

C期は、SD197・SD397溝、SK3273・SK3274・SK3283土坑、SX249築地塀を切り、SK3439土坑によって切られる。

SD197溝（図面72 図版75・76・78）

BJ-西1～東12区に所在し、僧寺中心点の南84.8～85.6m、西0.5m～東36.5mに位置する。中樞部区画南辺小溝で、SD194溝の外側を巡る。中門および区画南辺調査区の南側で検出された。SB216中門前面

ではSX292硬質層によって覆われており、これを断割るとその下層からSD197溝が検出され、中門前面も一連の溝として掘り込まれていることがわかった。区画南辺においては、昭和33年度中央・東側旧トレンチと本調査で設定した調査区南西隅の断割り（Aトレンチ）断面によって確認した。なお、中門の西側については、第226次調査で検出されている。

SA33掘立柱塼より約8.8m南に位置し、規模は上面幅1.6～2.4m、底面幅0.7～0.8m、確認面からの深さ1.0mを測り、断面は逆台形状を呈す。覆土は5層に細分されるが、黒褐色土を主体として上層には白色粘土粒が含まれる。遺物は瓦が少量出土する。SD197溝は、SX292硬質面に覆われ、SD194溝・SK3283土坑に切られる。

SD396溝（図面72 図版73～75）

BF～BG-5～12区に所在し、僧寺中心点の南74.5～75.5m、東17.5～36.5mに位置する。中樞部区画塼の内側に巡る南辺溝である。区画南辺調査区で溝の西端部が確認され、東は調査区外に延びる。SA33掘立柱塼9～13柱穴では塼から約1.4m北側で並行するが、9柱穴以西は緩やかに北に振れて西端となる5柱穴付近では塼から約2.4m北側に位置する。幅0.4～0.9m、深さは0.2～0.5mで西端部が最も深い。覆土は白色粘土を多く含むローム土主体の褐色土で、SD194溝C期覆土と類似し、築地塼の崩壊土と考えられる。このことからSX249築地塼の掘込地業を切っているが、築地塼に伴う溝と想定される。遺物は瓦片が出土する。中門調査区で検出されたSD398溝が検出位置や規模、覆土の様相から一連の溝と考えられる。

SD397溝（図面57 図版68）

BE～BI-東2～西3区に所在し、僧寺中心点の南71.0～82.0m、西8.4～東6.8mに位置する。SB216中門の周囲を巡る溝で、SB216中門の各壺地業掘り方心から溝心までの距離は東辺が約2.7m、西辺が約2.8～3.1m、南辺が約2.3～2.4m、北辺が約2.2～2.3mに位置する。南辺西側および北辺中央は、昭和40年度に断割り調査され、今回新たに東辺3カ所、南辺と南東隅に各1カ所断割りを行った。

溝が巡る範囲は溝心で東西約15.2m、南北約10.7mを測る。南辺の中央やや東寄りの位置で一部途切れ、南東隅は、東辺・南辺ともに浅い掘り込みとなって連結し、また、北東隅付近でも掘り込みが浅いなど、SD397の深さは一定ではない。規模は上面幅0.7～0.9m、底面幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.7mを測る。覆土は黒褐色土を主体とする。本遺構は、SD194C期、SK3335・3438、SX278・279、SX249築地塼ほか複数の小穴に切られる。

SD397溝は、検出位置からSB216中門の雨落溝や基壇外装の設置の痕跡、あるいは建設当初の地割りなどが想定された。今回の調査では、溝の形状や覆土の様相から雨落溝や基壇外装とする痕跡は認められなかったが、本溝の範囲が中門の基壇規模を推定する手がかりになるとと思われる。

SD398溝（図面61 図版71・76）

BF-5・6区に所在し、僧寺中心点の南74.4m、西13.2～16.6mに位置する。中樞部区画塼の内側に巡る南面の溝である。中門調査区で東端部を確認し、西は調査区外に延びる。SA10掘立柱塼から北へ2.1mに位置し、SA10掘立柱塼3柱穴付近で途切れる。一部断割りを行った。上面幅60～70cmで、深さは15cmを測る。覆土は白色粘土を含むローム土主体の褐色土で、SD194溝C期・SD396溝の覆土と類似し、築地塼の崩壊土と想定される。遺物は瓦が出土する。検出位置や規模等から区画南辺で検出されたSD396溝と一連の溝跡と考えられ、それぞれ中門北側では途切れている。

SX292硬質面（図面62・図版68）

BI・BJ-東2～西2区に所在し、僧寺中心点の南82.8～85.5m、西4.9m～東1.6mに位置する。SB216中門の前面の参道部分にあたる位置で確認された硬質面である。東西3.7m～6.4mを測り、南に向かって幅が広がる。南北は2.7m以上を測り、北端は後世の掘り込みによって壊され、南側は調査区外に延

びる。一部断割りを行った結果、深さ40cmを測り、覆土は白色粘土を少量含む黒褐色土が水平に堆積しており、上層は硬く締まっていた。遺物は瓦が多数出土する。SD197溝と重複し、それよりも新しい。

(2) 区画南東

調査区の概況 区画南東部での調査は、南辺と北東部の既往の調査において、それぞれで検出されたSA33・2掘立柱塼の主軸延長線上から仮に想定し、発掘調査は行っていない。

中樞部区画施設南辺の調査は、昭和33年度調査、昭和40・41年度中門調査、第226・360次調査と今回の中門および区画南辺の調査において実施され(図面48)、SB216中門の東側の区画施設として、SA33掘立柱塼1～5・10～13柱穴とその後に造り替えられたSX249築地塼、塼の外側を巡るSD194溝とSD197溝、塼の内側を巡る溝SD396・398溝が検出されている。

中樞部区画施設東辺は、昭和53年に公共下水道敷設に伴う調査(第87次調査)と、個人住宅建設に伴う調査を昭和51・55年、平成7年の計3度実施している(第19・117・414次調査)。東僧坊及びその周辺の区画施設に関連する遺構が確認されている(図面77)。

伽藍中樞部区画東辺塼のSA2掘立柱塼は、第19・117・414次調査の成果を合わせると、北東隅の柱穴を基準に南側へ約36m部分が確認され、7基の柱穴(1・6・12・14～17柱穴)を検出している。東僧坊東側廂列より6.5m東に離れて並列し、柱間寸法は約2.4m(8尺)と想定される。SA2-1柱穴のみ1回の建て替えが確認される。柱穴列の上には、幅約2.0m、厚み最大30cmほどのSX1硬質面が被覆していて、この覆土を掘削して12・14～17柱穴が確認されている。SX1硬質面の性格を『国分寺市史 上巻』では「通路状遺構」として報告しているが、先にみた中門東側の調査状況に照らすと、築地塼の基底部である可能性がある。その前提にたてば、塼の構造が掘立柱塼から築地塼へと移行した状況が、区画東辺でも確認されたことになる。

区画溝は、北西・南辺地区と同様に、SA2掘立柱塼の外側に2条巡っていることが想定される。第87次調査で発見された外側のSD215Aと内側のSD214は、後者の溝の南側延長部分が第19次調査のSD27溝に連なる。幅は上面で2.0m以上、深さは約1.8mを測り、断面の土層観察によると、ここでも幾度かの掘り返しの形跡が認められる。一方、塼の内側では、東僧坊と区画塼間の約5m幅の中で確認されるSKI30・131・574土坑、SD26溝などの遺構があり、中門地区・南辺地区の様相と比較して、これらが一連の溝であった可能性がある。以上のことから、北東地区は南辺地区と区画施設の様相と近似していることが窺える。

調査区の設定 これまで区画施設南東隅の位置は、南辺地区と北東地区の既往の調査において、それぞれで検出されたSA33・2掘立柱塼の主軸延長線上から仮に想定していたが、今次の調査でその位置を確定するために調査を行った。区画南辺調査区(中門東側)の調査区から東へ約40m離れた、区画塼と溝の延長が想定される地点に東西5.5m、南北12.0mのトレンチ(1区)と、それより北約17m離れて、東西13.0m、南北2.0mのトレンチ(2区)の二つの調査区を設定した(図74)。北側トレンチは、第19次調査区より約65m南側にあたる。

検出された遺構 検出遺構は、区画南辺塼のSA33掘立柱塼29・30柱穴と区画東辺塼のSA36掘立柱塼1・2柱穴、区画南辺溝のSD194・SD197溝、区画東辺溝のSD425・426溝で、中樞部区画施設の掘立柱塼の南東隅の柱穴を確認した(図74・75)。

SA33 掘立柱塼(図面65・66・75 図版71～74・77)

BG・BH-25・26区に所在し、僧寺中心点の南77.6m、東74.3～76.7mに位置する。中樞部区画南辺掘立柱塼の中門東側にあたる。南側調査区(1区)において、SB216中門側から数えて、29本目と30本目を

検出した。30 柱穴が区画塙の南東隅の柱で、この北に SA36 掘立柱塙の柱穴が検出されている。いずれも、平面プランの確認に留めた。

主軸は、中門地区および区画南辺調査区において検出された 1・5・10～13 柱穴と合わせると、伽藍中軸線に直行せず、中門から南東隅に向かいわずかに南に振れている。柱間寸法は、8 尺（約 2.4 m）である。30 柱穴では、1 回の建て替えが認められ、29・30 柱穴はともに柱抜き取り穴が確認される。29 柱穴は、東西 0.9 m、南北 1.1 m の隅丸長方形である。30 柱穴は、1 時期目の柱穴（A）が東西 1.3 m、南北 1.5 m の隅丸長方形で、2 時期目の柱穴（B）が東西 1.4 m、南北 0.8 m の楕円形状を呈す。なお、中樞部区画施設南辺の中門東側で確認した SA33 掘立柱塙上層の SX249 築地塙は検出されなかった。

SA36 掘立柱塙（図面 75・図版 77）

AT～BH-25 区に所在し、僧寺中心点の南 56.2～77.6 m、東 76.6 m に位置する。中樞部区画東辺の掘立柱塙で、第 17・117・414 次調査で確認された SA12 掘立柱塙と同一の塙である。区画塙の南東隅の柱から数えて、1・2 本目（1・2 柱穴）を南側調査区（1 区）、10 本目（10 柱穴）を北側調査区（2 区）で検出した。なお、SA36 掘立柱塙 1 柱穴は SA33 掘立柱塙 30 柱穴と同一の柱穴で区画塙の南東隅柱にあたる。

主軸は、伽藍中軸線に対して約 40° 東に振れる。柱穴 1 から 10 の間の柱間寸法は約 2.4 m 等間と考えられる。いずれも柱抜き取り穴が確認され、1・10 柱穴は 1 回建て替えた形跡がうかがえる。

2 柱穴は、東西 1.2 m、南北 1.0 m で東西に長い隅丸長方形を呈し、10 柱穴は、1 時期目（A）が東西 1.1 m、南北 1.2 m 以上で南北に長い隅丸長方形、2 時期目（B）が一辺 1.0 m のやや不整形な隅丸方形を呈す。10 柱穴の柱抜き取り穴の覆土は白色粘土を多量に含み、瓦が多く混入する。

なお、中樞部区画施設北東地区で確認された SA12 掘立柱塙の上に重畳する SX 1 硬質面や、区画南辺で検出された築地塙は、当該範囲の中では確認されなかった。

SD194 溝（図面 70～71・76 図版 74・75・78）

BG～BJ-25～26 区に所在し、僧寺中心点の南 80.1～85.0 m、東西 75.0～77.6 m に位置する。中樞部区画施設南辺塙の外側を巡る区画大溝である。1 区で区画大溝の南東隅を確認した。平面プランのみの確認だが、その形状から南辺溝 SD194 と東辺溝 SD425 は、一部重複し連結するが、それぞれの掘り込みはコーナー付近で立ち上がり、区画溝の南東隅は一部掘り残していることが判明した。1 区西壁際で覆土の掘り下げを行い、溝の深さや断面形状の確認を行った。上面幅 5.2 m、深さは確認面から最深部で 1.5 m、掘り方形状・覆土の堆積状況の観察から 3 時期（A～C）に大別される。A・C 期は区画南辺調査区と同じ様相を呈し、C 期の上層には築地の崩壊土と想定されるローム土主体層が堆積する。ただし、本調査区における B 期は、確認面から 2.0 m 以上と深く、A 期の南側の壁を壊して掘り込まれている点で区画南辺と異なる。なお、区画南辺の B 期は A 期の北側壁を掘り込み、底面はロームブロック主体層が堆積するが、本調査区の A 期 22 層がこれに対応する可能性がある。

SD197 溝（図面 72・76 図版 82・83）

BJ-25 区に所在し、僧寺中心点の南 86.3 m、東 75.0～76.0 m に位置する。中樞部区画施設南辺小溝で SD194 溝の外側を巡る。1 区で一部確認したが、区画溝の南東屈曲点はさらに調査区の東側に延びる。1 区西壁際で覆土の掘り下げを行い、溝の深さや断面形状の確認をした。上面幅 1.1 m、深さは 0.7 m を測り、断面は逆台形状を呈する。覆土は黒褐色土主体とする。

SD425 溝（図面 74・76 図版 77）

ST～BI-25・27 区に所在し、僧寺中心点の北 55.0～81.6 m、西 81.3 m に位置する。中樞部区画塙の外側を巡る東辺大溝で、1・2 区でその一部を確認した。2 区の南壁沿い 1 m 幅で覆土の掘り下げを行った結果、北側延長で検出された SD27 溝と同一の区画溝で、南辺区画溝の SD194 溝に対応する溝であることを確認し

た。掘り方形状や覆土の堆積状況から3時期(A～C期)に大別され、1区のSD194A～C期に対応するものと考えられる。A期は、断面逆台形状で上面幅2.0m以上、底面幅1.0m、深さは1.0mを測る。B期は、上面幅2.9m、底面幅1.6m、深さはA期より深く1.5mを測り、断面逆台形状を呈す。C期は上面幅5.2m、深さ0.8mと幅広く浅い掘り込みで、ローム粒子を多量に含む層がみられる。

SD426 溝 (図面 74・76 図版 78)

AT-28区に所在し、僧寺中心点の北55.0～57.0m、西85.5mに位置する。中樞部区画の東辺小溝でSD425大溝の外側を巡る。規模や形状から区画南辺のSD197溝と一連の溝と想定される。2区でその一部を確認し、前述のとおり、南東隅は調査区外に位置する。南壁沿い1m幅で覆土の掘り下げを行った。上面幅1.2m、深さは0.8mを測り、断面形は逆台形状を呈する。覆土は5層に細分され、黒褐色土を主体とする。

(3) 区画南西

既往調査 中樞部の区画南西部では、これまでに平成3年度に2度の発掘調査が行われている。一つは、区画南辺の西側を対象にした確認調査(第360次調査)、もう一つは市道南2号線上で下水道管敷設工事に伴う緊急調査(第357次調査)である(図面78)。

第360次調査では中樞部区画施設南辺のSA10掘立柱塼と、その外側を巡るSD194溝および塼の内側を巡る溝のSX86、また第357次調査では調査区の北東端で中樞部区画施設西辺溝のSD259溝の一部をそれぞれ確認している(上敷領1994・小野本2010)。

調査区の設定 中樞部を区画する南西隅は、国史跡としては未指定地の現況宅地で、今次の調査ではその北側公有地内で、西辺を区画する塼および溝等の遺構を確認するため、東西12m、南北6m幅のトレンチを1本設定して調査を行った。

検出された遺構 地表下約50cmのⅢb層において遺構確認を行い、SA35掘立柱塼とその外側に巡る区画溝SD259大溝を検出した(図面79)。

SA35 掘立柱塼 (図面 78・79 図版 78)

AT・BA-26・27区に所在し、僧寺中心点の北54.1～58.9m、西78.4mに位置する。中樞部を区画する西辺の掘立柱塼である。想定される南西隅柱の位置から数えて、8～10本目にあたる柱穴3基を確認し(8～10柱穴)、10柱穴の北側は調査区の外へと延びている。いずれも平面プランの確認作業のみに留めたが、主軸は伽藍中軸線に対して約西に振れ、8～10柱穴の柱間寸法は約2.4m(8尺)等間である。

柱穴の平面形は東西に長軸を有する長方形を呈し、規模は8柱穴が東西1.2m、南北1.0m、9柱穴が東西1.3m、南北0.9m、10柱穴が東西1.2m以上、南北0.7m以上を測る。いずれも柱痕跡が確認され、柱痕はどれも掘り方のやや北東側に偏っており、径40cm程の円形プランとして確認できる。このうち9柱穴は、プランの確認状況から新旧2時期の建て替えをした可能性がある。

SD259 溝 (図面 78・79 図版 78)

AT～BA-28・29区に所在し、僧寺中心点の北54.0～60.0m、西82.5mに位置する。SD259溝は、SA35掘立柱塼の外側を巡る中樞部区画大溝である。SA35掘立柱塼の西側約2.5m離れた位置で検出され、南北は調査区外に延びている。このうち調査区北壁沿い1m幅部分で覆土の掘り下げを行った。断面形は逆台形状を呈し、上面幅5.0m、深さは1.9mを測る。溝の底面はほぼ平坦で、左右の両壁は外形してやや緩やかに立ち上がる。土層の堆積状況から幾度かの掘り返しが行われた形跡が認められ、遺物は覆土中層付近より瓦が多数出土した。

なお、区画北西部で確認された区画溝SD424の延長、及び区画南辺の溝SX86の延長は、本調査区内からは確認されなかった。

(4) 区画北西

既往調査 中枢部の区画北西部では、平成元年度の第322次調査で北西端部を狙って4つの調査区を設定した結果、北辺掘立柱塼 SA12 に伴う柱穴4基（1～4柱穴）と、その北側に並行して南北幅約3.0m、東西長約10m以上に及ぶ黄白色粘土層の分布、さらにその北側には大小2条の溝（外側：SD229 A期、内側：SD229 B期）が巡ることを確認した。このうち、外側のSD229 A期溝は調査区内でほぼ90度南側へ屈曲し、区画溝の北西コーナーにあたるのが判明している（図面80）。

しかし、調査区の形状からSA12掘立柱塼の1柱穴が塼の西端に該当するの否か、またその北側に広がる黄白色粘土層が平面検出のみに留めたため、その具体的な性格解明には至っていなかったことが課題として残されていた。

調査区の設定 今回の調査では、2カ所にトレンチを設定した（図面80・81）。一つは、第322次調査で検出した1・2柱穴および黄白色粘土層の一部を絡めつつ、南側へも約8m拡張した調査区を設けた（2区）。また、掘立柱塼や溝の南側延長線上の様相を探るため、2区よりさらに15m離れた南側にも南北3m、東西8mの調査区を設定した（1区）。

検出された遺構 調査の結果、伽藍中枢部の西辺区画塼であるSA34掘立柱塼、西辺区画溝のSD423大溝・424小溝、337特殊遺構、SX335・338・339不明遺構等が確認された。また、北辺区画塼ではSA12掘立柱塼の1・2柱穴と白色粘土層を再確認し、粘土層が築地塼（SX336）であることが判明した（図面81）。

SA12 掘立柱塼（図面80～82・85 図版79・82）

AS-26・27区に所在し、僧寺中心点の北54.5m、西76.0～78.7mに位置する。中枢部を区画する北辺の掘立柱塼である。第322次調査により1～4柱穴の北側部分が検出され、1柱穴は一部断割りを行い、その他は平面プランの確認で留めている。このうち今回の調査では1・2柱穴を確認した。

1～4柱穴はいずれも1回の建て替えをした形跡があり、2時期目の柱穴には柱抜き取り穴が確認される。柱間寸法は約2.8mである。塼の主軸方位は1～4柱穴間では伽藍中軸線とほぼ直行するが、北東隅柱を含めると東に向かって約35°南に振れる。

1時期目の柱穴（A）の平面プランは3柱穴のみ不明だが、その他は方形を基調としており、それに対して2時期目の柱穴（B）の平面プランは、円形もしくは楕円形状を呈しているのが特徴である。2時期目の柱穴は1時期目の柱を抜き取ったものを新たな柱掘り方とし、柱を埋めている。1柱穴の規模は1時期目が、東西1.5m、南北1.0m以上、深さ0.8mを測り、2時期目が東西1.2m、南北が1.4m以上で、深さは1.0mを測る。なお、2時期目の柱穴の上層にはSX336築地塼が重畳しており、SA12掘立柱塼は一度建て替えられた後に、築地塼へと造り替えられている。

SA34 掘立柱塼（図面80～82 図版78～80）

AP～AS-26・27区に所在し、僧寺中心点の北47.5～54.5m、西78.7mに位置する。中枢部を区画する西辺掘立柱塼である。北側調査区の2区において、新たに2～4柱穴が検出され、北西隅にあたる1本目から4本目までの4基が並んで確認された。このことによって、SA12掘立柱塼1柱穴が伽藍中枢部を区画する掘立柱塼の北西隅柱であることが確定した。これらの南側延長部にあたる1区では、塼の走行位置が後世の掘り込み（SX335）によって柱穴は検出されなかった。なお、2～4柱穴掘り方の西側はSX339によって壊されている。

柱穴覆土の掘削は行わず平面プランの確認作業に留めたが、2～4柱穴はいずれも1回の建て替えを行った形跡があり、2時期目の柱穴には柱の抜き取り穴が確認された。SA12掘立柱塼1～4柱穴と様相は類似し

ている。柱の抜き取り痕跡を手掛かりに想定した塀の主軸は、ほぼ伽藍中軸線とほぼ並行する関係にあるが、南東のSA35-8～10を含めると約30'西偏する。また柱間寸法は、1柱穴と2柱穴の間が約2.7m、2～4柱穴の間は約2.4mを測る。

1時期目の柱穴(A)の平面形は方形で、2時期目の柱穴(B)は円形もしくは楕円形状を呈し、これもSA12掘立柱塀1～4柱穴と共通した様相といえる。柱穴規模は、いずれもSX339に壊されており明確ではないが、3A柱穴が東西1.2m以上、南北1.0m、4A柱穴が東西1.0m以上、南北1.0mを測り、3B柱穴が東西0.8m以上、南北0.8m、4B柱穴が東西0.6m以上、南北0.8mを測る。なお、2～4A・B柱穴はSX339と重複し、いずれもSX339よりも古い。

SX336 築地塀 (図面80～82 図版79～81)

AS-26・27区に所在し、僧寺中心点の北54.9～56.3m、西76.279.8mに位置する。SX336築地塀は、第322次調査で検出した東西10m以上、南北3.0mに広がる黄白色粘土層を指す。この時の調査では平面検出のみに留めていたが、平成17年度に中門の東側で行った区画南辺の調査(第570・578次調査)では、掘立柱塀を覆って築地塀の基底部を構成する掘込地業が確認され、区画塀の変遷が掘立柱塀から築地塀へと移行する様相が判明した。そこで、当該粘土層も版築を伴う築地塀の痕跡であるのか否かを探るために、再度検出したうえで部分的な断ち割り調査を行うこととした。

その結果、今回の調査範囲では、粘土の分布はSA12掘立柱塀の北側に沿う形で東西3.8m、南北2.1mにわたって帯状に広がる。一方で、西辺のSA34掘立柱塀以西は後世の削平を受けており、今回の調査区では、築地塀は未検出である。なお、区画北側で検出した粘土層は、その西端でSA12掘立柱塀の柱穴1に重なって広がるため、掘立柱塀よりも新しい時期の所産である。

また、この粘土層は1柱穴の北側部分で一部約20cm幅で断ち割りを行ったところ、地山を構成する黒色土を基底部に掘え、その上に粘質の褐色土と白色粘土・砂質土を交互に叩き締めながら固く積み上げている状況が確認され、版築を施した形跡が明らかとなった。確認された版築層の残存する層厚は40cmを測り、版築1枚の堆積土は平均して約3～4cm程度と薄く、所々に瓦片が混入しているが、いずれの瓦片も平積の出土状況であった。また、本調査区北西壁際では、これらと同質の版築層上にやや粘性の弱いローム土主体の黄褐色土層が層厚約10cm残存しており、築地塀本体の積み土である可能性が考えられる。

これらのことから区画南辺と同様に、区画北西部でも伽藍中軸を圍繞する塀の構造が掘立柱塀から築地塀へ造り替えられたことが判明した。ただし、SA12掘立柱塀も部分的に攪乱されており、柱穴南側が未掘のため全体形状を明らかにしていない。そのため、築地塀の中心位置が掘立柱塀の中心軸線を踏襲しているのか否かは現時点で不明である。

SD423 溝 (図面80・81・83 図版80)

AJ・AK-27・28区に所在し、僧寺中心点の北28.5～31.5m、西82.0mに位置する。中樞部を区画する西辺溝で、南辺のSD194溝や東辺のSD425溝と対応する区画塀外側を巡る大溝である。南側の1区で、溝の東肩がSA34掘立柱塀の西約2.1m離れた位置で検出され、南北は調査区外に延びている。調査区内の北壁に沿ってトレンチ状に覆土の掘削を行った。

溝の平面形は、あたかも土坑が数珠状に連続しているような形状をなしている。確認面での最大幅は2.8m、深さは1.0mを測る。覆土の様相から何回かの掘り直しが確認される。遺物は大量の瓦の他に、土師器や須恵器が出土した。

第322次調査によって中樞部北西部で確認された区画溝SD229A・B溝の2条の溝は、内側のSD229B溝が北西隅付近で途切れ、外側のSD229A溝が塀を囲んでいる状況が見られた。今回の調査では、これらの溝の延長部分でトレンチを2本設定したが、2区ではこれらの溝の走行が予測される範囲に、後世の削平およ

び階段を伴う掘り込み SX337・SX338 が存在し、明確に溝の延長を捉えることはできなかった。

SD424 溝 (図面 83・図版 80)

AJ-AK-29 区に所在し、僧寺中心点の北 28.5～31.5 m、西 84.3 m に位置する。中枢部を区画する西辺溝で、南辺の SD197 溝や東辺の SD426 溝と対応する区画塀の外側を巡る小溝である。南側の 1 区で、SA34 掘立柱塀から西に 5.1 m、SD423 溝の西屑から 0.7 m 西側に離れて並走する。SD423 と同様に、調査区北壁に沿ってトレンチ状に覆土の掘削を行った。上面幅は 0.7 m、深さは 0.5 m を測り、断面形は逆台形を呈している。なお、SD423 大溝と同様に 2 区では後世の掘り込みによるものか、溝の延長を捉えることはできなかった。

SX337 特殊遺構 (図面 81・84・図版 80)

AP-28・29 区に所在し、僧寺中心点の北 46.5～47.5 m、西 82.5～86.0 m に位置する。SX337 特殊遺構は南側の断割り部で検出され、階段状の掘り込みを伴う遺構である。トレンチ北壁際で硬化面を伴う階段状の痕跡が確認され、その南側はさらに深く掘りこまれ、深さは 1.7 m 以上を測る。覆土は瓦などの遺物が多量に混入し、中層付近に炭化物を含む焼土層が見られた。なお、A トレンチで検出された SX338 特殊遺構は、本遺構との関係は不明で、また、SD229 A 溝よりも西側に位置しており、溝とは別の掘り込みと判断した。

(5) 区画北辺

既往の調査 中枢部区画施設の北辺部は、市教育委員会が平成元年の第 322 次調査で区画北西隅、昭和 55 年の第 117 次調査と昭和 53 年の第 87 次調査で区画北東隅部をそれぞれ調査している（小野本 2009・上敷領 1994）（図面 77・80）。第 322 次調査では、北辺塀の SA12 掘立柱塀に伴う柱穴 4 基（1～4 柱穴）と、その北側に塀と並行して南北幅約 3.0 m、東西長約 10 m 以上に及ぶ黄白色粘土層の広がり、さらにその北側に大小 2 条の溝（外側：SD229 A 期、内側：SD229 B 期）が走行していること等が確認された。第 117 次調査では、SA 2 掘立柱塀に伴う柱穴が 2 基（1・6 柱穴）を確認し、1 柱穴は区画塀の北東隅柱と想定されている。第 87 次調査では、中枢部区画塀外側を巡る区画溝 SD214 と SD215 A が確認され、内側の溝 SD214 南側延長部分が東辺区画溝の SD27・425 溝に連なる。中枢部区画の北辺は、上記のとおり北東と北西隅を調査しているが、その間の様相は未調査のため不明確であった。

調査区の設定 平成 19 年度に北辺塀の位置と規模、構造を確認するために、伽藍中軸線の西側に調査区を設け、区画塀の北東隅柱穴から数えて 29～31 本目にあたる SA12 掘立柱塀 29～31 柱穴と、その南側で SD415 溝を確認した。

その後、金堂・講堂を含む伽藍中枢部の整備工事基本設計に基づき、平成 23 年度には講堂跡北側で現公有地内の既存石垣の解体・積直し工事を行うこととなったが、石垣撤去及び周辺の造成工事により古代の遺構を保護する土層厚を確保することが出来るか否かを確認し、合わせて区画塀に取り付くことが予測される北門等の施設を確認するために、平成 19 年度調査区とほぼ重複する形で広めに調査区を設定し、再調査を行うこととした。

検出された遺構 地表下 0.4～1.2 m で、調査区西側は整地層と考えられる白色粘土を含む黒色土層、調査区中央～東側はⅢ層上面で遺構確認を行った。おおよそ遺構確認面は、東から西に向かって高く傾斜し、中央部分が最も低い。検出された遺構は、SA12 掘立柱塀（28～31 柱穴）、SD415 溝、SX322・323 柱穴、SX333 不明掘り込みである（図面 85）。

なお、本調査区内では北門に関わる遺構は検出されなかった。SX322・323 は掘立柱建物等を構成する柱穴の一部の可能性があるが、平面プランの確認に留め、さらにこれらと組み合う柱穴群は調査区の中からは確認されなかった。SX322 柱穴は伽藍中軸線より西に約 2.4 m、SA12 掘立柱塀より南に約 1.4 m 離れて位置し、径 0.8～0.9 m で平面円形状を呈す。柱の抜き取り穴が確認された。SX323 柱穴は伽藍中軸線より西に約

4.0 m、SA12 掘立柱塼より南側に約 2.4 m 離れて位置し、東西 0.6 m 以上、南北約 0.7 m を測り、平面形は方形を呈する。また、北門や通路状遺構の存在を探るため、想定伽藍中軸線上における SD415 溝の状況を精査したが、付近は後世の攪乱や SX333 不明掘り込みによって削平されており、これらを確認することはできなかった。

SA12 掘立柱塼 (図面 85 図版 81・82)

AS-26・27 区に所在し、僧寺中心点の北 54.5 m、西 76.0～78.7 m に位置する。SA12 掘立柱塼は、伽藍中樞部を区画する北辺塼である。本調査区内で検出した柱穴は、北西隅から 28 本目～31 本目と推定される 4 基で、いずれも平面プランの確認作業に留めている。29～31 柱穴はいずれも白色粘土を含む黒色土の整地面で確認した。28 柱穴の掘り方東側は、白色粘土を多く含むにぶい黄褐色の粘性土が覆い、また両者を切る後世の掘り込みによって、平面プランを確認できなかった。この粘性土は、28 柱穴上に堆積しており、築地塼基底部の版築の可能性があるものの、遺存状態は悪く、確認した層厚はわずか 3 cm で、平面の広がりも断片的であり、その可能性を指摘するに留める。

塼の主軸方向はほぼ伽藍中軸線とは直行するが、北東隅柱の SA 2 掘立柱塼の 1 柱穴と北西隅柱の SA12 掘立柱塼 1 柱穴を含めると、東に向かって約 35° に南に振れる。

規模・形状は、29 柱穴が東西 1.0 m、南北 1.2 m 以上、30 柱穴が東西 1.1 m、南北 1.3 m、31 柱穴が東西 1.1 m、南北約 1.2 m を測り、南北に長い平面形隅丸長方形を基調とする。いずれも柱の抜き取り穴が確認された。柱間寸法は 8 尺 (約 2.4 m) 等間である。

第 117・322 次調査では柱穴は新旧 2 時期あり、柱の建て替えた形跡が確認されているため、29～31 柱穴の間の整地層を一部断割り、下層遺構の確認作業を行った。30 柱穴の西側において掘り込みを確認した。この掘り込みが 30 柱穴の 1 時期目の柱穴の可能性があるものの、全容を確かめるには至らず、本調査区で掘立柱塼の建て替えは明確に確認できなかった。

SD415 溝 (図面 85 図版 82)

AQ-AR-2～4 区に所在し、僧寺中心点の北 49.1～52.2 m、西 6.9～12.2 m に位置する。調査区の南西で、SA12 掘立柱塼から南側に約 2.8 m 離れた地点で確認された東西溝である。東西 5.4 m を確認し、東側は後世の掘り込み SX333 によって削平され、伽藍中軸線付近の状態は不明である。南北幅 3.2 m、深さ 0.2 m を測る。覆土は白色粘土とローム土を主体とし、築地塼の崩壊土の可能性がある。中樞部区画南辺で検出された SD396・398 溝と対応関係にある区画塼内側を巡る溝と想定される。

第2節 伽藍地内の調査

1. 塔地区

(1) 塔 1 (SB223 塔)

既往の調査 武蔵国分寺跡には塔跡が現在 2 基確認されている。SB223 塔は現地に礎石が残り、古くから七重塔跡と認識されてきた塔跡で、もう一つは SB223 塔の西約 55 m にある SB224 塔を指し、これは平成 15 年度に行った地下遺構レーダー探査と、その後の発掘調査で確認された塔跡である。なお、現在も礎石が残る東側の SB223 塔を「塔 1」、新たに確認された西側の SB224 塔を「塔 2」と記して区分する。

SB223 塔は、昭和 39・40 年度に市教育委員会による発掘調査 (第 3・4 次調査) が行われている (図面

87)。調査の目的は、塔が、金堂と講堂を結ぶ伽藍中軸線から東へ約205 mも離れた場所に占地するという伽藍配置は、諸国の国分寺と比較しても極めて異例であり、その実態を解明する必要があること。さらに、『続日本後紀』の記載で、承和2年(835)に神火のため塔が焼失し、その後、承和12年(845)に前男舎群大領壬生吉志福正が塔の再建を願い出て許されたことの考古学的な確証を得るため必要があること。さらに、SB223塔付近の畑から大量の瓦が掘り出され、その中には金堂や講堂の創建瓦と同種の製品があり、さらに周辺の宅地化に伴い塔基壇の南端が道路の拡幅により、一部削り取られることになったため発掘調査が行われた。

SB223塔の確認状況は以下のとおりである。

1 礎石・礎石据え付け 中央に心礎があり、南側四天柱礎2個、側柱礎は4個が確認された。礎石据え付け痕跡が北東の四天柱礎、側柱礎の北東隅で確認されている。

心礎は、基壇のほぼ中央にあり、長径2.12 m、短径1.36 mで、中央に径73 cm、深さ45 cmの円形孔が穿っており納穴円座式とみることができる。据付状況から当初の版築の上に安定していることが認められた。

側柱礎は、南側の2個と東側の1個は、いずれも礎石直下に火を受けたものを含む多数の瓦片を突き込んでいることが確認された。

2 建物 塔の建物は、一辺が33尺(10.7尺+11.6尺+10.7尺)と推定されている。

3 基壇 基壇は河原石による乱石積基壇で、基壇南面では3段ほど、30 cm前後の高さで残存している。基壇の平面規模は約17.7 m四方、高さは約95 cmである。基壇の周囲には拳大、頭大の石敷が幅2.5～3 mの幅で確認され、外側に向かって平均15°の緩やかに下り傾斜となっている。石敷は瓦片の入った粘土により構築されている。

4 基壇および掘込地業 掘込地業は、確認された基壇上面から地下1.7 mまで掘り込まれている。版築は、底面から砂礫混じりの褐色土を厚さ約40 cm、その上層はローム土主体と砂礫の互層になっている。掘り込みの形状は、底面からほぼ垂直に30 cm立ち上がり、それから約10度の緩い傾斜で上方へ広がる。掘込地業の深さは約1.15 m、地上部の基壇の高さは約1.0 mと推定された。

また、基壇東辺部で断ち削りを行ったところ、掘込地業の壁から約2.0 m内側で版築の積み方の違いが確認された。この点について、創建以後この部分について何らかの異常により築き直された可能性があると指摘されている。

SB223塔の東へ約43 mの地点と南へ約40 m地点で伽藍地の溝跡が確認され、北側と西側で同様の溝が確認されれば塔院が形成されている可能性が指摘されたが、未確認に終わっている。

SB223塔の昭和39年・40年度の調査によって、礎石が据え直されていること、基壇周りの石敷きは、粘土層によって構築され、礎石の根固めや粘土層中に焼けた瓦が認められた。これにより、SB223塔は、創建後、火災にあい、同じ場所に再建されたと想定された。SB223塔は同じ場所で創建・再建され、『続日本後紀』承和十二年三月二十三日条にみられる、創建塔が火災を受け、その十年後に前の男舎郡大領である壬生吉志福正が再建を願い出て許されるという記事に対応する事象と結論付けられた。この点については、後述するがSB224塔の確認によって、再検証が迫られることとなった。

また、その後の調査・研究により、SB223塔の創建塔に伴う瓦が金堂・講堂などから出土する瓦より古手であることで、主要建物の中でも塔が先行して建てられたこと、さらに、SB223塔を中心とする寺院地区画溝の存在が確認され、その区画溝の西辺が埋め戻され、新たに金堂・講堂を中心とする伽藍配置により造営が進むことが判明することとなった。

調査区の設定 SB223塔の調査は、後述するように、SB224塔が平成15年度に実施した地下遺構レーダー探査とこれに続く発掘調査によって塔であることが確認されたことによって計画された。塔跡の新発見は、

SB224塔が同位置で再建されたことを前提とした伽藍配置の考え方、およびその変遷に係わる従来の見解に大幅な変更を迫るもので、今後の史跡整備計画にも深く関わるため、昭和39・40年度調査で確認された基壇修復の痕跡等をめぐる事実関係を再確認し、SB224塔と比較する目的で調査を行った。

調査区は、SB224塔の本体の調査に関連して設定した東西南北の4本の調査区のうち、東側トレンチをSB223塔まで東へ延長して設定し、SB223塔の基壇西辺の調査を実施した(図面86・87)。

検出された遺構 地表下0.2～0.3mでSB223塔の基壇上面部分や基壇の周囲を巡る石敷が確認された。石敷は後世の瓦溜りによって攪乱されている。地表下0.5～0.7mの地山土Ⅲ～Ⅳ層(暗褐色土～黄褐色土)においてSX308 幢竿遺構、SD413溝を検出した(図面89)。遺構の断割り、一部SD413溝跡の深さを確認する目的で行った。その他は、昭和39・40年度調査の断割り部分において土層の断面観察を行った。

SB223塔(図面86～89・96 写真83～85)

SB223塔の創建時の基壇および掘込地業、再建時の基壇修復の痕跡や修復された石敷が検出された。基壇外装の乱石積は、調査範囲内では明確には確認されなかった。調査区北東隅とその南側で旧調査による断割りトレンチが確認され、これにより断面観察を行った。

掘込地業は、検出した基壇上面から深さ1.8mまで地下を掘り込み、版築が施される。掘り込みの形状は底面からはほぼ垂直に40cmほど立ち上がり、その上は約10度の緩やかな傾斜で広がる。版築は、下層が層厚35cmの礫を多く含む黒褐色土が主な層で、その上下に黒色土とローム土、砂礫層の互層がみられる。その上層は一部黒褐色土層がみられるが、ローム土層と砂礫層を互層に版築される。基壇確認面となる最上層とその下の1層は、白色粘土を含み瓦片が混入するローム土主体層である。この層は基壇の修復部分と想定され、それ以下は創建時の地業と考えられる。創建時の版築土中には遺物や白色粘土は含まれていなかった。

なお、SB224塔の版築と比較すると、SB224塔は砂礫層がなくローム土や黒色・黒褐色・茶褐色などの版築土からなり、瓦や土器などが混入している点で異なる。また、SB224塔の掘込地業は垂直に近い掘り込み形状であることから、両者の基礎地業の在り方は大きく違っている。

旧調査断割り部断面において、基壇を切る掘込地業と、さらにこれを切るSX310不明掘り込みが確認された。基壇を切る新規掘込地業は、創建時のローム土主体の版築とは異なり、黒色土・黒褐色土を主体とする層と砂礫層の互層である。この上層には、創建時の版築と一体的に積まれたローム土の版築層が覆っており、このため新規の掘込地業は創建時の基壇築成中に行われたことになる。今回限られた範囲での確認のため今後もこの点については、昭和39年度調査検出された基壇東側における創建時の基壇を切る地業も含めて、時期や地業の目的などは今後検証する必要がある。規模は基壇確認面から深さ1.0mで、平面規模は南北60cm以上、東西90cm以上で、本調査区外の東と北へ範囲が広がるものと想定される。

基壇外装は、河原石を小口積みに3段積み上げた乱石積が旧調査で確認されているが、今回の調査範囲では基壇外装推定線上に30cm大の河原石が1個確認されたが、明確な基壇外装の石積みは確認できなかった。

基壇周囲を巡る石敷は幅約3.0mの範囲で確認され、石敷上面は西に向かって緩やかな下り傾斜となる。ただし、石敷の西側1m幅の間は石が点在し、旧調査による粘土層の断割り状況からその上層には白色粘土が覆っていたものと想定される。このことからこれらの石は白色粘土中に突き込まれたものの可能性がある。石敷の構築は創建基壇の版築土を切って地面を浅く掘り込み、下層より黒色土、白色粘土を少量含む黒色土を充填し、その上に白色粘土によって河原石が固定される。白色粘土層は基壇の外側に向かって厚く堆積し、最大で厚さ40cmを測る。推定される基壇縁から西へ3.8mまで延び、その先は攪乱されている。白色粘土層中には河原石や創建期の重瓠文字瓦等赤く焼損した瓦片が多数確認された。

以上のとおり、基壇上面や周囲の石敷きは補修され、掘込地業部は一部補修された可能性があるが、創建

時のものを利用したものと考えられる。なお、石敷粘土層の下層に見られる黒色土層が創建当初のものの可能性はあるが今回の調査でははっきりとしなかった。

SB223塔は、基壇およびその周囲を巡る石敷が補修されていること、また、修復した粘土層からは焼損した創建期の瓦片が含まれていることから、創建後に火災を受け、同じ場所に再建されたとする昭和39・40年度調査結果を追認することができた。『続日本後紀』にみられる承和二年の七重塔の被災は創建時のSB223塔と考えられる。

SD413溝（図面89・写真85）

BS-62～63区に所在し、僧寺中心点の南110.5～112.4m、東189.0mに位置する。SB223塔の心礎から西へ約17mの地点に位置し、塔の軸線にほぼ並行する南北溝と考えられる。本遺構は、昭和39年度調査の断割りによって底面部分が残存する状態で検出され、調査区南壁で土層断面を確認することができた。今回の調査で深さを確認する目的で一部溝の底面まで覆土を掘削した。規模は上面幅1.6m、底面幅0.9m、深さ1.0mで、断面逆台形状を呈す。覆土は、下層が黒褐色土、上層は白色粘土が厚く堆積し、いずれも瓦片が多く含まれる。上層覆土中に混入する瓦には、赤く焼けたものがみられる。SX308幢竿遺構と重複関係にあり、その柱抜き取り穴に切られる。なお、旧調査において塔1の南と北側に設定した南北トレンチ調査では本遺構と関連する溝跡の報告はないが、本溝は僧寺伽藍中核部区画する区画小溝（SD197）と同様の規模・形状であることから、塔1やその造営に関わる溝の可能性がある。

SX308幢竿遺構（図面89・図版85）

BS-62～63区に所在し、僧寺中心点の南111.0～112.4m、東189.4～191.2mに位置する。SB223塔心礎から西へ約17mに位置し、ほぼ南側の四天柱列の西延長上に当たる。昭和39年度調査によって掘削された状態で柱穴が検出され、本調査区の南壁に土層断面が確認された。柱掘り方は東西1.3m、南北0.7m以上で、平面隅丸方形を呈し、深さは柱抜き取り穴の確認面から2.0mを測る。柱穴の埋土はローム土主体で白色粘土を含む。柱抜き取り穴は東西2.3m、深さ2.0mを測り、その覆土には瓦が多く混入し、上層は白色粘土を多量に含む。対をなす柱穴は未確認であるが、幢竿遺構の可能性が指摘される。

SX310不明掘り込み（図面88・89・図版85）

BS-65・66区に所在し、僧寺中心点の南111.4～111.8m、東197.5～200.0mに位置する。旧調査トレンチ断面において確認された。規模は東西2.4m以上、南北0.5m以上m、深さは2.2mでSB223塔の掘り込み地業より深い。覆土は、ローム粒子やロームブロック、礫を含む黒褐色土で水平堆積し硬く締まる。その上層はローム土からなる黄褐色土が2層みられ、その間に5～15cmほどの礫がみられる。SB223塔の創建時および新規掘込地業を切る。

(2) 塔2（SB224塔）

既往の調査 塔2はSB223塔の西方にあたり、平成15年度に行った地下遺構レーダー探査を契機として、その後の発掘調査によってSB224塔が確認された調査区である。

SB224塔が検出された塔1の西方約55m地点は、北側に隣接する個人墓地南端の土塁状の高まりに、武蔵国分寺に関連すると思われる礎石が東西方向に並んで所在する。かつてその性格をめぐっては議論があり、建物遺構の存在が指摘された地点であった。明治36年の重田定一の礎石分布調査が初見で（重田1906）、墓地の周囲に6個の礎石（内4個は埋没にて未計測）を見出し、鐘楼などに当たるかとし、ついで、大正12年3月発行の『東京府史蹟跡地調査報告書 第一冊 武蔵国分寺址の調査』では、確認された2個の礎石について回廊跡などが想定された。また、太田静六博士もここに一堂宇を想定された（太田静六1938）。石村喜英は、礎石と瓦が累々と見いだされ、人工の土壇跡らしい形跡を示す赤土の突起が一部残存している

ことから建物跡の存在を指摘し、塔院を形成する塔付属の建物と想定された（石村 1960）。

その後、塔院を形成する塔付属の建物やこの地点の礎石群をもって創建塔とする意見もあった。これは、七重塔が創建から70年ほど後の承和2年（835）に神火（雷火）で焼失し、承和12年（845）に、男衾郡前大領壬生吉志福正が塔の再建を願ひ出て許可されたことが『続日本後紀』に記録されており、現に礎石が残る東側のSB223塔を再建塔とする立場であった。

一方、SB223塔の付近で戦後行われた開墾の際に得られた知見から、表土層出土瓦が再建期、下層の粘土層出土瓦が創建期として区分され得ることが認識された（宇野 1953）。かかる問題については、上述の通り、昭和39年度に行われたSB223塔の発掘調査によって、基壇外周の補修（焼けた瓦が混じった粘土による）や心礎以外の礎石の据え替え（礎石を持ち上げ下部に瓦を詰め込む）の痕跡などが確認され、同じ位置での建て替えとの結論が出された。

以上の調査・研究の一方で、この地点の礎石群の性格については依然として不明のままであり、また、礎石群の南が周囲より地膨れ状に盛り上がっていることから、何らかの建築遺構があると注目されていたが、発掘調査によってその存在が確認されずにいた。

調査区の設定 平成15年度に、今後の事前遺構確認調査を各地区において進める上の基礎資料とするために、物理探査（地下レーダー探査）によって遺構分布の概略状況を把握することとした。買収済みの史跡地内全域を対象に20mメッシュで測線を設定し、さらに反応のあった範囲については、適宜補助測線を加え、測線長計5,592mの探査を実施した。なお、測線の方向は、想定される僧寺伽藍中軸線に合わせて設定している調査基準線とした。その結果、塔1の西方において約11m四方の範囲に塔に類する反射面が確認された（図面105・106）。

同年度、塔基壇に似た反応を発掘して確認するため、反応範囲の各辺に直交するトレンチを4カ所と中央部にトレンチを設置し、予備調査として発掘調査を実施した。その結果、SB224塔2の掘込地業が確認され、平成16年度に地業遺構の全面に調査区を設けて調査を開始した。

なお、地下レーダー探査は、平成16年度に塔1・2の周辺部（主に北側）において、平成15年度実施の20mメッシュ測線内に5mメッシュの測線を設定し、測線長2,139mで実施した。平成15・16年度の遺構探査では、塔2以外に新たな地業遺構は確認されなかった。

検出された遺構 地表面下0.2～0.6mで遺構確認を行った。中央部は表土層が薄く、深さ20～30cmで塔の地業土が検出された。周辺部は40～60cmと厚く、Ⅲb層で遺構確認作業を行った。主な検出遺構は、SB224塔、SK3254～3256・3258～3260・3263～3266・3276～3281・3319土坑、SX285掘り込み、SX269・282～284輻竿遺構、SX268不明遺構である。

SB224塔（図面90～96 図版85～91）

BM～BS-48～53区に所在し、僧寺中心点の南95.0～113.0m、東141.0～159.0mに位置する。SB224塔2は、現に心礎などが残り従来から塔と認識されてきたSB223塔1の西方55m地点で確認され、伽藍中軸線から東へ150mに位置する。

平成15年度予備調査によって、東・西・南辺部の地業範囲を確認し、北辺は調査区外に版築土が延びることを確認した。この際、南側のトレンチにおいて断ち割りを行い（aトレンチ）、掘込地業であることを確認した。平成16年度には、調査区の範囲を広げて遺構確認を行い、掘込地業の規模・形状をもとに建物や基壇規模を確認するために、東辺（C・Dトレンチ）、西辺（Fトレンチ）、北辺（Bトレンチ）、南辺（Eトレンチ）、北西隅（Aトレンチ）において計7ヶ所の断ち割りを行った。なお、aトレンチでは掘込地業底面まで掘削したが、その他のトレンチでは、掘り込み部が明確に確認できる深さまでの掘削とした。D・G

トレンチについては突き棒痕跡の検出面で断割りを終了させた。

武蔵国分寺の七重塔は、承和2年(835)に火災にあったことが『続日本後紀』に記されているが、本調査においてSB224塔が火災を受けた痕跡は確認されなかった。遺構の上面および周囲は後世の耕作等により削平されている。

礎石が一つも遺存せず、根固石を伴う礎石据え付け痕跡も未検出で、基壇上面は削平されている。唯一、基壇中央に心礎の据え付け・抜き取りとの関係が指摘されるSX285が検出されたのみで、建物規模は不明である。建物の建築に関わる足場穴などの痕跡も未確認であった。

基壇外装や雨落施設、SB223塔で見られる基壇周囲を巡る石敷などは部材や設置の痕跡も確認されず、基壇の規模は不明である。掘込地業の外側に広がるローム土(上層)と黒色土(下層)の版築土は、基壇版築土の残存と想定され、その平面の広がり、東西18m以上、南北約17m以上で、北側は調査区外の墓地内に延びる。掘込地業の中心を基点として、最もこれらの版築土が残存する調査区北西隅から基壇平面規模を推定すると一辺約20.0m以上となる。これはSB223塔の基壇より広く、一部基壇周囲の石敷を含めた範囲に及ぶ(図面96)。

基壇上面や周囲は、後世の耕作等により削平されており、版築土が不整形に残存している状態で、仮に基壇平面規模がSB223塔と同規模と想定すると、基壇外装やその設置の痕跡もほぼ攪乱を受けたと考えられる。

掘込地業は、東西南北と北西隅の7箇所遺構の断割りを行い、規模や地業の断面観察を行った。掘込地業の南辺のaトレンチでは、底面まで断割りを行った。

掘込みの形状は、底面から垂直に近い角度で立ち上がり、上部は緩く傾斜して立ち上がる。北西隅では約60～70度の角度で掘込まれている状況が確認された。南辺aトレンチでは、掘込みの底面まで確認し、掘込み肩から底面までの深さは約2.3mを測る。底面は掘方中央部へ向かって僅かに傾斜して深くなる。

ほぼ垂直に掘り込まれた掘方の肩を基準とすると、掘込地業の平面形状は正方形で、平面規模は一辺11.4mを測り、僧寺伽藍中軸線より約6°東偏する。この掘込地業の規模が地下レーダーによる遺構探査で反応のあった地業遺構の範囲を示していたことが分かった。

版築は、南トレンチの断割り部において、掘込地業部と想定される基壇版築土を合わせて約2.7mを測る。全体で28層以上の版築層が確認され、大別して3つに区分できる。下層は厚み1.3mで、ローム土を主体とした版築層が11層以上ある。中層は厚み0.7mで、版築層が11層以上ある。良く締まるが、上層より弱い。上層は厚み0.7mで、黒色土とローム土の互層で版築層が6層以上あり、隙間無く硬く締まる。上層のうち、最上層で確認されたローム土版築とその下の黒褐色土版築が、地上部へも広がり基壇版築土と想定される。版築内からは、瓦片、須恵器片、土師器片、鉄滓、縄文土器、礫などが出土した。

なお、基壇および掘込地業を合せた版築層の厚さは、調査区中版築土の残存が最も良かった調査区北側の確認レベルと掘込み部底面のレベルから3.07m以上となる。掘込地業と地上部へ広がる地業は連続したものとして確認され、一時期の造作と想定される。

東・西・北側の掘り込み部では、地上部に延びる版築土の下層に黒褐色土の整地土が確認され、この整地土を掘り込んで地業が施されている。

D・Gトレンチにおいて、版築する際の棒状道具による突き痕と考えられる痕跡が検出された。突き棒痕跡は地業遺構の掘込み東辺の肩付近から内側に及ぶ。

Dトレンチにおける突き棒痕跡は、地業遺構の内側に黒色土版築層(図95-②層)を掘り下げ、ローム土主体の版築層(図95-③層)上面で確認された(図95-11)。突き棒痕跡の確認状況は、平面的に掘り下げを行った結果として、③層上面を突いてきた回みに、上層の②層(黒色土)が残存する形で、径約5～10cmの略円形のプランが検出された。一部の突き棒痕跡について黒色土を掘削した結果、深さは1cm前後で断面形

はやや丸みを持つ。

Gトレンチでは二つの異なる版築面で突き棒痕跡が検出された。一つは、Dトレンチと同じ版築層で、径約5～10cmの突き棒痕跡がトレンチ全体に点々と検出された。確認状況は、Dトレンチと同様でローム土版築層上面にできた突き痕に上層の黒色版築土が入り込んだ状態で、突き棒痕跡を確認した(図95-(2))。

もう一つは、上層の黒色土版築層(図95-②層に対応)上面で検出された(図95-(3)・(4))。地業遺構の掘り込み南辺の肩部付近で、黒色土版築層上面がやや窪んだ部分に密集しており、トレンチ全面に及ばない。ここでは突き棒痕跡内に上層のローム土を主体とした版築土が入り込んでいる。平面形状は略円形で、径約5～15cmで、比較的に大きいものはやや隅の丸い方形をなす。ここでは突き棒痕跡内の積み土を取り除いて形状等を確認した。断面形は小振りで略円形のは深さ約3cmで底面がやや丸みを帯び、大振りで隅丸方形形状のものは深さ約5cmで、底面は丸みがあるものやほぼ平坦なものがある。

この他、平面では確認できなかったが、B・C・Fトレンチなどの断面観察により、突き痕と想定される痕跡確認されている。

SB224塔と切合関係のある主な遺構はSK3255・3257～3259・3266・3276～3280・3319、SX268・269・282で、いずれもSB224塔を切る。

SB224塔は、礎石や基壇外装などが未検出で不明な点が多いが、以下の事由により、塔の基壇遺構と判断した。

掘込地業は、計7か所の断割りの結果、一辺11.4mの正方形であることが確認され、この形状から塔と判断される。この規模は、SB223塔の一辺9.8mの初重平面規模が収まる。また、掘込地業の深さは2.3m以上、地業全体の版築の厚さが3.0m以上を測り、SB223塔の掘込地業の深さ1.7mを超える。また、SB224塔は、地上部の版築土の範囲が推定で一辺20.0m以上を測り、SB223塔の基壇とその周囲を巡る石敷を含めた範囲にほぼ相当する。これらのことから、SB224塔の基礎は、SB223塔の建物が建つような規模の建物基礎であったと推測される。

調査区から出土する瓦に、模骨文字「造塔」(逆字)の文字瓦が出土しており、これは未だSB223塔からは出土していないことから、この「造塔」はSB224塔を示すものと想定される。

SX285 掘り込み(図面91 図版91)

B0・BP-49区に所在し、僧寺中心点の南102.1～105.1m、東149.1～152.6mに位置する。SB224塔のほぼ中央に位置し、東西約3.3m、南北約3m、深さ約0.4mのほぼ円形の掘り込みである。遺構の中心は、SB224塔の掘込地業の中心北に約0.4m、西に約0.6mずれるが、規模・位置から塔心礎の抜き取りもしくは掘え付け痕跡と想定される。礎石の根固め石や根固め石を抜いた痕跡は確認されていない。覆土は灰黄褐色土で上下2層に大別でき、いずれも締まりはよいが、上層は締まりの弱い土で、下層の方がより硬い。遺物は上層から瓦片や土器片、礫が出土する。

SK3254 土坑(図面100 図版99)

BR-48区に所在し、僧寺中心点の南108.1～108.9m、東144.3～145.2mに位置する。SK3254土坑は、版築土を一層剥いで確認された。版築作業工程中の所産と考えられるが、性格は不明である。長径0.94m、短径0.77mの不整形な楕円形で深さ0.4m。

SK3260 土坑(図面100 図版101)

BQ-52区に所在し、僧寺中心点の南105.5～106.2m、東156.8～157.9mに位置する。SB224塔の北側中央で検出され、SB224塔を切る。平面形は隅丸長方形で、長径1.1m、短径0.6m、深さは0.5mを測る。覆土は黒褐色土が主体で、他のSB224塔を切る土坑とは様相を異にする。SX282を切る。

SK3255・3256・3257・3258・3259・3266・3276・3277・3278・3279・3319 土坑 (図面 100・101 図版 92・94)

SB224 塔の版築土を切る土坑で、いずれも覆土がローム土を主体とし類似した土坑である。

SK3255 土坑は長径 1.0 m、短径 0.9 m の楕円形で深さ 0.6 m。SK3256 土坑は長径 0.66 m 以上、短径 0.64 m のやや不整形の隅丸方形で深さ 0.46 m。SK3258 土坑は長径 1.4 m、短径 0.95 m の隅丸長方形で深さ 0.65 m。SK3266 土坑は SK3255 土坑に切られる土坑で、南北 0.54 m、東西 0.52 m 以上の隅丸方形で深さ 0.5 m。SK3276 土坑は長径 0.9 m、短径 0.8 m の平面長方形で、深さは 0.6 m を測る。SK3277 土坑は長径 0.7 m、短径 0.5 m の平面楕円形状の長方形を呈し、深さは 0.5 m を測る。SK3279 土坑は長径 0.9 m、短径 0.7 m 以上の平面隅丸方形を呈し、深さは 0.5 m を測る。SK3319 も類似した土坑で、長径 1.2 m、短径 0.4 m 以上の平面隅丸方形、確認面で河原石が 1 個くい込んでおり、その他に河原石を抜き取った痕跡が 3 箇所確認された。

SK3264 土坑 (図面 99 図版 94)

B0-54・55 区に所在し、僧寺中心点の南 99.3～103.2 m、東 163.3～166.3 m に位置する。調査区北東で検出され、調査区外の北に延びる。一部断割りを行った。平面形状は隅丸方形で、規模は東西約 3 m、南北 2.1 m 以上、確認面からの深さは東側が 1.1 m、西側が 0.7 m で、底面は段差があり、東壁はオーバーハングする。形状や覆土の様相から土取り穴の可能性はある。規模や形状等が類似した遺構に SK3281・3283 があり、ほぼ南北に並ぶ。出土遺物は、瓦が出土する。

SK3263 土坑 (図面 99 図版 94)

BR-54・55 区に所在し、僧寺中心点の南 107.9～110.8 m、東 164.1～165.6 m に位置する。調査区の東端で検出され、遺構は調査区外の東に延びる。一部断割りを行った。平面形状は隅丸方形で、規模は東西 2.3 m 以上、南北 2.7 m、確認面からの深さは西側が 0.7 m、東側は 1.8 m を測り、西側が浅く、東側が深く掘り込まれ、底面形状は比高差 1.1 m の段差がある。覆土の堆積状況から人為的な埋戻しとみられる。類似した遺構として、南北に並ぶように SK3264・3281 が検出され、土探り遺構の可能性はある。

SK3281 土坑 (図面 98 図版 93・94)

BP-54・55 区に所在し、僧寺中心点の南 103.0～104.0 m、東 163.3～165.6 m に位置する。調査区の北東部で確認され、遺構は一部調査区外の東に延びる。一部断割りを行った。SX268・SX270 に切られ、平面形状は明確ではないが、隅丸方形と想定される。規模は、南北 1.8 m 以上、東西 2.2 m 以上で、深さは 1.5 m を測る。断割り部では、掘方は北側が浅く、南側は深く掘り込まれ段差があり、東側はオーバーハングして掘り込まれている。覆土の堆積状況から人為的な埋戻しとみられる。土探りの遺構の可能性があり、同じく土取り穴と想定される SK3263・3264 と南北に並ぶ。

SK3265 土坑 (図面 101 図版 94)

CA～CC-45～47 区に所在し、僧寺中心点の南 119.7～123.2 m、東 136.5～143.1 m に位置する。調査区南西隅で遺構の北東隅が検出された状態で、遺構の全体は不明。一部遺構の断割りを行い、規模は南北 3.2 m 以上、東西 6.8 m 以上、深さ 0.6 m を測る。覆土は、黒褐色土を主体とする。瓦が出土するが、瓦溜めのような出土状況ではない。

SX269 幢竿遺構 (図面 98 図版 93)

BP-47・48 区に所在し、僧寺中心点の南 103.4～104.8 m、東 143.0～144.3 m に位置する。SB224 塔の西側で検出され、SB224 塔の版築土を切る。一部断割りを行った。掘り方の規模は東西 1.2 m、南北 1.3 m の方形で、深さ 2.0 m を測る。柱痕跡が残り、柱径約 0.4～0.5 m、根入れ 1.4 m を測る。遺物は瓦片、須恵器片などが出土する。SX269 の東へ約 14 m 地点に、

SX282 幢竿遺構 (図面 97 図版 93)

BP・BQ-52区に所在し、僧寺中心点の南104.8～106.3m、東156.4～158.2mに位置する。SB224塔の掘込地業東辺で検出され、SB224塔を切る。平面形は隅丸方形で、規模は東西1.5m、南北1.5m以上、深さ1.9mを測る。SX268、SK3260と重複関係にあり、それらよりも古い。柱痕跡は未確認だが埋土の状態から柱穴跡と考えられる。

SX283・284 幢竿遺構 (図面 97 図版 95)

BQ-46区に所在し、SX283は僧寺中心点の南106.5～107.5m、東139.0～140.6m、SX284は僧寺中心点の南103.7～104.6m、東139.3～140.7mに位置する。調査区の西側で検出され、SB224塔との切合い関係は不明。いずれも断割りを行った。SX283・284(旧SK3261・3262)は、南北に並ぶ2基一対の幢竿遺構と想定され、柱は西側に向かって約50度に傾いて斜めに設置されたものと考えられる。いずれも平面形は楕円形状の隅丸方形で、掘方は西が浅く、東に向かって深く掘り込まれ、東壁はオーバーハングしている。規模はSX283幢竿遺構が、長径1.4m、短径は0.8mで深さは1.0m、SX284幢竿遺構が長径1.5m、短径0.9m、深さは1.0mを測る。柱抜き取り穴が確認され、建替えは確認されない。

SX268 不明遺構 (図面 102 図版 94・95)

BP・BQ-52～55区に所在し、僧寺中心点の南103.5～105.4m、東157.6～166.0mに位置する。調査区の東側で検出され、SB224塔掘込地業掘方の東辺に直行する東西に長い溝状の掘り込みみである。断割りを3か所行った。南北幅は1.3～1.7mで西から東に向かて広がり、東西の長さは8.8m以上、深さは西側の断割り部で約3m、中央部断割り部で3.8m以上を測り、調査区東端でほぼ立ち上がる。覆土は、黒褐色土・暗茶褐色土・黄褐色土が堆積し、人為的に埋め戻されている。SB224塔・SK3281を切る。なお、西側の断割り部の深さは、SB224塔の掘込地業より50cm程度深い。

(3) 塔2周辺 (SB224塔周辺)

調査区の設定 SB224塔に関連する遺構の確認、SB224塔の建造や廃絶の時期並びにSB223塔との関係を明確にするための情報を得る目的で、SB224塔に直行する東西南北方向の調査区を設定した。東トレンチは、東西22m、南北2m、西トレンチは東西39m、南北2.5m、南トレンチは、東西3m、南北21m、北トレンチは東西2m、南北9mと東西2m、南北19mの範囲で調査を行った(図面86)。

検出された遺構 東トレンチは、調査を行ったところ、昭和39・40年度にSB223塔の塔院に関わる施設を確認するために設定した南北幅1m～2mの旧調査区を確認した。旧調査ではⅢb～Ⅲc層で遺構確認を行っており、一部、地表下約1mのIV層まで掘削している。本調査における遺構確認は、旧調査遺構確認面と地表下約0.5mの土Ⅲb層上面で行った。なお、遺構確認に大きな支障がないと判断して、一部旧調査の埋戻し土は未掘とした。検出遺構は、SD413溝と小穴3個である。SD413溝は、SB223塔の調査区において述べる。西トレンチは、地表下約0.3～0.5mのIV層と一部Ⅲc層上面において遺構確認作業を行った。検出遺構は、SD409溝、SX289・290柱穴、SX357不明遺構、小穴である。南トレンチは、地表下0.4～0.5mのⅢc層上面で遺構確認を行い、SD23伽藍地区画南辺溝と小穴が検出された。北トレンチは、地表下約0.4mのⅢb層上面において、遺構確認を行い、SK3321・3322土坑、SX288柱穴、SX291硬質面、SX358不明遺構、小穴が検出された。いずれも平面プランの確認に止めた。

SD23 溝 (図面 103 図版 96)

南トレンチで検出。CK-48・49区に所在し、僧寺中心点の南148.5m、東145.5～148.5mに位置する。SD23溝は伽藍地区画南辺溝である。調査は覆土掘削せず、プランの確認で留めた。南北幅は3.0mを測る。

SD409 溝 (図面 104)

西トレンチで検出された。BN-32区に所在し、僧寺中心点の南95.5～97.0m、東98.2mに位置する。幅約0.5～1.0mの小規模な南北溝である。

SX357 不明遺構 (図面 104)

西トレンチで検出された。BN-34～37区に所在し、僧寺中心点の南95.5～99.0m、東103.5～112.0mに位置する。一部断割りを行った。規模は南北3m以上、東西5m以上、深さ1.2mを測る。覆土は黒褐色土で、底面にわずかにロームブロックを含む層がある。遺物は、須恵器、土師器、鏡・男・女瓦、鉄滓などが出土する。

SX288・289・290 柱穴 (図面 103・104 図版 96)

SX288は北トレンチで検出された。BI・BJ-51・52区に所在し、僧寺中心点の南83.5～8.0m、東51.6～52.5mに位置する。平面規模は南北1.3m、東西0.8m以上で平面形は方形で、西端は調査区外に延びる。

SX289・290は西トレンチで検出された。B0-37区に所在し、僧寺中心点の南99.5～100.0m、東110.7～112.0mに位置する。SX289柱穴は東西1.0m、南北0.7m以上で平面形は隅丸方形で、SX290柱穴は東西1.1m以上、南北0.4m以上である。SX290柱穴がSX289柱穴を切る。SX288～290は本調査区内では組み合う柱穴は未検出である。

SX291 硬質面 (図面 103)

北トレンチで検出。BI・BJ-51・52区に所在し、僧寺中心点の南83.4～85.0m、東156.0～157.7mに位置する。南側調査区の南端で検出し、範囲は南北約1.4m、東西約2mの不整形で東・西・南は調査区外に延びる。

(4) 塔周辺 (予備調査)

調査区の設定 本調査区は、平成15年度に実施した予備調査区で、遺構確認面の深度、土層体積状態、遺物包含状況等の把握を主な目的として、SB223塔の西方約30m地点において、東西6m、南北3mの調査区を設定した(図面86)。

検出された遺構 地表面下0.5mのⅢb層上面で遺構確認作業を行った。遺構は小穴が6基検出され、そのうち2基は柱穴と確認された。遺構確認のみで断割りは行っていない。2基の柱穴跡は重複しており、古い方は抜き穴、新しい方は柱痕跡が確認された。平面規模はともに1辺0.4mで平面形は方形である。調査区内では組み合う柱穴は未検出である。

2. 南門地区

既往の調査 大正時代に東京府が行った分布調査によると、金堂跡から南へ約216m離れた付近で、瓦が堆積して地彫れ状に高まった箇所(第11図A地点)を認識し、そこを「南大門」跡として推定した。この地点は、明治のはじめには「薬師大門」と呼ばれた場所で、礎石が4～5個現存していたが(東京府1923)、その後に取り去られたようで、東京府の調査の時点では一つも残っていない状況が報告されている。

昭和33年度の日本考古学協会による南門の調査は、A地点(A地区)と金堂から南へ約120m離れた地点(B地区)の2カ所(第11図)で行われた(日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会1985・矢島1959)。A地区では南北方向に走る溝が2条確認されたものの、基壇や礎石、礎石据え付け痕跡などの門跡を裏付ける遺構は未検出で、出土した瓦の量も多くないことが報告されている。B地区の調査は、礎石跡と想定される掘り方が4カ所検出され、南門の遺構と想定された。この他に、東西溝が1条(SD23伽藍地南辺区画溝)、南北溝が2条検出されている。

その後、市教育委員会が寺院地区画溝南辺の伽藍中軸線上において行った第348次調査では、門跡と想定される建物跡は確認されず、南門推定地としては昭和33年度調査のB地区が有力な候補地とされた。

調査区の設定 平成20年度に昭和33年度調査によって南門跡と想定された遺構を再確認することを目的として、昭和33年度調査B地区において東西16m、南北12mの調査区を設定した。

検出された遺構 地表下0.55～0.75mのⅢb～c土層上面で遺構確認を行い、SB215南門、SD23伽藍地区画溝、SD410溝、SX316橋脚遺構1基、SX315硬化面、柱穴を含む多数の小穴が検出された(図面107)。なお、旧調査により覆土掘削が行われ、SB215南門の掘り方は確認面から深さ最大約0.4mまで、SD23溝は底面の一部を除くほぼ全体、その他多数の小穴が掘り上げられていた。

SB215南門(図面107・108 図版98・99)

CH・CI-西1～東1区に所在し、僧寺中心点の南140.3～143.0m、西2.8～東2.0mに位置する。金堂心から南約115m、中門建物心から南へ約65m地点で確認され、SD23伽藍地区画南辺溝の南側に位置する。建物の中軸線は伽藍中軸線より西に約35cmずれ、その傾きは伽藍中軸線に対して約4°東偏し、SD23伽藍地区画南辺溝に近い傾きを示す。

昭和33年度で調査された礎石据え付け掘り方と想定された痕跡を4カ所すべてを再確認した。一部断割りを行った結果、埋め土は版築状に積まれており、これらの掘り方は礎石下部の壺地業と考えられる。建物は、桁行1間、梁行1間で、南側の壺地業1-1・2-1は、北側の壺地業1-2・2-2に比べて規模が大きいことから、南側の2本が親柱で、その背後にそれぞれ控柱が伴う構造と推定される。間口(東西)約4.5m、親柱と控柱の間隔は約2.25mを測る。

1-1は平面形が方形で東西1.05m、南北1.1m、深さ0.5mを測り、埋め土は底面にわずかに残存していた。1-2は平面形が方形で東西0.95m、南北0.85m、深さ0.4mを測り、埋土が底面に残存し、1層の版築層が確認された。2-1は、平面形が方形で東西1.2m、南北1.0m、深さ0.5mを測り、ローム土、黒褐色土の互層の版築層が計5層確認された。2-2は、平面形がやや不整形であるが方形基調で、東西0.75m、南北0.65m、深さ0.3mを測り、埋め土は黒褐色土を主体とする版築層が4層確認された。いずれも礎石や根固石、基壇は未検出である。また、建物全体に及ぶ掘込地業は本調査区内では確認されなかった。

SD23溝(図面109 図版100)

CG・CH-西4～東1区に所在し、僧寺中心点の南137.5m、西10.0～東5.5mに位置する。伽藍地区画南辺溝である。昭和33年度調査で覆土をほぼ完掘しているため詳細は不明だが、掘り込みの形状(A～I)から数度の掘り直しがあったと想定できる。南門北側では、逆台形状の断面形状と想定されるC・D・Eの3つ掘り込みが確認された。その東西側は、A・B・F・G・Hがみられ、B・F・Gは南門北側を掘り残したものと想定される。なお、AはCと同じ掘り込みの可能性があり、IはC～Eのいずれかの南壁となる。Hはどの掘り込みの北壁に対応するが明確ではない。A・Bは、土層断面で確認でき、Bが底面幅0.7～0.9m、深さは1.0mで、断面逆台形状を呈し、先行するAを切る。SB215南門背面の溝は最も深いCでも深さ約0.8mと比較的浅く、C～Eとその東西側の溝には段差が生じている。新旧関係は不明だが、このような状況から、南門背面の溝は、おおよそ4.5m間を土橋状に掘り残した時期と、溝を掘って後述する木橋を架けた時期とがあったものと想定される。

SX316橋脚遺構(図面108 図版100)

CG・CH-西1～東1区に所在し、僧寺中心点の南136.3～139.6m、西2.0～東1.7mに位置する。SB315南門の北側に走るSD23伽藍地区画溝の南側と北側には多数の小柱穴が存在し、これらは溝に架けられた木橋の痕跡の可能性がある。関連する柱穴は18個確認されたが、溝の北側の柱穴は4基と少なく、溝

の掘り直しによる消滅も想定され、それぞれの組み合わせ関係は必ずしも明確ではない。検出位置や規模・形状から1～4と12～15、5と6が組み合わせると想定され、その東西幅は約3.0～3.4mを測る。なお、8～11・17・18は旧調査による覆土掘削が行われており詳細は不明である。

SD410 溝 (図面 110 図版 100)

CG・CH-3区に所在し、僧寺中心点の南194.0～146.0m、西7.7mに位置する。上面幅約1.0～1.8m、底面幅0.5m、深さ0.9mを測り、断面形は「V」字状で壁は外上方に向かって開く。僧寺伽藍中軸線に対して2°30′西偏する南北溝である。昭和33年度調査のA地区や第348次調査、本調査の中門調査区でその延長が検出され、SA33 掘立柱塼の柱穴2やSD23 伽藍地南辺区画溝、寺院地南辺区画溝を切る。

SX315 硬質面 (図面 100)

CF～CJ-1区に所在し、僧寺中心点の南134～146.0m、西3.0～4.5mに位置する。南門の東側で南北に延びる掘り込みを伴う硬質面で、幅1.6m、深さ0.3m以上を測る。遺物は永楽通宝が出土した。

第3節 伽藍地外の調査

1. 塔地区南方

調査区の設定 本地区は、七重塔(塔1)のほぼ南方70m離れた地点に位置する。当該地付近は、従前は住宅地で遺跡のデータがあまり得られていなかったこと、及び昭和53年度～63年度に公共下水道整備に伴う第87次調査で武蔵国分寺創建期に比定されるSX23地業遺構を検出しており(上敷領1994)、これとの関連遺構の存在を確認するため、平成15年度に予備調査の一環で調査を実施した。調査区は、東西3m、南北12mのトレンチを1本設定した。

検出された遺構 地表面下約0.25～0.3mのⅢb層で遺構確認作業を行った。小穴5基を検出したが、平面プランの確認に留めており、覆土の掘削等は行っていない。なお、SX23地業遺構に関わる遺構は確認されなかった(図面111)。

2. 南門地区南方

調査区の設定 平成15年度に予備調査の一環として、遺構確認面の深さ、土層堆積状態、遺物包含状況等の把握するために、南門南方1区・2区の2地点に調査区を設定した。

1区は、現史跡指定地の南端部に位置し、大正期に東京府が行った調査では付近から相当量の瓦が出土し、南大門の存在が想定された場所に近接する。なお、昭和33年度の日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が南大門を探る目的で設定したA地区の南東に位置する。

2区は、現南門の南東に位置し、第242・286次調査で検出されている東西溝のSD199溝の西側延長を確認することを目的として、伽藍中軸線の東48～50m、金堂から南約158～165m地点に、東西3m、南北7mの調査区を設定した。

検出された遺構 1区は、地表面下約0.55mのⅢc層土で遺構確認を行ったところ、調査区西側全体が中～近世の所産と思われる暗褐色土の落ち込みがあり、古代の遺構は確認されなかった(図111)。2区は、地表下約0.4mのⅢb層上面で遺構確認を行い、SD199溝、小穴1個を検出した。調査は遺構の平面プラン確認に留め、覆土の掘削は行っていない。SD199溝は幅2.6mを測り、伽藍中軸線方向へ延びていることを確認した。

第5章 結 語

平成 15 年度～平成 24 年度に実施した史跡保存整備に伴う僧寺地区の事前遺構確認調査は、昭和 30～40 年代に発掘調査された金堂、講堂、鐘楼、中門、中樞部区画施設南辺、塔 1、南門の位置や規模、構造を確認することを主な目的として再調査を行い、新たに、中樞部区画内における堂間部分、中樞部区画施設の北西、南西、南東、北辺、平成 15 年度の地下遺構レーダー探査を契機として確認された塔 2 の調査を行った。昭和 30～40 年代の調査成果の追認するところが多いが、塔 2 や金堂講堂間の通路の確認、中樞部区画施設が掘立柱礎から築地塀へと造り替えられたことなど新たな情報を得ることができた。なお、以下に、主な調査結果について述べる。

1. 金堂

①建物規模・構造 桁行 7 間 (約 36.2 m) × 梁行 4 間 (約 16.6 m) の四面廂建物である。柱間寸法は、桁行が 13 尺 + 18 尺 + 20 尺 + 20 尺 + 20 尺 + 18 尺 + 13 尺 (= 122 尺)、梁行が 13 尺 + 15 尺 + 15 尺 + 13 尺 (= 56 尺) に復元される。

②基壇規模・構造 基壇は乱石積基壇で、規模は東西約 45.4 m、南北 26.2 m を測る。乱石積基壇外装は 50～70 cm 大の河原石を 3 段積み上げた状況が確認された。基壇高は、雨落石敷上面から推定約 80 cm～1.25 m で、相対的に東側が高い。床面は埴敷きと想定されているが、部材や構築状況を示す痕跡は未確認である。基壇縁から建物側柱までの距離は、南北面で約 4.8 m、東西面で約 4.6 m を測る。

③階段 基壇の南面におおよそ建物中央間 3 間分、北面におおよそ建物中央間 1 間分の幅の階段が設置される。北面階段は、改作されたものと想定される。その規模は、推定幅約 4.45 m、出幅は最大で約 1.35 m を測る。河原石を部材とした乱石積階段で、蹴上げ高約 20 cm、踏み面幅約 30 cm、推定で 3 段と推定される。南面階段は部材が残存していないが、南面の基壇外装と雨落石敷が途切れる範囲から幅がほぼ建物中央間 3 間分で推定約 16.3 m、出幅は 1 m 以上である。

④雨落施設 雨落施設は、河原石を平坦に敷いた石敷 (雨落石敷) で、基壇および階段の外周を巡る。基壇の周囲は 20 cm 程度の河原石を用いた幅 90 cm～1 m 幅の石敷で、北面階段部分は階段や乱石積基壇外装の部材と同等の石を外周に使用する。

⑤基礎地業 掘込地業は建物全体に及び総地業で、規模は東西約 42 m、南北約 22.4 m、深さ約 1.3 m を測る。基壇を含めた版築の厚さは 2.1 m 以上を測る。礎石下部には土と石敷層を互層にした壺地業が施される。

2. 講堂

講堂は、創建時の桁行 5 間、梁行 4 間の二面廂建物から、桁行を東西に各 1 間広げて金堂と同規模の桁行 7 間、梁行 4 間の四面廂建物に再建し、再建時には礎石の据え直しや基壇外装全体の造り替えを行っていることが判明した。

創建講堂

①建物規模・構造 桁行 5 間 (約 28.5 m) × 梁行 4 間 (約 16.6 m) の二面廂建物である。柱間寸法は桁行が 18 尺 + 20 尺 + 20 尺 + 20 尺 + 18 尺 (= 96 尺)、梁行が 13 尺 + 15 尺 + 15 尺 + 13 尺 (= 56 尺) に復元される。

②基壇規模・構造 基壇は瓦積基壇で、規模は東西約 34.4 m、南北は北面で部材が未検出であるため 22.7 m 前後と推定される。瓦積基壇外装は場所によって異なる様相を呈す。基壇東面は基底部の部材が河

原石主体で一部に女瓦片、西面が完形の男瓦主体で一部に女瓦片、南面が完形の男瓦を使用する。基底部より上の瓦積みは再建基壇を造る際にほとんど壊されており、東面で基底部の部材の上に完形の男瓦、西面北側で女瓦片を積んだ状況が確認されるのみである。

基壇高（推定標高 65.5 m）は、基壇外装基底部上面からの推定高で、西面が約 70 cm、南面中央が約 80 cm、東面が約 1 m を測り、東側が高い。基壇上面の構築状況を窺える白色粘土層を確認したが、床面として想定されている埴敷きは未検出である。なお、階段や雨落施設は本調査では確認されなかった。

③基礎地業 掘込地業は建物全体に及ぶ総地業で、規模は 24.8 m 以上、南北は 25.6 m 以上、深さは基壇外装の基底部上面から約 50 cm を測る。残存する基壇最上層の白色粘土層まで含めると地業の厚さは基壇西側で約 90 cm、基壇東側で約 1.3 m を測る。

再建講堂

①建物規模・構造 桁行 7 間（約 36.2 m）×梁行 4 間（約 16.6 m）の四面廂建物である。柱間寸法は、桁行が 13 尺 + 18 尺 + 20 尺 + 20 尺 + 18 尺 + 13 尺（= 122 尺）、梁行が 13 尺 + 15 尺 + 15 尺 + 13 尺（= 56 尺）に復元される。

②基壇規模・構造 基壇は瓦積基壇で、規模は東西約 42.3 m、南北約 22.8 m である。瓦積基壇外装は埴を基底部として、その上に女瓦片を主体に宇瓦片、男瓦片を積む。基壇高（推定標高 65.5 m）は、基壇外装基底部の埴上面からの推定高約 85 cm ~ 1.2 m を測り、南東側が高い。基壇床面の部材は未検出である。

③階段 基壇南面と北面に、おおそ建物中央間 1 間分の幅の階段が設置されたものと想定される。再建基壇外装を設置した後に加えられた階段の構築土が残存し、階段の部材の可能性のある河原石が周辺に点在するが、規模・構造は不明である。なお、雨落施設は未検出である。

④基礎地業 建物を東西 1 間分広げる範囲に、創建基壇の東側と西側にそれぞれ掘込地業を施す。再建基壇外装の基底部の上面から深さ 50 ~ 60 cm で、残存する版築の厚さは約 1.2 m を測る。

3. 鐘楼

①建物規模・構造 桁行 3 間（約 9.2 m）、梁行 2 間（約 5.9 m）の南北棟の総柱建物である。柱間寸法は、桁行 10 尺 + 11 尺 + 10 尺（= 31 尺）、梁行 10 尺 + 10 尺（= 20 尺）に復元される。主軸方向は、基壇縁を示す石列より伽藍中軸線より約 1° 60′ 西偏する。

②基壇規模・構造 建物南面において基壇縁を示すと考えられる石列とその北側に瓦列が検出されたが、基壇外装は不明。石列と瓦列は創建当初の設えではなく、後補のものと考えられる。基壇の平面規模は建物と石列の位置関係から東西約 14.5 m、南北約 11.3 m、基壇高は残存する礎石と石列からおおよそ 50 cm と推定される。階段や雨落施設は未検出である。

③基礎地業 掘込地業は、東西 11.5 m、南北 14.3 m の建物全体に及ぶ総地業で、基壇を含めた基礎地業全体の版築の厚さは 1 m を測る。従来、鐘楼の基礎地業として想定されていた壺地業は施されていないことが判明した。

4. 堂間地区

金堂・講堂間において堂間通路と 1 組の幢竿遺構、中門・金堂間で 2 組の幢竿遺構が検出された。堂間通路（SF12）は、金堂と講堂をつなぐ幅約 4.15 m の南北通路で、路面は 4 本の石列により 3 つに区画され、中央は玉石が主体で、その左右両側は瓦片が主体に敷かれている。金堂、講堂との取り付け部分は不明だが、金堂の北面階段の幅とはほぼ一致する。

幢竿遺構は、中門・金堂間で 2 組、金堂・講堂間で 1 組確認され、いずれも伽藍中軸線を挟んで東西に並

ぶ。中門・金堂間では、金堂南側柱から南へ約11.9 m地点にSX304・305・306、約27 m地点にSX302・303が位置する。SX304・305・306は未調査であるが東側もう1基存在し、4本の柱が組み合うものと推定される。SX302・303は、規模の大きな柱穴で2本の柱が組み合う。金堂・講堂間では、講堂南側柱から南へ約11.5 mの位置に6本の柱が組み合う榦竿遺構と推定されるSX319・324～327が確認される。遺構の切り合い関係から創建講堂に伴うもので、柱間は約5.6 m + (約6.2 m) + 約6.2 m + 約6.2 m + 約5.6 mを測り、創建講堂の桁行方向の柱間間隔に近似する。

5. 中門

中門は、礎石建物(SB216)として創建され、その後掘立柱建物(SB232)へと建て替えられる。SB232掘立柱建物は、東側柱は後世に削平されて未検出であるが、桁行3間、梁行2間の側柱建物と推定される。柱間隔は桁行が約2.4 m + 3.1 m + (2.4 m)、梁行が約2.55 m + 2.55 mで、正面中央間が広く、側柱建物状構造の門と想定される。なお、SB216中門の前身となる門は未検出である。中門前面に参道と関連する硬くしまった土層(SX292)が検出された。金堂・講堂間で確認されたSF12通路遺構のような石列による区画や玉石や瓦片を使用した路面は見られない。以下、SB216中門について概要を述べる。

①**建物規模・構造** SB216中門は、桁行3間(約9.5 m)、梁行2間(約5.9 m)の八脚門である。柱間寸法は、桁行が10尺+12尺+10尺(=32尺)、梁行が10尺+10尺(=20尺)に復元され、正面中央間を扉口とする三間一戸の門である。

②**基壇規模・構造** 中門に伴う基壇や階段、雨落施設は未確認である。中門の周囲に廻るSD397溝は、その位置から中門と関連した施設と考えられるが、規模や形状、覆土の様相から雨落溝や基壇外装設置に関わる痕跡と判断できず、性格は定かではない。

③**基礎地業** 基礎地業は、礎石下部のみ行壺地業で、礫や瓦片などを突き込んで版築し、下層には完形品を含む瓦を敷いた層が確認された。

6. 伽藍中樞部区画施設

伽藍中樞部区画施設は、塀と素掘り溝で構成され、中門より両翼に延びて北に折れ、東西僧坊を取り込み、講堂の背後で閉じる。

当初の区画塀は掘立柱塀で、第117次調査により北西隅柱、今回の調査により南東隅柱と南西隅柱の位置が確定したことにより、東西(北辺)で約156 m、南北(東辺)で約131 mを測り、東西に長い長方形の区画を呈していたことが判明した。掘立柱塀の柱穴には、最低1回の柱の建て替えが行われているが、区画南東地区、北東地区、北西地区の一部で見られ、部分的に柱の立て替えを行ったと考えられる。

掘立柱塀は、その後、築地塀へと建て替えられるが、明確に捉えている箇所は区画南辺と北西で、東僧坊付近の東辺の調査(第19・414次調査)で掘立柱塀の上層で検出された硬化面SX1が築地塀の可能性がある。

区画溝は、塀の外側に大小2条の溝が廻り、内側には1条の溝が確認された。塀の外側に大溝(SD27・194・215A・259・423・425)、さらにその外側に小溝(SD197・426・424)が廻る。大溝は中門前面で途切れ、土橋状に掘り残されていることが判明した。一方、小溝は中門前面も掘り込まれているが、区画南西では区画北西で確認したSD424の南延長上に小溝は検出されなかった。

塀の内側に区画南辺において中門の背面では途切れる1条が確認され、その他、区画北辺のSD415や既往調査で検出された区画南辺のSX41・86、区画東辺のSD26・SK130・131・574は一連の溝であった可能性がある。

7. 塔1

本調査では基壇西面の一部について昭和39年度調査の再調査を行い、SB223塔1は、基壇およびその周囲を廻る石敷が補修されていること、また、石敷を修復した粘土層には焼損した瓦片が含まれていることから、創建後に火災を受け、同じ場所で作られたとする昭和39・40年度調査結果を再確認した。

創建の建物全体に及ぶ掘込地業は創建当初のもので、基壇上面及び基壇外装とその外周の石敷を再建の際に補修した痕跡が認められた。創建時の版築を切って、深さ1mの新規の掘込地業が一部施され、さらにこの新規の掘込地業を切る深さ2.2mのSX310不明掘り込みが確認された。いずれも旧調査断割りトレンチの断面で確認され、平面の規模や形状は不明であるが、塔の建設に伴う痕跡と考えられる。

この他に、塔1基壇縁から西に約7m地点で、南北溝のSD413溝、SX308幢竿遺構が確認され、塔1との関連するものと考えられる。

8. 塔2

SB224塔2は、伽藍中軸線より東に約151m、SB224塔1の西方約55mの地点で、平成15年度に実施した地下遺構レーダー探査を契機として確認され、掘込地業が正方形であること、その規模は塔1と同等級以上で、調査区から出土する「造塔(逆字)」の文字瓦から、塔跡と判断された。

掘込地業は、平面形状が一边11.4mの正方形で、深さは2.3m以上を測る。地業全体の版築の厚さは3m以上を測り、掘込地業の外側の地上部にも一連の版築土が広がり、その範囲は復元すると一边20m以上である。塔2の掘込地業の平面範囲に塔1の初重平面規模一边約9.8mが収まり、地業の版築の厚さは塔1以上であることが判明した。また、地上部の版築土の広がり、塔1の基壇周りの石敷範囲にも及んでいる。

調査区の北側に礎石が点在するものの、原位置を留める礎石はなく、四天王・側柱の礎石や根固石などの礎石据え付け痕跡は検出されなかった。唯一、掘込地業のほぼ中央に、心礎の抜き取りや据え付けの痕跡と思われる長径3.3m、短径2.9mの楕円形状のSX285が確認された。また、基壇外装や雨落施設は未検出であった。基壇上面やその周囲は後世に削平されており、このため、礎石の移動や礎石の据付痕跡、基壇外装等が失われた可能性がある。なお、塔2が火災を受けた痕跡は確認されなかった。

塔2の築造に関わる遺構として、塔2の東側で南北に並ぶ3つの土採り穴が確認された。

その他の遺構として、塔2の西側で、南北に2基並ぶ伽藍中軸線に斜めに立てた幢竿遺構や、塔2を切るSX268・282幢竿遺構が確認された。

9. 南門

南門は、昭和33年度調査により南門と想定された4基の掘方の再調査を行い、桁行1間(約4.5m)、梁行1間(約2.25m)の二本の親柱の背後に控柱を立てた構造の門であること、礎石建ちであったことを確認した。南門の北側には、SD23伽藍地区画溝が東西に走り、南門は伽藍地区画溝の外側(南側)に位置している。南門の背面にあたるSD23伽藍地区画溝は、土橋状に掘り残した時期と開口して木製の架けられていた時期があったと想定される。

引用・参考文献

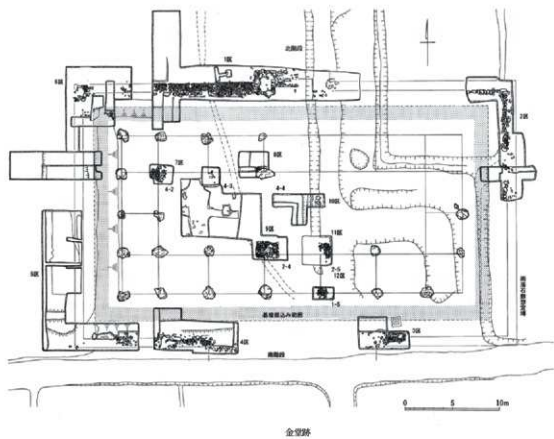
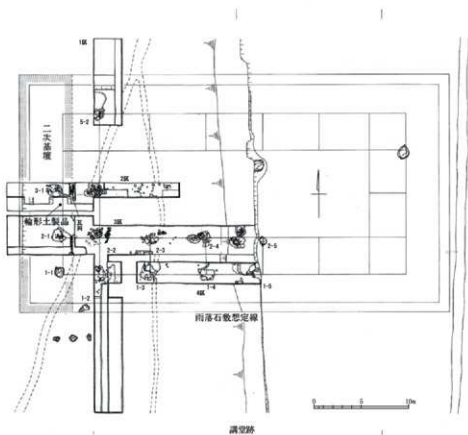
- 石村喜英 1960『武蔵国分寺の研究』明善堂書店
- 宇野信四郎 1953「武蔵国分寺創建時に於ける瓦について『西郊文化』4 杉並区史編纂委員会
- 太田静六 1938a「武蔵国分寺復原考（上）」『考古学雑誌』28-5 日本考古学会
- 太田静六 1938b「武蔵国分寺復原考（中）」『考古学雑誌』28-7 日本考古学会
- 太田静六 1938c「武蔵国分寺復原考（下）」『考古学雑誌』28-10 日本考古学会
- 小野本敦 2009『武蔵国分寺跡発掘調査概報 34』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 小野本敦・増井有真・立川明子 2010『武蔵国分寺跡発掘調査概報 35』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 上敷領久 1994『武蔵国分寺跡発掘調査概報 XX』国分寺市遺跡調査会
- 榎本杜人 1961「東京都北多摩郡武蔵国分寺址（第1次調査）」『日本考古学年報』9 日本考古学協会
- 久保常晴 1983「武蔵国分寺発掘日記抄—昭和三十一年度—」『続々仏教考古学研究』ニューサイエンス社
- 国分寺市史編纂委員会 1986『国分寺市史 上巻』
- 国分寺市教育委員会 1967『武蔵国分寺図譜』
- 重田定一 1906「武蔵国分寺僧寺の廢址」『古蹟』2-2 帝国古蹟取調会
- 滝口宏 1968「武蔵国分寺址調査私見」『日本歴史考古学論叢』2 日本歴史考古学会
- 滝口宏 1991「第九 武蔵」『新修武蔵国分寺の研究』第二巻古川弘文館
- 滝口宏 1987『武蔵国分寺跡調査報告—昭和三十九～四十四年度—』早稲田大学考古学会・国分寺市教育委員会
- 東京府 1922「武蔵国分寺址の調査」『東京府史蹟勝地調査報告書』第1冊
- 内藤政恒 1965「武蔵国分寺址（昭和40年度夏期）発掘略報」『歴史考古』13 日本歴史考古学会
- 日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会 1956「武蔵国分寺跡第一次発掘調査概要」『武蔵国分寺遺跡調査会年報 1974 武蔵国分寺跡』再録
- 日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会 1985『武蔵国分寺跡遺物整理報告書—昭和三十一年・三十三年度—』日本考古学協会
- 矢島恭介 1959「武蔵国分寺跡発掘調査概要（昭和三十三年度）」『考古学雑誌』44-3 日本考古学会

図 面



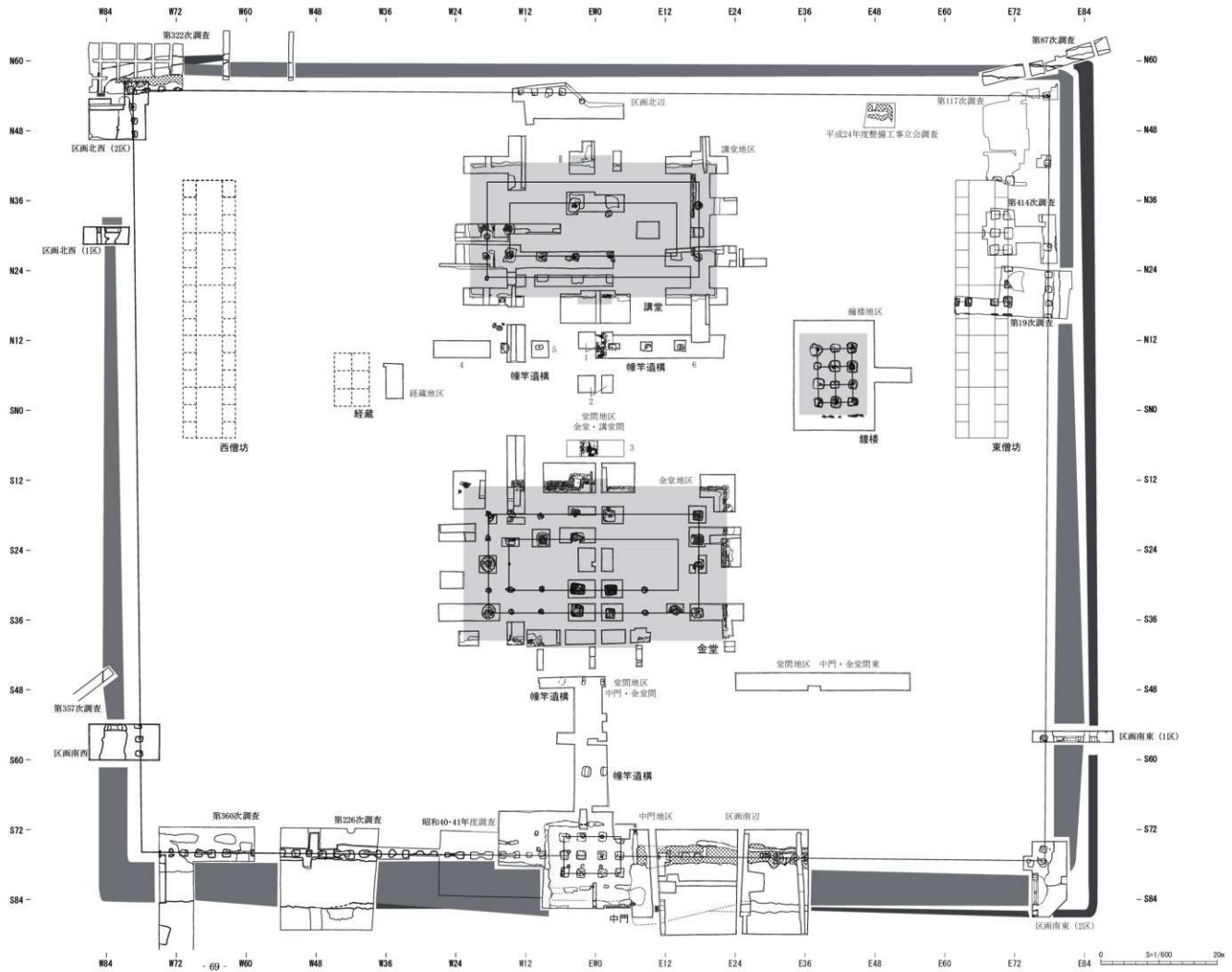
第 12 図 武蔵国分寺跡（僧寺地区）全景（南から）

図面1 金堂地区 講堂地区 昭和31年度調査全体図

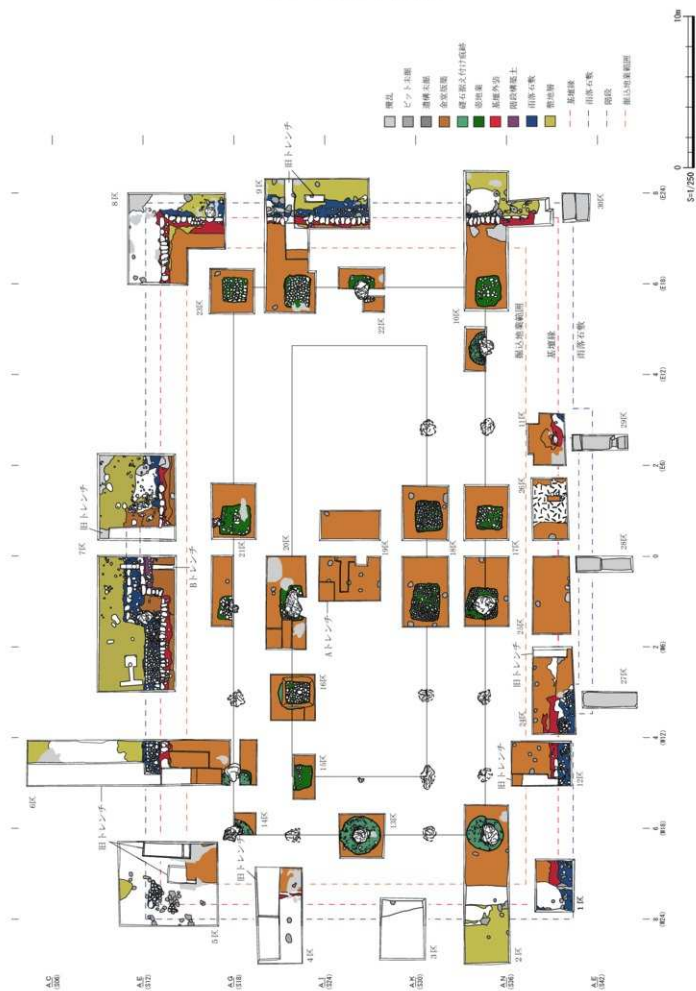


『武蔵国分寺跡遺跡調査報告書—昭和31・33年度—』より

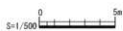
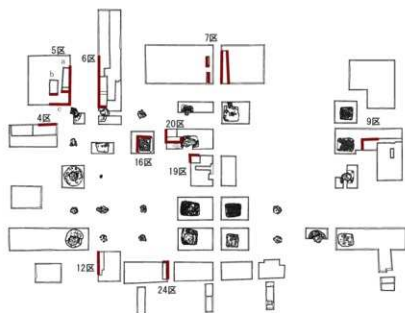
図面2 武蔵国分寺(僧寺地区) 遺構配置図



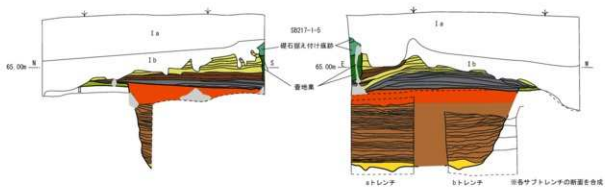
図面3 金堂地区 遺構配置図



図面4 金堂地区 トレンチ断面図1

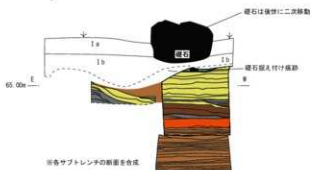
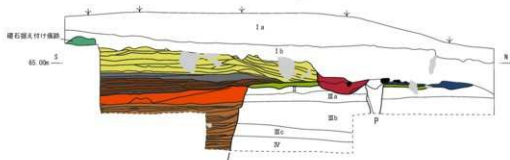


5区



※各サブトレンチの断面を合成

6区

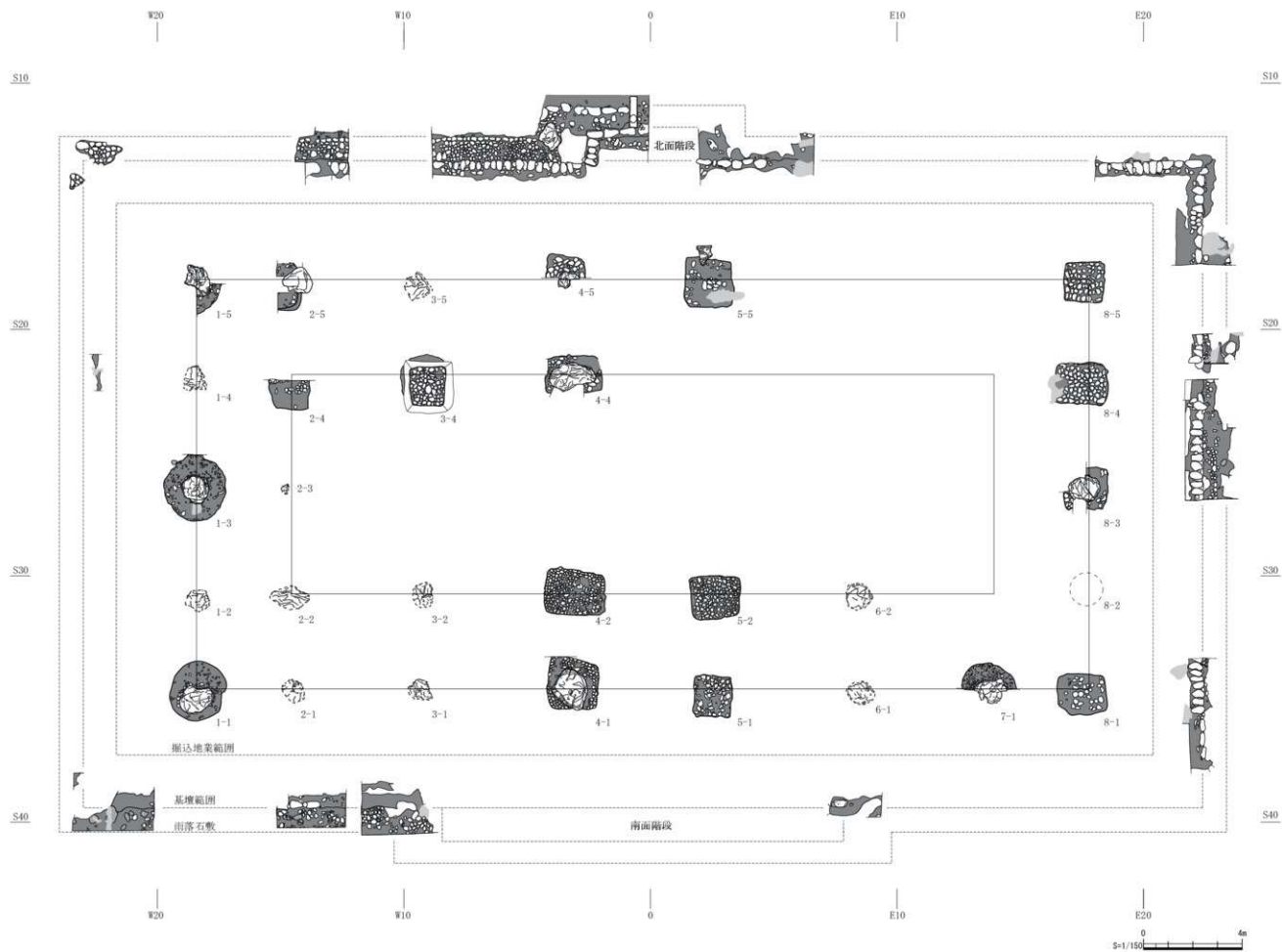


※各サブトレンチの断面を合成

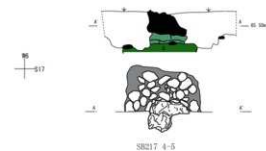
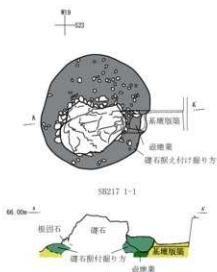
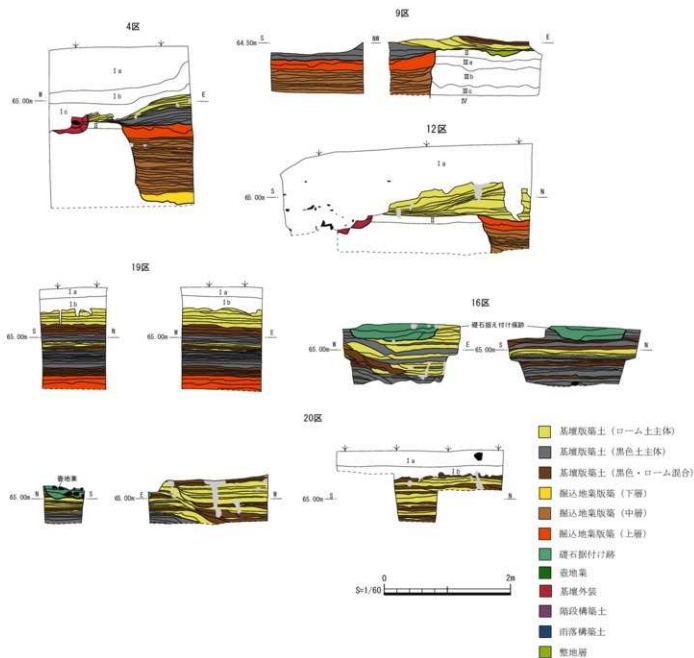
- 基礎版瓦土 (ローム土主体)
- 基礎版瓦土 (黒色土主体)
- 基礎版瓦土 (黒色・ローム混合)
- 扉込地蔵版瓦 (下層)
- 扉込地蔵版瓦 (中層)
- 扉込地蔵版瓦 (上層)
- 礎石埋付跡
- 遺地層
- 基礎外瓦
- 扉込磚瓦土
- 扉込磚瓦土
- 敷地層



圖面 5 SB217 金堂礎石建物



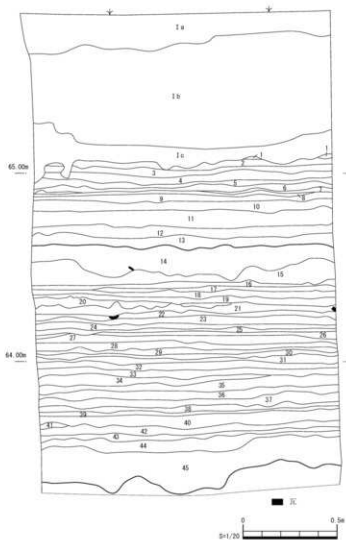
図面6 金堂地区 トレンチ断面図2



礎石4-5 (礎石据え付け跡り方: 1・2 遺地業跡り方: 3)	
1 灰黄褐色土 103R1/2	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体弱。黒色土粒少量、白色粘土少量含む。
2 にじい黄褐色土 103R1/3	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体弱。黒色土粒少量、白色粘土少量含む。
3 褐色土 103R1/4	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体弱。黒色土粒少量含む。



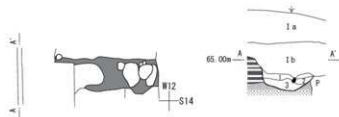
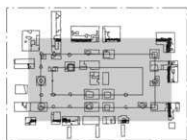
図面7 金堂地区 基壇版築土



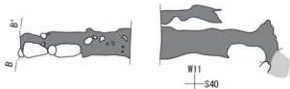
取組 (1~12: 基礎取組 14~21: 組込地盤取組土層 14~15 中層 16~44 下層 45)		
1 にぶい・黄褐色土	10YR5/4	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒少量含む。
2 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
3 にぶい・黄褐色土	10YR4/2	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒少量含む。
4 にぶい・黄褐色土	10YR5/2	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒腐土、黒腐土、黒色土を少量含む。
5 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
6 褐色土	10YR3/2	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒腐土を少量含む。
7 褐色土	10YR3/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒腐土を少量含む。
8 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒腐土を少量含む。
9 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒腐土を少量含む。
10 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土主体層。
11 黒腐土	10YR3/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。
12 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土粒少量含む。
13 黒腐土	10YR3/1	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土粒少量含む。

14 黒腐土	10YR3/2	しまり強い。粘性あり。ローム土、黒腐土。黒色土の混合土層。互方混入。
15 黒腐土	10YR2/2	しまり強い。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土主体層。ローム土粒少量含む。
16 灰黄褐色土	10YR4/2	しまり強い。粘性あり。ローム土主体層。
17 にぶい・黄褐色土	10YR4/3	しまり強い。粘性あり。ローム土主体層。黒色土プロックや多く含む。
18 黒腐土	10YR3/2	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土を主体とし、ローム土プロック、黒色土粒を含む。
19 黒腐土	10YR3/1	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土を主体とし、ローム土プロック、黒色土粒を含む。
20 にぶい・黄褐色土	10YR5/3	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒少量含む。
21 黒腐土	10YR3/2	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土を主体とし、ローム土プロック、黒色土粒を含む。
22 黒腐土	10YR2/2	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土を主体とし、黒腐土の混合土層。ローム土少量含む。互方混入。
23 にぶい・黄褐色土	10YR5/3	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層とし、黒腐土、黒色土の混合土層。
24 黒腐土	10YR2/2	しまり強い。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土粒少量含む。
25 黒腐土	10YR3/2	しまり強い。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土粒少量含む。
26 黒腐土	10YR2/2	しまり強い。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土粒少量含む。
27 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
28 褐色土	10YR3/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
29 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
30 にぶい・黄褐色土	10YR5/3	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層とし、黒腐土、黒色土の混合土層。
31 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
32 褐色土	10YR4/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。黒腐土を少量含む。
33 にぶい・黄褐色土	10YR5/3	硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、黒腐土、黒色土の混合土層。
34 黒腐土	10YR3/2	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土を主体とし、ローム土プロック、黒色土粒を少量含む。
35 黒腐土	10YR3/1	硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
36 黒腐土	10YR3/2	硬く締まる。粘性あり。黒腐土を主体とし、ローム土プロック、黒色土粒を少量含む。
37 にぶい・黄褐色土	10YR5/3	硬く締まる。粘性あり。ローム土主体層とし、黒腐土、黒色土を少量含む。
38 黒腐土	10YR2/2	しまり強い。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土粒少量含む。
39 黒腐土	10YR3/1	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
40 黒腐土	10YR2/2	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土粒少量含む。
41 黒腐土	10YR2/2	非常に硬く締まる。粘性あり。黒腐土主体層。ローム土プロックを少量含む。
42 黒腐土	10YR3/1	硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、ローム土、黒腐土、黒色土の混合土層。
43 黒腐土	10YR3/1	硬く締まる。粘性あり。黒腐土を主体とし、ローム土プロックを少量含む。
44 にぶい・黄褐色土	10YR4/3	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、黒色土プロック、黒腐土プロックを少量含む。
45 にぶい・黄褐色土	10YR4/3	非常に硬く締まる。粘性あり。ローム土を主体とし、黒色土プロック、黒腐土プロックを少量含む。

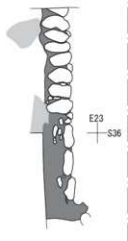
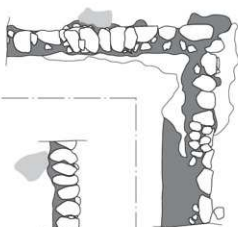
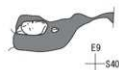
図面8 金堂地区 基壇外装



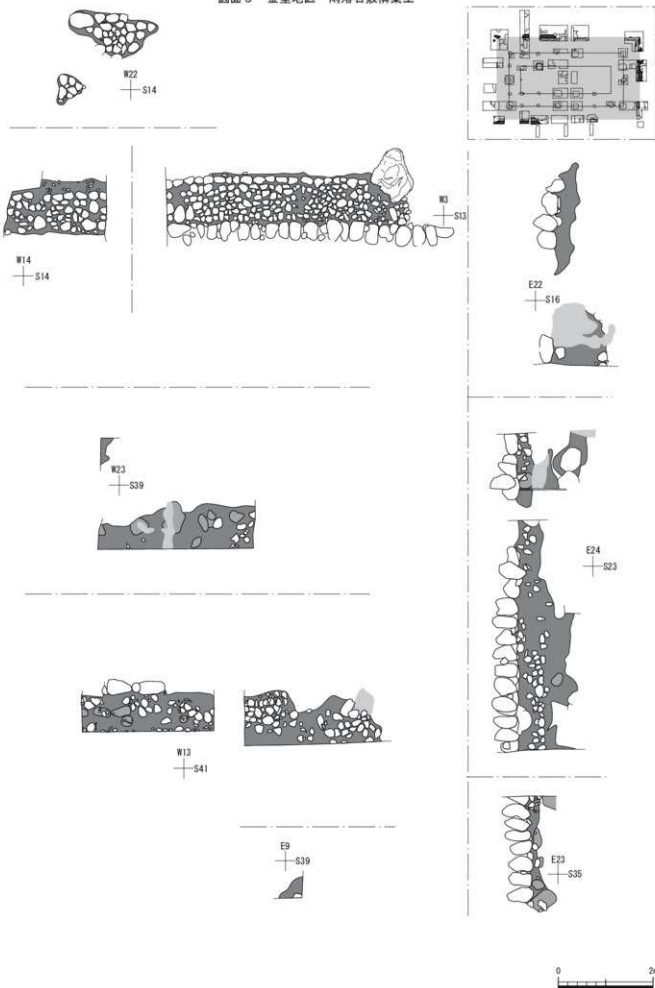
基壇外装積層土		
1 灰黄褐色土	10YR5/2	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、黒色土粒多量、白色粘土含む。
2 濃い黄褐色土	10YR5/4	硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量、ロームブロック多量、黒色土粒多量、白色粘土多量を含む。
3 灰黄褐色土	10YR5/2	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒多量、白色粘土を含む。



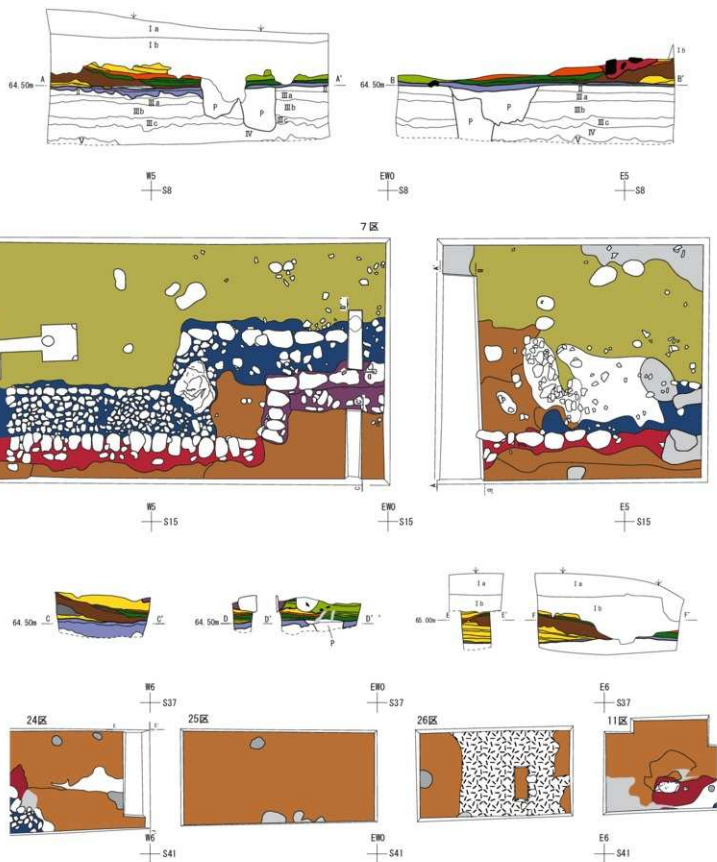
基壇外装積層土：1～3			石敷積層土：4		
1 灰黄褐色土	10YR4/2	しまり強。粘性あり。ローム土少量、黒色土粒少量、白色粘土粒含む。	4		
2 黒褐色土	10YR2/2	しまり強。粘性あり。黒色土主体層。白色粘土粒少量含む。			
3 灰黄褐色土	10YR4/2	硬くしまる。粘性あり。ローム粒微量、黒色粘土粒微量、白色粘土粒少量含む。			
4 黒褐色土	10YR2/2	硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。			



図面9 金堂地区 雨落石敷構築土



図面 10 金堂地区 北面階段・南面階段



【平面】

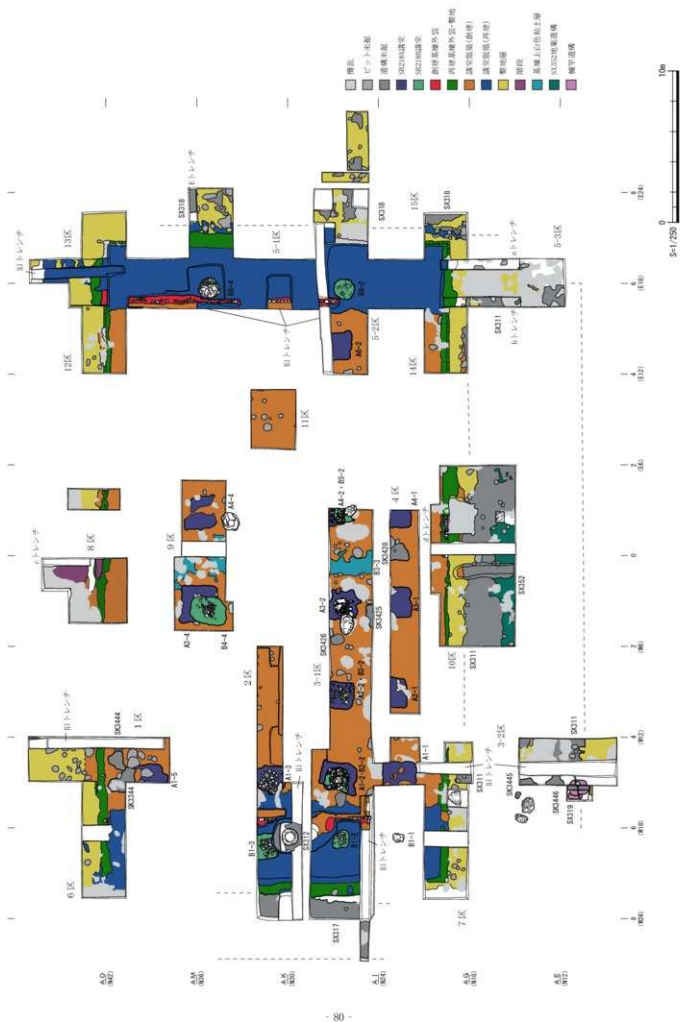
- 灰築土
- 基壇外装
- 階段構築土
- 雨落構築土
- 塋地層
- 後世の硬質層

【断面】

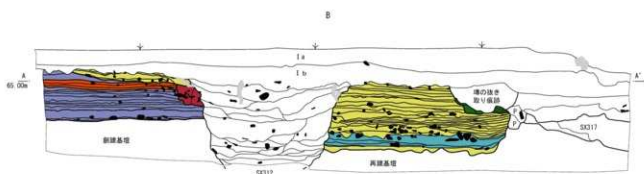
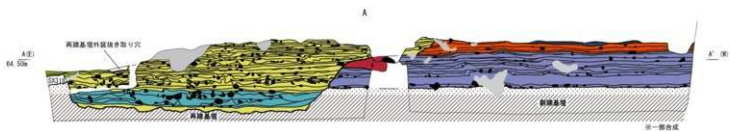
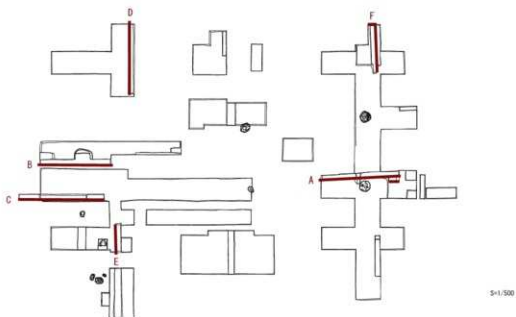
- ローム土主体層
- ローム土（混じりあり、粘性弱い）
- 白色粘土含む灰黄褐色土
- 白色粘土含む暗灰黄色土
- 黒色土
- 基壇外装
- 階段構築土
- 雨落構築土
- 塋地層（階段改作時）
- 塋地（創建）



図面 11 講堂地区 造構配置図



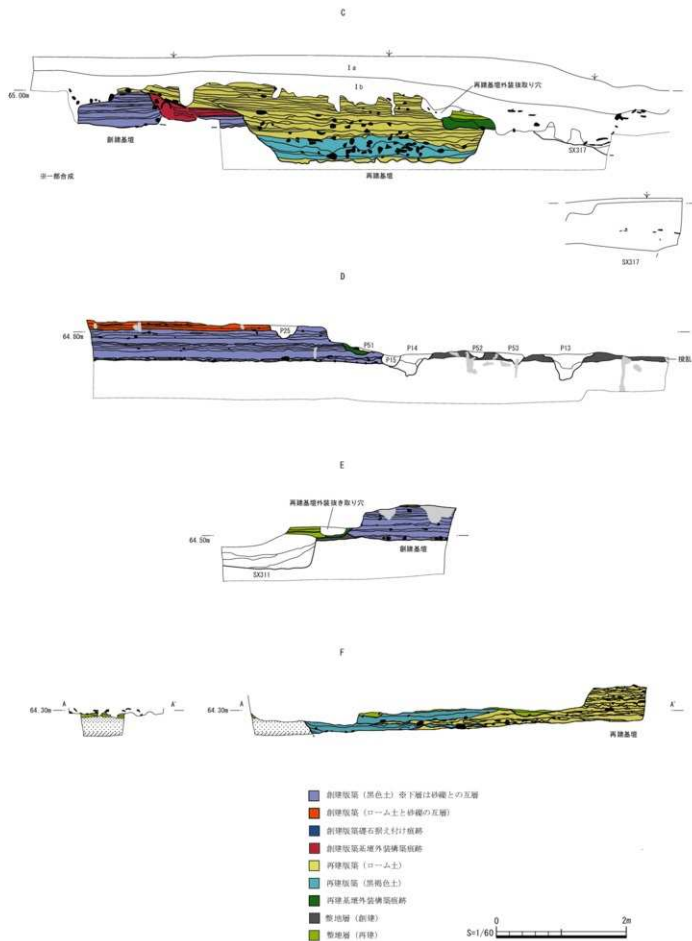
図面 12 講堂地区 旧トレンチ断面図 A・B



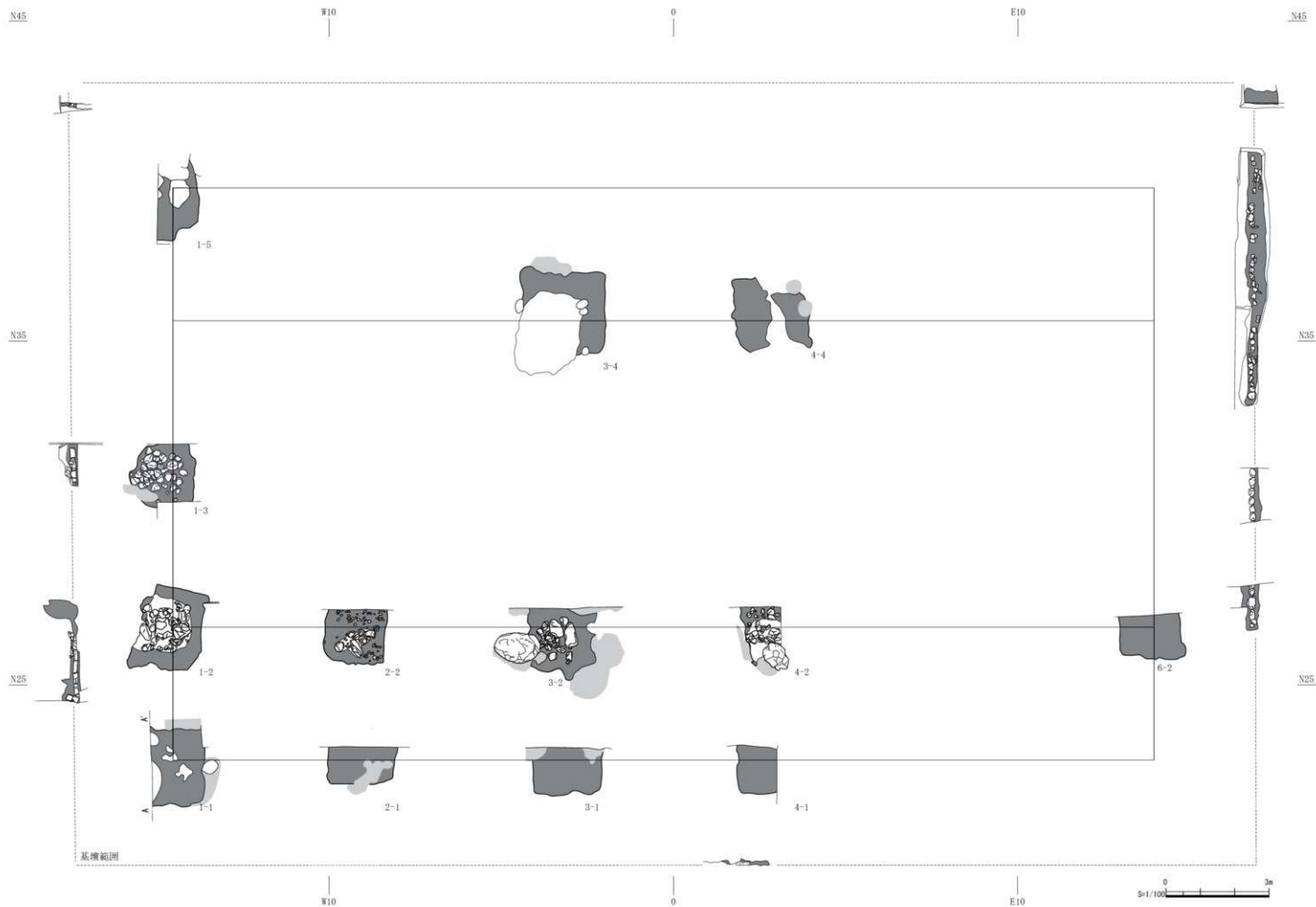
- 創設版築（黒色土）地下層は砂礫上の瓦層
- 創設版築（ローム土と砂礫の瓦層）
- 創設版築礎石跡之付け痕跡
- 創設版築基壇外装構築痕跡
- 再建版築（ローム土と砂礫の瓦層）
- 再建版築（黒褐色土）
- 再建基礎外装構築痕跡
- 敷地層（創設）
- 敷地層（再建）

0 2m
S=1/60

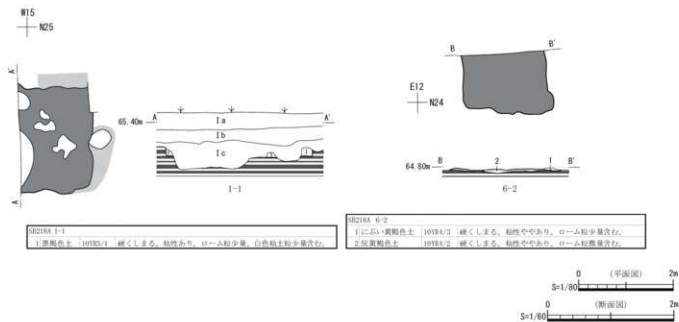
図面 13 講堂地区 旧トレンチ断面図 C・D・E



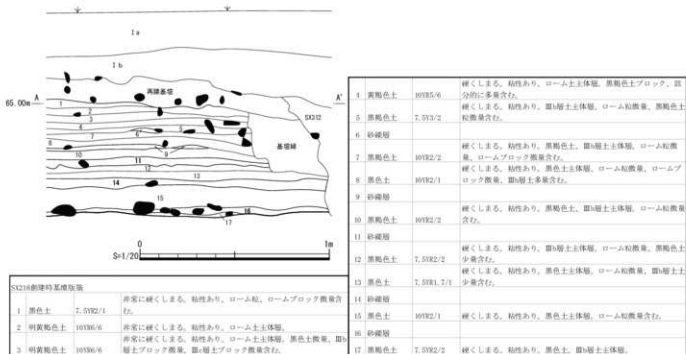
圖面 14 SB218 A講堂礎石建物 (創建期)



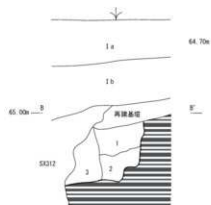
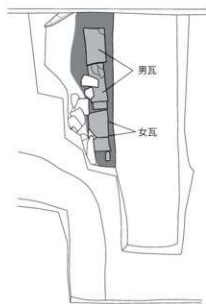
図面 15 講堂地区 礎石建物（創建期） 礎石据付痕跡



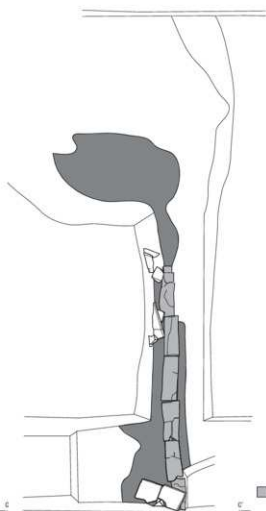
図面 16 講堂地区 創建期基壇・掘込地床版築土



図面 17 講堂地区 創建期基壇外装（西面） 1

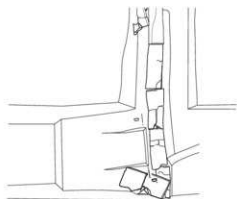
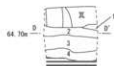


■ 外装(瓦)



■ 外装(瓦)

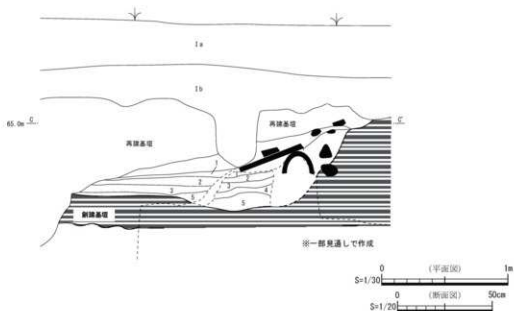
9-9' (1~2: 高さ約 3: 秋期掘削小)		
1	浅黄色土 2.017/3	硬くしまる。粘性強い。粘土主体層。ローム粒少量。黒色土粒少量。膠状粘土粒散見含む。
2	浅黄色土 2.017/3	硬くしまる。粘性強い。粘土主体層。ローム粒少量。黒色土粒少量含む。
3	灰黄褐色土 10194/2	しまり強い。粘性あり。ローム粒少量。黒色土粒少量。白色粘土多量。粘土粒輪散見含む。
9-9' (1~4: 構築土)		
1	黄褐色土 2.033/3	硬くしまる。ローム粒多量。黒色土粒散見。白色粘土粒多量含む。
2	黄褐色土 2.034/1	硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒多量。黒色粘土粒少量。白色粘土粒多量含む。
3	黒褐色土 2.032/2	やや硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒・ロームブロック多量。白色粘土粒。黒色土粒含む。
4	黒褐色土 2.032/1	やや硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒少量。黒色土粒多量含む。



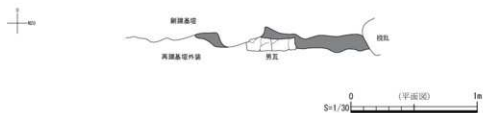
図面 18 講堂地区 創建期基壇外装（西面）2



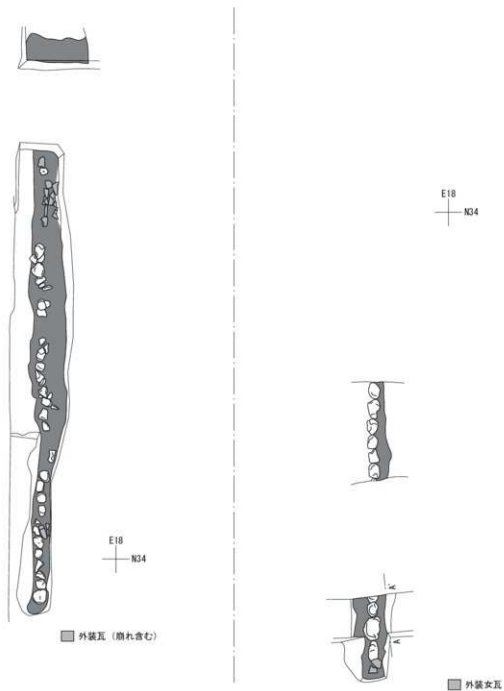
K-A (1~5: 焼土)			
1	浅黄褐色土	H1936/2	硬くしまる。粘性強い。白色粘土主体層。灰褐色粘性土を多量含む。
2	黒褐色土	H1932/1	硬くしまる。粘性強い。黒色土とB層土を主体とし、白色粘土を微量含む。
3	黒褐色土	H1932/2	硬くしまる。粘性強い。黒色土とB層土を主体とし、白色粘土を微量含む。上面に積み焼跡を確認した。
4	灰黄褐色土	H1931/2	硬くしまる。粘性ややあり。黒色土とB層土を主体とし、ローム土ブロック多量。白色粘土粒少量含む。上面に積み焼跡を確認した。
5	黒褐色土	H1931/1	しまりあり。粘性あり。白色粘土粒少量含む。
C-C (1~4: 焼土)			
1	オリーブ褐色土	2.531/2	やや硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒少量。黒色土粒微量。白色粘土粒少量含む。
2	黄褐色土	2.533/3	硬くしまる。ローム粒多量。黒色土粒微量。白色粘土粒多量含む。
3	黄褐色土	2.531/1	硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒多量。黒色土粒少量。白色粘土粒多量含む。
4	黒褐色土	2.533/2	やや硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒・ロームブロック多量。白色粘土粒。黒色土粒含む。
5	黒褐色土	2.533/1	やや硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒少量。黒色土粒多量含む。



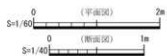
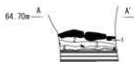
図面 19 講堂地区 創建期基壇外装（南面）



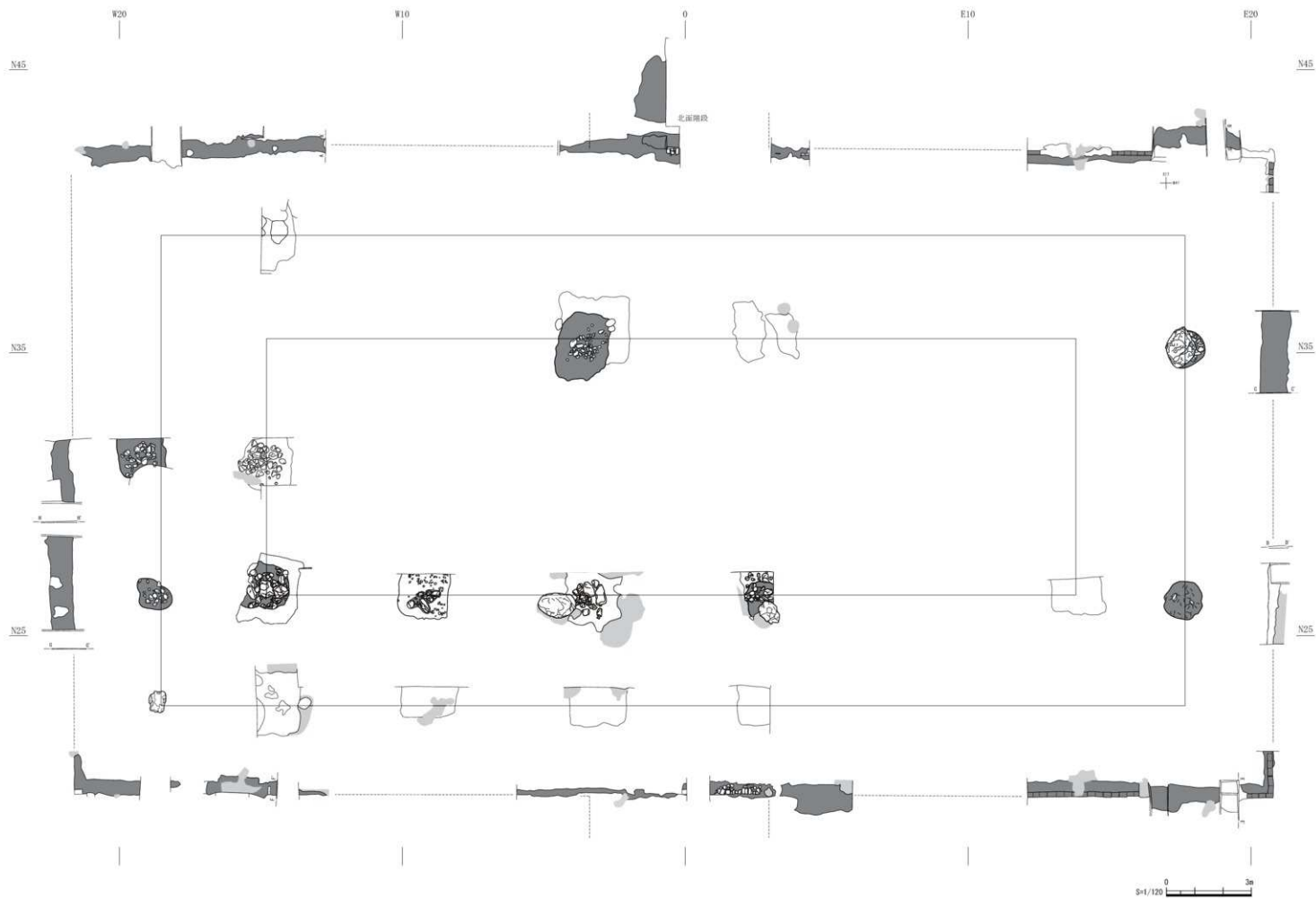
図面 20 講堂地区 創建期基壇外装構（東面）



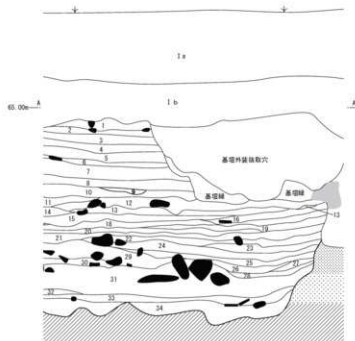
A-A'	
1	黒褐色土 2.513/2 しまりあり、粘性強い、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒ごく少量含む。
2	暗灰黄色土 2.514/2 しまりあり、粘性強い、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒多量含む。
3	黄褐色土 10195/4 しまり強い、粘性あり、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
4	黒褐色土 10193/1 しまり強い、粘性あり、黒色土土塊層、白色粘土粒少量含む。



圖面 21 SB218 B 講堂礎石建物 (再建期)



図面 22 講堂地区 再建期基壇・掘込地業板築土



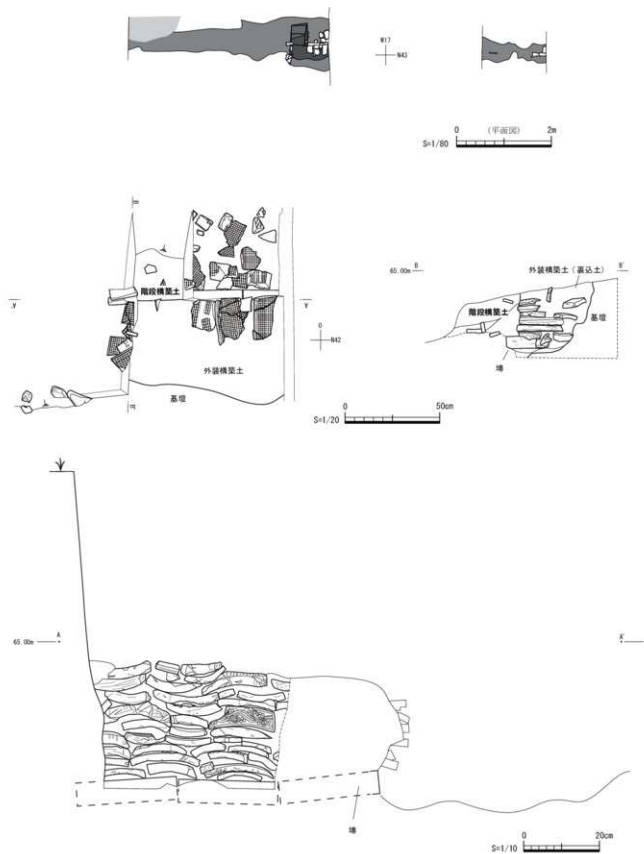
53219明堀基壇断面

1 黄褐色土	10195/4	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
2 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
3 明黄褐色土	10196/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
4 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
5 明黄褐色土	10196/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
6 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
7 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
8 黄褐色土	2.515/4	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒を微量含む。
9 砂礫層		

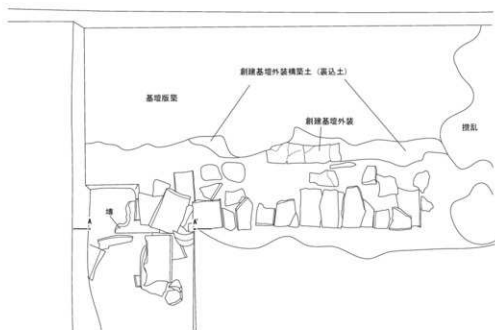
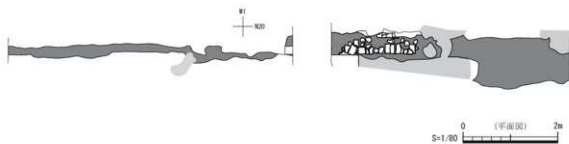
10 黄褐色土	2.515/4	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒を微量含む。
11 色土	10195/4	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。砂礫を少量含む。
12 黒褐色土	10192/2	非常に硬くしまる。粘性あり。黒色土主体層。ローム粒少量。ロームブロック少量。珪石層土微塵含む。
13 明黄褐色土	10196/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。白色粘土粒微塵。焼土粒微塵。炭化物粒微塵を含む。
14 砂礫層		
15 砂礫層		
16 黒褐色土	10192/2	非常に硬くしまる。粘性あり。黒色土主体層。ローム粒微量。珪石層土微量含む。
17 黒褐色土	10192/2	非常に硬くしまる。粘性あり。珪石層土主体層。ローム粒少量。黒色土粒少量。焼土粒微塵。炭化物粒微塵を含む。
18 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。
19 明黄褐色土	10196/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。白色粘土粒微塵。焼土粒微塵。炭化物粒微塵を含む。
20 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。焼土粒微塵。炭化物粒微塵を含む。
21 褐色土	10194/4	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒。珪石層土少量。焼土粒微塵。炭化物粒微塵を含む。
22 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒。珪石層土少量。焼土粒微塵。炭化物粒少量を含む。
23 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒。珪石層土少量を含む。
24 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒少量を含む。
25 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒。黒色土粒。珪石層土少量を含む。
26 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒。黒色土粒。珪石層土少量を含む。
27 黒色土	10192/1	非常に硬くしまる。粘性あり。黒色土主体層。ローム粒少量。ロームブロック少量を含む。
28 砂礫層		
29 砂礫層		
30 黄褐色土	10195/6	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒少量。白色粘土粒少量。砂礫を含む。
31 黄褐色土	10193/1	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒少量。白色粘土粒微塵。焼土粒微塵。炭化物粒微塵を含む。
32 黒褐色土	10193/2	非常に硬くしまる。粘性あり。珪石層土。珪石層土主体層。ローム粒少量。黒色土粒少量。焼土粒微塵。炭化物粒微塵を含む。
33 黒褐色土	10192/2	非常に硬くしまる。粘性あり。珪石層土主体層。ローム粒少量。黒色土粒少量。白色粘土粒微塵を含む。
34 黒褐色土	10192/1	非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土と珪石層土。珪石層土との層合土。



図面 23 講堂地区 再建期基壇外装（北面）



图面 24 讲堂地区 再建期基壇外装 (南面)



64.90m — A —



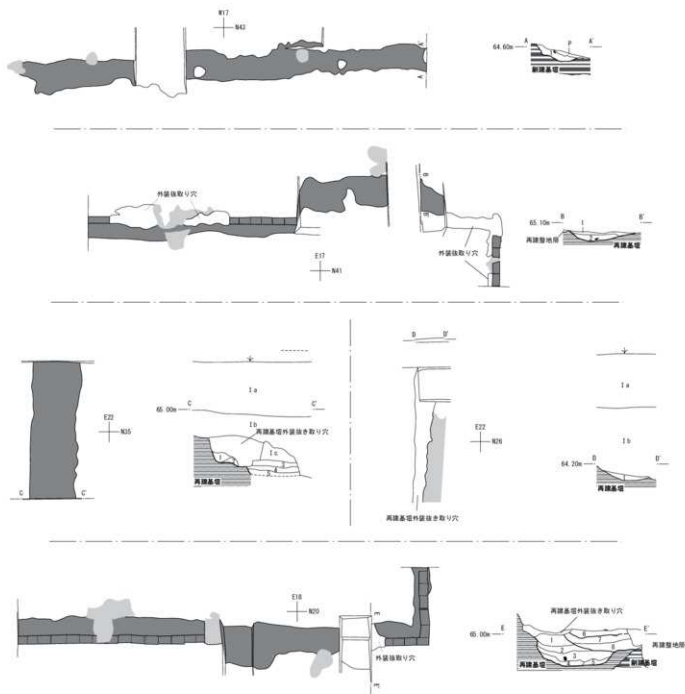
0 (平面图) 50cm

S=1/20

0 (断面图) 50cm

S=1/20

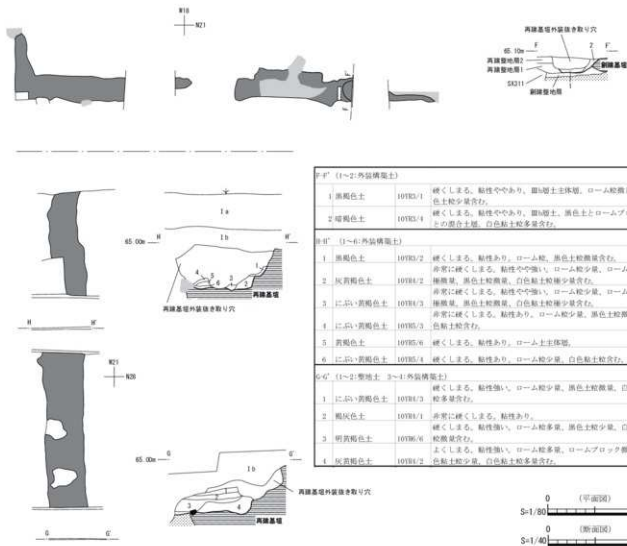
図面 25 講堂地区 再建期基壇外縁構築土 1



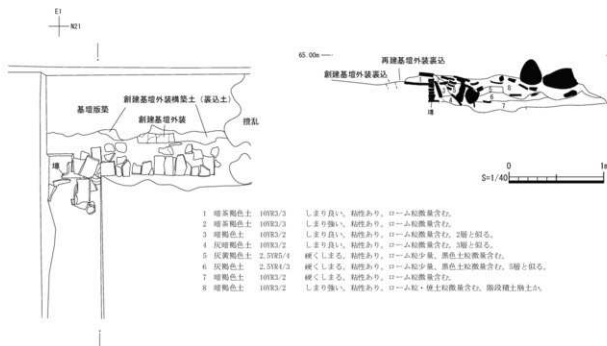
A' A' (1) 外築構築土		B' B' (1) 外築構築土	
1 灰黄褐色土	H094/2	1 濃い黄褐色土	H094/3
しまりあり、粘性強い、ローム土主体層、黒色土粒少量、白色粘土粒少量含む。		しまりやや強い、粘性あり、ローム粒少量、黒色土粒少量含む。	
B' B' (1~2) 整地土		B' B' (1~5) 外築構築土 6~8(整地層)	
1 灰黄褐色土	H094/2	1 黒褐色土	H093/1
しまり強い、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒少量含む。		非常に硬くしまる、粘性あり、ローム土多量、黒色土多量、白色粘土粒少量含む。	
2 暗褐色土	H092/4	2 黄褐色土	2.094/2
硬くしまる、粘性ややあり、礫h層土、黒色土とロームブロックとの混合土層、白色粘土粒少量含む。		硬くしまる、粘性あり、白色粘土主体層、ローム粒少量、黒色粘土粒少量含む。	
C' C' (1~2) 外築構築土 3~5(整地土)		3 黒褐色土	H093/1
1 暗褐色土	H092/4	硬くしまる、粘性あり、黒色土粒少量、白色粘土粒少量含む。	
しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒少量、粘粒少量含む。		4 黒色土	H092/1
2 灰黄褐色土	H094/2	硬くしまる、粘性あり、礫h層土主体層、ローム粒少量含む。	
しまり強い、粘性ややあり、ローム粒少量、埴土粒少量含む。		5 暗灰黄色土	2.094/2
3 黒褐色土	H093/1	硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量含む。	
しまり強い、粘性あり、ローム粒少量、埴土粒少量含む。		6 黒褐色土	H093/1
4 黒褐色土	H093/2	硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土を含む粘性土。	
しまり強い、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒少量含む。		7 灰黄色土	2.093/2
5 灰黄褐色土	H094/2	硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土を含む粘性土。	
しまり強い、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒少量含む。		8 暗灰黄色土	2.094/2
		硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土を含む粘性土。	



図面 26 講堂地区 再建期基壇外縁構築土 2



図面 27 講堂地区 再建期南面階段



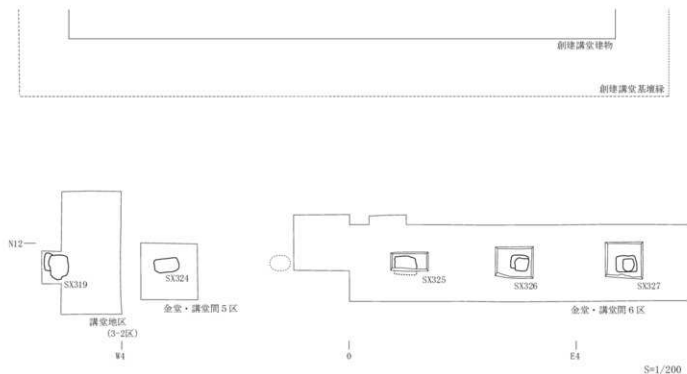
図面 28 講堂地区 再建期北面階段



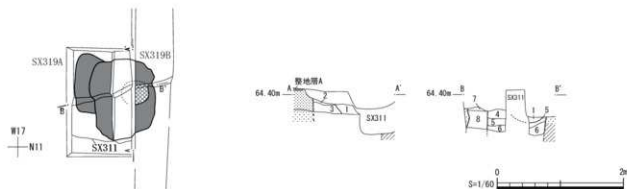
- 再建基壇外装構築土
- 創建講堂敷築
- 階段構築土

1 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
2 黄褐色粘り土	2. 05.4	土質より硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
3 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
4 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
5 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
6 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
7 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
8 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
9 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
10 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
11 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。
12 黄褐色粘り土	2. 05.4	硬くしまる。粘性あり。ローム土少量。白色粘土粒散見あり。階段構築土。

図面 29 幡竿遺構模式図



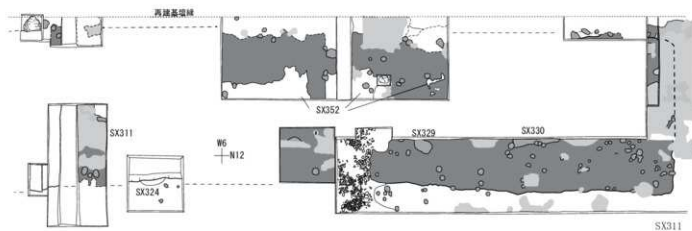
図面 30 SX319 幡竿遺構



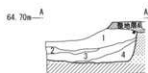
SX319柱穴 (SX319A→SX319B) 1: SX319礎取穴 2~6: SX319版方埋土 7~8: SX319版方埋土

1	黒褐色土	HVK3/2	しまりあり、粘性あり、ロームブロック多量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量、焼土粒ごく少量含む。
2	黒褐色土	HVK3/1	硬くしまる、粘性あり、ローム粒多量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
3	黒褐色土	HVK2/1	しまり強い、粘性あり、礫・層土主体層、ローム粒微量、白色粘土粒少量含む、層上面に焼き灰跡あり。
4	黒褐色土	HVK3/2	硬くしまる、粘性あり、ロームブロック多量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量、焼土粒ごく少量含む。
5	黄褐色土	HVK5/6	しまりあり、粘性あり、ローム土主体、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
6	黒褐色土	HVK2/2	しまりあり、粘性あり、ロームブロック少量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量、焼土粒微量含む。
7	黒褐色土	HVK3/2	硬くしまる、粘性あり、ロームブロック多量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量、焼土粒ごく少量含む。
8	黒褐色土	HVK3/1	硬くしまる、粘性あり、ローム粒多量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。

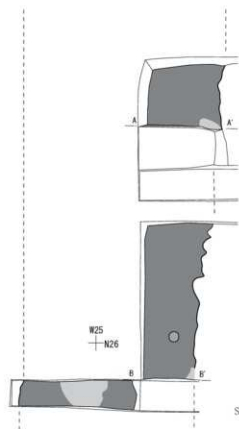
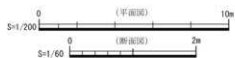
図面 31 SK311・317 土取り遺構



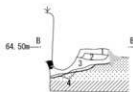
SK311



SK311土取穴		
1 黒褐色土	10193/1	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒少量、ロームブロック少量、埋層土ブロック多量含む、黒色土多量含む、人為的埋土。硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、埋層土多量、白色粘土粒多量含む、人為的埋土。
2 黒色土	10192/1	硬くしまる、粘性強い、ローム粒少量、埋層土多量、白色粘土
3 埋褐色土	10193/2	粒多量含む、人為的埋土。
4 にごい・黄褐色土	10196/2	しまり強い、粘性強い、白色粘土主体層、ローム粒少量、埋層土少量、黒色土粒少量含む、人為的埋土。
5 黒褐色土	10193/1	しまり強い、粘性ややあり、ローム粒少量、ロームブロック少量、埋層土多量、白色粘土粒多量含む、人為的埋土。



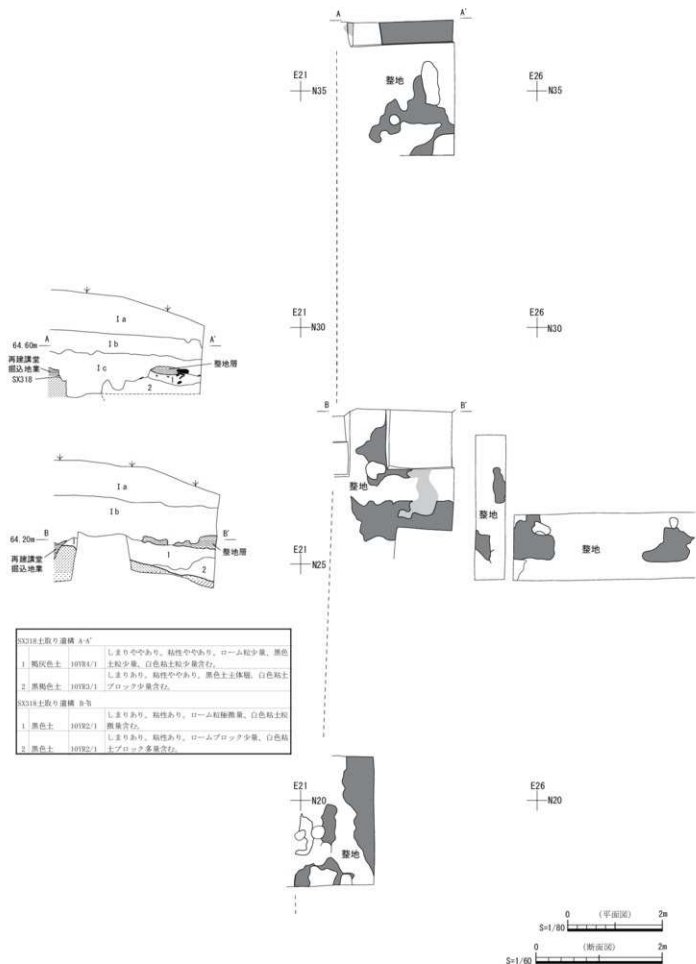
SK317

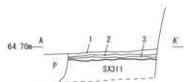
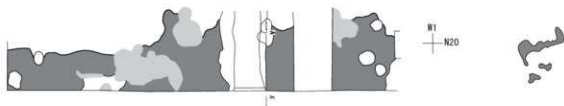


SK317土取穴		
1 黒色土	10192/1	しまりあり、粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量含む。
2 黒褐色土	10193/1	しまりあり、粘性あり、黒色土主体層、白色粘土ブロック多量含む。
3 黒色土	10192/1	しまりあり、粘性あり、黒色土主体層。
4 黒色土	10192/1	しまりあり、粘性あり、埋層土主体層、ローム粒多量含む。



図面 32 SX318 土取り遺構

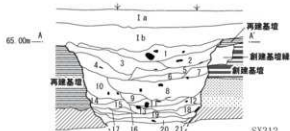
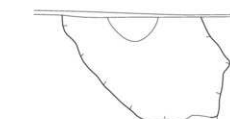
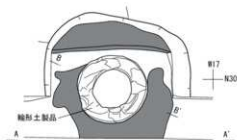




1. 黄褐色土	2. 黄土	3. 黄褐色土
1. 10YR6/6 非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。	2. 2.5YR5/4 非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。	3. 2.5YR5/6 硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。



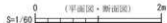
SX352地業遺構



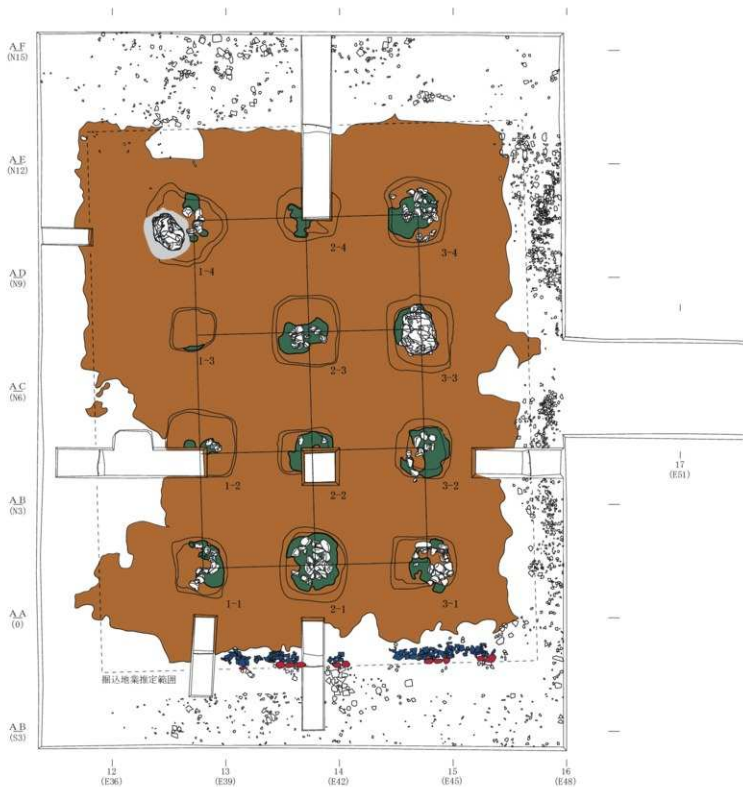
SX312



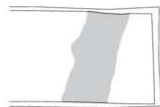
SX312不明遺構		
1	灰褐色土	10YR4/2
2	黄褐色土	10YR3/2
3	黄土	10YR4/4
4	灰褐色土	10YR4/2
5	灰黄褐色土	10YR6/2
6	黄褐色土	10YR3/2
7	灰黄褐色土	10YR4/2
8	黄褐色土	10YR3/2
9	灰黄褐色土	10YR4/2
10	黄褐色土	10YR3/2
11	濃い黄褐色土	10YR7/2
12	黄褐色土	2.5Y/2
13	黄褐色土	10YR3/2
14	暗オリーブ褐色	
15	黄褐色土	10YR3/3
16	黄褐色土	10YR3/6
17	黄褐色土	10YR3/2
18	黄褐色土	10YR3/3
19	黄褐色土	10YR3/2
20	黄褐色土	10YR3/6
21	黄褐色土	10YR5/6



図面 34 鐘樓地区 全体図

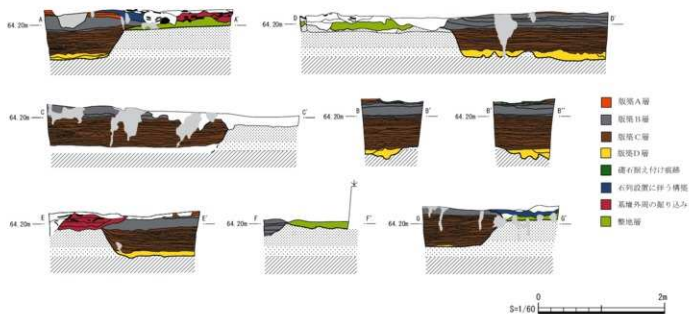
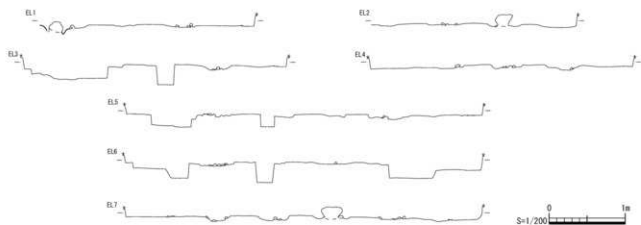
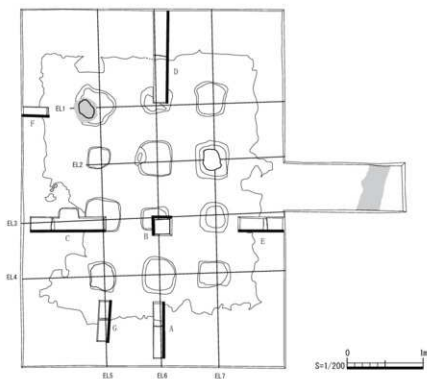


- 攪乱
- 鐘樓版築土
- 石列
- 礎石据付柱礎方
- 瓦列

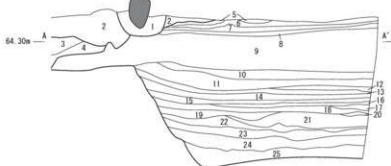
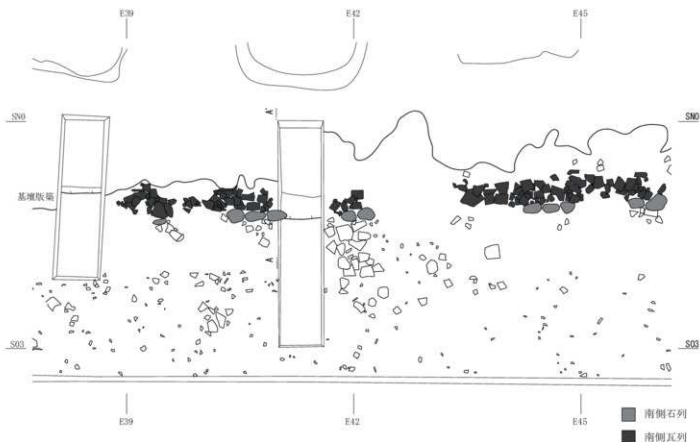


17
(E51)

図面 35 鐘樓地区 断面図



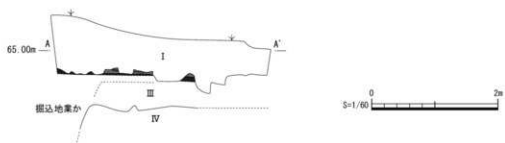
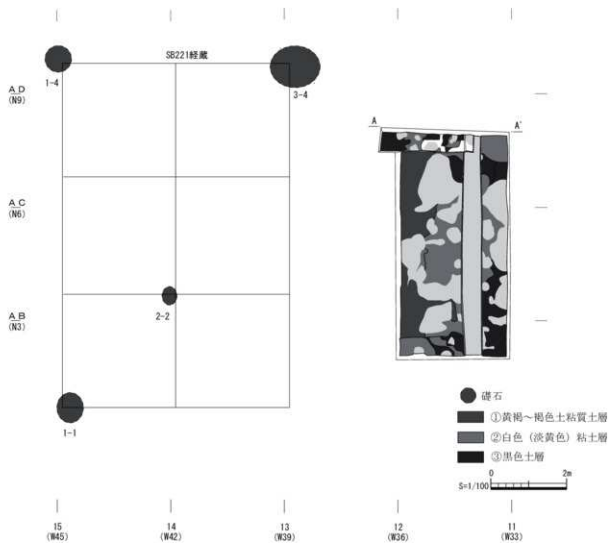
図面 36 鐘楼地区 南側石列・基壇・掘込地案



1:石列付穴 2~4:基壇周辺構築土 5~25:基壇・掘込地案取壊 33~6:A層 9:9層 10~21:C層 25:D層

1 黒褐色土	10YR2/3	しまりあり、粘性強い、石の附付穴。
2 黒褐色土	10YR2/3	しまり強い、粘性強い、焼土多量、炭化物少量含む。
3 褐色土	10YR3/3	しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土ブロック多量、焼土粒少量、炭化物少量含む、瓦片が多量混入する。
4 褐色土	10YR3/3	しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土ブロック少量、焼土粒少量、炭化物少量含む。
5 褐色土	10YR3/1	硬くしまる、ローム土主体層、赤色スコリア少量含む、基壇上面土。
6 黒褐色土	10YR2/2	硬くしまる、ローム粒少量、赤色スコリア少量含む、基壇上面土。
7 褐色土	10YR3/4	硬くしまる、ローム土主体層、赤色スコリア少量含む、基壇上面土。
8 黒褐色土	10YR2/2	硬くしまる、ローム粒少量、赤色スコリア少量含む、基壇上面土。
9 黒色土	10YR2/1	硬くしまる、ローム粒多量、赤色スコリア少量、白色粘土粒ごく少量含む、基壇礎土。
10 黒褐色土	10YR2/2	しまりやや強い、ローム粒多量、焼土粒多量白色粘土粒ごく少量含む、基壇礎土。
11 褐色土	10YR3/3	赤家に硬くしまる、ローム粒多量、焼土粒多量含む。
12 黒褐色土	10YR2/2	赤家に硬くしまる、ローム粒多量、焼土粒多量含む。
13 黒褐色土	10YR2/2	赤家に硬くしまる、ローム粒粒少量、焼土粒少量含む。
14 黒褐色土	10YR2/3	赤家に硬くしまる、ローム粒多量、焼土粒少量含む。
15 黒褐色土	10YR2/2	赤家に硬くしまる、ローム粒少量、焼土粒少量含む。
16 黒褐色土	10YR2/3	赤家に硬くしまる、ローム粒多量、焼土粒少量含む。
17 黒褐色土	10YR2/2	赤家に硬くしまる、ローム粒多量、焼土粒少量含む。
18 黒褐色土	10YR2/3	赤家に硬くしまる、ローム粒多量含む。
19 黒色土	10YR2/1	赤家に硬くしまる、ローム粒少量含む。
20 黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、ローム粒少量、ロームブロックごく少量含む。
21 褐色土	10YR3/3	赤家に硬くしまる、ロームブロック多量、焼土粒少量含む。
22 黒褐色土	10YR2/2	赤家に硬くしまる、ローム粒多量、焼土粒少量含む。
23 黒褐色土	10YR2/2	硬くしまる、ローム粒少量、焼土粒少量含む。
24 黒褐色土	10YR2/3	硬くしまる、ローム粒少量、赤色土粒少量含む。
25 黒褐色土	10YR3/6	ローム土主体層、黒色土粒ごく少量含む。

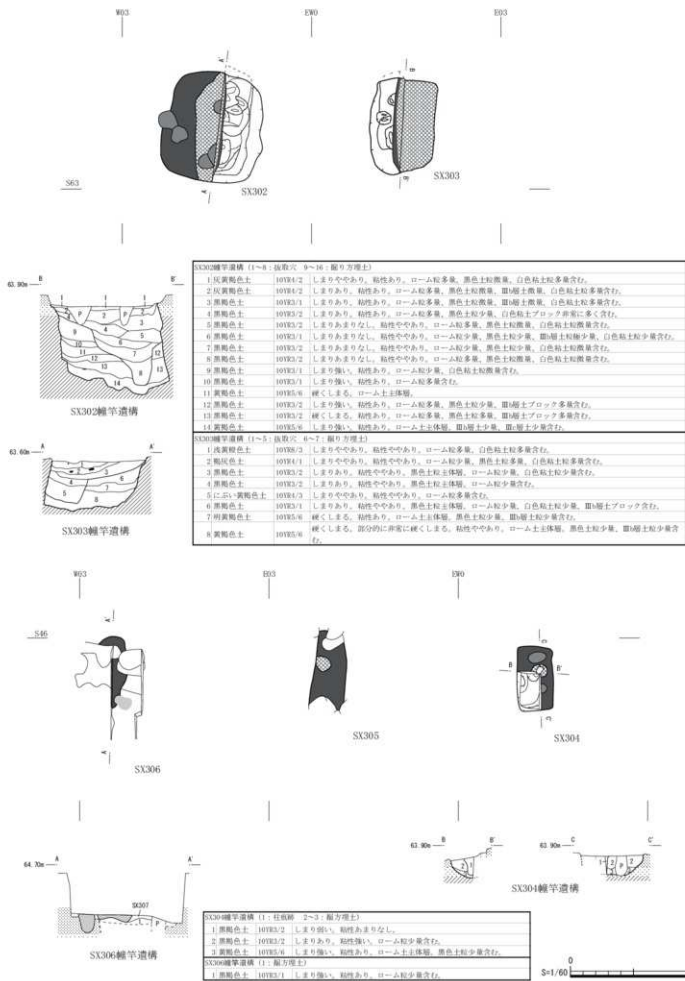
図面 37 経蔵地区 全体図



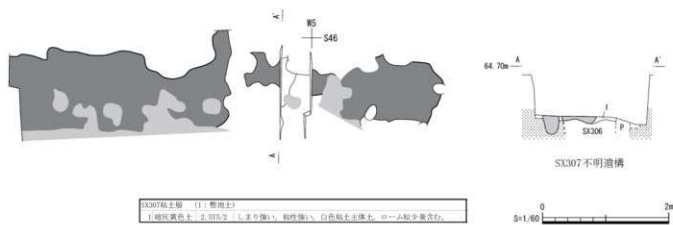
図面 38 堂間地区 中門・金堂間 遺構配置図



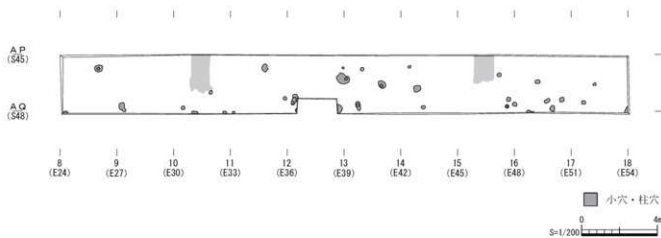
図面 39 SX302・303・304・305・306 輪竿遺構



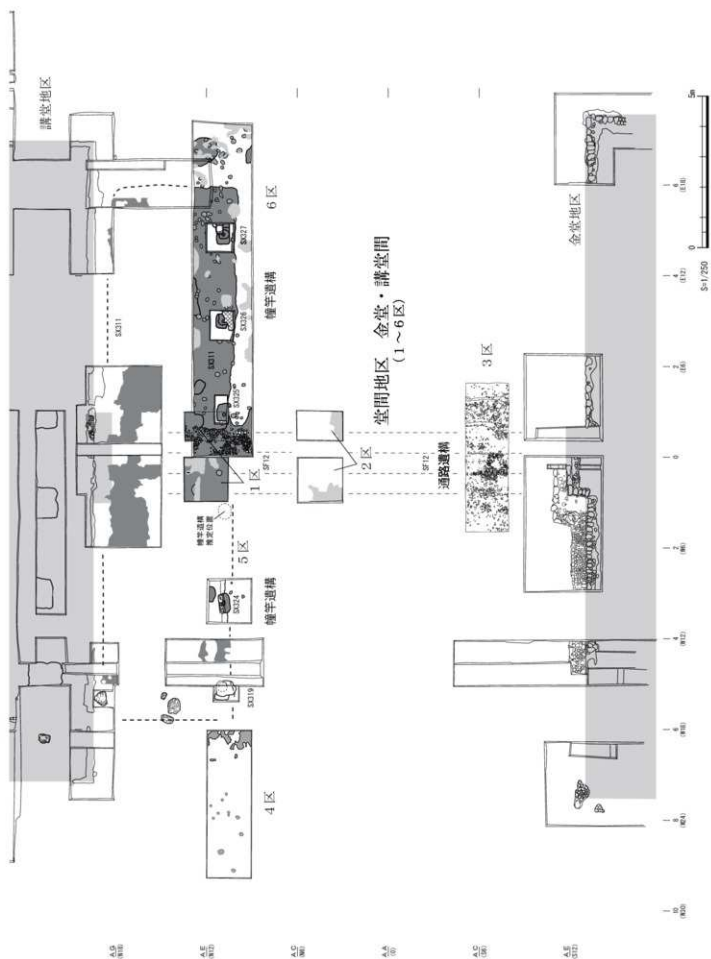
図面 40 SX307 粘土層



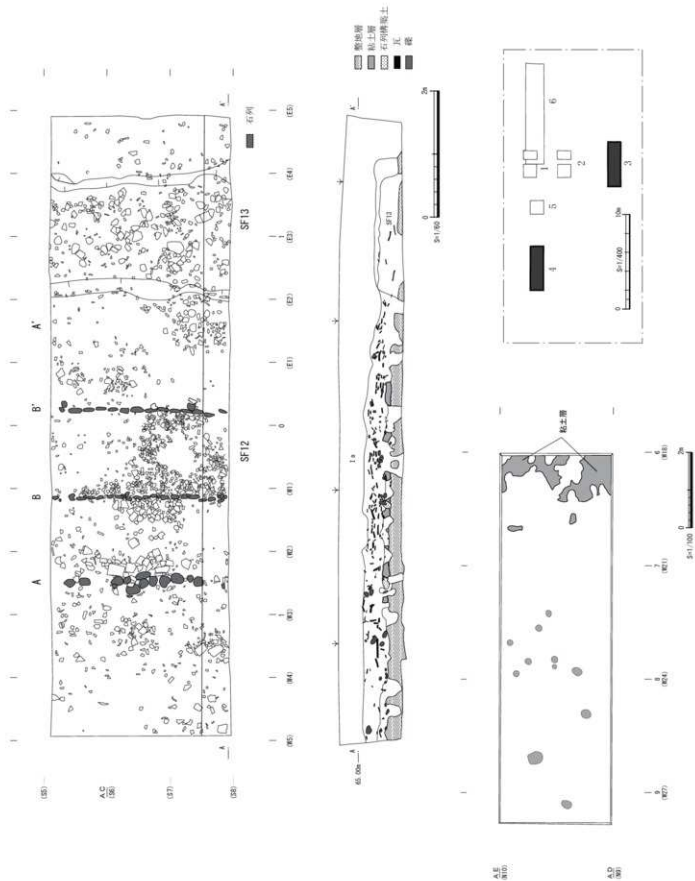
図面 41 中門・金堂間東 遺構配置図



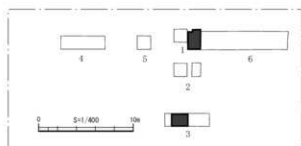
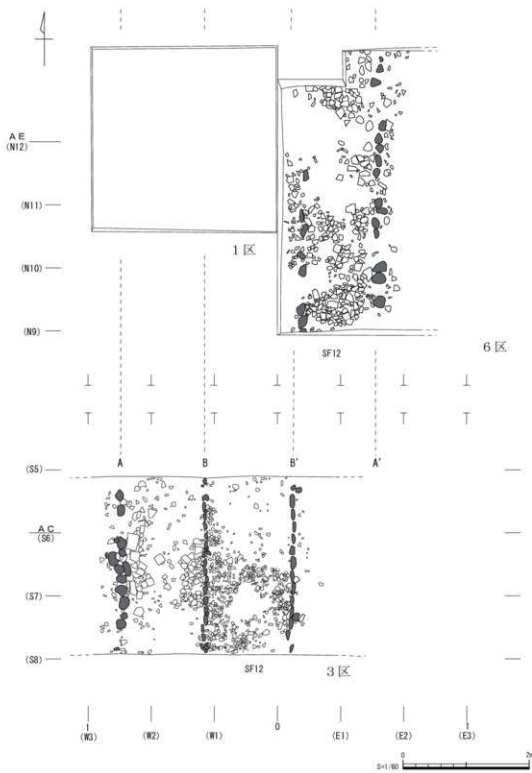
図面 42 金堂地区 金堂・講堂間 金堂図



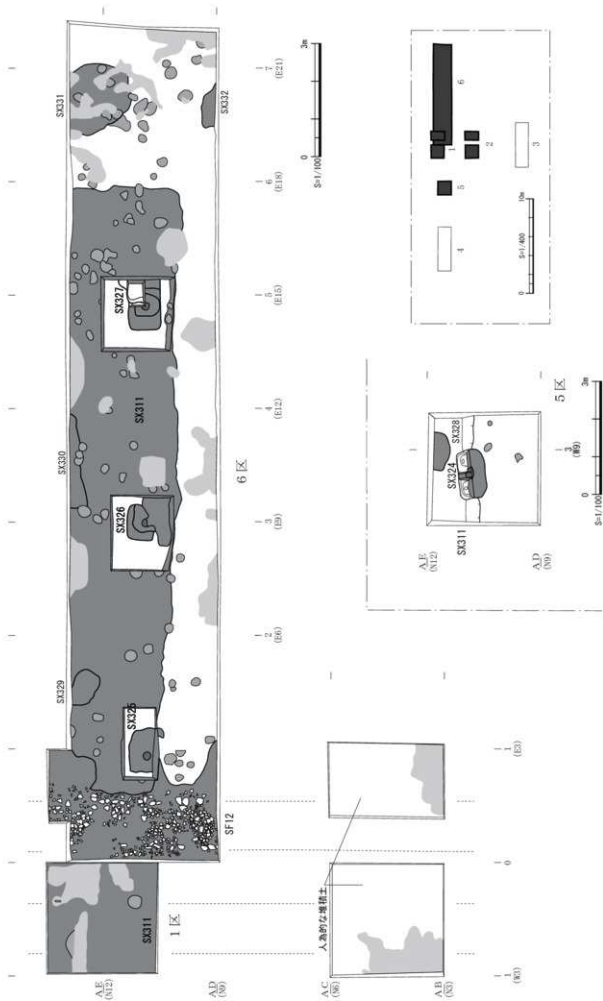
図面 43 金堂・講堂間 3・4区 遺構配置図



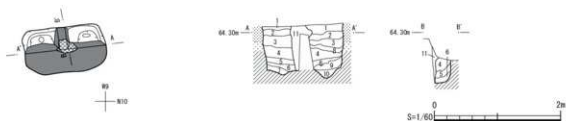
図面 44 金堂・金堂間 1・3区 SF12 通路遺構 (石列検出状況)



圖面 45 餘隆・講堂區 1・2・5・6 區 遺構配置圖



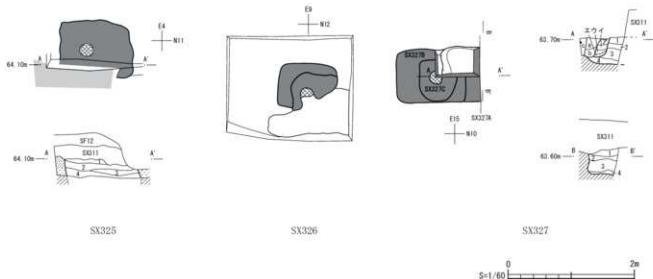
図面 46 SX324 韓竿遺構



SX324韓竿遺構

- | | | | |
|----|------|---------------------------------|---|
| 1 | 黒褐色土 | 101R2/1 | しまり強い、粘性あり。黒色土とⅡb層主体土。ローム粒少量、ロームブロック少量含む。 |
| 2 | 黒褐色土 | 101R2/2 | Ⅱb・c層ローム黒色土の混合(Ⅱb・Ⅳ層主体)的黒色土多い。ローム粒少量、ロームブロック少量含む。 |
| 3 | 混合土 | 101R3/2、3/5、4/3、2/2、2/1、101R6/6 | しまり強い、粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック多量、Ⅱb層土多量、黒色土少量含む。 |
| 4 | 混合土 | 3層と似る。 | しまり強い、粘性あり。ローム粒やや多量、ロームブロック、Ⅱc層土ブロック、黒色土極少量含む。 |
| 5 | 混合土 | 4層と似る。 | しまり強い、粘性あり。ローム粒、ロームブロック多量、Ⅱc層土ブロック少量、黒色土粒少量含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | 101R6/6 | しまり強い、粘性あり。ロームブロック主体土。黒褐色Ⅱb・c層土少量含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | 101R2/1 | 3層と似る。しまり強い、粘性あり。黒色土、ローム粒、ロームブロック少量含む。 |
| 8 | 黒褐色土 | 101R3/2 | しまり強い、粘性あり。Ⅱb層主体土。ロームブロック少量含む。 |
| 9 | 黄褐色土 | 101R6/6 | しまり強い、粘性あり。ローム粒・ロームブロック多量、黒色土少量含む。 |
| 10 | 黄褐色土 | 101R6/6 | しまり強い、粘性あり。ローム主体土。黒褐色土少量含む。 |
| 11 | 黒褐色土 | 101R2/1 | しまりあり、粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量含む。 |

図面 47 SX325・326・327 韓竿遺構



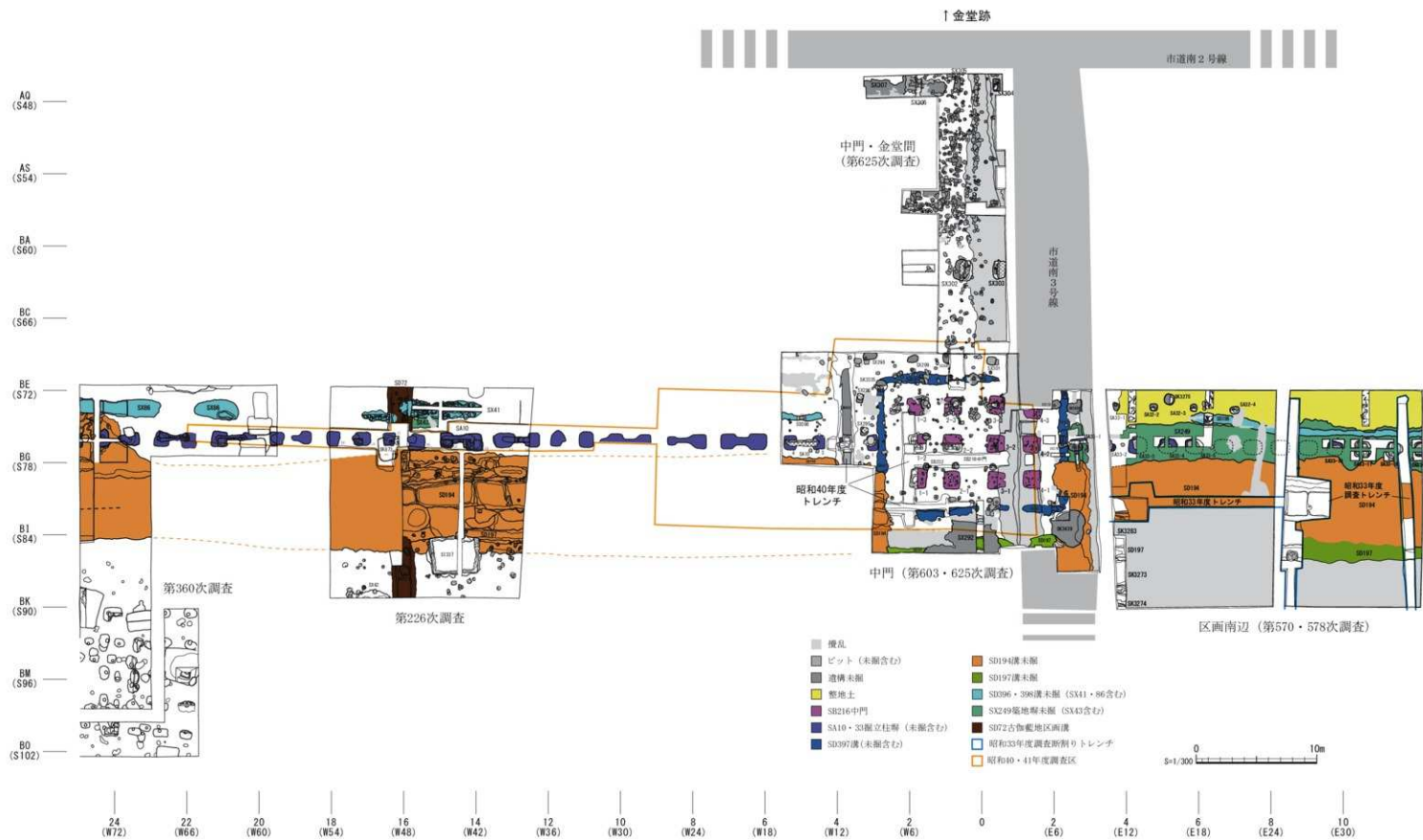
SX325韓竿遺構 1~4:埋土

- | | | | |
|---|------|---------|---|
| 1 | 黒色土 | 101R2/1 | しまり強い、粘性あり。黒色土主体、Ⅱb層土、ローム粒、ロームブロック少量含む。 |
| 2 | 黒色土 | 101R2/1 | しまり強い、粘性あり。黒色土主体、ローム粒、ロームブロック少量、Ⅱb層土含む。 |
| 3 | 黄褐色土 | 101R6/6 | しまり強い、粘性あり。ローム粒とロームブロック主体土。 |
| 4 | 黄褐色土 | 101R6/6 | しまり強い、粘性あり。ローム主体土、Ⅱb層土少量含む。 |

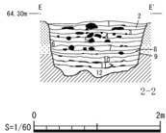
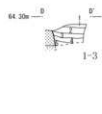
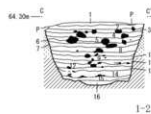
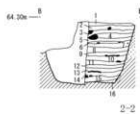
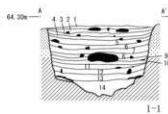
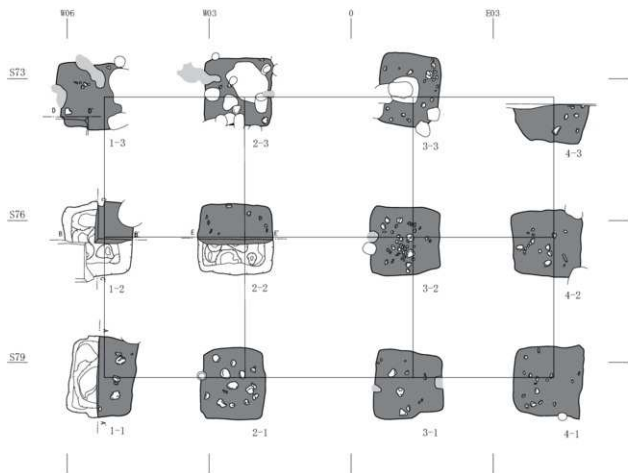
SX327韓竿遺構 1~4:A埋理土 T~S:B埋理土 a~b:C埋理土 c:C期粒取り

- | | | | |
|---|---------|---------|--|
| 1 | 黄褐色土 | 101R6/6 | しまりあり、粘性あり。ローム土主体、Ⅱb・cブロック少量、黒色土粒微量。 |
| 2 | にじい黄褐色土 | 101R4/3 | しまりあり、粘性あり。Ⅱc層土主体、ローム粒、ロームブロックやや多く含む。 |
| 3 | 混合土 | | しまり強い、粘性あり。黒褐色土、黄色土、Ⅱbブロックの混合。 |
| 4 | 黒色土 | 101R2/1 | しまり強い、粘性あり。黒色土主体、ローム粒、ロームブロック、Ⅱb層土微量含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | 101R3/1 | しまり強い、粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、Ⅱb・c層土ブロック少量含む。 |
| 6 | 混合土 | | しまり強い、粘性あり。ローム粒、ロームブロック、Ⅱb・cブロック主体。 |
| 7 | 黒褐色土 | 101R2/1 | しまり強い、粘性あり。黒色土主体、ローム粒、ロームブロック少量、Ⅱb層ブロック少量含む。 |
| 8 | 黄褐色土 | 101R6/6 | しまり強い、粘性あり。ローム粒、ロームブロック主体土。黒色土、Ⅱb層土粒微量含む。 |
| a | 黒褐色土 | 101R3/1 | しまり強い、粘性あり。ローム粒多く含む。ロームブロック少量、Ⅱb層ブロック少量含む。 |
| b | 黒褐色土 | 101R3/1 | しまり強い、粘性あり。ローム粒、ロームブロック多く含む。Ⅱb層ブロック、黒色土微量含む。 |
| c | 混合土 | | しまり強い、粘性あり。白色粘土、Ⅱb層、黒色土の混合。 |

図面 48 中門および区画南辺 全体図

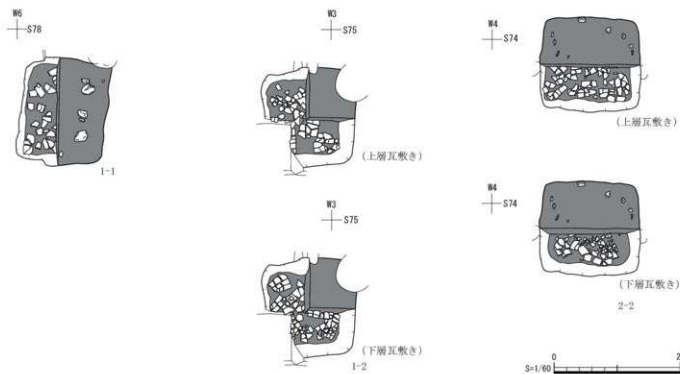


図面 50 SB216 中門礎石建物



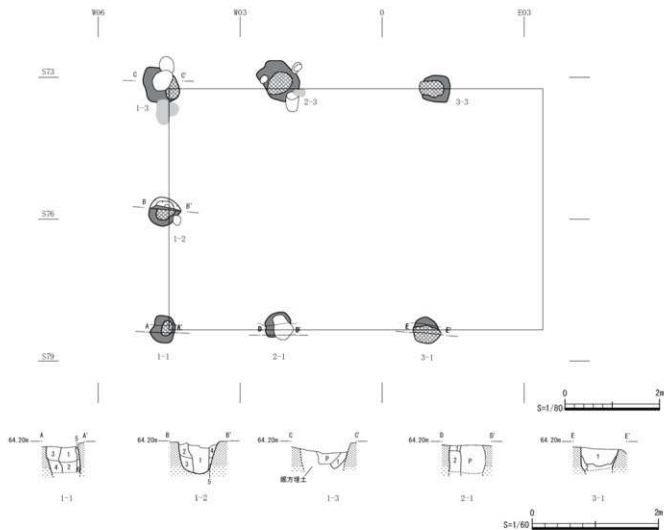
1-1 1~14: 基礎層	
1 1:50~黄褐色土	10YR4/3 硬くしまる。粘性あり。Ⅱa層土主体層。ローム粒少量、ロームブロック多量、Ⅱc層土ブロック微量含む。
2 1:50~黄褐色土	10YR4/3 硬くしまる。粘性あり。Ⅱb層土主体層。ローム粒少量、ロームブロック少量、Ⅱc層土ブロック微量含む。
3 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる。粘性あり。Ⅱb層土主体層。ローム粒微量、Ⅱc層土ブロック微量含む。
4 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる。粘性あり。Ⅱb層土主体層。ローム粒少量、ロームブロック少量、Ⅱc層土ブロック微量含む。
5 1:50~黄褐色土	10YR4/3 硬くしまる。粘性あり。ロームブロックと黒色土との混合土。
6 1:50~黄褐色土	10YR4/3 非常に硬くしまる。粘性あり。ロームブロックと黒色土との混合土。
7 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる。粘性あり。Ⅱb層土主体層。ローム粒少量、ロームブロック少量、Ⅱc層ブロック微量。
8 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量、ロームブロック微量、Ⅱc層ブロック少量、黒色土含む。
9 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる。粘性あり。黒褐色土とⅡb層土との主体層。ローム粒少量含む。
10 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる。粘性あり。Ⅱb層土主体層。ロームブロック微量、黒色土粒少量含む。
11 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる。粘性あり。Ⅱb層土主体層。ロームブロック多量、黒色土多量含む。
12 黒褐色土	10YR3/2 硬くしまる。粘性あり。ローム土とⅡb層土との混合土。
13 黒褐色土	10YR2/1 硬くしまる。粘性あり。Ⅱb層土主体層。ローム粒少量、ロームブロック少量、Ⅱc層土粒多量含む。
14 黄褐色土	10YR5/6 しまり強い。粘性あり。ローム土主体層。Ⅱb層土少量、Ⅱc層土粒微量含む。層土上に瓦を敷き詰める。

図面 51 SB216 中門礎石建物（礎石据え方互敷き状況）



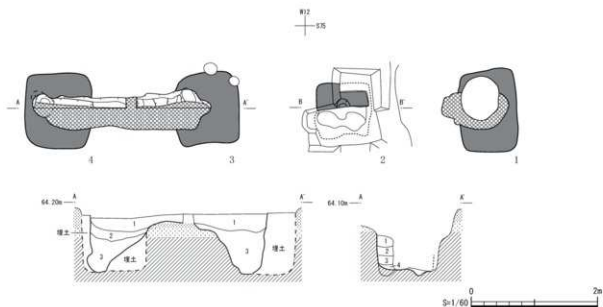
1-2 1~16 : 遺地層		
1	黒褐色土 10YR3/4	硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、珪砂層土少量、珪砂層土少量含む。
2	黒褐色土 10YR3/4	硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土少量、珪砂層土少量含む。
3	黒褐色土 10YR3/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土少量、珪砂層土少量含む。
4	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
5	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
6	黄褐色土 10YR5/6	硬くしまる。粘性あり、ローム土主体層、黒色土粒少量、珪砂層土少量、珪砂層土少量含む。
7	黒褐色土 10YR3/2	非常に硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒色土粒少量含む。
8	黄褐色土 10YR5/6	非常に硬くしまる。粘性あり、ローム土主体層、黒色土粒少量、珪砂層土粒少量、珪砂層土ブロック少量、珪砂層土ブロック少量含む。
9	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土ブロック少量、珪砂層土少量、黒色土粒少量含む。
10	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土粒少量、珪砂層土ブロック少量含む。
11	黄褐色土 10YR5/6	硬くしまる。粘性あり、ローム土主体層、珪砂層土粒少量、黒色土粒少量含む。
12	黒褐色土 10YR2/2	非常に硬くしまる。粘性あり、ロームブロック少量、珪砂層土少量、珪砂層土少量含む。
13	黒褐色土 10YR3/2	硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒色土粒少量含む。
14	黒褐色土 10YR2/2	非常に硬くしまる。粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土粒少量、珪砂層土粒少量含む、層上面に互を嵌り合っている。
15	黒褐色土 10YR2/2	やや硬くしまる。粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土少量、黒色土粒少量含む、層上面に互を嵌り合っている。
16	黄褐色土 10YR5/6	硬くしまる。粘性あり、ローム土主体層、珪砂層土粒少量、珪砂層土ブロック少量含む。
1-3 1~5 : 遺地層		
1	黄褐色土 10YR5/6	非常に硬くしまる。粘性あり、ローム土主体層、珪砂層土ブロック少量、黒色土粒少量含む。
2	黒褐色土 10YR3/2	非常に硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒色土粒少量含む。
3	黒褐色土 10YR3/2	非常に硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土粒少量含む。
4	黒褐色土 10YR3/2	非常に硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、珪砂層土粒少量、黒色土粒少量含む。
5	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
2-2 1~12 : 遺地層		
1	黒褐色土 10YR3/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土・珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
2	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土少量含む。
3	黒褐色土 10YR2/2	非常に硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土ブロック少量、珪砂層土ブロック少量含む。
4	黒褐色土 10YR3/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土・珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
5	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土・珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
6	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒色土粒少量含む。
7	黒褐色土 10YR3/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土・珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
8	黒色土 10YR2/1	非常に硬くしまる。粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、珪砂層土ブロック少量含む。
9	黒褐色土 10YR3/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土・珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
10	黒褐色土 10YR2/2	硬くしまる。粘性あり、珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒色土粒少量含む。
11	黒褐色土 10YR3/2	硬くしまる。粘性あり、黒色土・珪砂層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、層上面に互を嵌り合っている。
12	黒褐色土 10YR5/6	しまり強い。粘性強い、ローム土主体層、珪砂層土ブロック少量、珪砂層土ブロック少量含む、層上面に互を嵌り合っている。

図面 52 S8232 中門掘立柱建物



1-1 1~2 : 柱穴取穴 3~6 : 掘方埋土		
1 灰黄褐色土	10YR4/2	しまり弱い。粘性弱い。ローム粒少量、黒色土粒少量含む。
2 黒褐色土	10YR3/2	しまり弱い。粘性弱い。ローム粒微量、黒色土粒微量含む。
3 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり。粘性あり。黒色土と羅h層土の主体層。ローム粒少量、ロームブロック微量、羅h層ブロック少量、白色粘土粒微量含む。
4 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり。粘性ありローム粒微量、羅層土多量、白色粘土粒微量含む。
5 黒褐色土	10YR3/1	しまりあり。粘性あり。ローム粒微量、黒色土粒微量含む。
6 暗褐色土	10YR3/3	しまりあり。粘性あり。ローム粒微量、黒色土粒微量含む。
1-2 1 : 柱穴取穴 2~5 : 掘方埋土		
1 黒褐色土	10YR3/2	しまりあり。粘性ややあり。ローム粒少量、黒色土粒微量含む。
2 黒褐色土	10YR3/2	よくしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
3 黒褐色土	10YR3/1	よくしまる。粘性あり。ローム粒少量、ロームブロック微量、黒色土粒少量含む。
4 灰黄褐色	10R4/2	よくしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
5 暗褐色土	10YR3/2	しまりあり。粘性あり。ローム粒微量、ロームブロック微量、黒色土粒少量含む。
1-3 1 : 柱穴取穴		
1 黒褐色土	10YR3/1	しまりあまりなし。粘性あまりなし。ローム粒微量、ロームブロック微量、黒色土粒少量含む。
2-1 1~2 : 掘方埋土		
1 黒褐色土	10YR3/1	しまりあり。粘性やや弱い。羅層土主体層。ローム粒少量、ロームブロック微量、黒色土粒少量含む。
2 黒色土	10YR2/1	しまりあり。粘性ややあり。黒色土主体層。ローム粒少量、羅層土少量含む。
3-1 1 : 柱穴取穴 2 : 掘方埋土		
1 黒褐色土	10YR3/1	しまりあまりなし。粘性あまりなし。ローム粒微量含む。
2 黒褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。羅層土主体層。ローム粒少量、黒色土粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量、塵土粒微量含む。

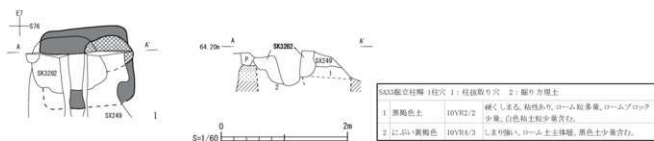
図面 53 SA10 掘立柱塼



SA10掘立柱塼 2 1~4: 掘り方塼土

1	黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック少量、罫土層土ブロック少量含む。
2	黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック少量、罫土層土ブロック少量含む。
3	黒色土	10YR2/2	しまり強い、粘性あり、ローム粒多量含む。
4	黄褐色土	10YR5/6	しまり強い、粘性あり、ローム土主体層。
SA10掘立柱塼 3.4 1~3: 柱塼取り穴			
1	黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、粘性ややあり、黒色土と罫土層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、罫土層土ブロック少量、白色粘土粒少量含む。
2	黒褐色土	10YR2/2	しまりあまりなし、粘性ややあり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、罫土層土多量含む。
3	黒褐色土	10YR2/2	しまりあり、粘性あり、罫土層土ブロック主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、罫土層土少量含む。

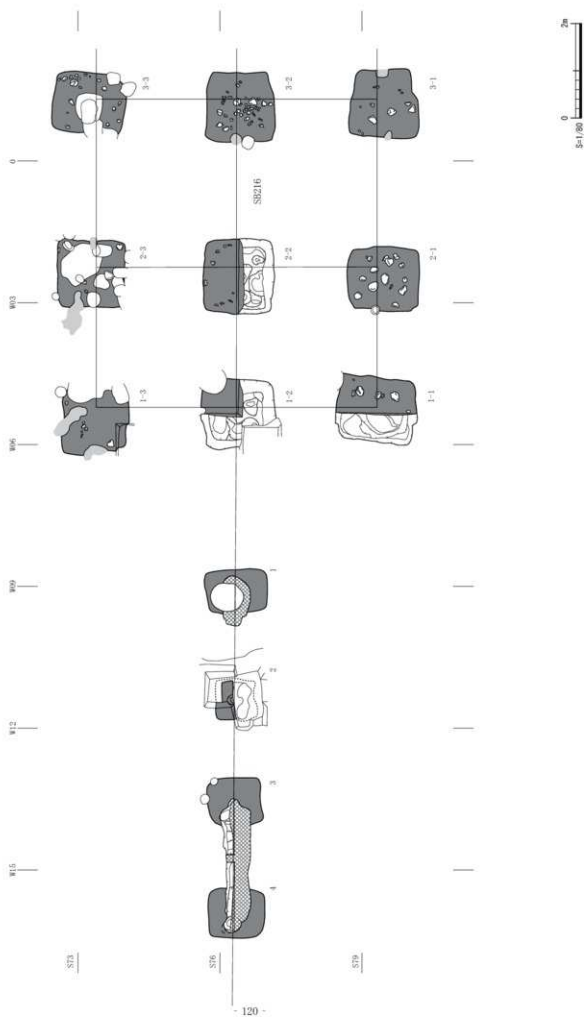
図面 54 SA33 掘立柱塼



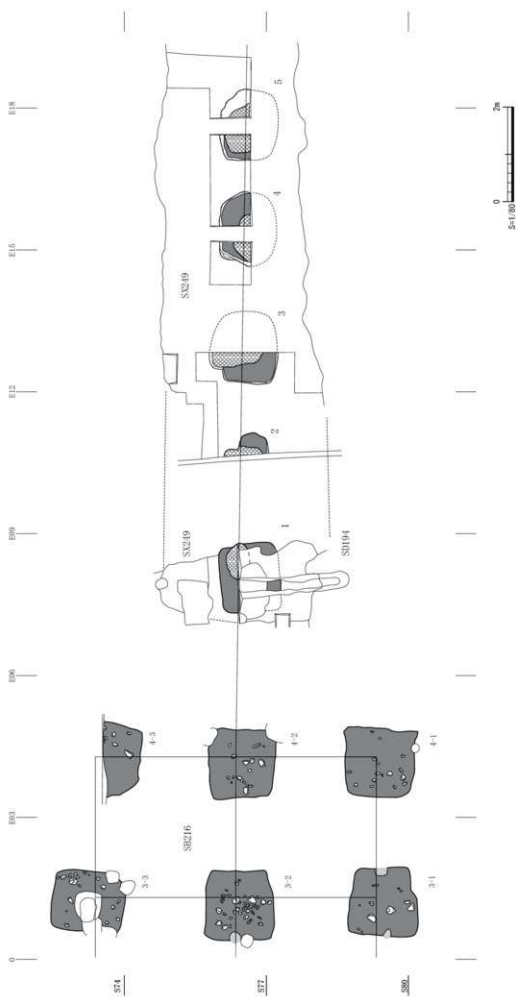
SA33掘立柱塼 1柱穴 1: 柱塼取り穴 2: 掘り方塼土

1	黒褐色土	10YR2/2	硬くしまる、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック少量、白色粘土粒少量含む。
2	にじみ黄褐色	10YR4/3	しまり強い、ローム土主体層、黒色土少量含む。

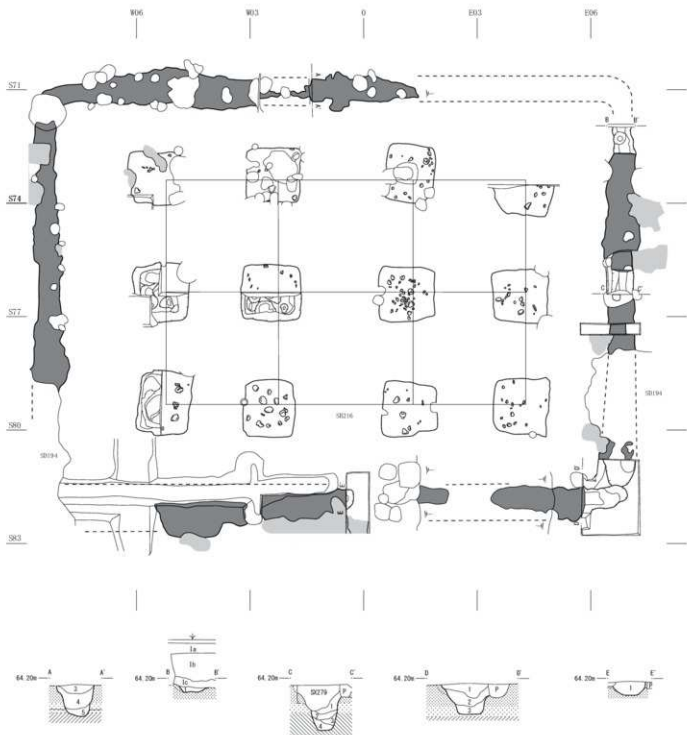
图面 55 SA10 掘立柱罫 1 ~ 4



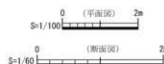
図面 56 SA33 掘立柱塚 1 ~ 5



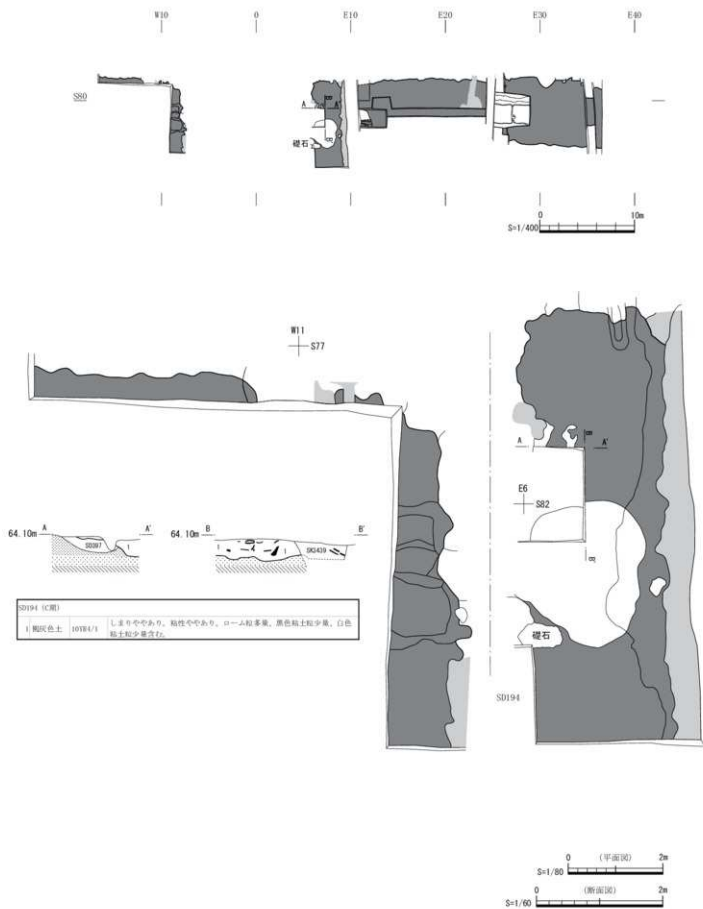
図面 57 SD397 溝



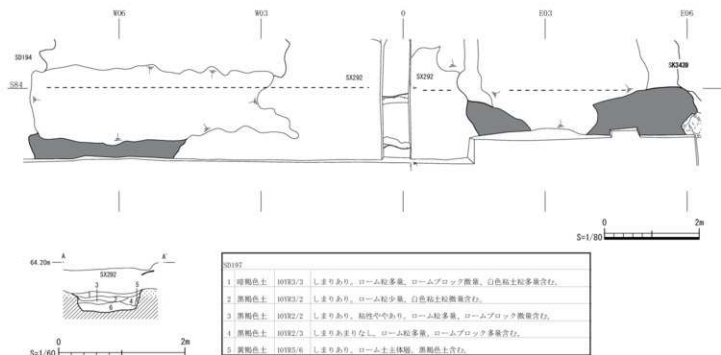
A-A'		D-D'			
1 黒褐色土	10YR2/3	硬くしまる。粘性ややありなし。ローム粒多量。ロームブロック極微量含む。	1 黒褐色土	10YR3/2	硬くしまる。粘性ややあり。ローム粒多量。ロームブロック微量。黒色土粒少量。白色粘土粒少量含む。
2 黒色土	10YR2/1	しまりあり。粘性ややありなし。ローム粒少量。ロームブロック極微量含む。	2 黒褐色土	10YR2/3	しまりあり。粘性ややあり。ローム粒多量。黒層土多量含む。
3 暗褐色土	10YR3/3	しまりあり。粘性強い。黒層土・ローム土主体層。黒色土粒極微量含む。	3 暗褐色土	10YR3/3	しまりややあり。粘性あり。黒層土主体層。黒色土少量含む。
B-B'		E-E'			
1 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり。粘性ややあり。ローム粒多量。ロームブロック少量含む。	1 黒褐色土	10YR2/2	硬くしまる。粘性あり。黒色土主体層。ローム粒微量。ロームブロック極微量。黒色土多量含む。
C-C'					
1 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり。粘性ややあり。ローム粒多量。ロームブロック極微量含む。			
2 黒褐色土	10YR3/2	しまりあり。粘性ややあり。ローム粒多量。黒層土多量含む。			
3 暗褐色土	10YR3/2	しまりややあまじ。粘性ややあり。黒層土主体層。ローム粒少量含む。			
4 黒褐色土	10YR3/6	しまりあり。粘性ややあり。ローム土主体層。黒色土粒極少量含む。			



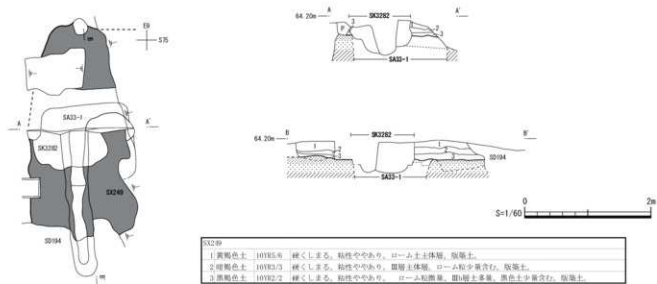
図面 58 SD194 溝



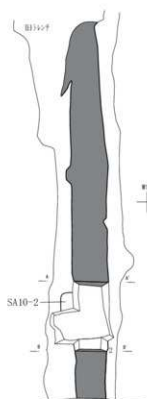
図面 59 SD197 溝



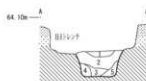
図面 60 SX249 築地層



図面 61 中門地区 その他の遺構 1 SD398 溝・SD410 溝・SK3282・SK3335

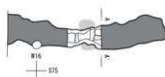


SD410



SD410		
1 黒褐色土	10YR3/2	しまりあり、粘性あまりなし、ローム粒多量、黒色土粒少量含む。
2 黒褐色土	10YR2/2	しまりあまりなし、粘性あり、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
3 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり、粘性あまりなし、ローム粒多量、細繊維ブロード層を含む。
4 黒褐色土	10YR2/2	しまりあまりなし、粘性あり、ローム粒微量、ロームブロード層を含む。
5 黒褐色土	10YR2/2	しまりあまりなし、粘性あり、ローム粒微量含む。

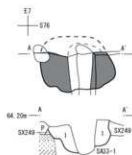
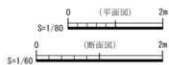
SD410溝



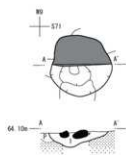
SD398溝



SD398		
1 褐色土	10YR3/4	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロード多量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量、炭化物粒微量を含む。
2 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり、粘性あり、ローム粒微量、白色粘土粒微量を含む。



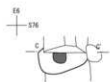
SK3282土坑



SK3335土坑

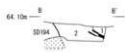
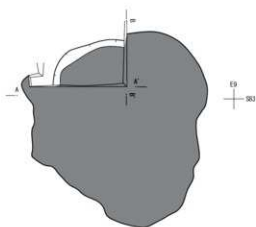
SK3282		
1 暗褐色土	10YR3/1	しまりあり、粘性あり、ローム土主体層、黒褐色土少量含む、互層く入る。
SK3335		
1 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、黒褐色土少量、白色粘土粒微量を含む、互層く入る。





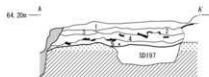
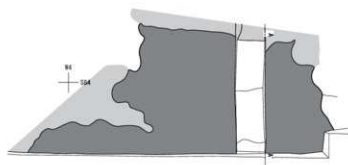
SX279

SX279 (1:柱基礎 2:埋土)	
1 黒褐色土	10YR2/2 しまりあまりなし、粘性あまりなし、黒色土ブロック多量含む。
2 黒褐色土	10YR2/2 硬くしまる、粘性ややあり、ローム粒多量、黒褐色土粒少量、白色粘土粒少量含む。



SK3439	
1 暗褐色土	10YR3/1 しまりあり、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、白色粘土粒少量含む。
2 黒褐色土	10YR2/2 しまりあり、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、白色粘土粒少量含む。

SK3439土坑



SX292

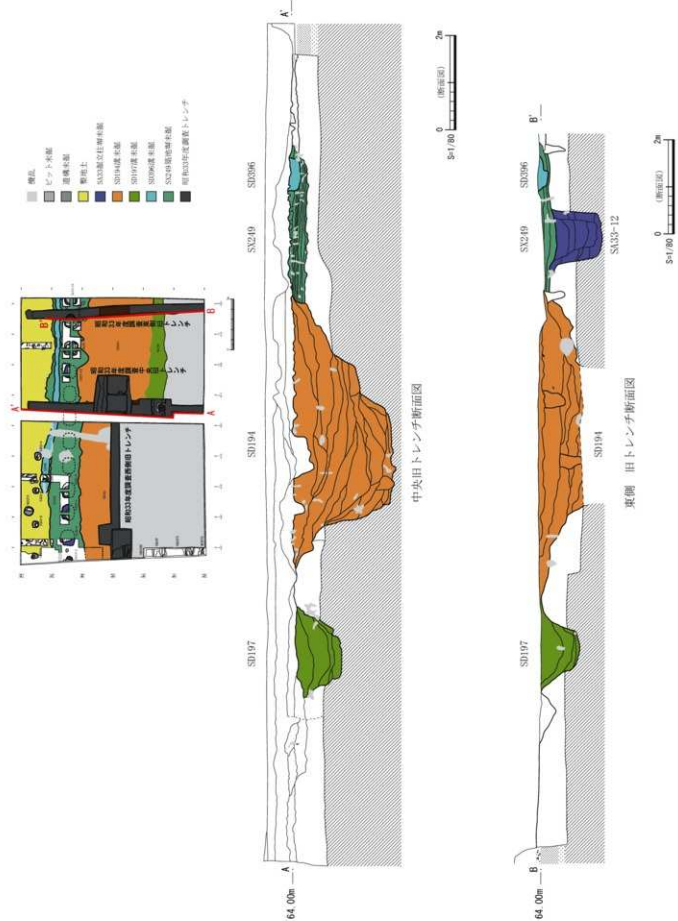
SX292埋土	
1 黒褐色土	10YR2/2 非常にしまりあり、粘性あり、粘質土体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒褐色土粒少量、白色粘土粒少量含む。
2 黒褐色土	10YR2/2 しまり強い、粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック少量、白色粘土粒少量含む。
3 黄褐色土	10YR3/2 しまり強い、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック多量含む。
4 黒褐色土	10YR2/2 しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量含む。
5 黒褐色土	10YR2/2 しまりあり、粘性あまりなし、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒褐色土多量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量含む。



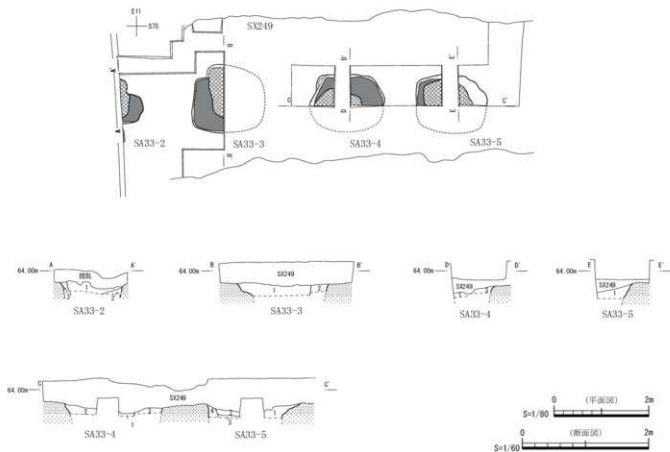
図面 63 区画南辺 遺構配置図



図 64 区画南辺 遺構配置図 2

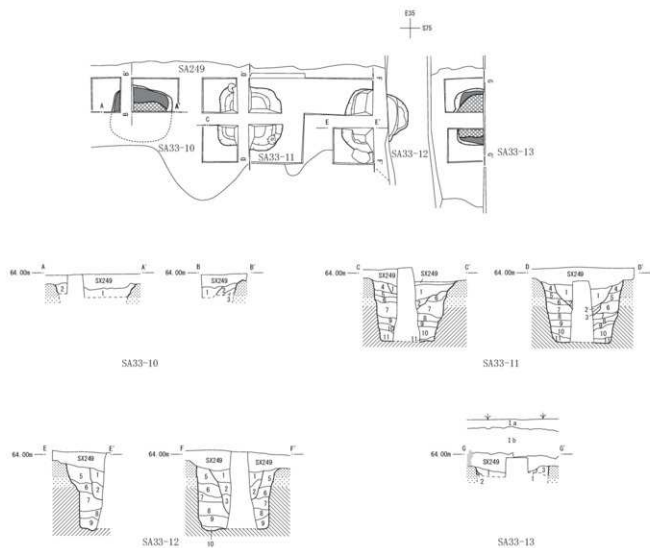


図面 65 SA33 掘立柱罫 1



SA33-2 (1~2) 抜取り穴 3) 掘り方埋土)	
1 黒褐色土	HVR1/2 しまりあり、黒色土と暗褐色土主体層、ローム粒やや多量、ロームブロック多量含む。
2 黒褐色土	HVR2/2 しまり強い、ローム粒少量、ロームブロック微量、黒色土ブロック極微量含む。
3 黒褐色土	HVR2/3 しまり強い、粘性あり、ローム粒少量含む。
SA33-3 (1) 抜取り穴 2) 掘り方埋土)	
1 黒褐色土	HVR2/2 しまりあり、Ⅱb層土と黒色土主体層、ローム粒多量、ロームブロックやや多量、白色粘土粒微量含む。
2 黒褐色土	HVR2/3 しまり強い、粘性ややあり、Ⅱb層土と黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
SA33-4 (1~2) 抜取り穴 3) 掘り方埋土)	
1 黒褐色土	HVR2/3 しまりややあり、ローム粒少量、ロームブロック微量、白色粘土粒微量含む。
2 黒褐色土	HVR3/2 しまりあり、粘性ややあり、Ⅱb層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
3 黒褐色土	HVR2/2 しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
SA33-5 (1~3) 抜取り穴 4) 掘り方埋土)	
1 黒褐色土	HVR2/2 しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土少量、Ⅱb層ブロックやや多量含む。
2 黒褐色土	HVR2/2 しまり強い、粘性あり、Ⅱb層土主体層、ローム粒微量、ロームブロック極微量、黒色土粒極微量含む。
3 黒褐色土	HVR2/3 しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック微量、黒色土多量含む。
4 黒褐色土	HVR2/2 硬くしまる、ローム粒多量、ロームブロック少量、暗褐色土少量混入する。

図面 66 SA33 掘立柱竪 2



SA33-10

SA33-11

SA33-12

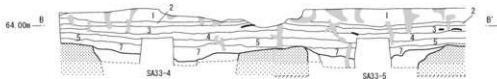
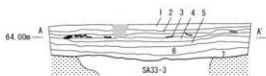
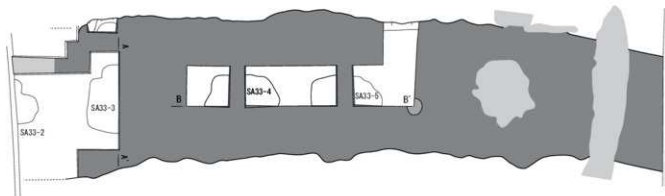
SA33-13

SA33-10 (1) 掘取り穴 2~2 掘り方掘土		SA33-12 (1~4) 掘取り穴 5~10 掘り方掘土	
1	黒褐色土 10YR2/2 硬くしまる、ローム粒多量、白色粘土粒散在含む。	1	黒褐色土 10YR2/1 しまりやや強い、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
2	黒褐色土 10YR3/2 硬くしまる、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒散在、黒く層ブロック散在含む。	2	黒褐色土 10YR3/2 しまりやや強い、ローム粒多量、ロームブロック少量、増褐色土ブロック少量含む。
3	黄褐色土 10YR5/6 硬くしまる、粘性あり、ローム土主体。	3	黒褐色土 10YR3/2 しまりあり、ロームブロック多量、増褐色土ブロック少量含む。
SA33-11 (1~3) 掘取り穴 4~11 掘り方掘土		4	黒褐色土 10YR2/1 しまりあり、ローム粒多量、増褐色土ブロック少量含む。
1	黒褐色土 10YR2/2 しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、白色粘土粒散在含む。	5	黒褐色土 10YR2/1 しまりあり、ローム粒多量、増褐色土ブロック少量含む。
2	黒褐色土 10YR3/2 しまりやや強い、ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒、黒く層ブロック少量、黒色土粒少量、白色粘土粒散在含む。	6	増褐色土 10YR3/4 しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、増黄褐色土ブロック含む。
3	黒褐色土 10YR2/3 しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック散在、黒く層ブロック少量、黒色土粒少量、白色粘土粒散在含む。	7	黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、ローム土主体層、黒く層ブロック散在含む。
4	黒褐色土 10YR2/2 しまりあり、ローム粒少量、増褐色土少量含む。	8	黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、粘性あり、ローム土主体層、黒色土粒含む。
5	黒褐色土 10YR2/2 しまり強い、ローム粒散在含む。	9	黄褐色土 10YR5/8 しまりやや強い、ローム土主体層、黒色土粒散在含む。
6	褐色土 10YR4/4 しまりあり、ローム土主体層。	10	黒色土 10YR2/1 しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック散在含む。
7	増褐色土 10YR3/3 しまり強い、粘性あり、黒く層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量、黒色土粒散在含む。	SA33-13 (1) 掘取り穴 2~2 掘り方掘土	
8	増褐色土 10YR3/4 しまりあり、ローム土主体層、黒色土、黒褐色土少量含む。	1	黒褐色土 10YR2/3 しまり強い、黒褐色土と黒く層土主体層、ローム粒多量、ロームブロックやや多量含む。
9	黒褐色土 10YR2/2 しまりあり、ローム粒散在、増褐色土少量含む。	2	黒色土 10YR2/1 しまり強い、ローム粒多く含む。
10	黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、ローム土主体層。	3	黄褐色土 10YR5/6 しまりあり、ローム土主体層、黒色土、灰黄褐色土含む。
11	黒褐色土 10YR2/2 しまりあり、ローム粒散在、ロームブロック含む。		



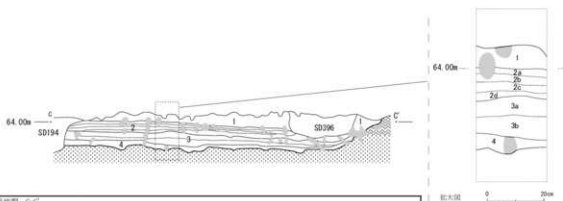
図面 67 SX249 築地塚 1

E16
S74



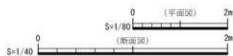
SX249築地塚 A-A' B-B'

1 黄褐色土	10193/6	しまりあり、粘性あり、ローム土主体層、白色粘土粒を含む。
2 2に似る黄褐色土	10194/3	硬くしまる、粘性あり、羅層土主体層、ロームブロック少量、黒色土粒微量含む。
3 暗褐色土	10194/4	硬くしまる、粘性あり、羅層土主体層、ローム粒少量含む、瓦片を含む。
4 褐色土	10194/4	硬くしまる、粘性あり、羅層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
5 黄褐色土	10195/6	硬くしまる、粘性あり、ローム土主体層、羅層土少量含む。
6 暗褐色土	10193/4	硬くしまる、粘性あり、羅層土主体層、ロームブロック少量、黒色土粒微量含む。
7 暗褐色土	10192/3	硬くしまる、粘性あり、羅層土主体層、ローム粒微量、白色粘土粒微量含む。

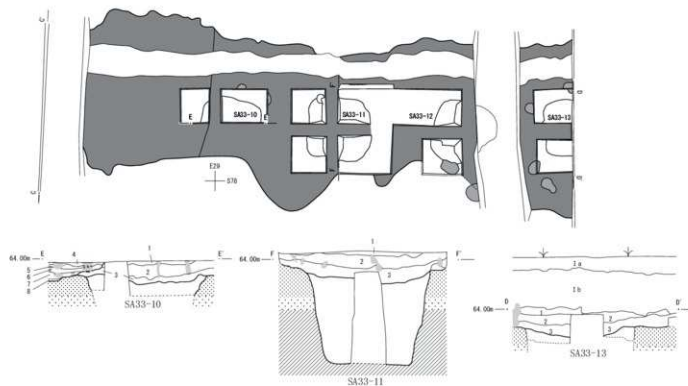


SX249築地塚 C-C'

1 黄褐色土	10195/6	しまりあり、粘性あり、ローム土主体、白色粘土粒を含む。
2a 褐色土	10192/1	硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒微量含む。
2b 黄褐色土	10196/6	硬くしまる、粘性あり、ローム土多量含む。
2c 褐色土	10192/1	硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量を含む。
2d 明黄褐色土	10196/6	硬くしまる、粘性あり、ローム土多量含む、白色粘土粒微量含む。
3a 暗褐色土	10193/3	硬くしまる、粘性あり、羅層土主体、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
3b 暗褐色土	10193/3	硬くしまる、粘性あり、羅層土主体、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
4 暗褐色土	10192/3	硬くしまる、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック微量、白色粘土粒微量含む。



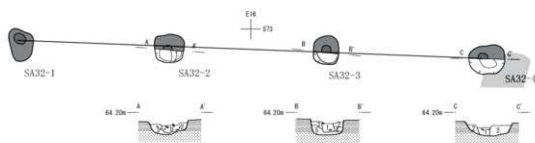
図面 68 SX249 築地塚 2



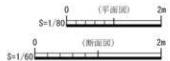
SX249 築地塚 D-D' E-E' F-F'	
1 濃い黄褐色土	10194/3 硬くしまる。粘性あり。置層土主体層。ローム粒多量。黒色土粒微量含む。
2 暗褐色土	10194/4 硬くしまる。粘性あり。置層土主体層。ローム粒少量含む。
3 黒褐色土	10192/3 硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量。白色粘土粒微量含む。
4 黄褐色土	10195/6 硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。白色粘土粒微量含む。C-C' 1層に対応。
5 黄褐色土	10193/2 硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。ロームブロック微量含む。C-C' 2層に対応。
6 黄褐色土	10195/6 硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒色土粒微量含む。C-C' 2層に対応。
7 黄褐色土	10193/2 硬くしまる。粘性あり。置層土主体。ローム粒子少量。白色粘土粒微量含む。C-C' 3層に対応。
8 黒色土	10192/1 硬くしまる。粘性あり。ローム粒微量含む。C-C' 4層に対応。



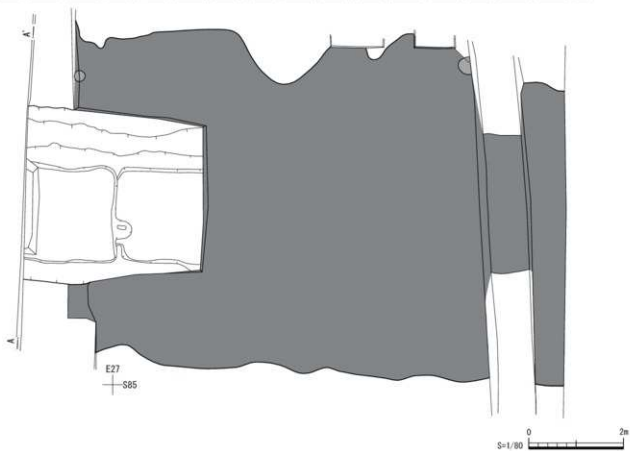
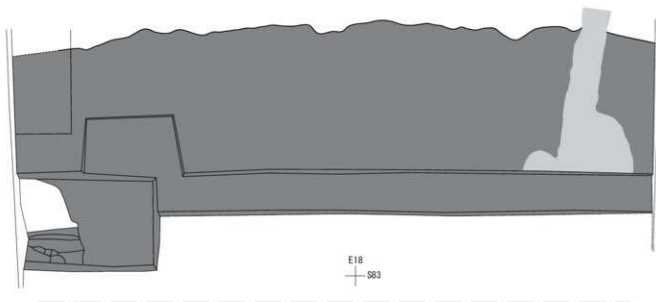
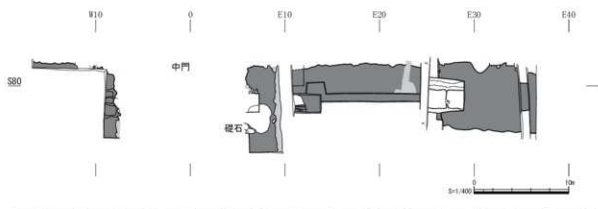
図面 69 SA32 横列



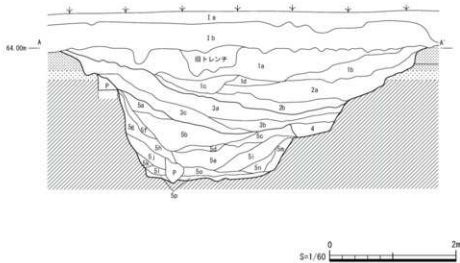
SA32-2 (1:柱穴 2~3:掘方埋土)		SA32-3 (1:柱穴 2~5:掘方埋土)	
1 黒褐色土	2.593/1 しまりあり。ローム粒微量。白色ブロック多量。粗い黒色土粒含む。	1 黒褐色土	2.593/1 しまりややあり。ローム粒微量。白色粘土ブロック多量。黒褐色土含む。
2 黒褐色土	2.593/2 硬くしまる。ローム粒微量。白色粘土粒多量。黒色粒含む。	2 黄褐色土	2.593/1 しまりあり。ローム粒少量。白色粘土粒多量。黒色粒含む。
3 黒褐色土	2.593/2 硬くしまる。ローム粒微量。白色粘土粒多量。黒色粒含む。	3 黒褐色土	2.593/1 しまりあり。ローム粒微量。白色粘土粒少量含む。
SA32-4 (1:柱穴 2:掘方埋土)		1 黒褐色土	2.593/2 しまりあり。ローム粒微量。白色粘土粒微量含む。
1 黒褐色土	2.593/1 しまりあり。ローム粒多量。黒褐色土含む。	5 黒褐色土	2.593/2 硬くしまる。ローム粒微量。白色粘土粒微量含む。
2 黒褐色土	2.593/2 しまりややあり。ローム粒多量。黒褐色土。白色粘土粒含む。		



圖面 70 SD194 溝

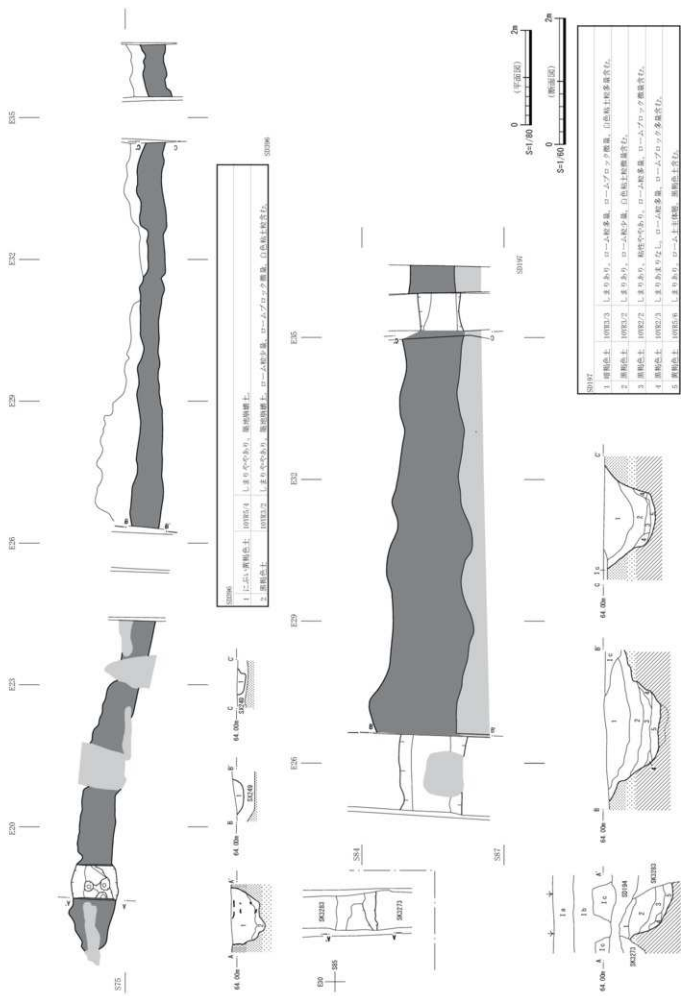


図面 71 SD194 溝

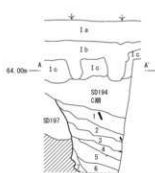
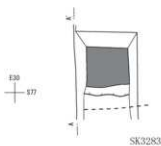
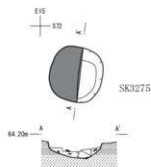


SD194 (A層～E層～F層 1～2 C層 3～4 E層 5 A層)			
1a	褐色土	10YR4/1	しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック多量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量含む。
1b	明黄褐色土	10YR6/8	しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック多量、白色粘土粒少量含む。
1c	黄褐色土	10YR3/1	しまりあり、ローム粒やや多く含む。
1d	明黄褐色土	10YR6/8	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック多量、白色粘土粒少量含む。
2a	黄褐色土	10YR3/1	よくしまる。ローム粒多量、ロームブロック少量、炭化物微塵含む。
2b	黒褐色土	10YR3/1	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック多量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
3a	黒色土	10YR2/1	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック少量、白色粘土粒微量含む。
3b	黒色土	10YR2/1	しまりあり、ローム粒微量、ロームブロック少量、白色粘土粒少量含む。
3c	黄褐色土	10YR3/2	しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒含む。
4	黄褐色土	10YR5/6	しまりあり、ローム土主体層。
5a	黄褐色土	10YR2/3	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック微量、白色粘土粒少量含む。
5b	黄褐色土	10YR2/2	しまりあり、ローム粒微量、白色粘土粒少量含む。
5c	棕色土	7.5YR4/4	しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土多量含む。
5d	黄褐色土	10YR2/3	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
5e	黒色土	10YR2/1	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック微量、炭化物粒少量、白色粘土粒微量含む。
5f	極暗褐色土	7.5YR2/3	しまりやや多い、ローム粒少量含む。
5g	明褐色土	7.5YR5/9	しまりやや多い、ローム土主体層、黒色土粒少量含む。
5h	黒褐色土	10YR2/3	しまりやや多い、ローム粒多量、ロームブロック多量含む。
5i	棕色土	7.5YR4/4	しまりあり、ローム粒多量含む。
5j	黄褐色土	10YR1/2/1	しまりやや多い、ローム粒少量、ロームブロック多量、黒褐色土ブロック少量含む。
5k	黄褐色土	10YR5/6	しまり少ない、ローム土主体層。
5l	黄褐色土	10YR3/2	しまりやや多い、ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
5m	暗褐色土	10YR3/3	しまり少ない、ローム粒多量含む。
5n	黄褐色土	10YR2/2	しまりやや多い、ローム土と黒色土との互層。
5o	暗褐色土	10YR3/3	しまり少ない、粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。
5p	暗褐色土	10YR3/3	硬くしまる。ローム土主体層。

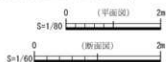
図面 72 SD396 溝・SD197 溝



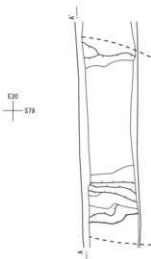
図面 73 区画南辺 その他の遺構 SK3273 ~ SK3275・SK3283



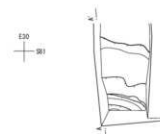
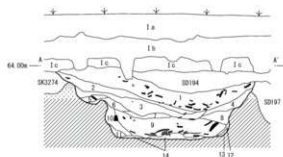
SK3275	1 黒褐色土 10192/2 しまりあまりなし、ローム粒微量含む。
	2 黒褐色土 10193/2 しまりあまりなし、ローム粒微量含む。



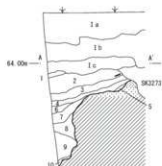
SK3283	1 黒褐色土 10192/2 硬くしまる、ローム粒やや多量、白色粘土粒少量、黒色土粒少量、炭化物含む。
	2 黒褐色土 10192/3 硬くしまる、ローム粒少量、白色粘土粒多量含む。
	3 黒褐色土 10192/2 硬くしまる、ローム粒少量、白色粘土粒少量含む。
	4 黒褐色土 10192/2 しまりあり、ローム粒やや多量、白色粘土粒多量、炭褐色土多量含む。
	5 黒褐色土 10192/3 しまりあり、ローム粒やや多量、白色粘土粒多量、炭褐色土多量含む。
	6 黒褐色土 10193/2 しまりあり、ローム粒少量、白色粘土粒多量含む。
	7 黒褐色土 10192/2 しまりの強い、黒褐色土とローム土の混合土。



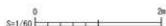
SK3273



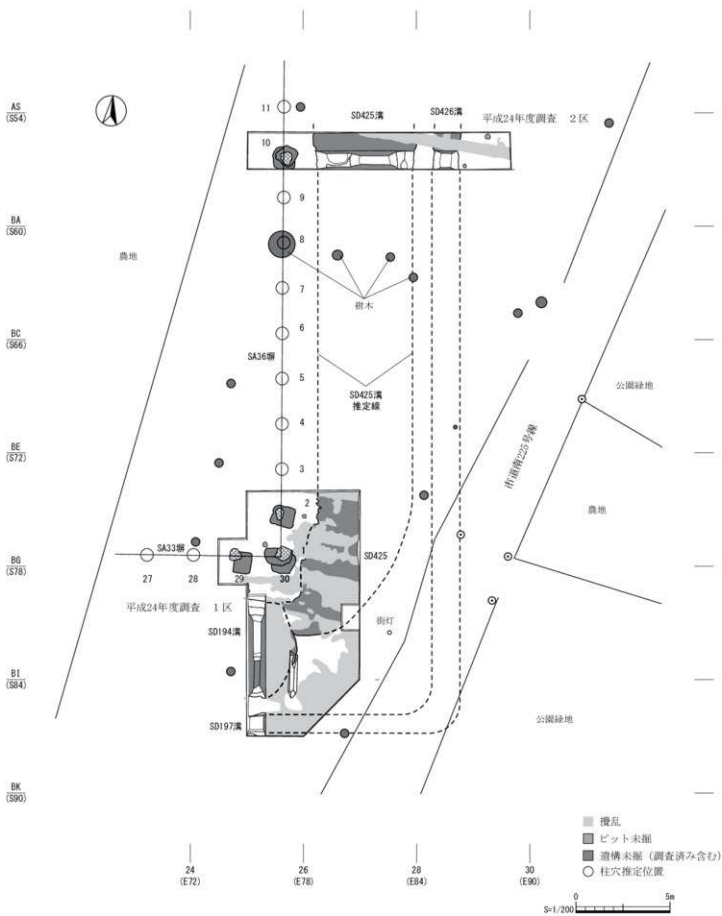
SK3274



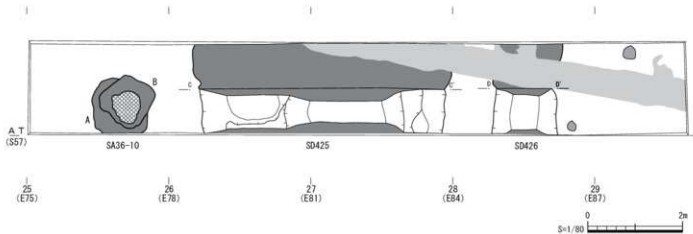
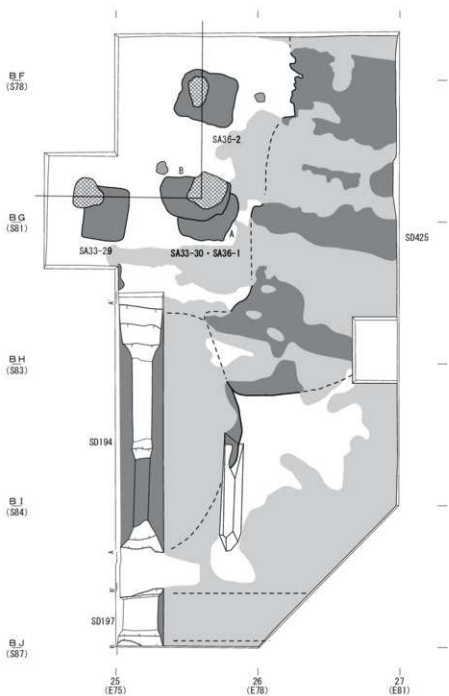
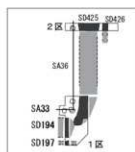
SK3273	1 黒褐色土 10193/2 しまりあり、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒含む。
	2 埋め土 10193/4 しまりやや弱い、ローム粒多量、ロームブロック微量、面cブロックを極微量含む。
	3 黒褐色土 10193/2 しまりあり、やや粘性あり、ローム粒やや多量、ロームブロック微量含む。
	4 黒褐色土 10192/2 しまり弱い、ローム粒微量、黒色土粒少量、白色粘土粒微量含む。
	5 黒褐色土 10192/3 しまり弱い、ローム粒多量、ロームブロック微量、白色粘土ブロック微量含む。
	6 黒褐色土 10192/3 しまりやや弱い、やや粘性あり、ローム粒微量含む。
	7 黒褐色土 10192/2 しまりやや弱い、やや粘性あり、ローム粒微量、若いローム粒やや多く含む。
	8 埋め土 10194/4 しまりやや弱い、やや粘性あり、ローム粒多量含む。
	9 埋め土 10193/2 しまりやや弱い、ローム粒微量、白色粘土粒少量含む。
	10 埋め土 10192/2 しまり弱い、ローム粒多量、白色粘土粒微量含む。
	11 埋め土 10193/4 しまり弱い、ローム土主体。
	12 黒褐色土 10192/3 しまりやや弱い、ローム粒少量、黒色土粒少量、白色粘土粒含む。
	13 埋め土 10193/4 しまり弱い、ローム土主体。
	14 黒褐色土 10192/2 硬くしまる、粘性あり。
SK3274	1 黒褐色土 10192/2 硬くしまる、粘性あり、ローム粒微量含む。
	2 黒褐色土 10193/2 硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒微量含む。
	3 黒褐色土 10192/2 硬くしまる、ローム粒やや多い、白色粘土粒少量、炭褐色土を小ブロック状に少量含む。
	4 黒褐色土 10193/2 硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土粒微量含む。
	5 黒褐色土 10192/3 しまりあり、やや粘性あり、ローム粒少量、黒色土粒微量。
	6 埋め土 10192/2 硬くしまる、粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック微量、白色粘土粒微量含む。
	7 埋め土 10192/3 硬くしまる、ローム粒多量、ロームブロック少量、面層ブロック微量含む。
	8 黒褐色土 10192/2 硬くしまる、ローム粒多量、ロームブロック少量、面層ブロック含む。
	9 埋め土 10193/3 しまりあり、やや粘性あり。
	10 埋め土 10192/3 しまりあり、やや粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック微量、黒色土粒少量含む。



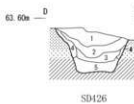
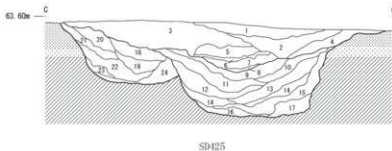
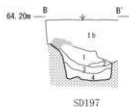
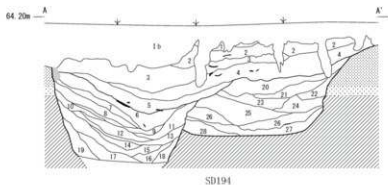
図面 74 区画南東 遺構配置図



図面 75 SA33・36 掘立柱罫



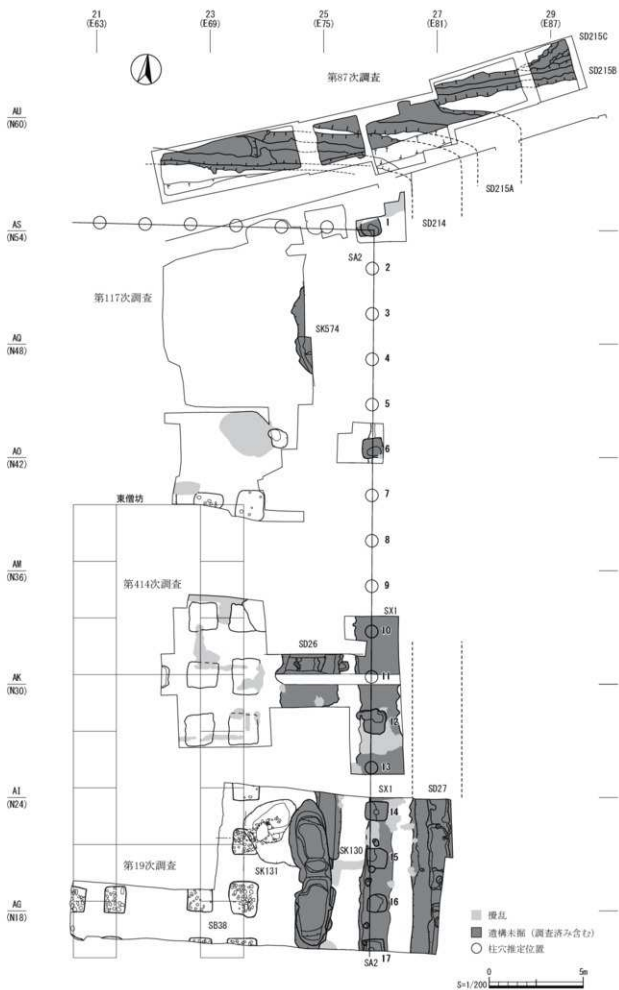
図面 76 SD194・197・425・426 溝



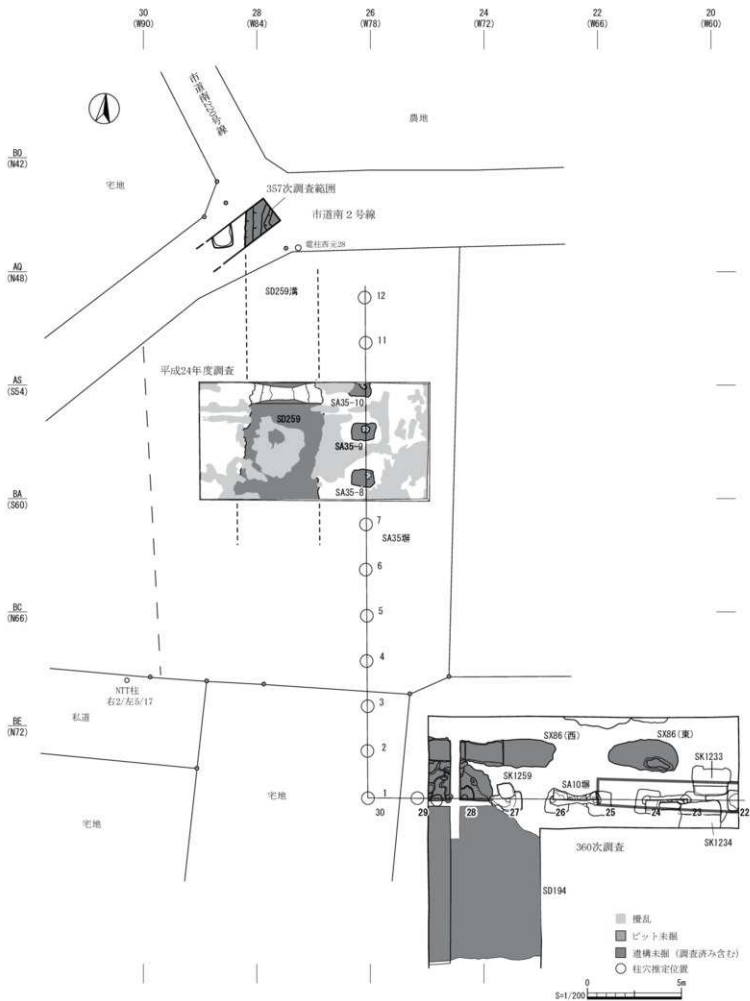
SD194 A層(20~26)・B層(16~19)・C層(1~5)		SD125 A層(18~21)・B層(9~17)・C層(1~6)	
1 明黄褐色土 10YR6/6	しまりあり、粘性ややあり、ロームブロック多量含む。	1 褐色土 7.5YR4/4	粘性ややあり、しまりややあり、ローム粒少量含む。
2 褐色土 10YR4/4	しまりあり、粘性あまりなし、ローム粒多量、黒色土粒少量、白色粘土粒少量含む。	2 褐色土 7.5YR4/2	粘性ややあり、しまりややあり、ローム粒多量含む。
3 黒褐色土 10YR3/1	しまり強い、粘性ややあり、ローム粒少量、白色粘土粒微量含む。	3 明褐色土 7.5YR5/3	粘性なし、しまりあり、ローム粒多量含む。
4 明黄褐色土 10YR6/6	しまり強い、粘性ややあり、ロームブロック多量含む。	4 黒褐色土 7.5YR2/2	粘性なし、しまりなし、ローム粒少量、赤色スコリア少量含む。
5 黒褐色土 10YR3/1	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒多量、白色粘土粒微量含む。	5 暗褐色土 7.5YR3/4	粘性ややあり、しまりややあり、ローム粒多量含む。
6 黒褐色土 10YR3/1	しまりややあり、粘性ややあり、ローム粒少量、黒土層少量、白色粘土粒微量含む。	6 明褐色土 7.5YR5/3	粘性なし、しまりあり、ローム粒微量含む。
7 黒褐色土 7.5YR3/1	しまり強い、粘性強い、黒土層主体層、ローム粒微量含む。	7 黄褐色土 7.5YR7/8	粘性なし、しまりあり、ロームブロック多量含む。
8 黒褐色土 10YR3/1	しまり弱い、粘性ややあり、黒色土主体層、黒土層少量含む。	8 明褐色土 7.5YR5/3	粘性なし、しまりややあり、ロームブロック少量含む。
9 黒褐色土 7.5YR3/1	しまりややあり、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック少量含む。	9 明褐色土 7.5YR5/3	粘性なし、しまりややあり、ローム粒多量、赤色スコリア多量含む。
10 黒褐色土 10YR3/1	しまり弱い、粘性ややあり、黒色土主体層、黒土層多量含む。	10 暗褐色土 7.5YR3/2	粘性なし、しまりややあり。
11 黒褐色土 10YR3/1	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒少量、白色粘土粒少量含む。	11 暗褐色土 7.5YR3/2	粘性なし、しまりあり、ローム粒多量、赤色スコリア多量含む。
12 黒褐色土 7.5YR3/1	しまり弱い、粘性あり、黒土層主体層、黒土層少量含む。	12 暗褐色土 7.5YR3/2	粘性なし、しまりややあり。
13 黒褐色土 10YR3/1	しまり弱い、粘性ややあり、黒色土主体層、黒土層多量含む。	13 暗褐色土 7.5YR3/4	粘性なし、しまりややあり。
14 黒褐色土 7.5YR3/1	しまり弱い、粘性あり、黒土層主体層、黒土層少量含む。	14 明褐色土 7.5YR5/4	粘性ややあり、しまりあり、ローム粒少量含む。
15 黒褐色土 10YR3/1	粒多量含む。	15 明褐色土 7.5YR5/3	粘性なし、しまりあり。
16 黒褐色土 10YR3/1	しまりややあり、粘性あり、ロームブロック多量、黒土層多量、黒色土粒少量含む。	16 黒褐色土 7.5YR2/2	粘性ややあり、しまりあり、ロームブロック多量含む。
17 黒褐色土 7.5YR2/2	しまり強い、粘性あり、黒土層主体層、黒土層少量含む。	17 黒褐色土 7.5YR2/2	粘性なし、しまりなし、黒色土とロームブロック主体層。
18 明黄褐色土 10YR6/6	しまり弱い、粘性弱い、ローム土主体層、黒色土粒少量含む。	18 明褐色土 7.5YR5/3	粘性なし、しまりなし、ロームブロック多量含む。
19 明黄褐色土 10YR6/6	しまり弱い、粘性弱い、ローム土主体層、黒土層少量含む。	19 明褐色土 7.5YR5/2	粘性ややあり、しまりややあり、ローム粒少量含む。
20 黒色土 10YR2/1	しまりあり、粘性あり、黒色土主体層、ローム粒少量、白色粘土粒微量含む。	20 明褐色土 7.5YR5/1	粘性なし、しまりややあり、ローム粒少量含む。
21 黒褐色土 10YR2/1	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒少量、ロームブロック少量、白色粘土粒少量含む。	21 明褐色土 7.5YR5/6	粘性ややあり、しまりややあり、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
22 明黄褐色土 7.5YR6/6	粘性ややあり、しまり強い、ロームブロック・ローム粒多量含む。	22 暗褐色土 7.5YR3/3	粘性なし、しまりなし、ローム粒少量、赤色スコリア少量含む。
23 暗褐色土 7.5YR3/2	粘性なし、しまりややあり、ローム粒・ロームブロック少量、白色粘土粒多量含む。	SD126	
24 黒色土 10YR2/1	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒少量、白色粘土粒少量含む。	1 黄灰色土 7.5YR4/1	粘性なし、しまりややあり、ローム粒少量、赤色スコリア少量含む。
25 黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒少量、黒色土粒少量含む。	2 黒褐色土 7.5YR3/1	粘性ややあり、しまりややあり、ローム粒多量、赤色スコリア多量含む。
26 黒色土 10YR2/1	しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、黒色粘土粒微量含む。	3 黄灰色土 7.5YR4/1	粘性なし、しまりややあり、ローム粒多量、ロームブロック多量含む。
27 黒色土 10YR2/1	しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、黒土層少量含む。	4 明褐色土 7.5YR5/3	粘性ややあり、しまりややあり、硬弱粘土。
28 黄褐色土 10YR5/6	しまりやや強い、粘性あり、ロームブロック多量、黒土層少量含む。	5 黒色土 7.5YR2/1	粘性なし、しまりあり、ロームブロック多量含む。
SD197			
1 黒褐色土 7.5YR3/1	粘性ややあり、しまりあり、ローム粒少量含む。		
2 灰褐色土 7.5YR4/2	粘性ややあり、しまりあり、ローム粒含む。		
3 黄灰色土 7.5YR4/1	粘性ややあり、しまりあり、ローム粒少量含む。		
4 灰褐色土 7.5YR4/2	粘性やや強い、しまりあり、ローム粒、ロームブロック多く含む。		

0 2m
S=1/60

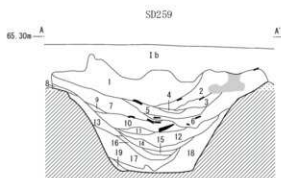
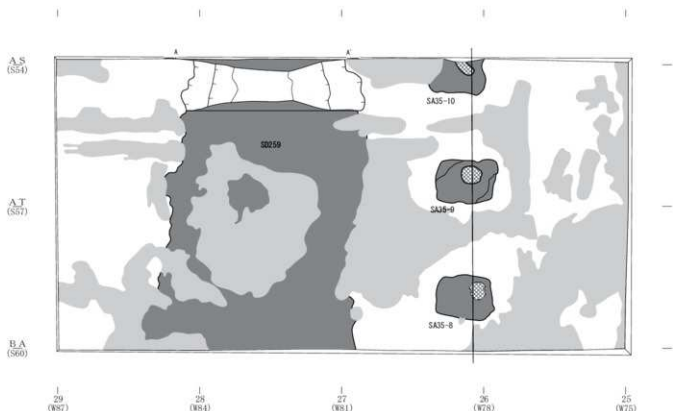
図面 77 区画北東 遺構配置図



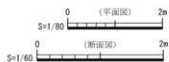
図面 78 区画南西 遺構配置図



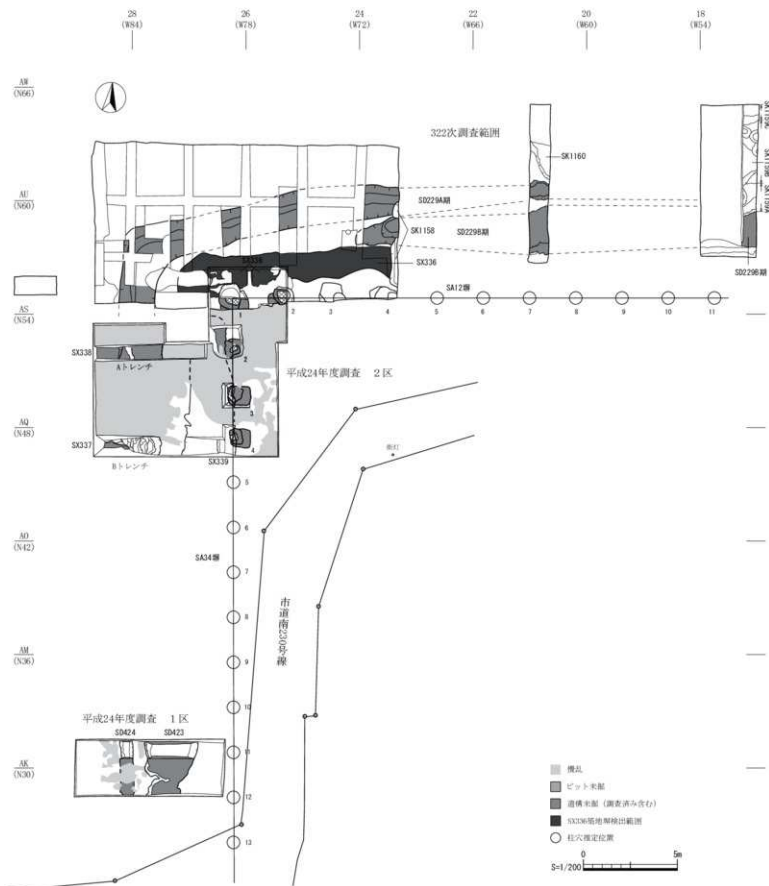
図面 79 SD259 溝 SA35 掘立柱罫



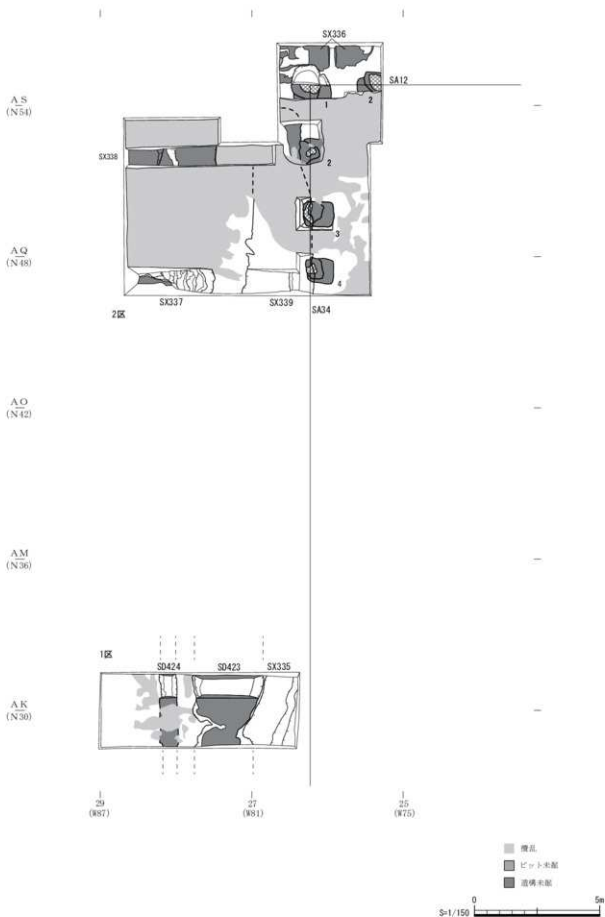
1 埋鞠色土	T.5YR3/4	粘性なし、しまりや中あり、ローム粒多量含む。
2 黒褐色土	T.5YR3/2	粘性なし、しまりなし、ローム粒多量含む。
3 埋鞠褐色土	T.5YR2/3	粘性なし、しまりや中あり、ローム粒多量含む。
4 黒褐色土	T.5YR3/1	粘性や中あり、しまりや中あり、ローム粒多量、ロームブロックを部分的に含む。
5 褐色土	T.5YR4/6	粘性や中あり、しまりや中あり、ローム粒少量、ロームブロック多量含む。
6 埋鞠褐色土	T.5YR2/3	粘性や中あり、しまりや中あり、ローム粒多量含む、瓦を多量包含する。
7 埋鞠色土	T.5YR3/4	粘性なし、しまりなし、ローム粒少量含む。
8 埋鞠色土	10YR3/4	粘性なし、しまりなし、ローム粒多量含む。
9 埋鞠色土	10YR3/2	粘性なし、しまりなし、ローム粒多量含む。
10 埋鞠色土	10YR4/4	粘性なし、しまりなし、ローム粒多量含む。
11 埋鞠色土	10YR4/4	粘性なし、しまりあり。
12 明黄褐色土	10YR6/6	粘性なし、しまりあり、ローム粒多量含む。
13 埋鞠色土	10YR3/4	粘性なし、しまりや中あり、ローム粒多量含む。
14 黒褐色土	10YR2/2	粘性や中あり、しまりあり。
15 埋鞠色土	10YR3/2	粘性や中あり、しまりや中あり、ローム粒少量含む。
16 埋鞠色土	10YR2/2	粘性なし、しまりや中あり、ローム粒少量含む。
17 黄褐色土	10YR5/6	粘性なし、しまりや中あり、ローム粒多量、黒色土ブロック多量含む。
18 黄褐色土	10YR5/8	粘性や中あり、しまりや中あり、ローム粒多量、断面にロームブロック多量含む。
19 黄褐色土	10YR5/8	粘性や中あり、しまりや中あり、ロームブロック少量。



図面 80 区画北西 遺構配置図



図面 81 区南北西 平成 24 年度調査区



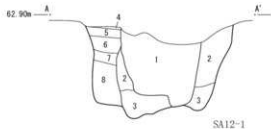
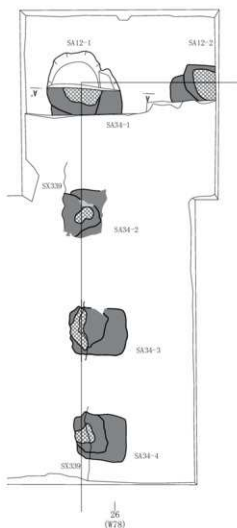
図面 82 SA12・34 掘立柱罫 SX336 築地罫

AT
(N57)

AS
(N54)

AR
(N51)

AQ
(N48)



SA12-1掘立柱罫 (1) 掘立柱穴遺存 2~3 掘立柱穴遺存(基部掘立柱穴跡方 4~8 掘立柱穴跡方) しまりや中弱い、粘性や中あり、ローム状、黒色土、白色粘土、白色粘土を多量含む。

1 黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、粘性や中あり、ローム状、白色粘土粒を多量含む。
2 暗褐色土	10YR2/3	しまり強い、粘性や中あり、ローム粒少量、白色粘土粒を多量含む。
3 黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、粘性や中あり、ローム粒少量、ロームブロック多量含む。
4 にじみ・黄褐色土	10YR4/3	しまり強い、粘性や中あり、ロームブロック多量含む。
5 にじみ・黄褐色土	10YR4/3	しまり強い、粘性や中あり、ロームブロック多量含む。
6 黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、粘性や中あり、黒色土粒、黒色土ブロックを多量含む。
7 にじみ・黄褐色土	10YR4/3	しまり強い、粘性や中あり、ロームブロック多量含む。

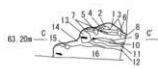
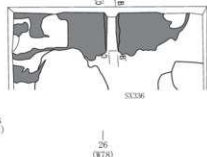


SX336

1 暗赤褐色土	5YR3/4	しまり強い、粘性や中あり、ローム土主体。
2 灰黄色土	10YR5/2	しまり強い、粘性あまりなし、白色粘土主体。
3 浅黄色土	2.5Y7/4	硬くしまる、粘性あまりなし、粘質土多量を含む。
4 明褐色土	7.5YR5/6	硬くしまる、粘性あまりなし、赤色スコリアを少量含む。
5 明黄褐色土	7.5YR4/6	しまり強い、粘性や中あり、ローム土主体。
6 黒褐色土	7.5YR3/1	硬くしまる、粘性あまりなし、ローム粒を多量含む。

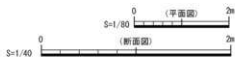
AT
(N57)

AS
(N54)

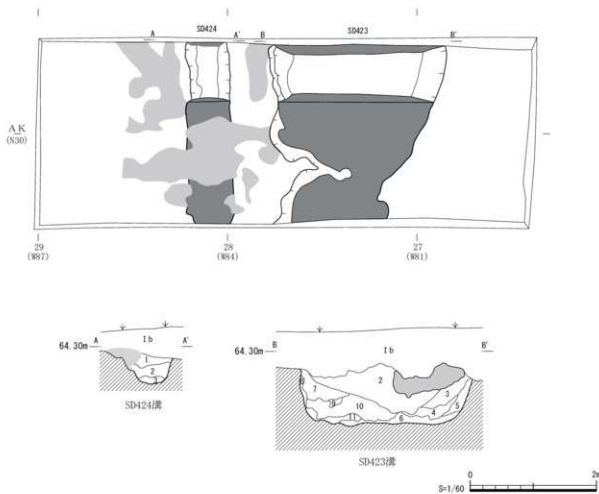


SX336

1 暗赤褐色土	5YR3/4	しまり強い、粘性なし、ロームブロック多量含む。
2 明赤褐色土	5YR5/6	しまり強い、粘性なし、黄白色粘土多量含む。
3 浅黄色土	2.5Y7/4	しまりや中あり、粘性あり、黄白色粘土多量含む。
4 明黄褐色土	10YR6/8	しまりや中あり、粘性なし、ロームブロック含む。
5 明黄褐色土	10YR6/6	しまりなし、粘性や中なし。
6 明褐色土	10YR6/8	しまり強い、粘性なし、ロームブロック含む。
7 黄褐色土	10YR6/4	しまりや中あり、粘性なし、中々砂質。
8 明褐色土	7.5YR5/6	硬くしまる、粘性なし、黄白色粘土含む。
9 淡褐色土	2.5YR7/4	硬くしまる、粘性なし、黄白色粘土含む。
10 明褐色土	7.5YR5/6	硬くしまる、粘性なし、赤色スコリア含む。
11 暗褐色土	7.5YR6/6	しまり強い、粘性なし、ローム土主体、赤・黒色スコリア含む。
12 暗褐色土	7.5YR6/6	しまり強い、粘性なし、ローム土主体。
13 黄褐色土	7.5YR7/6	硬くしまる、粘性なし、ローム土主体。
14 暗褐色土	7.5YR6/6	しまり強い、粘性なし、ローム土と褐色土の互層。
15 褐色土	7.5YR4/6	しまりや中あり、粘性や中あり、ローム土少量含む。
16 黒褐色土	7.5YR3/1	しまりや中あり、粘性や中あり、ローム土少量含む。

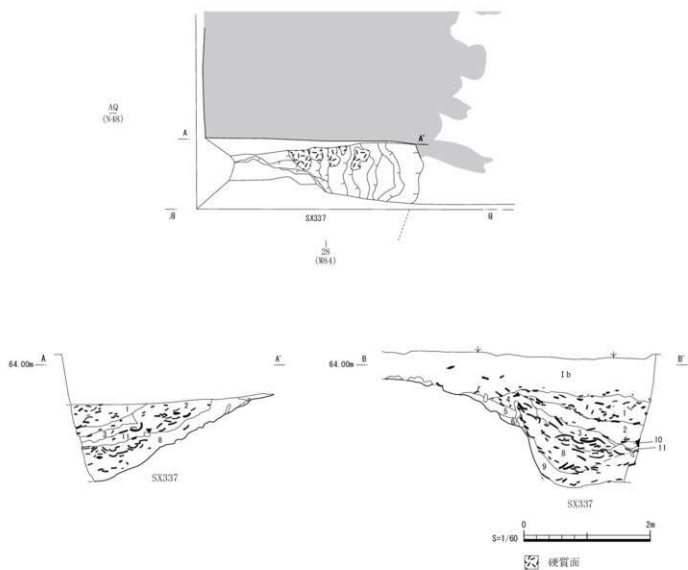


図面 83 SD423・424 溝



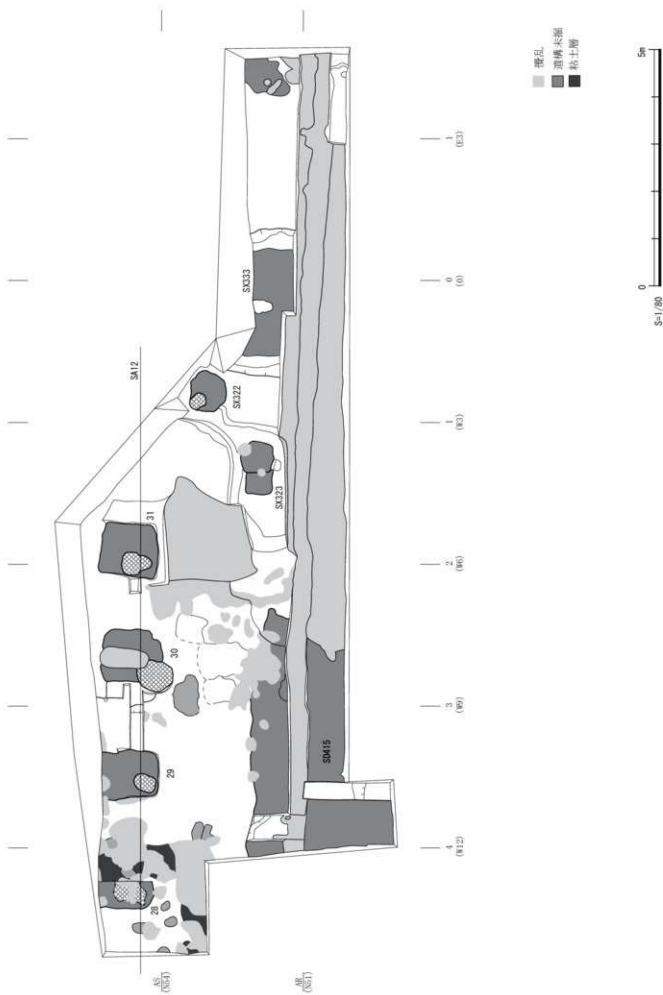
SD424溝		
1	黒褐色土 10YR2/3	しまりやや弱い、粘性やや強い、ローム粒微量含む。
2	黒褐色土 10YR2/3	しまりあり、粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
3	褐色土 10YR4/6	しまり強い、粘性あり、ローム土主体層。
SD423溝		
2	黒褐色土 10YR2/3	しまり弱い、粘性ややあり、ローム粒少量、炭化物粒少量含む。
3	黒褐色土 10YR2/3	しまり弱いが、部分的に硬くしまる。粘性ややあり、ローム粒少量、白色粘土粒少量含む。
4	黒褐色土 10YR2/3	しまりややあり、粘性ややあり、ローム粒多量含む。
5	褐色土 10YR4/6	しまり弱い、粘性ややあり、ローム粒多量含む、炭屑層土が。
6	黒褐色土 10YR2/2	しまり強い、粘性強い、炭化物粒微量含む。
7	黒褐色土 10YR2/3	しまりややあり、粘性やや強い、ローム粒少量、白色粘土粒微量、赤色スコリア微量、黒色スコリア微量含む。
8	褐色土 10YR4/6	しまり弱い、粘性ややあり、ローム粒多量含む、炭屑層土が。
9	黒褐色土 10YR2/1	しまりやや弱い、粘性やや強い、ローム粒多量、ロームブロック多量含む。
10	褐色土 10YR4/6	しまりやや弱い、粘性やや強い、ローム土主体層。
11	黒褐色土 10YR2/2	しまりややあり、粘性ややあり、炭屑層土主体層。

図面 84 SX337 特殊遺構

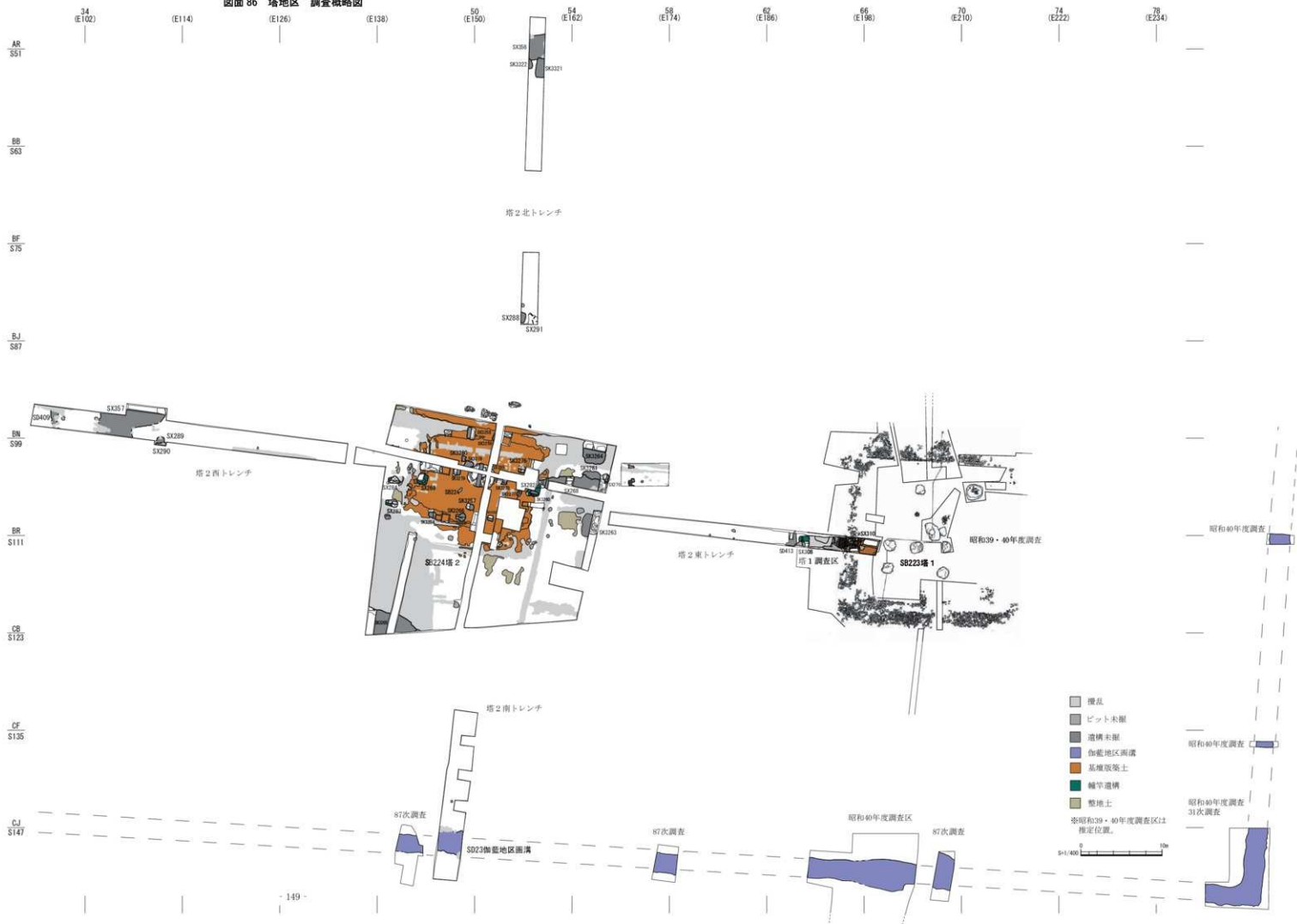


SX337特殊遺構		
1 埋褐色土	7.00K3/3	しまりややあり。粘性なし。ローム粒子多量含む。
2 埋褐色土	7.00K3/4	しまりややあり。粘性なし。ローム粒子多量含む。
3 にがい赤褐色土	2.00K1/4	粘土層。極めてよく焼けている。
4 埋褐色土	7.00K1/6	しまりなし。粘性なし。ローム粒子少量含む。
5 埋褐色土	7.00K3/3	しまりなし。粘性なし。ローム粒子少量含む。
6 埋褐色土	7.00K3/4	しまりややあり。粘性なし。ローム粒子多量含む。
7 埋褐色土	7.00K3/4	しまりなし。粘性なし。包有物は概無。
8 埋褐色土	7.00K3/4	しまりなし。粘性なし。ローム粒子多量含む。
9 埋褐色土	7.00K2/3	しまりややあり。粘性ややあり。ローム粒子少量含む。
10 赤褐色土	2.00K1/6	焼土と2層の互層。
11 埋赤褐色土	2.00K3/6	焼土と6層の互層。

図面 85 区画北辺 遺構配置図



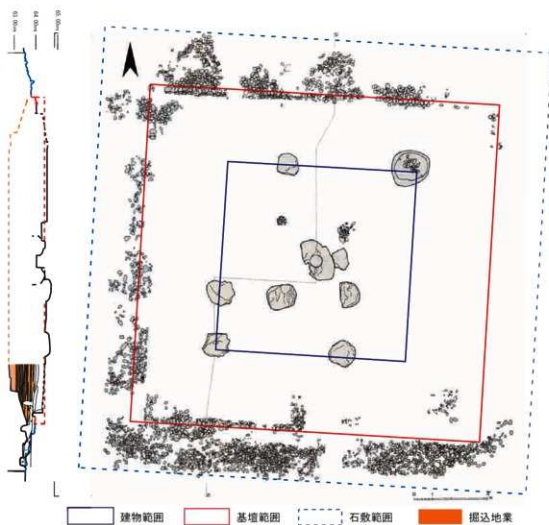
図面 86 塔地区 調査概略図



図面 87 塔地区 塔1 周辺遺構配置図

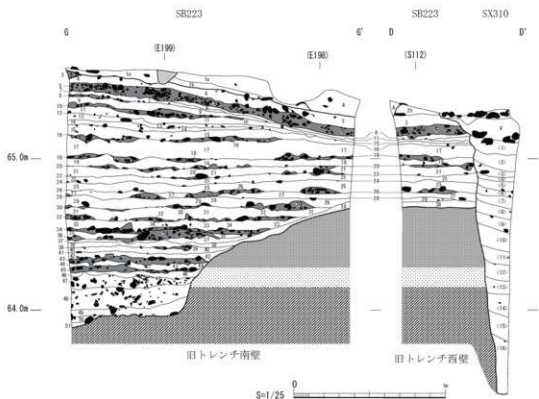


塔1 周辺調査区全体略図

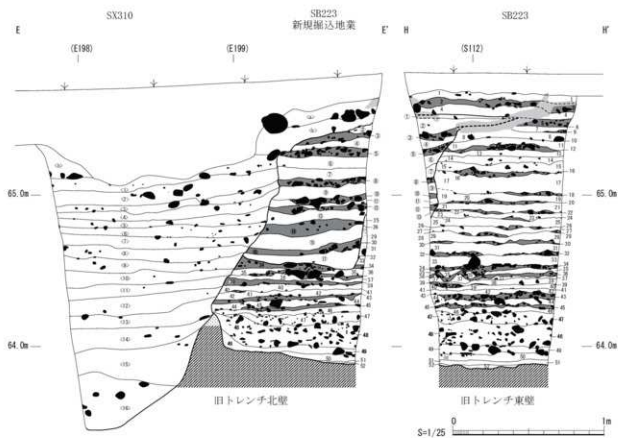


塔1 全体図 (昭和39・40年度調査)

図面 88 塔地区 塔1 基礎版築土



塔1 旧トレンチA 南・西壁断面図



塔1 旧トレンチA 北・東壁断面図

S2310不明鑑込み

(a) 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。(b)との境に微多数混入。
(b) 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
(1) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。黒土層土多量、黒色土粒やや多量。黒c層ブロック微量混入。
(2) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒やや多量、ロームブロック少量黒土層土・黒色土多量、黒c層微量混入。
(3) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロックやや多量、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(4) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(5) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(6) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(7) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロックやや多量、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(8) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(9) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(10) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック、黒色土粒やや多量、黒土層土多量含む。
(11) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(12) 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(13) 黄褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(14) 黄褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(15) 黄褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロックやや多量、黒色土粒、黒土層土多量含む。
(16) 黄褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック多量、黒色土粒、黒土層土多量含む。

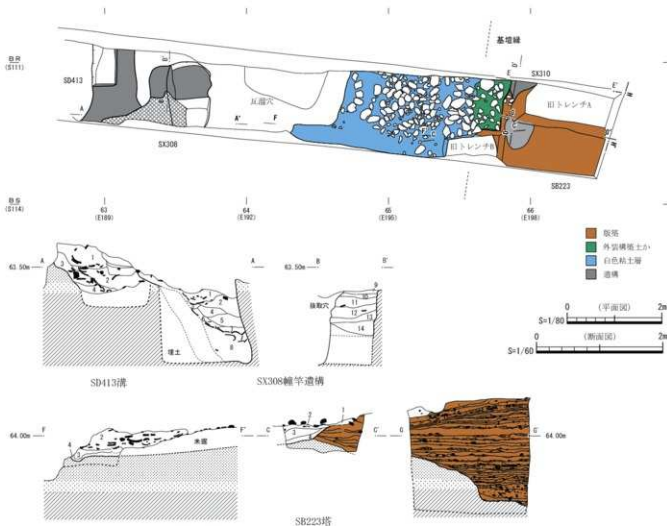
S2321第1 新緑尾込地帯

① 灰褐色土	10YR4/1	しまり強い。粘性なし。砂礫を多く含む。ローム粒黒色土粒少量。
② 黒色土	10YR2/1	硬くしまる。粘性あり。黒色土多量、ロームブロック、ローム粒微量含む。
③ 砂礫層		
④ 黒色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒多量、ロームブロック、黒色土粒含む。暗褐色の粘性土多量含む。
⑤ 砂礫層		
⑥ 黄褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。黒色土と黒土層土主体、ローム粒、ロームブロック少量含む。
⑦ 黄褐色土	10YR5/6	しまり強い。粘性あり。砂なし。ローム粒～ロームブロック多量、黒色土粒含む。黒b～層ブロック少量含む。
⑧ 砂礫層		
⑨ 黄褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。黒土層土多量、ローム粒、ロームブロック少量、炭化植物微量含む。
⑩ 砂礫層		
⑪ 黄褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。黒色土と黒土層土主体、ローム粒、ロームブロック微量含む。
⑫ 砂礫層		
⑬ 黒色土	10YR2/1	しまり強い。粘性あり。黒色土と黒土層土主体、ローム粒、ロームブロック微量含む。
⑭ 砂礫層		
⑮ 黒色土	10YR2/1	しまり強い。粘性あり。黒色土・黒土層土主体、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。
⑯ 砂礫層		
⑰ 黒色土層	10YR2/1	しまり強い。粘性あり。黒色土と黒土層土主体、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。

S2322第1 基層・尾込地帯 (a,b:再確認)

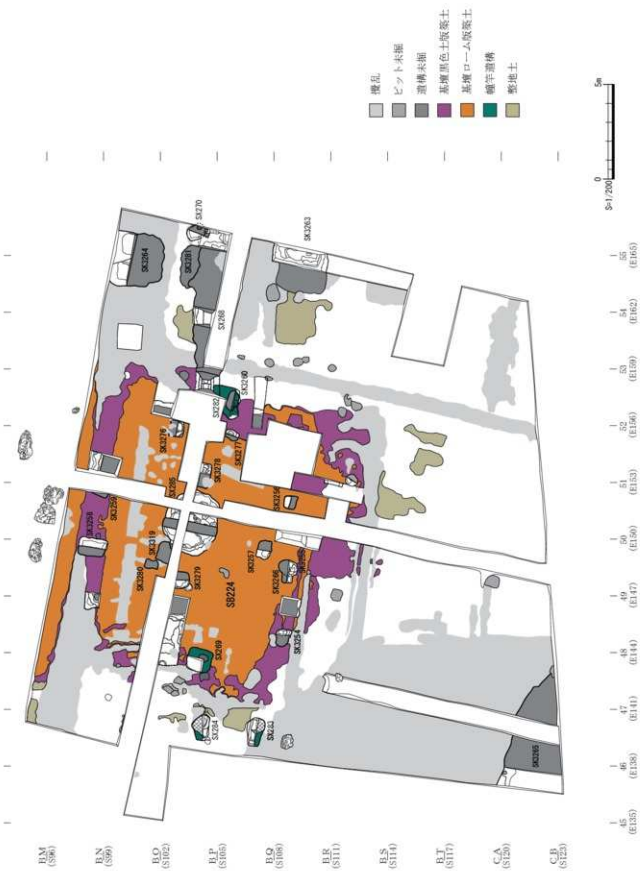
1a 黄褐色土	10YR5/6	しまり強い。粘性ややあり。ローム土主体。白色粘土粒・ブロックやや多量、黒色土粒微量、炭化植物微量、焼土粒微量含む。
2a 灰黄色土	2.5Y5/3	しまり強い。粘性ややあり。ローム土主体。ロームブロック微量、黒色土粒微量、白色粘土粒多量、白色粘土ブロック微量含む。
3 黄褐色土	10YR5/6	しまり強い。粘性ややあり。砂礫多量を含む。ローム粒多量、黒色土粒微量、白色粘土粒微量含む。
4 黄褐色土	10YR5/4	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
5 砂礫層		
6 黄褐色土	10YR2/1	硬くしまる。粘性あり。黒色土・黒土層土主体、ローム粒多量、ロームブロック含む。
7 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
8 砂礫層		
9 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
10 砂礫層		
11 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒色土粒微量含む。
12 砂礫層		
13 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒色土粒微量、小石少量含む。
14 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒色土粒微量、黒土層土少量、小石少量含む。
15 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒色土粒・ブロック微量、小石少量含む。
16 砂礫層		
17 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
18 砂礫層		
19 黄褐色土	10YR5/6	やや硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
20 砂礫層		
21 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
22 砂礫層		
23 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。
24 砂礫層		
25 黄褐色土	10YR5/6	しまり強い。粘性あり。ローム土主体。黒土層土・黒c層土、黒色土粒微量含む。
26 砂礫層		
27 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒土層土粒子、黒色土粒微量含む。
28 砂礫層		
29 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ロームブロック、黒土層～黒c層ブロック微量、黒色土粒微量含む。
30 砂礫層		
31 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体土。
32 砂礫層		
33 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体土。
34 砂礫層		
35 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体土。
36 砂礫層		
37 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体土。黒色土粒微量含む。
38 黄褐色土	10YR2/1	硬くしまる。粘性あり。黒色土・黒土層土主体、ローム粒、ロームブロック微量含む。
39 砂礫層		
40 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体土。
41 砂礫層		
42 黄褐色土	10YR2/1	硬くしまる。粘性あり。黒色土・黒土層土主体、ローム粒微量含む。
43 砂礫層		
44 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒土層土・黒c層土ブロック微量含む。
45 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒色土粒微量、小石少量含む。
46 砂礫層		
47 砂礫層		
48 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。黒土層土主体。黒色土粒、ローム粒少量、ロームブロック少量、小石少量、砂含む。
49 黄褐色土	10YR2/1	硬くしまる。粘性あり。黒土層土・黒色土粒主体、ローム粒、ロームブロック微量、黒c層土少量、小石少量含む。
50 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒c層土、黒色土粒微量、黒土層土微量含む。
51 黄褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。黒c層土、黒色土粒、黒土層土少量含む。
52 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム土主体土。黒色土粒・黒土層ブロック、黒c土微量含む。

図面 89 塔地区 塔 1 SB223 塔礎石建物 SD413 溝 SK308 輪竿遺構

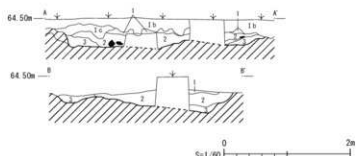
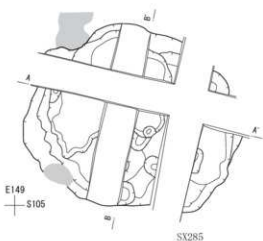
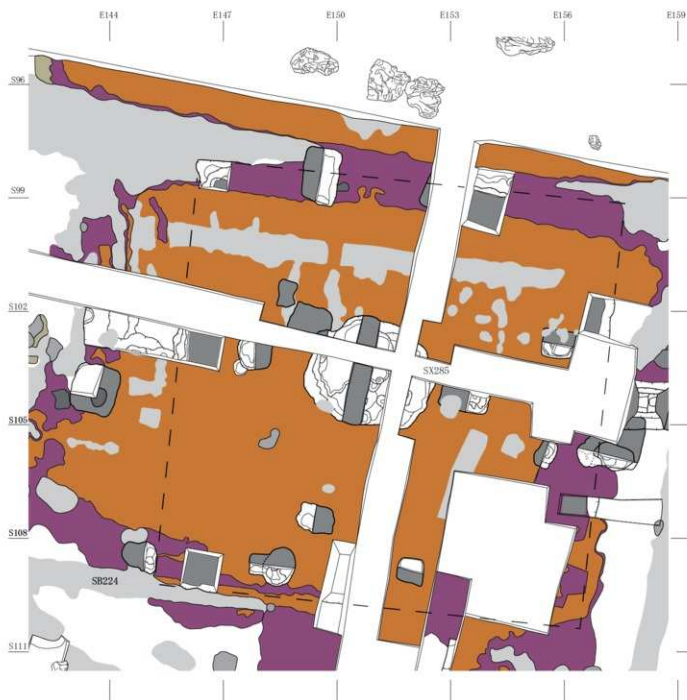


SD413溝			
1	灰白色土	10108/2	しまり強い、粘性強い、白色粘土主体層。灰黄色粘質土多量、明褐色土粒少量、黒色土粒散見含む。
2	に高い黄褐色土	10105/4	硬くしまる、粘性強い、白色粘土粒多量、黒色土粒散見、暗黄褐色粘質土含む。
3	黒褐色土	10102/2	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒散見、黒色土粒少量含む。
4	黒褐色土	10103/1	しまり強い、粘性ややあり、ローム粒散見、黒色土粒少量含む。
SK308 柱穴 (1~8: 柱取穴、9~14: 掘方埋土)			
1	黄褐色土	2.033/4	しまりややあり、粘性強い、層上部に粘土・炭化物を散見含む、ローム粒散見、灰白色粘土粒、黒色土粒散見含む。
2	黒褐色土	10102/2	しまりあり、粘性あり、黒土粘土主体層、ローム粒散見、白色土粒散見、黒色土粒散見含む。
3	灰黄褐色土	10104/2	しまりややあり、粘性あり、ローム粒少量、白色粘土少量、黒色土粒散見、焼土粒散見含む。
4	黒褐色土	10102/1	しまりややあり、粘性ややあり、白色粘土との混合土、ローム粒散見、黒色土粒散見、黒土層土少量含む。
5	黒褐色土	10103/2	しまりあり、粘性強い、黒土層土主体層。
6	灰黄褐色土	10104/2	しまりあり、粘性強い、ローム粒散見、白色粘土粒やや多量、黒土層土少量、黒色土粒散見含む。
7	に高い黄褐色土	10105/4	しまりあり、粘性強い、ローム土主体層、黒土層土少量、白色粘土粒散見、黒色土粒散見含む。
8	灰黄褐色土	10104/2	しまりあまりなし、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック多量、白色粘土粒少量、黒土層土少量、黒色土粒散見含む。
9	黄褐色土	10105/6	硬くしまる、粘性あり、ローム土主体層、黒土層土散見、白色粘土粒散見、黒色土粒散見、灰褐色土散見含む。
10	黒褐色土	10102/1	しまりあり、粘性あり、ローム粒多量、黒土層土粒少量、白色粘土粒散見、黒色土粒含む。
11	黄褐色土	10105/6	硬くしまる、粘性強い、ローム土主体層、黒土層土散見、白色粘土粒散見、黒色土粒散見含む、層上面全面に明確な焼き痕あり。
12	に高い黄褐色土	10104/2	しまりあり、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック多量、黒土層土粒少量、黒土層土少量、白色土粒少量含む。
13	黄褐色土	10105/6	しまり強い、粘性あり、ローム土主体層、黒土層土散見、黒土層土散見、白色粘土粒散見、黒色土粒散見含む、層上面部分に明確な焼き痕あり。
14	黄褐色土	10105/6	硬くしまる、粘性あり、ローム土主体層、黒土層土散見、黒土層土散見、白色粘土粒散見、黒色土粒散見含む、層上面全面に明確な焼き痕あり。
SB223塔 (1: 基壇外周構築土、石帯構築土)			
1	暗灰黄色土	2.033/2	硬くしまる、粘性あり、ローム粒散見、白色粘土粒多量、焼土粒散見、炭化物粒散見含む。
2	に高い黄褐色土	2.016/2	硬くしまる、粘性強い、白色粘土主体、黒色土粒散見含む。
3	黒褐色土	10102/1	硬くしまる、粘性あり、黒色土・黒土粘土主体層、ローム粒散見、白色粘土粒少量含む。
4	黒褐色土	10102/1	硬くしまる、粘性あり、黒色土・黒土粘土主体層、ローム粒少量含む。

図面 90 塔地区 塔2周辺遺構配置図

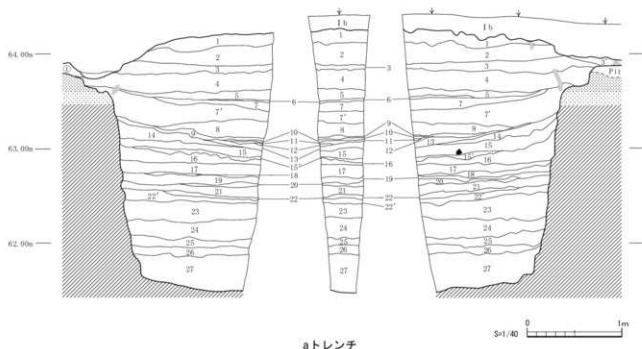


図面 91 塔地区 塔 2 SB224 塔礎石建物



SX285			
1	黄褐色土	HPB5-6	しまり強い、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色スコリアと赤色スコリアわずかに含む。
2	灰黄褐色土	2.314/3	細くしまる、粘性あり、ローム土主体、砂粒微量、黒色土粒少量、黒色スコリアと赤色スコリアわずかに含む。
3	黄褐色土	2.315/3	細くしまる、粘性やや強い、ローム土主体、砂粒微量、黒色スコリアと赤色スコリアわずかに含む。

図面 92 塔地区 塔2 SB224 基礎・掘込地兼版築土 1

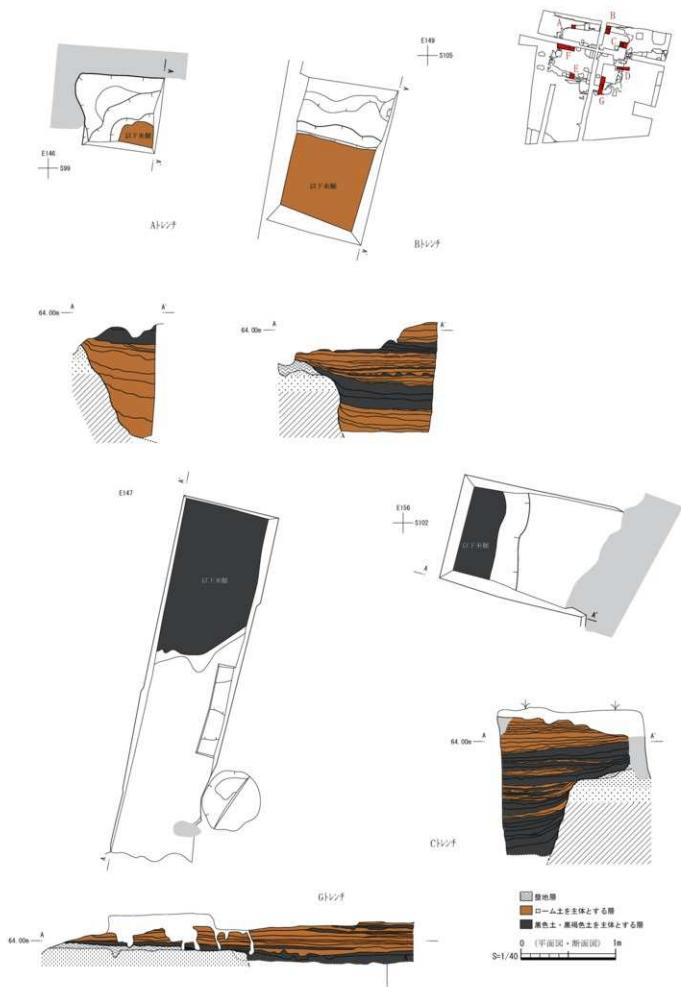


aトレンチ

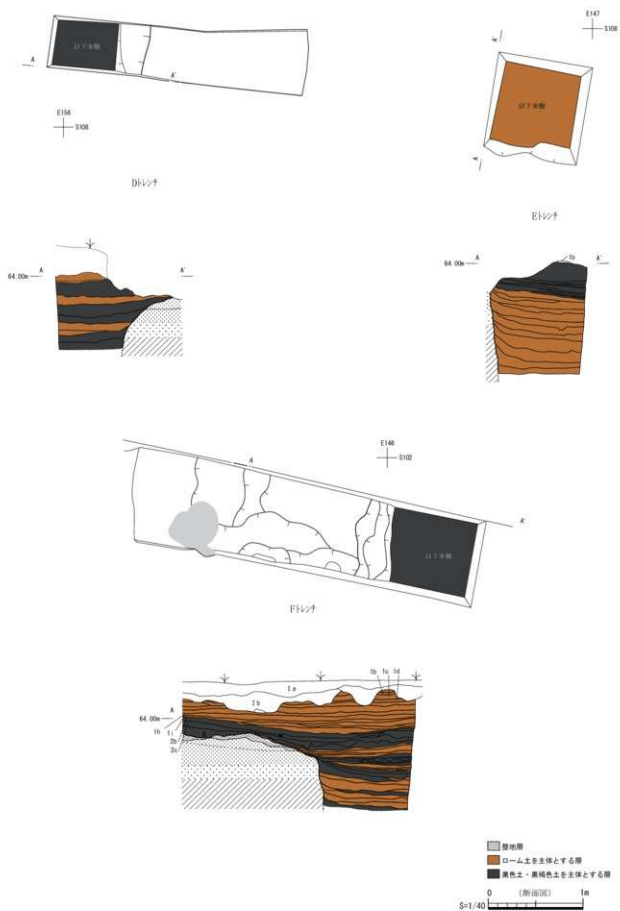
SR224

- | | | | |
|-----|-------|--------------------------|---|
| 1 | 黄褐色土 | 101K6.6 | 硬くしまる, すきまあり, ローム土からなる, 黒色粘土混入。 |
| 2 | 黄褐色土 | 101K6.6 | 極めて硬質, ローム土からなる, 黒色粘土混入。 |
| 3 | 黒色土 | 101K1.7/1 | 硬くしまる, ローム粘・ロームブロック少量。 |
| 4 | 褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, ローム土からなる。一部, ローム土と黒色土の放棄層 |
| 5 | 黄褐色土 | 101K6.6と黒色土101K1.7/1の互層。 | 黄褐色土はロームを主体とし黒色粘土少量混入, 黒色土はローム粘・ロームブロックが混入。 |
| 6 | 黄褐色土 | 101K5.6と黒色土101K1.7/1の互層。 | |
| 7 | 黒色土 | 101K1.7/1 | 硬くしまる, ローム粘少量。 |
| 7' | 暗茶褐色土 | 101K3/1 | 硬質だがしまりややなし, すきまあり, ローム粘・ロームブロック多量, 黒色粘, 黒色ブロック少量, 暗茶褐色土混量。 |
| 8 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, すきまややあり, 黒色粘少量。 |
| 9 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 極めて硬質, ローム主体。 |
| 10 | 暗黄褐色土 | 101K5.4 | 硬くしまる, すきまややあり, ロームブロックと黒色土混合, 暗茶褐色土混量。 |
| 11 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 極めて硬質, ローム土からなる。 |
| 12 | 暗黄褐色土 | 101K5.4 | ローム, 黒色, 暗茶褐色土ブロックの混合。 |
| 13 | 暗黄褐色土 | 101K5.4 | 硬くしまる, ローム粘, ロームブロック多量, 黒色土ブロック, 黒色粘少量, 暗茶褐色土混量。 |
| 14 | 黒褐色土 | 101K3/1 | しまりあり。 |
| 15 | 暗黄褐色土 | 101K5.4 | 硬くしまる, すきまあり, ロームブロック主体, 黒色粘, 黒色ブロック, 暗茶褐色土ブロック少量。 |
| 15' | 暗黄褐色土 | 101K5.4 | 1層と同じ, ややすきまあり。 |
| 16 | 黒褐色土 | 101K3/1 | しまりあがるがすきまあり。 |
| 17 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, すきまあり, ローム土のみなり黒色土混量。 |
| 18 | 黒褐色土 | 101K2/1 | しまりあり, ローム粘, ロームブロック少量。 |
| 19 | 黄褐色土 | 101K5.4 | 硬くしまる, すきまあり, ローム土からなる, 黒色土ブロック多く混入。 |
| 20 | 黒褐色土 | 101K2/1 | 硬くしまる, ロームブロック多く含む。 |
| 21 | 黄褐色土 | 101K5.4 | 硬質, すきまあり, 黒色粘少量, ロームブロック多量。 |
| 22 | 黒褐色土 | 101K2/1 | 硬くしまる, ローム粘, ロームブロック多く含む。 |
| 22' | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, 黒色土, 赤褐色土ブロック混入。 |
| 23 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, ややすきまあり, 黒色土ブロック混量。 |
| 24 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, 黒色土ブロック混量。 |
| 25 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, すきまあり, ローム土主体。 |
| 26 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, ローム土主体。 |
| 27 | 黄褐色土 | 101K5.6 | 硬くしまる, すきまあり, ロームブロック多い。 |
| ① | 暗褐色土 | 101K3/3 | やや硬質, ローム粘多量, ロームブロック少量, 3層と一連の積り土か。 |

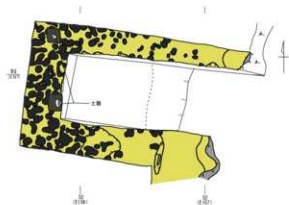
図面 93 塔地区 塔2 SB224 基壇・掘込地兼版築土2



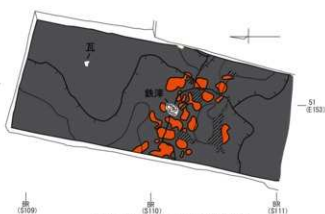
図面 94 塔地区 塔2 SB224 基壇・掘込地兼版築土3



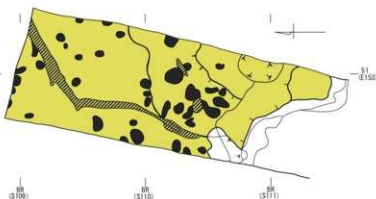
図面 95 塔地区 塔2 SB224 版築構築状況図



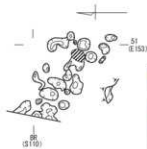
(1) Dトレンチ3層上面確認状況



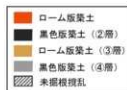
(3) Gトレンチ2層上面確認状況



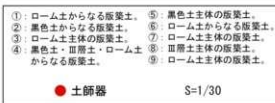
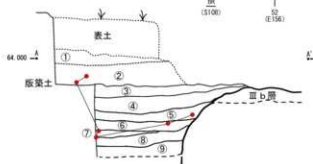
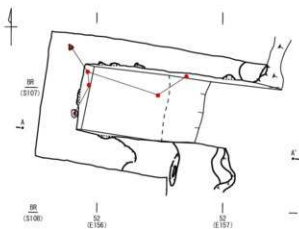
(2) Gトレンチ3層上面確認状況



(4) Gトレンチ2層上面完掘

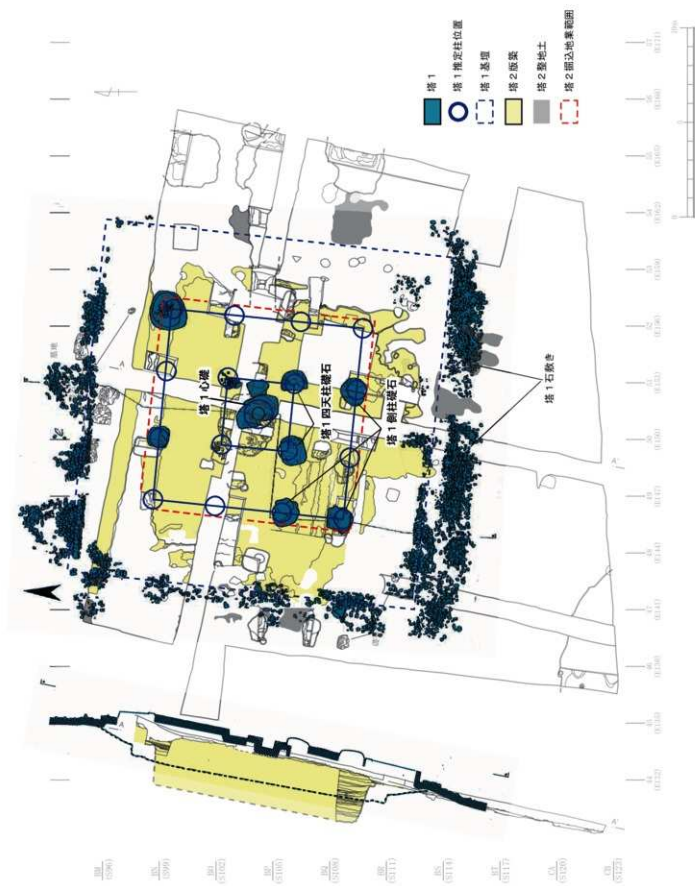


突き棒痕跡 平面図 (S=1/30)

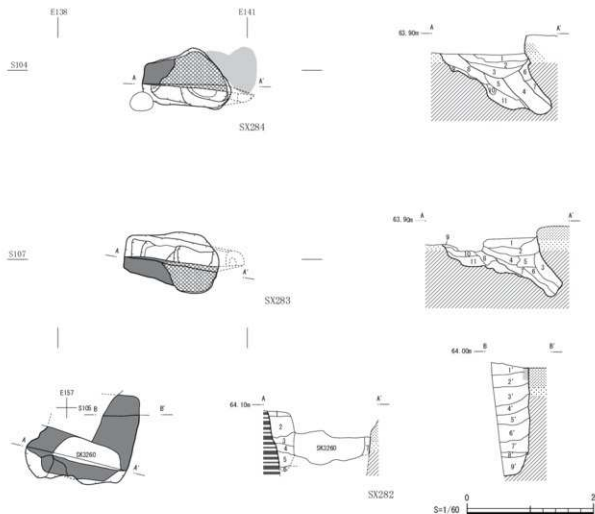


Dトレンチ土師器出土状況

図面 96 塔地区 塔1・塔2重ね図

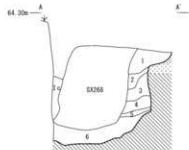
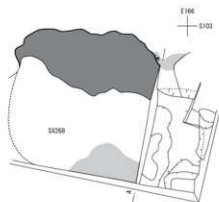


図面 97 塔地区 SX282 ~ 284 幢半遺構

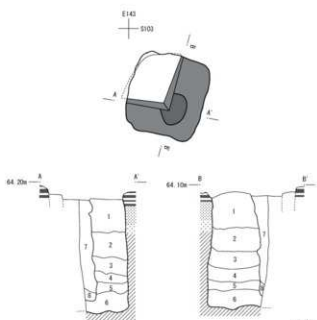
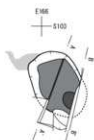


SX282 (1~7; 母体取次 8~11; 埋土)	SX281 (1~1; 柱状取次 2~9; 埋土)
1 埴間色土 10YR3/4 しまりあり, 粘性あり, ローム粒多量, ロームブロックやや多量, 罫層ブロック少量, 黒色土ブロック少量含む。	1 黒褐色土 10YR2/2 しまり強い, 粘性あり, 黒色土と罫層土主体, ローム粒多量, ロームブロック少量。
2 埴間色土 10YR3/3 しまりあまりなし, 粘性あまりなし, ローム粒多量, ロームブロック少量, 黒色土粒少量含む。	2 埴間色土 10YR3/4 しまり強い, 粘性強い, ローム粒多量, ロームブロック少量, 黒色土粒少量含む。
3 黒褐色土 10YR2/2 しまりあまりなし, 粘性あり, ローム粒少量, ロームブロック微量, 罫層ブロック少量含む。	3 黒褐色土 10YR2/3 しまり強い, 粘性ややあり, ローム粒多量, ロームブロック少量, 黒色土ブロック微量含む。
4 黒褐色土 10YR2/2 しまりあまりなし, 粘性あまりなし, ローム粒多量, ロームブロック微量, 黒色土粒微量, 罫層ブロック微量含む。	4 黒褐色土 10YR2/3 しまり強い, 粘性強い, ローム粒多量, ロームブロック微量, 罫層土ブロック微量含む。
5 黒褐色土 10YR2/2 しまりあり, 粘性あまりなし, ローム粒多量, ロームブロック微量, 罫層ブロック少量含む。	5 黒褐色土 10YR2/2 しまり強い, 粘性あり, ローム粒少量, ロームブロック微量, 罫層土ブロックやや多量, 黒褐色土小ブロック微量含む。
6 黒褐色土 10YR2/2 しまりあまりなし, 粘性あまりなし, ローム粒多量, ロームブロック少量, 罫層ブロック少量, 黒色土ブロック少量含む。	6 黒褐色土 10YR2/2 しまり強い, 粘性強い, 罫層土主体, ローム粒微量, 黒色土粒微量含む。
7 黒褐色土 10YR2/2 しまりあまりなし, 粘性あまりなし, ローム粒多量, ロームブロック少量, 黒色土, 今や粗い罫層土粒少量含む。	7 黒褐色土 10YR2/3 しまり強い, 粘性強い, 罫層土主体, ローム粒微量, ロームブロック少量, 黒色土粒微量含む。
8 黒褐色土 10YR2/2 硬くしまる, 粘性あり, ローム土主体, 罫層土ブロック少量含む。	8 黒褐色土 10YR2/3 硬くしまる, 粘性あり, ローム粒や中多量, ロームブロック少量, 黒色土粒少量, 罫層土ブロック少量含む。
9 黒褐色土 10YR3/4 硬くしまる, 粘性あり, ローム土主体。	9 黒褐色土 10YR3/4 しまり強い, 粘性強い, ローム土主体, 黒色土, 罫層土微量含む。
10 褐色土 10B1/4 硬くしまる, 粘性あり, ローム土主体, 罫層土ブロック少量含む。	10 黒褐色土 10YR2/2 しまりやや強い, 粘性あり, ローム粒含む。
11 黒褐色土 10YR3/4 硬くしまる, 粘性あり, ローム土主体, 黒褐色土少量含む。	11 黒褐色土 10YR3/4 しまりあり, ローム土主体, 黒褐色土少量含む。
SX282 (1~7; 埋土)	SX282 (1~9; 埋土)
1 黒褐色土 10YR2/2 しまり強い, 粘性あり, ローム粒微量。	1' 黒褐色土 10YR1/7 硬くしまる, 粘性あり, ローム粒少量, ロームブロック微量, 黒色土主体, 罫層土含む。
2 黒色土 10YR2/1 硬くしまる, 粘性あり, 黒色土主体, ローム粒微量, ロームブロック微量, 罫層土含む。	2' 黒褐色土 10YR2/1 よくしまる, 粘性あり, 黒色土主体, ローム粒少量, 罫層土含む。
3 黒褐色土 10YR2/3 硬くしまる, 粘性あり, ローム粒少量, ロームブロック微量, 黒色土粒少量, 罫層土多量含む。	3' 黒褐色土 10YR2/1 よくしまる, 粘性あり, 黒色土主体, 罫層土多量。
4 黒褐色土 10YR2/3 硬くしまる, 粘性あり, ローム粒微量, 罫層土ブロック多量含む。	4' 黒褐色土 10YR2/1 よくしまる, 粘性あり, ローム粒やや多量, ロームブロック微量, 罫層土多量含む。
5 黒褐色土 10YR2/2 硬くしまる, 粘性あり, ローム粒微量, 罫層土ブロック多量含む。	5' 黒褐色土 10YR2/2 しまりあり, 粘性あり, 黒色土と罫層土主体, ローム粒多量, ロームブロックやや多量, 罫層土微量含む。
6 黒褐色土 10YR2/2 硬くしまる, 粘性あり, ローム粒多量, 罫層土多量, 黒色土粒含む。	6' 黒褐色土 10YR2/2 よくしまる, 粘性あり, 黒色土と罫層土主体, ローム粒やや多量, ロームブロックやや多量含む。
7 黒褐色土 10YR2/2 しまり強い, 粘性あり, ローム粒多量, ロームブロック微量含む。	7' 埴間色土 10YR2/3 硬くしまる, 粘性あり, 罫層土主体, ローム粒多量, ロームブロック少量, 黒色土粒多量含む。
8 黒褐色土 10YR2/2 しまり強い, 粘性あり, ローム粒少量, ロームブロック微量, 罫層土多量, 黒色土粒含む。	8' 黒褐色土 10YR2/2 よくしまる, 粘性あり, 埴間土と黒色土主体, ローム粒少量含む。
9 埴間色土 10YR2/3 硬くしまる, 粘性あり, ローム土主体, 黒褐色土少量, ローム粒多量, 罫層土微量含む。	9' 埴間色土 10YR2/3 硬くしまる, 粘性あり, 罫層土主体, 黒色土粒多量, ローム粒多量, ロームブロック微量含む。

図面 98 SK3381 土坑 SX269 幡竿遺構・270 柱穴



SK3281



SX269

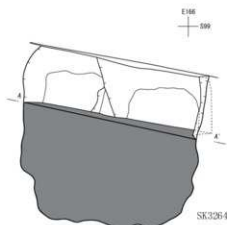


SX270

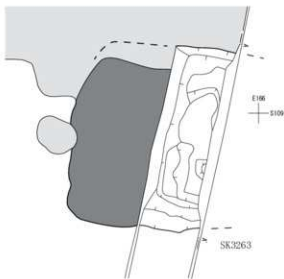


SK3281		SX270 A-A' (1-5:埋土)			
1 黒褐色土	10YR2/2	しまり強い、ローム粒少量含む。	1 増褐色土	10YR3/3	しまり強い、黒い層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック微量、黒色土粒少量含む。
2 黒色土	10YR2/1	しまりあり、ローム粒微量含む。	2 黒褐色土	10YR2/3	硬くしまる、黒い層土主体層、ローム粒微量、黒色土少量含む。
3 増褐色土	10YR3/3	少量、黒い層土微量、黒色土少量含む。	3 黒褐色土	10YR2/3	硬くしまる、ローム粒やや多量、黒色土粒少量含む。
4 黒褐色土	10YR2/3	しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック多量、黒色土少量、黒い層ブロック少量含む。	4 黒褐色土	10YR2/2	しまりあり、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック微量、黒い層土少量含む。
5 黒色土	10YR2/1	しまりあり、黒色土主体層、ローム粒多量、ロームブロック少量含む。	5 黄褐色土	10YR5/6	しまりあり、ローム土主体層、黒色土ブロック少量含む。
6 黄褐色土	10YR5/6	しまりあり、ローム土主体層。	SX270 B-B' (1-2:埋土、3:柱痕跡)		
SX269 (1~6:埋土、7:柱痕跡、8:柱注痕)		1 黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる、ローム土主体層、黒色土ブロック微量含む。	
1 増褐色土	10YR3/3	硬くしまる、ローム土、黒色土主体層、3面の向き痕跡を断面で確認している。	2 黒褐色土	10YR2/3	硬くしまる、黒い層土主体層、ローム粒少量、ロームブロック微量、黒色土少量含む。
2 黄褐色土	10YR2/1	硬くしまる、ローム土少量、黒色土多量含む、3面の向き痕跡を断面で確認している。	3 増褐色土	10YR3/4	しまり弱い、ローム粒少量含む。
3 黄褐色土	10YR5/6	しまりあり、ローム土主体層、黒い層ブロック土少量、黒い層ブロック土微量、黒色土少量含む。			
4 増黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる、ローム土主体層、黒色土ブロック少量含む。			
5 黒褐色土	10YR2/2	非常に硬くしまる、黒色土主体層、ローム粒少量、ロームブロック少量含む。			
6 褐色土	10YR4/4	硬くしまる、ローム土主体層、黒い層ブロック土微量含む。			
7 増褐色土	10YR3/3	しまりなし、ローム粒やや多量含む。			
8 増褐色土	10YR3/3	柱頭まわり極めて硬くしまる。			

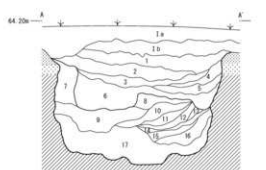
図面 99 SK3263・3264 土坑



SK3264



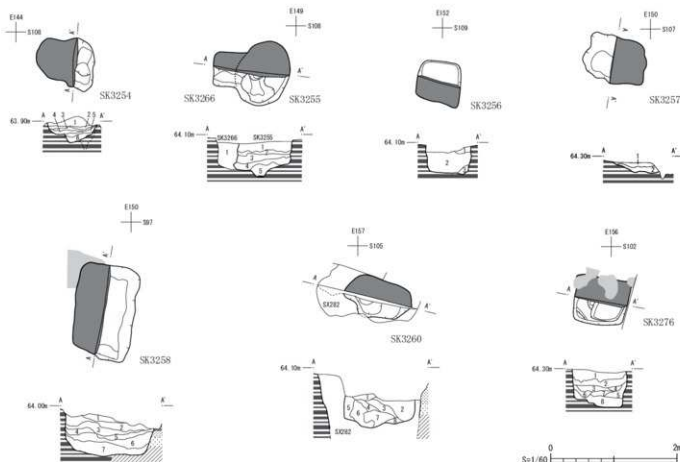
SK3263



0 2m
S=1/50

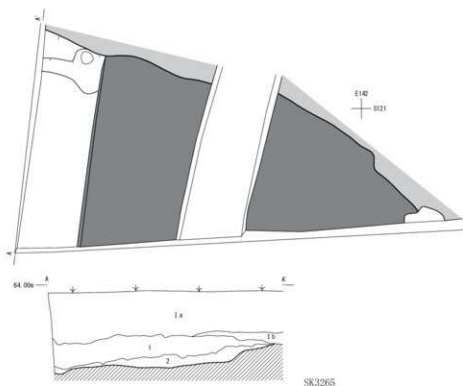
SK3264		SK3263		
1	褐色土 10YR1/4	しまりあり、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック少量、Ⅱb層土 微量、Ⅱc層土微量含む。	1 黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック微量を含む。
2	黒褐色土 10YR2/2	しまりやや弱い、粘性弱い、ローム粒、ロームブロック微量、黒色土少 量含む。	2 黒褐色土 10YR3/1	しまりあり、ローム粒やや多量、ロームブロック微量、Ⅱb層土微量含 む。
3	黄褐色土 10YR5/6	しまりあり、粘性あり、ローム土主体層、底面に炭化物、埴土粒を少量 層状に堆積する。	3 黒褐色土 10YR3/2	しまりあり、ローム粒多量、ロームブロックやや多量、Ⅱb層土微量、Ⅱc 層土微量含む。
4	黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、粘性やや弱い、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。	4 黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、ローム粒微量含む。
5	黒色土 10YR2/1	しまりあり、粘性やや弱い、ローム粒微量、Ⅱc層土少量含む。	5 黒褐色土 10YR2/3	しまりあり、ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。
6	黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、粘性やや弱い、ローム粒少量、ロームブロック微量含む。 しまりやや弱い、粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック微量、暗紅 色土含む。	6 黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、ローム粒少量、ロームブロック微量、Ⅱb層土、Ⅱc層土微量 含む。
7	黒褐色土 10YR2/2	しまり弱い、粘性やや弱い、ローム土主体層、灰黒褐色土を含む。	7 暗褐色土 10YR3/4	しまりあり、Ⅱc層土主体層、ローム粒多量、ロームブロック微量、Ⅱb層 土ブロック微量、Ⅱc層土微量含む。
8	黄褐色土 10YR5/6	しまりあり、粘性やや弱い、ローム粒多量、ロームブロック微量、黒色 土粒少量含む。	8 暗褐色土 10YR3/4	しまりあり、ローム粒多量、ロームブロック多量、Ⅱc層土ブロック微 量、黒色土微量含む。
9	黒褐色土 10YR2/2	しまりやや弱い、粘性あり、ローム土主体層、灰黒褐色土微量を含む。	9 黒褐色土 10YR2/3	しまりあり、ローム粒多量、ロームブロックやや多量、Ⅱc層土小ブロッ ク微量、黒色土ブロック微量含む。
10	黄褐色土 10YR5/6	しまりあり、粘性あり、ローム粒微量、ロームブロック微量、Ⅱb層土 多量含む。	10 暗褐色土 10YR3/3	しまりあり、やや粘性あり、ローム粒やや多量、ロームブロック微量、粗 い黒色土粒、Ⅱb層土粒多量含む。
11	黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、粘性あり、Ⅱb層土主体層、ローム粒少量、ロームブロッ ク少量含む。	11 黒色土 10YR2/1	しまりあまりなし、底面にⅡb層土が薄い層状に堆積する。
12	黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、粘性あり、ローム土主体層、Ⅱb層土少量含む。	12 暗褐色土 10YR3/3	しまりあり、粘性あり、Ⅱb層土主体層。
13	黄褐色土 10YR5/6	しまりあり、粘性あり、ローム土主体層、Ⅱb層土少。	13 黒褐色土 10YR2/2	しまりやや弱い、ローム粒やや多量、ロームブロック微量を含む。
14	黒褐色土 10YR2/2	しまりあり、粘性あり、ローム土主体層、灰黄褐色土微量、黒褐色土微 量含む。	14 黒褐色土 10YR2/2	しまりやや弱い、ローム粒微量、暗褐色土含む。
			15 黒褐色土 10YR2/3	しまりあり、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック微量、Ⅱb層土ブ ロック少量、黒色土微量含む。
			16 黒褐色土 10YR2/2	しまりあまりなし、ローム粒やや多量、ロームブロック微量、Ⅱb層ブロッ ク微量含む。
			17 黄褐色土 10YR5/6	しまりあり、ローム土主体層、黒褐色土ブロック多量含む。

図面 100 SSK3254 ~ 3258・3260・3266・3276 土坑



SK3254		SK3258	
1 黄褐色土	10YR5/8	1 黄褐色土	10YR5/6
硬くしまる。粘性あり。ローム土主体層。黒色土粒。暗茶色土粒散在含む。		硬くしまる。ローム土主体層。黒色土粒散在含む。	
2 暗褐色土	10YR3/4	2 褐色土	10YR4/6
硬くしまる。面層土主体層。ローム粒散在。ロームブロック散在。黒色土粒少量含む。		硬くしまる。ローム土主体層。黒色土ブロック少量。面層土少量含む。	
3 黄褐色土	10YR5/8	3 黄褐色土	10YR5/6
硬くしまる。ローム土主体層。暗茶褐色土ブロック散入する。		硬くしまる。ローム土主体層。黒色土粒散在含む。	
4 暗褐色土	10YR3/4	4 褐色土	10YR4/6
硬くしまる。ローム粒散在。ロームブロック多量。黒色土ブロック含む。		硬くしまる。ローム土主体層。面層土少量含む。	
5 黄褐色土	10YR5/8	5 黄褐色土	10YR5/6
硬くしまる。ローム土主体層。暗褐色土少量。黒色土粒散在含む。		硬くしまる。ローム粒多量。面層土ブロック多量。黒色土少量含む。	
6 暗褐色土	10YR3/4	6 黄褐色土	10YR5/6
硬くしまる。面層土主体層。ローム粒少量。ロームブロックやや多量。黒色土粒散在含む。		硬くしまる。ローム土主体層。黒色土粒散在含む。	
SK3255		SK3260	
1 黄褐色土	10YR5/8	1 暗褐色土	10YR3/4
しまりあり。部分的に硬くしまる。ローム土主体層。暗茶色粒。黒色土粒散在含む。		しまりあり。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒色土粒少量含む。	
2 にぶい黄褐色土	10YR4/3	2 黒褐色土	10YR3/2
しまりあり。ローム粒多量。ロームブロックやや多量。黒色土粒少量。黒色土ブロック少量含む。		しまりあり。ローム粒少量。ロームブロック多量。黒色土粒少量。面層土少量含む。	
3 黄褐色土	10YR5/6	3 黒褐色土	10YR3/1
しまりあり。部分的に硬くしまる。ローム土主体層。暗茶色粒。黒色土粒散在含む。		しまりあり。粘性あり。ローム粒少量。ロームブロック少量。黒色土粒やや多量。面層土少量含む。	
4 にぶい黄褐色土	10YR4/3	4 黒褐色土	10YR2/3
しまりあり。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒色土粒少量。黒色土ブロック少量含む。		硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。黒色土粒少量。面層土多量含む。	
5 黄褐色土	10YR5/6	5 黒褐色土	10YR2/2
しまりあり。部分的に硬くしまる。ローム土主体層。黒色土粒散在含む。		硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。黒色土粒少量。面層土少量含む。	
SK3266		SK3276	
1 黄褐色土	10YR5/6	1 にぶい黄褐色土	10YR4/3
硬くしまる。ローム土主体層。黒色土粒。黒色土ブロックを特徴散在含む。		非常に硬くしまる。ローム小ブロックと黒色土ブロックの混合土。	
SK3256		2 にぶい黄褐色土	10YR5/4
1 明黄褐色土	10YR6/6	硬くしまる。ロームブロックと黒色土ブロックの混合土。	
非常に硬くしまる。粘性あり。ローム土主体。面層土粒散在含む。		3 にぶい黄褐色土	10YR4/3
2 にぶい黄褐色土	10YR4/3	しまりあり。ローム小ブロックと黒色土ブロックの混合土。	
しまりあり。粘性弱い。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒色土ブロック少量含む。		4 灰黄褐色土	10YR4/2
3 暗褐色土	10YR3/3	非常に硬くしまる。黒褐色土主体層。ローム粒を含む。	
硬くしまる。ロームブロック少量含む。		5 灰黄褐色土	10YR4/4
SK3257		非常に硬くしまる。黒褐色土主体層。ローム粒を多く含む。	
1 暗褐色土	10YR3/4	6 にぶい黄褐色土	10YR5/4
しまりあり。ローム粒多量。ロームブロック散在。微土散在。団化物散在含む。		しまりあり。ローム小ブロック多量。黒色土ブロック少量含む。	
2 黄褐色土	10YR5/6	7 にぶい黄褐色土	10YR4/3
しまりあり。ローム土主体層。面層土散入する。		しまりややあり。黒色土主体層。やや強いロームブロックを含む。	
		8 にぶい黄褐色土	10YR4/2
		しまりややあり。黒色土主体層。ロームブロックを含む。	

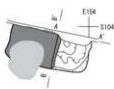
図面 101 SK3265・3277～3279 土坑



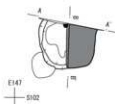
SK3265



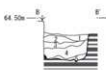
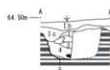
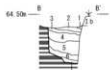
SK3277



SK3278

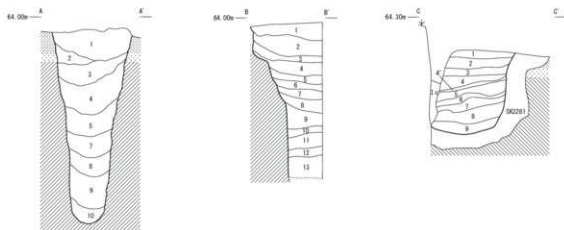
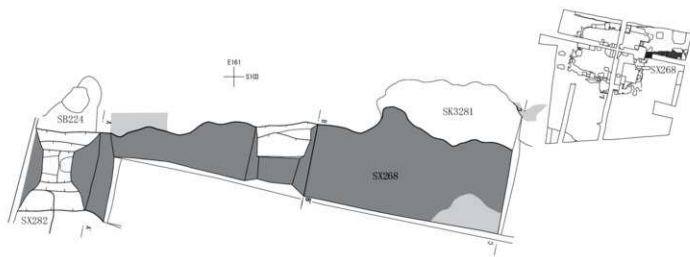


SK3279



SK3265	1 黄褐色土 10YR2/2	しまりあり、粘性ややあり、ローム粒少量、ロームブロック微塵量含む。	SK3279	1 黄褐色土 10YR5/6	非常に硬くしまる。ローム土主体層、黒色土ブロック微塵、白色砂粒小片微塵含む。
	2 黄褐色土 10YR5/6	しまりあり、粘性ややあり、やや粗いローム粒多量、灰層褐色土含む。		2 褐色土 10YR4/6	しまり強い、ローム土主体層、ロームブロック少量、黒褐色土粒少量、白色砂粒小片微塵含む。
SK3277	1 黄褐色土 10YR5/6	しまりややあり、ローム粒極少量含む。		3 暗褐色土 10YR3/4	しまり強い、ローム土主体層、褐色土粒微塵、黒色土ブロック微塵、白色砂粒小片微塵含む。
	2 暗褐色土 10YR4/6	しまりややあり、ロームブロック多量含む。		4 反黄褐色土 10YR4/2	しまり強く、部分的に非常に硬くしまる。ローム土主体層、黒色土粒微塵、黒色土ブロック微塵含む。
	3 暗褐色土 10YR4/4	しまりややあり、ローム粒少量含む。		5 反黄褐色土 10YR4/2	全体的にしまり強く、部分的に非常に硬くしまる。ローム土主体層、黒色土ブロックを多量に含む。
	4 暗褐色土 10YR3/4	しまりややあり、ロームブロック少量、黒色土ブロック多量含む。			
SK3278	1 明黄褐色土 10YR6/6	硬くしまる。ローム土主体層、黒色土小ブロック微塵含む。			
	2 黄褐色土 10YR5/6	硬くしまる。ローム土主体層、黒色土粒多量、反褐色土微塵含む。			
	3 黄褐色土 10YR5/3	非常に硬くしまる。ローム土主体層、褐色土粒少量、黒色土ブロック微塵、白色砂粒小片微塵含む。			
	4 黄褐色土 10YR5/4	非常に硬くしまる。ローム土主体層、褐色土粒少量、黒色土ブロック微塵含む。			
	5 黄褐色土 10YR5/6	しまり強い、ローム土主体層、黒色土粒少量、黒色土ブロック微塵含む。			
	6 黄褐色土 10YR5/3	しまり強い、ローム土主体層。			
	7 反黄褐色土 10YR5/4	硬くしまる。ロームブロック多量、黒色土ブロック多量含む。			

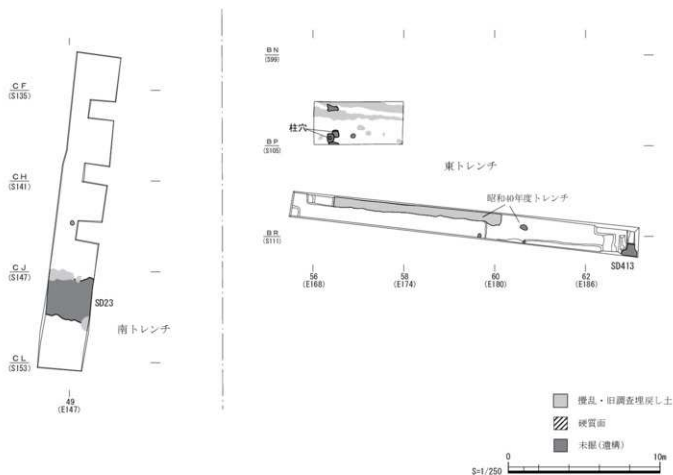
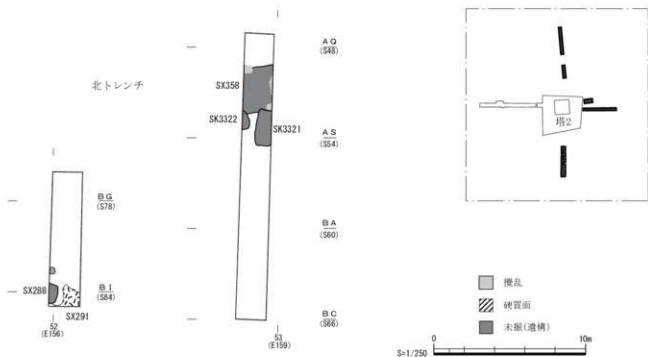
図面 102 SX268 不明遺構



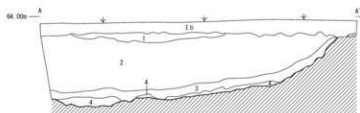
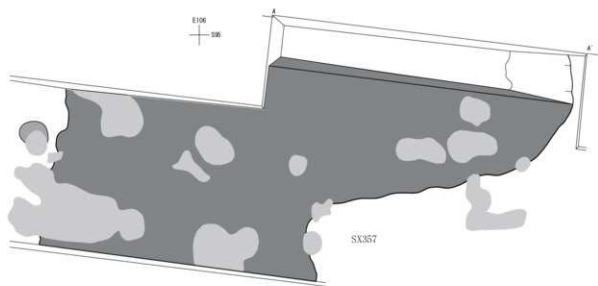
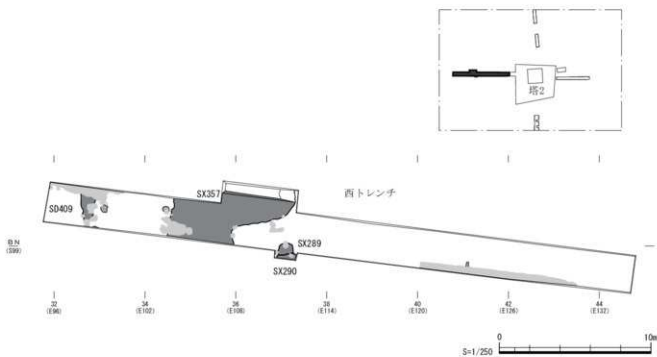
土質	層	説明	土質	層	説明
1 黄褐色土	10R5/6	硬くしまる。粘性弱い。ローム土主体層。薄い黒色土粒散見。炭酸塩結晶上のブロック含む。	1 暗褐色土	10R3/4	しまりあり。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒土ブロック少量。黒色土粒散見含む。
2 褐色土	10R4/4	しまり強い。粘性弱い。ローム粒多量。ロームブロック多量。粗い黒色土粒散見。にぶい黄褐色土粒含む。	2 暗褐色土	10R3/4	しまりあり。層上面硬くしまる。黒土ブロック少量含む。
3 黒褐色土	10R3/2	硬くしまる。粘性弱い。ローム土主体層。粗い黒色土粒散見。にぶい黄褐色土粒含む。	3 暗褐色土	10R3/2	しまりあり。層上面硬くしまる。黒土ブロック少量含む。
4 黒褐色土	10R2/2	しまりあり。粘性弱い。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒色土ブロック少量。黒土ブロック少量含む。上面と下面はロームブロック主体の層で、硬くしまる。	4 黒褐色土	10R2/2	しまり強い。ロームブロック少量。黒色土ブロック少量。黒土ブロック少量含む。
5 黒褐色土	10R3/2	しまりあり。粘性弱い。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒色土ブロック少量。黒土ブロック少量含む。	5 にぶい黄褐色土	10R4/3	しまりあり。ローム粒多量。ロームブロック少量。黒土ブロック少量。黒色土粒散見含む。
6 暗褐色土	10R3/4	しまりやや弱い。粘性なし。ローム粒多量。ロームブロック少量。黒色土粒少量。炭酸塩土ブロック含む。	6 黒褐色土	10R3/2	しまり強い。ローム粒多量。ロームブロック少量。黒土ブロック少量。黒色土粒少量含む。
7 暗褐色土	10R3/4	しまりあり。粘性やや弱い。ローム粒多量。ロームブロックやや多量。黒色土ブロック少量含む。	7 暗褐色土	10R2/2	しまり強い。ローム粒多量。ロームブロック少量。黒土ブロック少量。黒色土粒少量含む。
8 褐色土	10R4/4	しまり。上面硬く。下層弱い。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒色土粒含む。	8 黒褐色土	10R3/1	しまりあり。ローム粒やや多量。ロームブロックやや多量。黒土ブロック少量含む。
9 にぶい黄褐色土	10R3/4	しまり強い。粘性なし。ローム土主体層。黒色土粒少量含む。	9 暗褐色土	10R3/2	しまり強い。ローム粒多量。ロームブロック少量。黒土ブロック少量含む。
10 にぶい黄褐色土	10R3/4	しまりあり。粘性弱い。ローム土主体層。黒色土ブロック散見含む。	10 褐色土	10R4/4	しまり強い。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒土ブロック少量。黒色土粒少量含む。
11 黄褐色土	10R5/6	しまりあり。黒褐色土主体層。ローム粒多量。ロームブロック少量含む。	11 黄褐色土	10R5/6	しまりあり。ローム土主体層。黒土ブロック少量。黒色土粒少量含む。
12 にぶい黄褐色土	10R4/3	しまり強い。ローム土主体層。黒褐色土主体層。ローム粒多量。ロームブロック多量含む。	12 にぶい黄褐色土	10R4/3	しまり強い。ローム粒多量。ロームブロック多量。黒土ブロック少量含む。
13 黄褐色土	10R5/6	しまり強い。ローム土主体層。黒土ブロック少量含む。	13 黄褐色土	10R5/6	しまり強い。ローム土主体層。黒土ブロック少量含む。



図面 103 塔 2 周辺遺構配置図 1



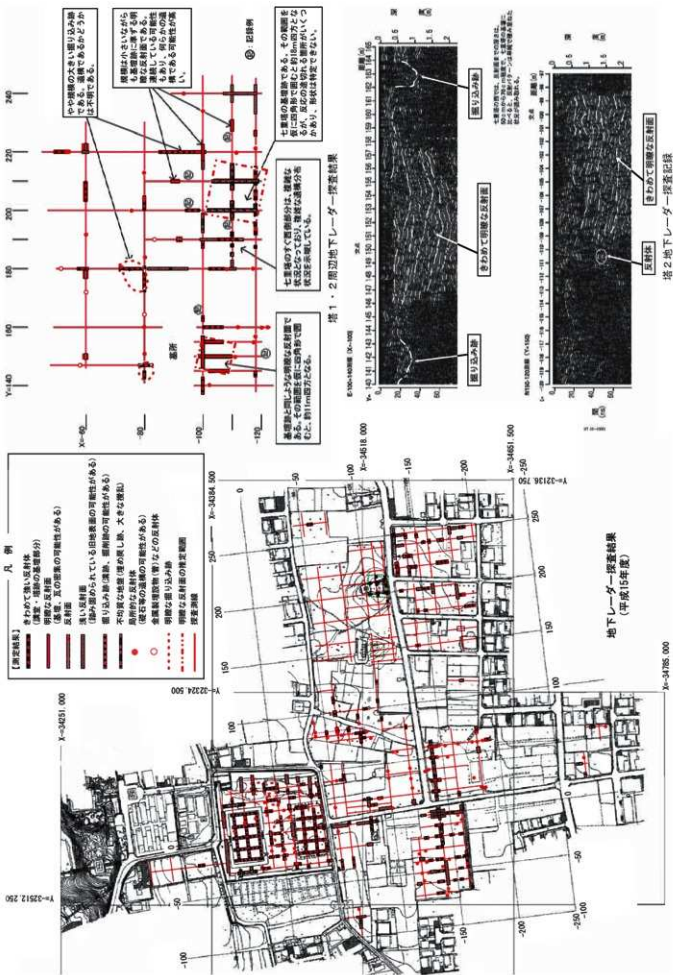
図面 104 塔 2 周辺遺構配置図 2



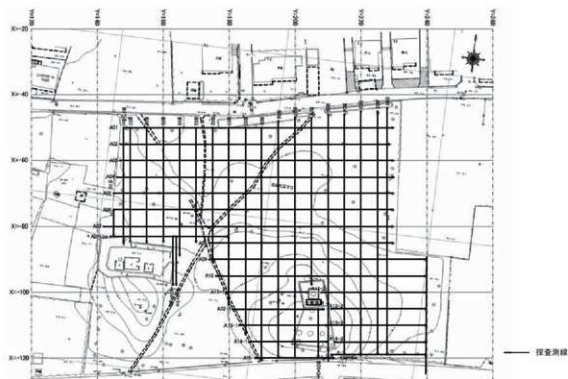
SX357	
1	黒褐色土 10TR2/2 しまりあり、粘性弱い、ローム粒少量含む。
2	黒褐色土 10TR2/2 しまりあり、粘性あり、粘土質、ローム粒 微量、炭化物微量含む。
3	黒褐色土 10TR2/2 硬くしまる、粘性あり、2層と同質。ローム 粒・ブロック微量含む。
4	黄褐色土 10TR5-6 しまりあり、粘性あり、ローム土主体。



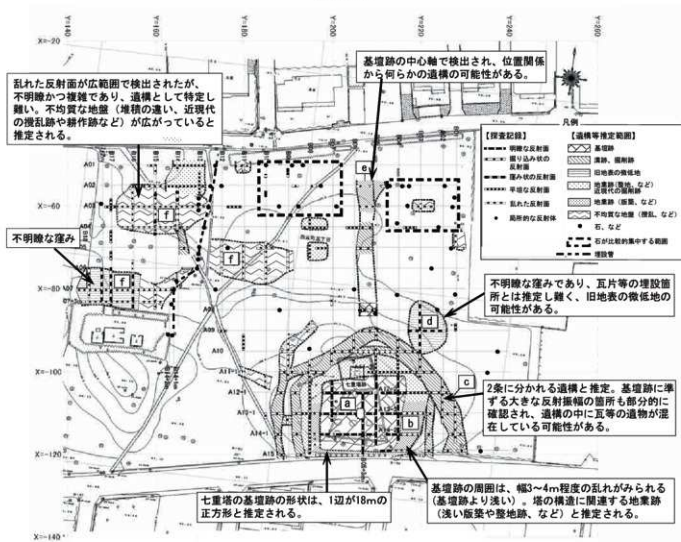
図面 105 塔地区 地下レーダー探査 1



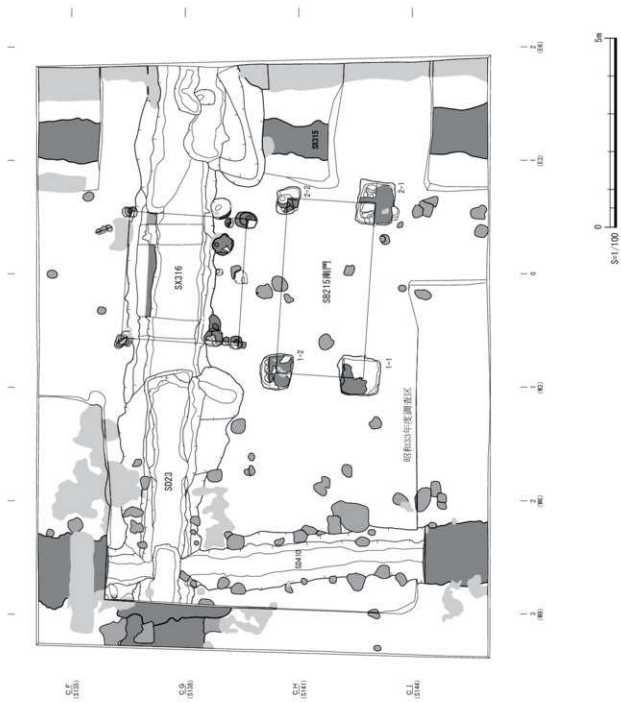
図面 106 塔地区 地下レーダー探査 2



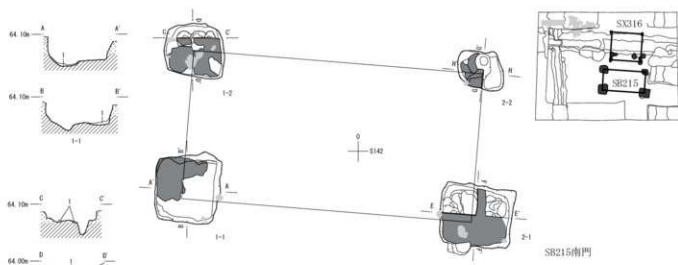
測線配置図



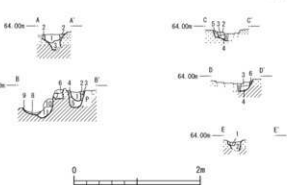
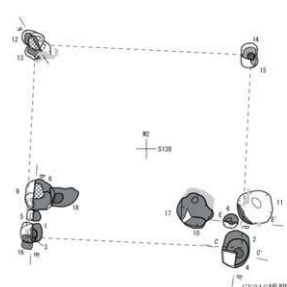
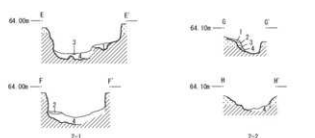
図面 107 南門地区 遺構配置図



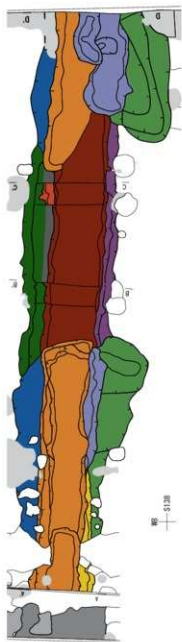
図面 108 南門地区 SB215 南門礎石建物 SX316 橋脚



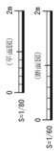
SB215南門



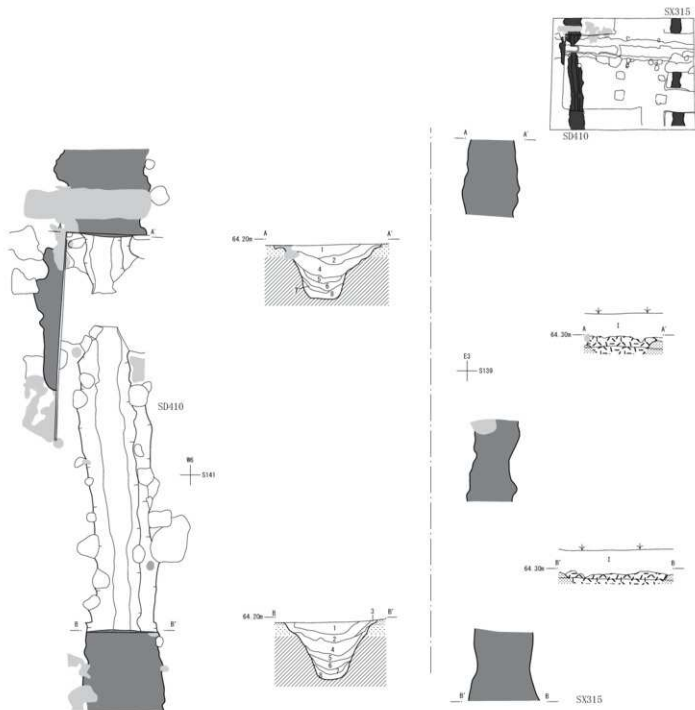
1-1	礎石跡欠け層方		
1	黒褐色土	10YR3/2	硬くしまる。粘性強い。ロームブロック少量含む。
1-2	礎石跡欠け層方		
1	黒褐色土	10YR3/1	非常に硬くしまる。粘性強い。ローム粒少量。ロームブロック少量含む。
2-1	1-1礎石跡欠け層方		
1	1に近い黄褐色土	10YR3/2	硬くしまる。粘性強い。ローム土主体。黒く層土少量。黒色硬くしまる。粘性あり。黒く層土と黒色土の主体。ローム粒微量。黒く層土微量含む。
2	黒褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。黒く層土と黒色土の主体。ローム粒微量含む。黒く層土微量含む。
3	黒色土	10YR2/1	硬くしまる。粘性ややあり。黒く層土と黒色土の主体。
4	黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性強い。ローム土主体。
2-2	1-1礎石跡欠け層方		
1	黒褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。黒色土粒多量。黒く層硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。黒く層土ブロック多量含む。黒く層所帯に硬くしまる。
2	黒褐色土	10YR3/2	硬くしまる。粘性あり。黒く層土と黒色土の主体。ローム粒微量含む。黒く層土微量含む。
3	黒褐色土	10YR3/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。反褐色土多量。黒色土少量含む。
4	黄褐色土	10YR5/6	硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。反褐色土多量。黒色土少量含む。
A-A'	SX316-12 (1:抜き取り穴 2~5:礎土)		
1	黒褐色土	10YR3/1	しまりあり。粘性中や強い。ローム粒少量。暗褐色土ブロック少量含む。
2	黒褐色土	10YR3/2	よくしまる。粘性あり。黒く層土主体。ローム粒微量。黒色土粒少量。
3	黒褐色土	10YR3/2	よくしまる。粘性あり。ローム粒微量。黒色土粒少量。黒く層土少量。黒色土粒少量含む。
B-B'	1~3: SX316-3 (1:柱基礎 2~3:礎土), 4~5: SX316-1 (4~5:礎土) 6~7: SX316-5 礎土		
1	黒褐色土	10YR2/2	しまりあり。粘性あり。ローム粒少量。黒く層土微量含む。
2	暗褐色土	10YR2/2	よくしまる。粘性あり。ローム粒。黒色土粒微量。黒く層土主体。
3	黒褐色土	10YR2/2	しまりあり。粘性あり。ローム粒微量。黒く層土・黒色土主体。
4	黄褐色土	10YR6/6	しまりやや強い。粘性強い。ローム土主体。黒く層土少量含む。
5	黒褐色土	10YR2/2	しまりやや強い。粘性あり。黒く層土含む。黒色土少量。ローム粒少量。ロームブロック微量含む。
6	黒褐色土	10YR2/1	しまり強い。粘性あり。土面所帯に硬く。ローム粒少量。黒く層土・黒色土主体。
7	黒褐色土	10YR3/1	しまりやや強い。粘性あり。ローム粒少量。ロームブロック微量含む。黒色土微量含む。黒く層土少量。
8	黒褐色土	10YR2/1	硬くしまる。粘性あり。ローム粒少量。ロームブロック微量含む。黒色土少量。黒く層土主体。
9	黒褐色土	10YR3/1	よくしまる。粘性あり。ローム粒。ロームブロック少量。黒色土粒少量含む。黒く層土主体。
10	黄褐色土	10YR6/6	よくしまる。粘性あり。ローム粒多量。黒色土粒少量含む。ロームブロック微量含む。
11	黒褐色土	10YR2/1	よくしまる。粘性あり。ローム粒少量。ロームブロック微量。黒く層土微量含む。黒色土少量。
C-C'-D-D'	1~4: SX316-4 (1:柱基礎 2~4:礎土), 5~6: SX316-6 (礎土)		
1	黒褐色土	10YR3/2	しまりあり。粘性中や強い。ローム粒少量。ロームブロック少量。黒色土粒微量含む。
2	暗褐色土	10YR3/3	よくしまる。粘性やや強い。ローム粒微量。黒く層土多量含む。
3	黒褐色土	10YR2/2	よくしまる。粘性あり。ローム粒微量。黒く層土多量。黒色土少量含む。
4	反黄褐色土	10YR5/2	よくしまる。粘性やや強い。ローム粒多量。黒く層土微量含む。
5	反黄褐色土	10YR4/2	しまりあり。粘性中や強い。粘性ややあり。ローム粒多量。ロームブロック微量。黒色土粒微量含む。
6	黒褐色土	10YR3/1	よくしまる。粘性あり。ローム粒少量。ロームブロック微量。黒く層土多量含む。
E-E'	SX316-6		
1	黒褐色土	10YR3/1	しまりやや強い。粘性ややあり。ローム粒少量含む。
2	黒褐色土	10YR3/1	しまり強い。粘性あり。黒く層土主体。ローム粒少量含む。



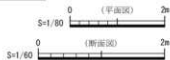
1) 河原砂土	(河原砂) 上層河原砂土、細粒河原砂土、中層河原砂土、下層河原砂土、
2) 河原土	(河原土) 上層河原土、細粒河原土、中層河原土、下層河原土、
3) 河原砂土	(河原砂) 上層河原砂土、細粒河原砂土、中層河原砂土、下層河原砂土、
4) 河原土	(河原土) 上層河原土、細粒河原土、中層河原土、下層河原土、
5) 河原砂土	(河原砂) 上層河原砂土、細粒河原砂土、中層河原砂土、下層河原砂土、
6) 河原土	(河原土) 上層河原土、細粒河原土、中層河原土、下層河原土、
7) 河原砂土	(河原砂) 上層河原砂土、細粒河原砂土、中層河原砂土、下層河原砂土、
8) 河原土	(河原土) 上層河原土、細粒河原土、中層河原土、下層河原土、
9) 河原砂土	(河原砂) 上層河原砂土、細粒河原砂土、中層河原砂土、下層河原砂土、
10) 河原土	(河原土) 上層河原土、細粒河原土、中層河原土、下層河原土、
11) 河原砂土	(河原砂) 上層河原砂土、細粒河原砂土、中層河原砂土、下層河原砂土、
12) 河原土	(河原土) 上層河原土、細粒河原土、中層河原土、下層河原土、



図面 110 SD410 溝 SX315 硬質面



SD410遺跡	
1 黒褐色土	101K3/2 しまりやであり、粘性やであり、ローム粒散見含む。
2 黒褐色土	101K3/1 しまりやであり、粘性やであり、ローム粒散見、ロームブロック散見含む。
3 黒褐色土	101K3/2 しまりあり、粘性ややあり、ローム粒散見、黒色土粒散見含む。
4 黒褐色土	7.53K3/1 よくしまる、粘性あり、ローム粒少量、ロームブロック散見含む。
5 黒褐色土	101K3/2 しまりあり、粘性あり、ローム粒多量、ロームブロック散見、黒+層土ブロック散見含む。
6 黒褐色土	101K2/2 しまりあり、粘性ややあり、ローム粒少量、ロームブロック散見、黒+層土ブロック散見含む。
7 黒色土	101K2/1 しまりあまりなし、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土粒少量含む。
8 黒色土	101K2/1 しまりあまりなし、粘性ややあり、ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
SX315硬質面	
1 黒褐色土	7.53K3/1 硬くしまる、粘性ややあり、ローム粒散見、黒層土+サブブロック状に多量含む。



図面 111 伽藍地外

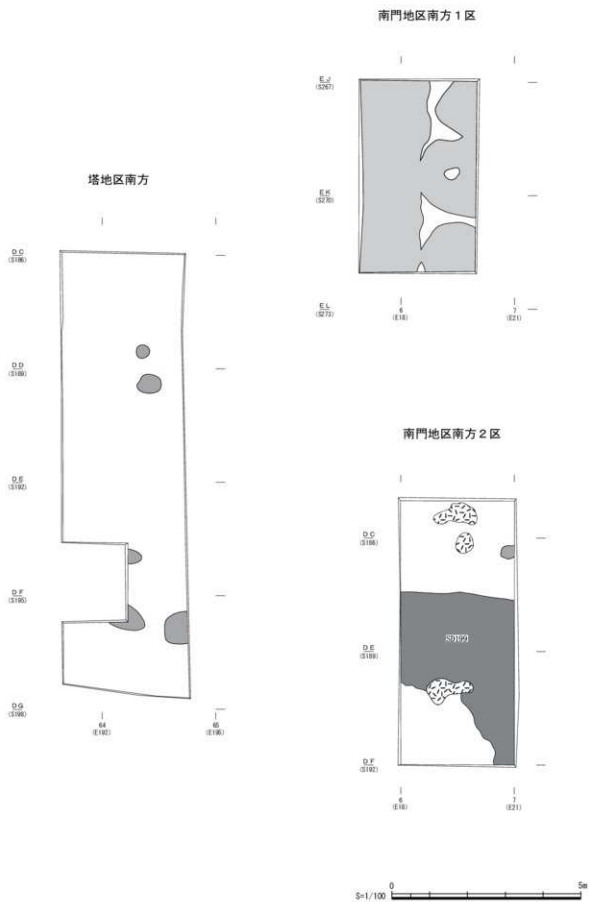
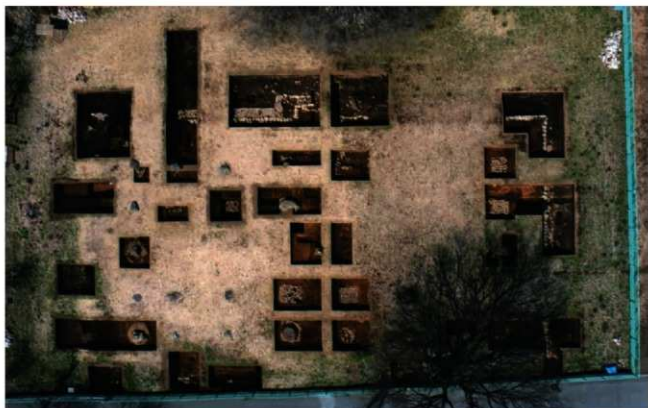


図 版



第13図 武蔵国分寺跡（僧寺地区）全景（東から）

図版1 金堂地区 1



1 金堂地区全景 (上が北)



2 金堂1区 全景 (西から)



4 金堂3区 全景 (西から)



3 金堂2区 全景 (西から)



1 金堂4区 全景 (西から)



2 金堂6区 全景 (北から)



3 金堂5区 全景 (北から)



4 金堂7区 全景 (上が北)



1 金堂8区 全景(北から)



2 金堂9区 全景(東から)



3 金堂11区 全景(南から)



4 金堂12区 全景(西から)



1 金堂13区 全景(南から)



2 金堂14区 全景(東から)



3 金堂15区 全景(南から)



4 金堂16区 全景(南から)



5 金堂17区 調査区東側(南から)



6 金堂17区 調査区西側(南から)



7 金堂18区 調査区東側(北から)



8 金堂18区 調査区西側(北から)



1 金堂19区 調査区東側(北から)



2 金堂19区 調査区西側(南から)



3 金堂20区 全景(東から)



4 金堂21区 調査区東側(南から)



6 金堂22区 全景(南から)



5 金堂21区 調査区西側(西から)



7 金堂23区 全景(東から)



1 金堂24区 全景(北から)



2 金堂25区 全景(西から)



3 金堂26区 全景(西から)



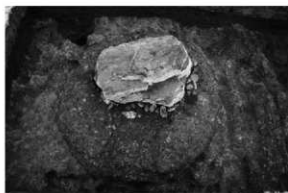
5 金堂29区 全景(南から)



4 金堂28区 全景(南から)



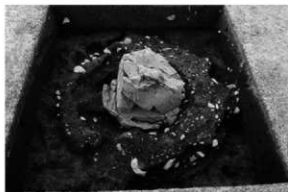
6 金堂30区 全景(西から)



1 金堂2区 SB217-1-1 礎石 (北から)



2 金堂2区 SB217-1-1 礎石 土層断面 (南から)



3 金堂13区 SB217-1-3 礎石 (東から)



4 金堂6区 SB217-2-5 礎石 (南から)



5 金堂6区 SB217-2-5 礎石 土層断面 (北から)



6 金堂16区 SB217-3-4 壺地業 (西から)



7 金堂17区 SB217-4-1 礎石 (南から)



8 金堂17区 SB217-4-1 礎石 掘付状況 (東から)



1 金堂 18 区 SB217-4-2 壺地業 (北から)



3 金堂 18 区 SB217-4-2 壺地業 (南東から)



2 金堂 20 区 SB217-4-4 礎石 掘付断面 (西から)



4 金堂 20 区 SB217-4-4 礎石 (北西から)



1 金堂20区 SB217-4-4 礎石 (北から)



2 金堂21区 SB217-4-5 礎石 (北から)



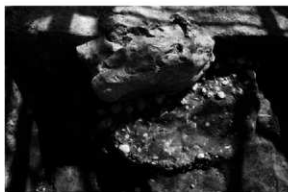
3 金堂17区 SB217-5-1 壺地業 (南から)



4 金堂18区 SB217-5-2 壺地業 (南から)



5 金堂21区 SB217-5-5 壺地業 (北から)



6 金堂10区 SB217-7-1 礎石 (北から)



7 金堂10区 SB217-8-1 壺地業 (北から)



8 金堂22区 SB217-8-3 礎石 (東から)



1 金堂9区 SB217-8-4 壺地業(南から)



2 金堂9区 SB217-8-5 壺地業(北から)



3 金堂9区 SB217 基壇外装・雨落石敷東面(東から)



4 金堂9区 SB217 基壇外装・雨落石敷東面(北から)



5 金堂9区 SB217 基壇外装・雨落石敷東面(東から)



1 金堂10区 SB217基壇外装東面(東から)



2 金堂10区 SB217基壇外装東面(南から)



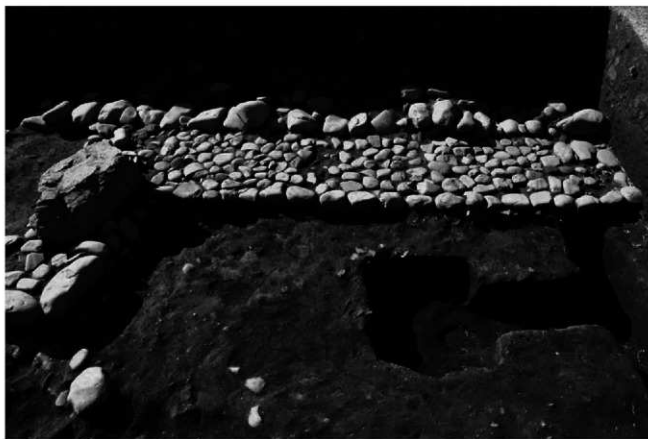
3 金堂8区 SB217基壇外装北東隅(北から)



4 金堂9区 SB217基壇外装北東隅(北東から)



5 金堂9区 SB217基壇外装北東隅(東から)



1 金堂7区 SB217 基壇外装・雨落石敷北面（北から）



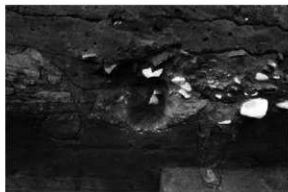
2 金堂7区 SB217 基壇外装・雨落石敷北面
（西から）



3 金堂7区 SB217 基壇外装北面（東から）



1 金堂 6 区 SB217 基壇外装・雨落溝北面 (北から)



2 金堂 6 区旧トレンチ SB217 基壇外装土層断面 (東から)



3 金堂 5 区 SB217 雨落石敷北西隅 (北から)



4 金堂 12 区 SB217 基壇外装・雨落石敷南面 (南から)



5 金堂 24 区 SB217 雨落石敷南面 (北から)



1 金堂7区 SB217北面階段 (北東から)



2 金堂7区 SB217北面階段 (北から)



3 金堂7区 SB217北面階段 (南から)



4 金堂7区 SB217北面階段 (西から)



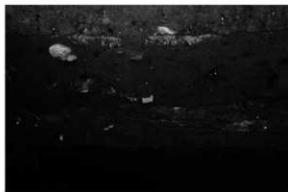
5 金堂7区 SB217北面階段 土層断面 (西から)



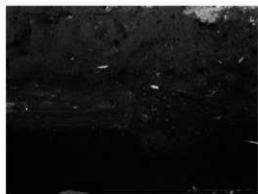
1 金堂7区 SB217北面階段土層断面(東から)



2 金堂7区 SB217北面階段土層断面(北から)



3 金堂7区旧トレンチ SB217北面階段土層断面(東から)



4 金堂7区旧トレンチ SB217北面階段土層断面(東から)



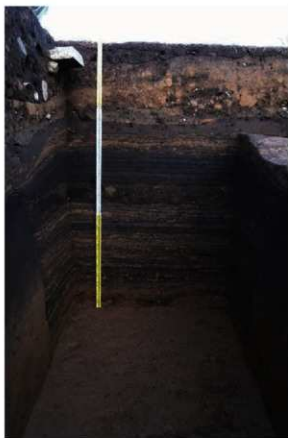
5 金堂11区 SB217南面階段部分(西から)



6 金堂24・25区 SB217南面階段部分(西から)



1 金堂4区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業版築断面(南西から)



2 金堂4区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業版築断面(西から)



3 金堂4区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業版築断面(西から)



1 金堂4区旧トレンチ SB217基礎・掘込地業版築 外装土層断面(南から)



2 金堂12区旧トレンチ SB217基礎・掘込地業版築断面(東から)



3 金堂9区旧トレンチ SB217基礎・掘込地業版築断面(東から)



4 金堂9区旧トレンチ SB217基礎・掘込地業版築断面(北から)



5 金堂19区 SB217版築断面(東から)



6 金堂19区 SB217版築断面(北から)



7 金堂24区旧トレンチ SB217南面階段部分土層断面(西から)



8 金堂24区旧トレンチ SB217南面階段部分土層断面(南から)



1 金堂6区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業(東から)



2 金堂6区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業
版築断面(東から)



3 金堂6区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業・
外装土層断面(東から)



4 金堂6区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業
版築断面(北から)



5 金堂5区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業
版築断面(西から)



1 金堂5区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業版築断面(西から)



2 金堂5区旧トレンチ SB217基壇・掘込地業版築断面(北から)



3 金堂5区旧トレンチ SB217掘込地業版築断面(南から)



4 金堂5区旧トレンチ SB217基壇版築断面(南から)



5 金堂20区旧トレンチ SB217基壇版築(北から)



6 金堂20区旧トレンチ SB217基壇版築(東から)



7 金堂16区 SB217基壇版築(北から)



8 金堂16区 SB217基壇版築(東から)



1 金堂地区 作業風景 1



2 金堂地区 作業風景 2



3 金堂地区 作業風景 3



4 金堂地区 作業風景 4



5 史跡発掘ボランティア活動風景



6 武蔵国分寺跡調査研究指導委員会



7 史跡武蔵国分寺跡保存整備委員会



8 発掘現場見学会



1 講堂地区・金堂地区全景（上が北）



2 講堂地区全景（上が北）※平成 20・21 年度合成



1 講堂1区 全景 (南から)



2 講堂1区 調査区南側 (西から)



3 講堂2区 全景 (東から)



4 講堂3-1区 全景 (東から)



5 講堂3-2区 調査区北側 (北から)



6 講堂3-2区 調査区南側 (東から)



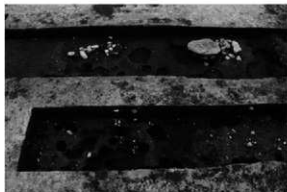
1 講堂2・3-1区 (西から)



2 講堂4区 全景 (東から)



3 講堂4区 調査区東側 (南から)



4 講堂4区 調査区西側 (南から)



1 講堂 2・3-1区 調査区西側（北から）



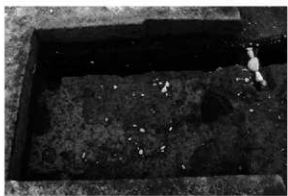
2 講堂 5-1区 調査区南側（南から）



1 講堂 5-1 区 調査区北側 (北から)



2 講堂 5-2 区 全景 (西から)



3 講堂 5-2 区 調査区西側 (南から)



4 講堂 5-2 区 調査区東側 (南から)



5 講堂 5-3 区 全景 (南から)



6 講堂 5-4 区 全景 (東から)



1 講堂6区 全景 (東から)



2 講堂7区 全景 (西から)



3 講堂6区 調査区西側 (西から)



4 講堂7区 調査区東側 (北から)



5 講堂11区 全景 (西から)



6 講堂8区 調査区東側 (南から)



1 講堂8区 調査区西側（西から）



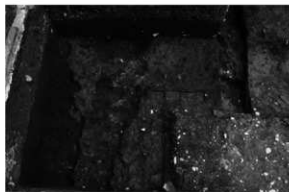
2 講堂9区 全景（西から）



1 講堂12区 全景(西から)



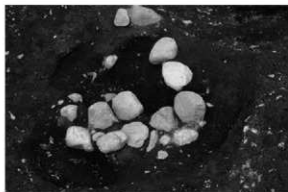
2 講堂13区 全景(東から)



3 講堂15区 全景(北から)



4 講堂14・15区 全景(東から)



1 講堂 3-1 区 SB218B-1-2 礎石据え付け痕跡
(南から)



2 講堂 2 区 SB218B-1-3 礎石据え付け痕跡
(北から)



3 講堂 3-2 区 SB218A-1-1 礎石据え付け痕跡
(西から)



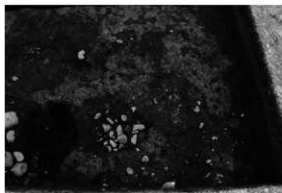
4 講堂 3-1 区 SB218A-1-2・SB218B-2-2 礎石・
礎石据え付け痕跡 (西から)



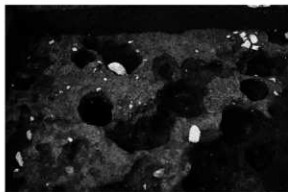
5 講堂 3-1 区 SB218A-1-2・SB218B-2-2 礎石・礎石据え付け痕跡 (南から)



1 講堂 2 区 SB218A-1-3 礎石据え付け痕跡
(北から)



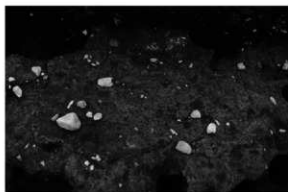
2 講堂 1 区 SB218A-1-5 礎石据え付け痕跡
(西から)



3 講堂 4 区 SB218A-2-1 礎石据え付け痕跡
(南から)



4 講堂 3-1 区 SB218A-2-2 礎石据え付け痕跡
(南から)



5 講堂 4 区 SB218A-3-1 礎石据え付け痕跡
(南から)



6 講堂 3-1 区 SB218A-3-2・SB218B-4-2 礎石据え
付け痕跡 (南から)



7 講堂 3-1 区 SB218A-3-2・SB218B-4-2 礎石据え
付け痕跡 (東から)



8 講堂 4 区 SB218A-4-1 礎石据え付け痕跡
(南から)



1 講堂9区 SB218A-3-4・SB218B-4-4 礎石据え付け痕跡 (西から)



2 講堂9区 SB218B-4-4 礎石据え付け痕跡 (北から)



3 講堂9区 SB218A-3-4 礎石据え付け痕跡 (北から)



4 講堂5-1区 SB218A-6-2 礎石据え付け痕跡 (南から)



5 講堂5-2区 SB218B-8-2 礎石据え付け痕跡 (南から)



1 講堂 5-1 区 SB218B-8-4 礎石 (東から)



2 講堂 5-1 区 SB218B-8-4 礎石 (南から)



1 講堂1区旧トレンチ SB218A 版築土 (北西から)



2 講堂1区旧トレンチ SB218A 版築断面 (北から)



3 講堂2区旧トレンチ SB218A 版築断面 (西から)



4 講堂2区旧トレンチ SB218A 版築・SB218B 版築土層断面 (北から)



5 講堂2区旧トレンチ SB218A 版築・外装・SB218B 版築土層断面 (北から)



1 講堂2区旧トレンチ SB218B 版築断面 (北から)



2 講堂2区旧トレンチ SB218B 版築・基壇外装
西面土層断面 (北から)



3 講堂3-1区旧トレンチ SB218B 西側基壇・掘込地業土層断面 (北西から)



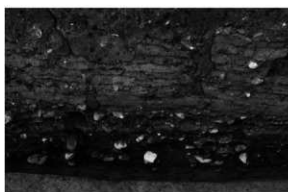
4 講堂3-1区旧トレンチ SB218A 版築断面
(北から)



5 講堂3-1区旧トレンチ SB218A・B土層断面
(北から)



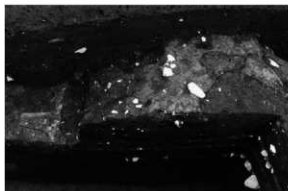
1 講堂 3-1 区旧トレンチ SB218B 版築断面
(北から)



2 講堂 3-1 区旧トレンチ SB218B 版築断面
(北から)



3 講堂 3-2 区旧トレンチ SB218A 版築断面
(西から)



4 講堂 3-2 区旧トレンチ SB218A 版築・SB218B
基壇外装土層断面 (東から)



5 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218A・B 東側基壇・掘込地業土層 (南東から)



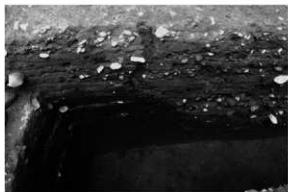
1 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218A 基礎外装土層断面 (東から)



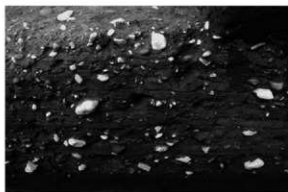
3 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218A 版築断面 (北から)



3 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218A 版築断面 (南から)



4 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218A・B 版築断面 (南から)



5 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218B 版築断面 (南から)



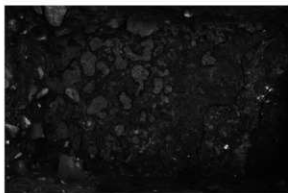
5 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218B 版築断面 (南から)



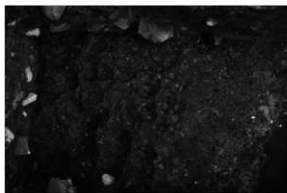
7 講堂 5-3 区B トレンチ 断割り状況 (南東から)



8 講堂 5-3 区A トレンチ SB218B 版築内遺物出土状況 (南から)



1 講堂 5-3 区 A トレンチ SB218B 突き棒痕跡
(西から)



2 講堂 5-3 区 A トレンチ SB218B 突き棒痕跡
(西から)



3 講堂 5-1 区旧トレンチ 2 SB218B 基壇土層断面 (南西から)



4 講堂 3-1 区 SR218 基壇白色粘土層 (南から)



5 講堂 9 区 SB218 基壇白色粘土層 (南から)



1 講堂 5-1・2 区旧トレンチ SB218A 創建基壇外装堂面 (南から)



3 講堂 5-2 区旧トレンチ SB218A 基壇外装東面 (南から)



3 講堂 5-1 区旧トレンチ 1 SB218A 創建基壇外装東面 (西から)



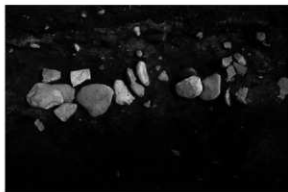
4 講堂 5-1 区旧トレンチ 1 SB218A 創建基壇外装東面 (北から)



5 講堂 5-1 区旧トレンチ 1 SB218A 創建基壇外装東面 (西から)



6 講堂 5-1 区旧トレンチ 1 SB218A 創建基壇外装東面 (西から)



1 講堂 5-1 区旧トレンチ 1 SB218A 創建基壇外装
東面 (西から)



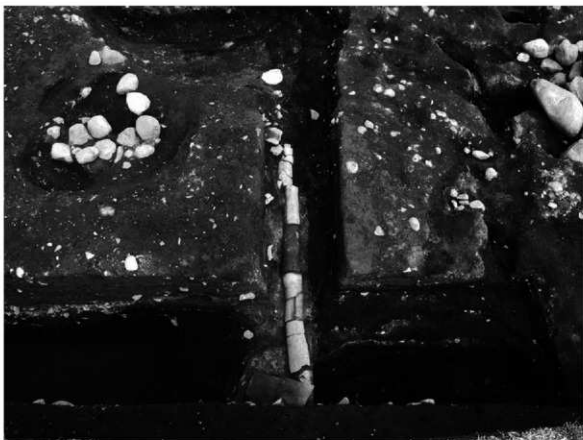
2 講堂 5-1 区旧トレンチ 1 SB218A 創建基壇外装
東面 (西から)



3 講堂 2 区旧トレンチ SB218A 創建基壇外装西面
(北から)



4 講堂 2 区旧トレンチ SB218A 創建基壇外装西面
(南から)



5 講堂 3-1 区旧トレンチ SB218A 創建基壇外装西面 (南から)



1 講堂 3-1 区 SB218A 基礎外装西面 (東から)



2 講堂 3-1 区旧トレンチ SB218A 基礎外装西面土層断面 (北から)



3 講堂 3-1 区 SB218A 創建基礎外装西面土層断面 (西から)



4 講堂 3-1 区 SB218A 創建基礎外装西面土層断面 (北から)



5 講堂 6 区 SB218A 創建基礎外装西面土層断面 (北から)



6 講堂 6 区 SB218A 創建基礎外装西面土層断面 (北から)



7 講堂 5-3 区 B トレンチ SB218A 創建基礎外装東面設置痕跡 (南から)



1 講堂8区Cトレンチ SB218B 再建基壇外装北面（北から）



2 講堂8区Cトレンチ SB218B 再建基壇外装北面（北から）



3 講堂8区Cトレンチ SB218B 再建基壇外装北面（北から）



4 講堂8区 SB218B 再建基壇外装北面確認状況（西から）



5 講堂8区 SB218B 再建基壇外装北面土層断面（西から）



1 講堂8区 SB218B 北面階段部分(西から)



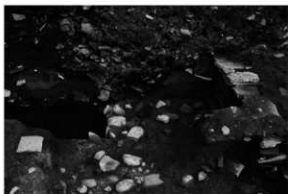
2 講堂8区 SB218B 北面階段部分南側確認状況(南から)



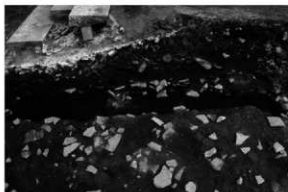
3 講堂8区 SB218B 北面階段部分北側確認状況(南から)



4 講堂8区Cトレンチ SB218B 北階段断割り状況(北西から)



5 講堂8区Cトレンチ SB218B 北面階段部分土層断面南側(西から)



7 講堂8区Cトレンチ SB218B 北面階段部分土層断面北側(西から)



6 講堂8区Cトレンチ 石敷層確認状況(北から)



1 講堂10区 再建基壇外装(東から)



2 講堂10区 SB218A・B創建再建基壇外装南面(上が北)



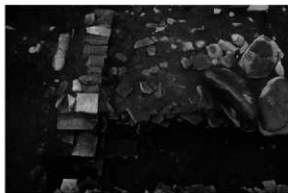
3 講堂10区 南階段部分(西から)



4 講堂10区 南階段部分調査状況(北から)



5 講堂10区Dトレンチ SB218B再建基壇外装(南西から)



1 講堂10区Dトレンチ SB218B階段部分
断割り状況(西から)



2 講堂10区 再建基壇外装(北から)



3 講堂10区Dトレンチ SB218B南階段部分
土層断面(西から)



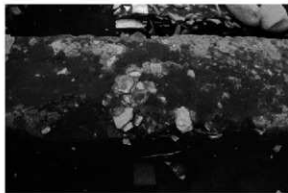
4 講堂10区 SB218B再建基壇外装南面(南から)



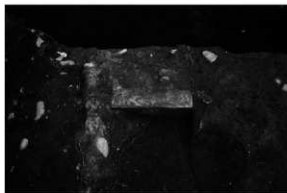
5 講堂10区 SB218B再建基壇外装南面(東から)



6 講堂10区Dトレンチ SB218B再建基壇外装
南面(南から)



7 講堂10区 SB218B再建基壇外装南面 基底部
(西から)



8 講堂3-2区 SB218B再建基壇外装南面
基底部(西から)



1 講堂 5・14・15区 SB218B 再建基壇外装南東隅
塼の抜き痕跡 (東から)



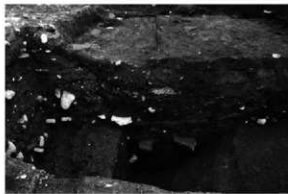
2 講堂 14区 SB218B 再建基壇外装南面 塼の抜き痕跡 (西から)



3 講堂 15区 SB218B 再建基壇外装南東隅
塼の抜き痕跡 (南東から)



4 講堂 5-3区 A・Bトレンチ 再建基壇外装南面
掘り込み (東から)



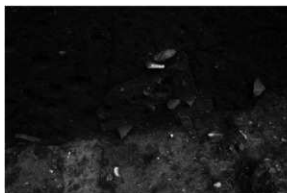
5 講堂 5-3区 Aトレンチ 再建基壇外装南面
土層断面 (西から)



6 講堂 5-3区 Aトレンチ 再建基壇外装南面
土層断面 (西から)



1 講堂5-2区旧トレンチ SB218B 再建基壇外装土層断面 (南から)



2 講堂1区 SB218B 再建基壇外装東面土層断面 (西から)



3 講堂13区 SB218B 再建基壇北東隅 磚の抜取り痕跡 (東から)



4 講堂12区 SB218B 再建基壇外装北辺 磚の抜取り痕跡 (西から)



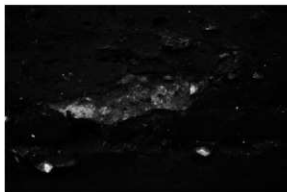
5 講堂12区 SB218B 再建基壇外装北辺 磚の抜取り痕跡 (北から)



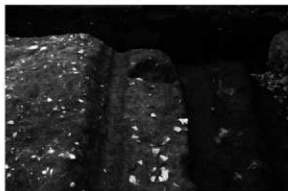
6 講堂5-1区旧トレンチ SB218B 再建基壇縁土層断面 (西から)



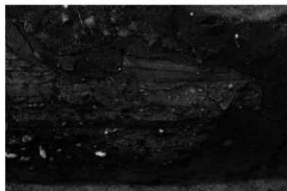
1 講堂7区 SB218B 再建基壇外装西隅(北から)



2 講堂1区旧トレンチ SB218B 再建基壇外装北面土層断面(西から)



3 講堂3-1区 SB218B 再建基壇外装西面壁抜取り痕跡(北から)



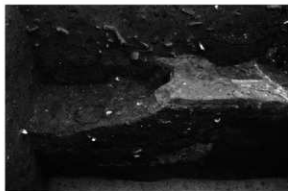
4 講堂3-1区旧トレンチ SB218B 再建基壇外装西面土層断面(北から)



5 講堂2区旧トレンチ SB218B 再建基壇外装西面土層断面(北から)



6 講堂3-2区旧トレンチ SB218A・SX311土層断面(西から)



7 講堂3-2区旧トレンチ SX311土層断面(東から)



8 講堂3-2区旧トレンチ SX311土層断面(東から)



1 講堂2区旧トレンチ SX312不明遺構全景・土層断面（北から）



2 講堂2区 SX312 輪形土製品確認状況
（北東から）



3 講堂2区 SX312 昭和31年の日付入りの石
（北東から）



4 講堂2区 SX312 輪形土製品全景（西から）



5 講堂2区 SX312 輪形土製品 上面（東から）



1 講堂 2 区 SX317 土層断面 (北から)



2 講堂 3-1 区 SX317 土層断面 (北から)



3 講堂 5-2 区 SX318 土層断面 (南から)



4 講堂 5-4 区 SX318 土層断面 (南から)



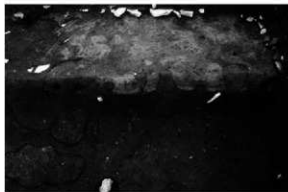
5 講堂 3-2 区 SX319 (北から)



6 講堂 3-2 区 SX319 土層断面 (東から)



7 講堂 10 区 SX352 確認状況 (北西から)



8 講堂 10 区 SX352 土層断面 (西から)



1 鐘楼地区全景 (上が北)



2 鐘楼地区全景 (南から)



1 鐘楼 SB22 鐘楼 1-1 礎石据え付け痕跡 (西から)



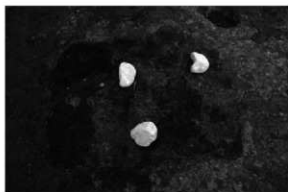
2 鐘楼 SB22 鐘楼 1-2 礎石据え付け痕跡 (南から)



3 鐘楼 SB22 鐘楼 1-4 礎石据え付け痕跡 (北から)



4 鐘楼 SB22 鐘楼 2-1 礎石据え付け痕跡 (東から)



5 鐘楼 SB22 鐘楼 2-2 礎石据え付け痕跡 (南から)



6 鐘楼 SB22 鐘楼 2-3 礎石据え付け痕跡 (南から)



7 鐘楼 SB22 鐘楼 3-1 礎石据え付け痕跡 (西から)



8 鐘楼 SB22 鐘楼 3-2 礎石据え付け痕跡 (東から)



1 鐘楼 SB22 鐘楼 3-3 礎石据え付け痕跡 (東から)



2 鐘楼 SB220 鐘楼 3-3 礎石据え付け痕跡 (西から)



3 鐘楼 SB22 鐘楼 3-4 礎石据え付け痕跡 (東から)



4 鐘楼 SB220 土層断面 Gトレンチ東壁 (西から)



5 鐘楼 Aトレンチ (南東から)



6 鐘楼 SB220 土層断面 Aトレンチ北壁 (南から)



7 鐘楼 SB220・石列土層断面 Aトレンチ 東壁 ((西から)



1 鐘楼 SB220・石列土層断面 Aトレンチ西壁
(東から)



2 鐘楼 SB220 土層断面 Eトレンチ北壁(南から)



3 鐘楼 SB220 Bトレンチ全景(東から)



4 鐘楼 SB220 土層断面 Bトレンチ北壁(南から)



5 鐘楼 SB220 土層断面 Cトレンチ南壁(北から)



6 鐘楼 SB220 土層断面 Dトレンチ西壁(東から)



1 鐘楼 SB220 土層断面 Fトレンチ南壁
(北から)



2 鐘楼 SB220 基壇南面石列・瓦列 (東から)



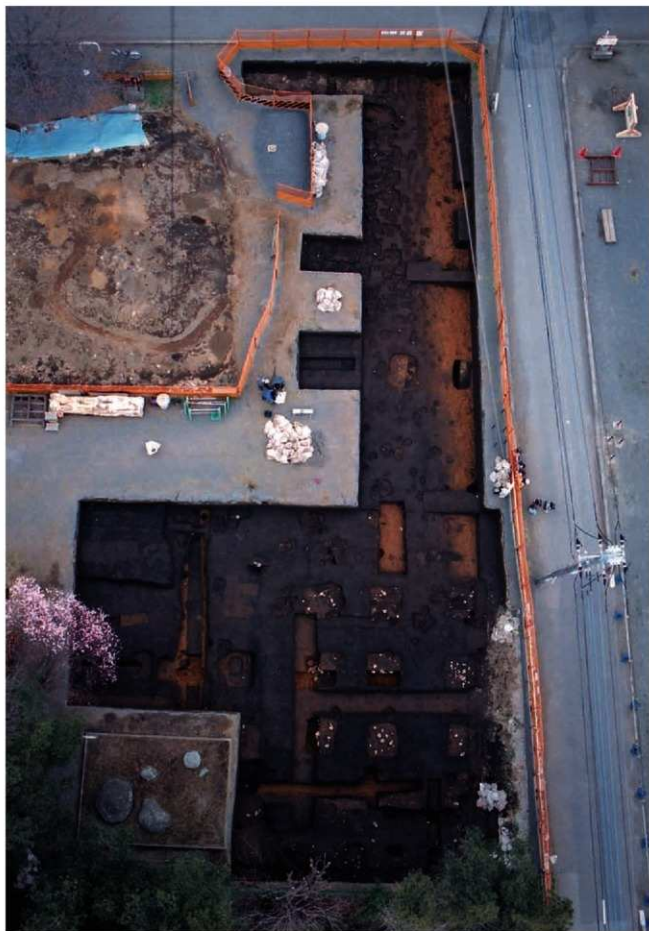
3 鐘楼 SB220 基壇南面石列・瓦列 (南から)



4 鐘楼 SB220 基壇南面石列・瓦列 (南から)



5 経蔵地区 全景 (東から)



1 中門 中門・金堂間 全景 (上が北)



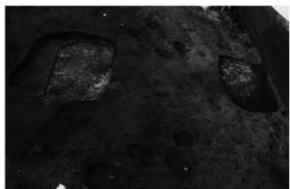
1 中門・金堂間 全景 (上が北)



2 中門・金堂間 遺構確認状況 (南東から)



3 中門・金堂間 SX307 (西から)



4 中門・金堂間 SX302・303 (南から)



5 中門・金堂間 SX302 土層断面 (東から)



6 中門・金堂間東 全景 (西から)



1 金堂・講堂間 3区 SF12 全景 (上が北)



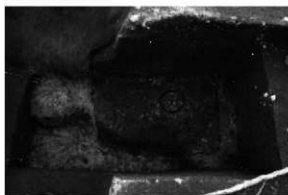
2 金堂・講堂間 3区 SF12 土層断面 (北から)



1 金堂・講堂間 6区 全景（西から）



2 金堂・講堂間 6区 SX324・SX328（北から）



3 金堂・講堂間 6区 SX325（北から）



4 金堂・講堂間 6区 SX326（西から）



5 金堂・講堂間 6区 SX327（北西から）



1 金堂・講堂間6区 SF12 (南から)



2 金堂・講堂間4区 全景 (西から)



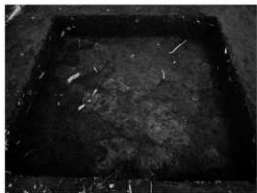
3 金堂・講堂間5区 全景 (東から)



4 金堂・講堂間1区 西側全景 (南から)



5 金堂・講堂間1区 西側全景 (南から)



6 金堂・講堂間2区 西側全景 (南から)



7 金堂・講堂間2区 東側全景 (南から)



1 中門 平成17・18年度調査区全景(下が北)



2 中門 市道南3号線下調査(迂回道路設置) 全景(北から)



3 中門 平成19年度調査区全景(上が北)



1 中門 市道南3号線上調査（北から）



2 中門 平成19年度調査（北東から）



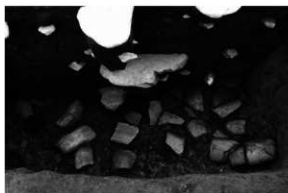
1 中門 調査区西側 (北東から)



2 中門 SB216 中門前面部分 (東から)



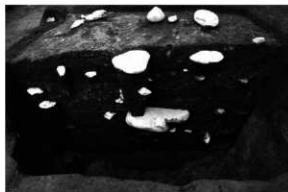
1 中門 SB216 中門 1-1 壺地業 確認状況(西から)



2 中門 SB216 中門 1-1 壺地業 瓦敷き層(西から)



3 中門 SB216 中門 1-1 壺地業 断割り完掘(西から)



4 中門 SB216 中門 1-1 壺地業 土層断面(西から)



5 中門 SB216 中門 1-2 壺地業 確認状況(西から)



6 中門 SB216 中門 1-2 壺地業 石敷き1層目(西から)



7 中門 SB216 中門 1-2 壺地業 石敷き1層目(南から)



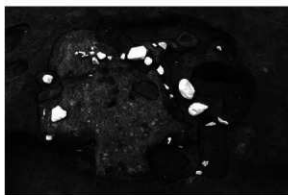
8 中門 SB216 中門 1-2 壺地業 石敷き1層目(西から)



1 中門 SB216 中門 1-2 壺地業 瓦敷き 2 層目 (西から)



2 中門 SB216 中門 1-2 壺地業 土層断面 (西から)



3 中門 SB216 中門 1-3 壺地業 (南から)



4 中門 SB216 中門 2-1 壺地業 (東から)



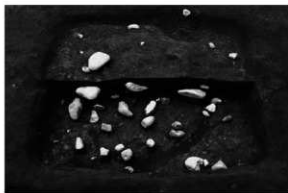
5 中門 SB216 中門 2-2 壺地業 確認状況 (北から)



1 中門 SB216 中門 2-2 壺地業 土層断面 (南から)



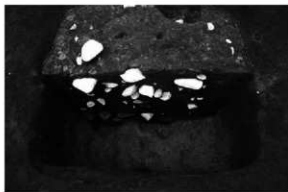
2 中門 SB216 中門 2-2 壺地業 瓦敷き1層目 (南から)



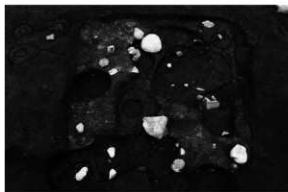
1 中門 SB216 中門 2-2 壺地業 露出土状況 (南から)



2 中門 SB216 中門 2-2 壺地業 瓦敷き 2 層目 (南から)



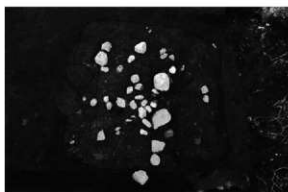
3 中門 SB216 中門 2-2 壺地業 断割り完掘 (南から)



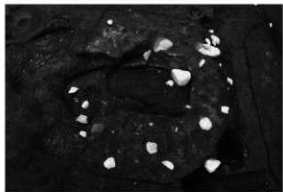
4 中門 SB216 中門 2-3 壺地業 (南から)



5 中門 SB216 中門 3-1 壺地業 (東から)



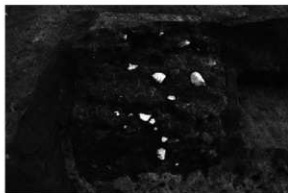
6 中門 SB216 中門 3-2 壺地業 (南から)



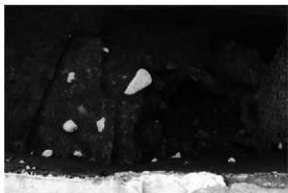
7 中門 SB216 中門 3-3 壺地業 (南から)



8 中門 SB216 中門 4-1 壺地業 (西から)



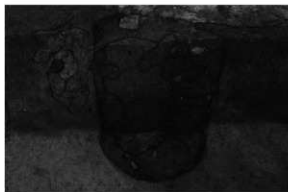
1 中門 SB216 中門 4-2 壺地業 (西から)



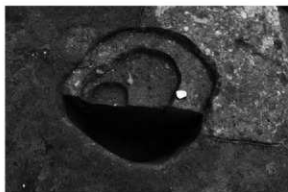
2 中門 SB216 中門 4-3 壺地業 (北から)



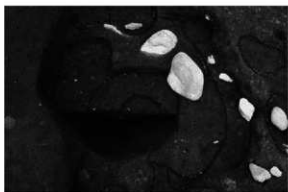
3 中門 SB216 中門 4-3 壺地業 (北から)



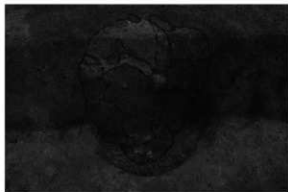
4 中門 SB232 中門 1-1 土層断面 (北から)



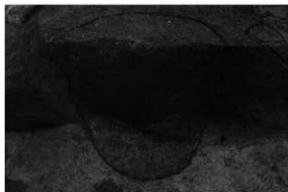
5 中門 SB232 中門 1-2 (北から)



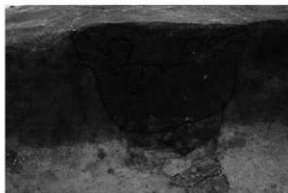
6 中門 SB232 中門 1-3 (北から)



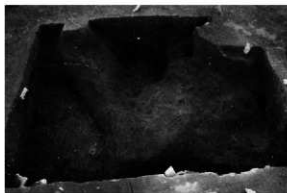
7 中門 SB232 中門 2-1 土層断面 (北から)



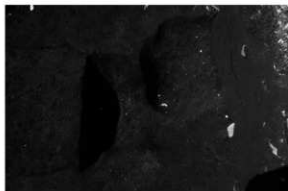
8 中門 SB232 中門 3-1 土層断面 (北から)



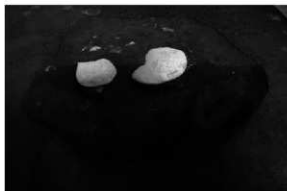
1 中門 SD397 北辺 旧調査断割り東壁 (西から)



2 中門 SD397 南西隅 B トレンチ (東から)



3 中門 SD397 北東隅確認状況 (東から)



4 中門 SK3335 土層断面 (南から)



5 中門 SX292 確認状況 (東から)



6 中門 SX292 土層断面 SD197 確認状況 (北から)



7 中門 SD410 全景 (北から)



8 中門 SD410 土層断面 (南から)



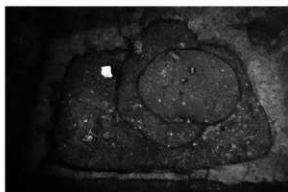
1 区画南辺 調査区全景（北から）



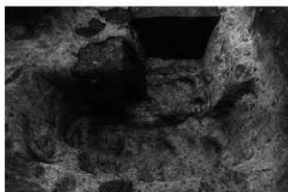
2 区画南辺 SX249・SD194・197・396 土層断面 中央旧トレンチ西壁（東から）



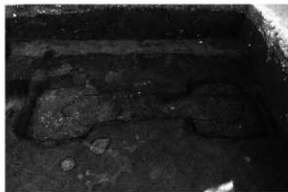
1 中門 SA10-1～4 確認状況（東から）



2 中門 SA10-1 確認状況（東から）



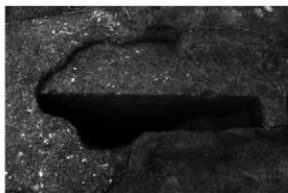
3 中門 SA10-2 確認状況（南から）



4 中門 SA10-3・4 確認状況（北から）



5 中門 SA10-3・4 断割り状況（東から）



1 中門 SA10-3 柱抜取り穴 土層断面 (北から)



1 中門 SA10-4 柱抜取り穴 土層断面 (北から)



3 区画南辺 区画塀・溝等検出状況 (西から)



4 区画南辺 区画塀・溝等検出状況 (東から)



5 中門 SA33-1・SD398・SX249 土層断面
C トレンチ南壁 (北から)



1 区画南辺 SA33-10 ~ 13・SX249 (西から)



2 中門 SA33-1 SX249 土層断面 (北から)



3 区画南辺 SA33-2・3 (南から)



4 区画南辺 SA33-3 (西から)



5 区画南辺 SA33 掘立柱No. 4 柱穴 SX249 築地塀 断面



6 区画南辺 SA33-5 SX249 土層断面 (北から)



7 区画南辺 SA33-10 SX249 土層断面 (北から)



1 区画南辺 SA33-11 (北から)



2 区画南辺 SA33-11・SX249 土層断面 (西から)



3 区画南辺 SA33-12・SX249 土層断面 (西から)



4 区画南辺 SA33-3 SX249 土層断面 Dトレンチ (西から)



5 区画南辺 SX249 (SA33-3 上層) Aトレンチ (西から)



6 区画南辺 SX249 土層断面 Cトレンチ北壁 (南から)



7 区画南辺 SX249・SD396 Cトレンチ 東壁 (西から)



8 区画南辺 SX249 遺物出土状況 Cトレンチ (東から)



1 区画南辺 SX249・SD396 土層断面 旧トレンチ断面(東から)



2 区画南辺 SX249・SD396 土層断面
中央旧トレンチ(東から)



3 区画南辺 SA33-11・SX249・SD396 土層断面
東側旧トレンチ(東から)



4 区画南辺 SD194・SX249 A トレンチ(西から)



5 中門 SD194・SK3439 土層断面(西から)



1 区画南辺 SD194 中央旧トレンチ (西から)



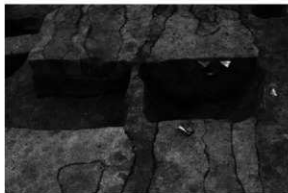
2 区画南辺 SD197 東側旧トレンチ西壁(東から)



3 区画南辺 SD197 中央旧トレンチ西壁(東から)



4 中門 SD197 土層断面 (西から)



5 区画南辺 SD396 土層断面 (東から)



1 中門 SD398 (西から)



2 区画南辺 SD197・SK3283 A トレンチ西壁 (東から)



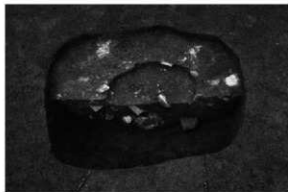
3 区画南辺 SD197・SK3283・3273・3274 B トレンチ全景 (南から)



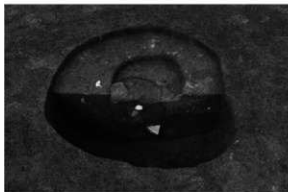
4 区画南辺 SK3273 土層断面 B トレンチ西壁 (東から)



5 区画南辺 SD3274 土層断面 B トレンチ西壁 (東から)



6 区画南辺 SA32-2 (南から)



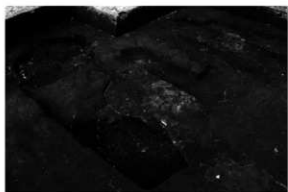
7 区画南辺 SA32-3 (南から)



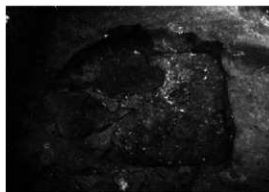
1 区画南東 1区全景 (南から)



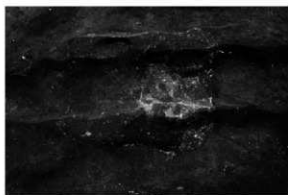
2 区画南東 2区全景 (東から)



3 区画南東 SA33-29・30・SA36-1・2 確認状況 (南東から)



4 区画南東 SA33-29 確認状況 (南から)



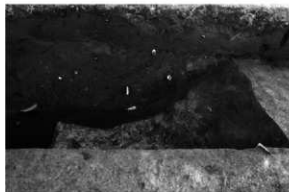
5 区画南東 SA36-2 確認状況 (南から)



6 区画南東 SA36-10 確認状況 (南から)



7 区画南東 SD425 土層断面東側 (北から)



8 区画南東 SD425 土層断面西側 (北から)



1 区画南東 SD426 (南から)



2 区画南東 SD197 土層断面 (東から)



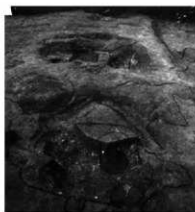
3 区画南東 SD194 土層断面南側 (東から)



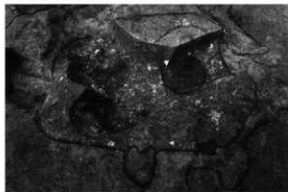
4 区画南東1区 SD194 土層断面北側 (東から)



5 区画南西 調査区全景 (北から)



6 区画南西 SA35-8 ~ 10 (南から)



7 区画南西 SA35-8 (南から)



8 区画南西 SD259 土層断面 (南から)



1 区画北西 2 区全景 (北から)



2 区画北西 1 区全景 (西から)



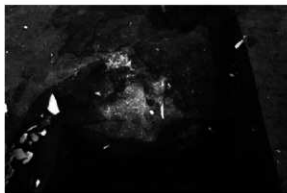
4 区画北西 SA12・34-1 (北から)



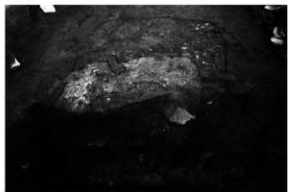
3 区画北西 SA12・SX336 (東から)



1 区画北西 SA34-2 (西から)



2 区画北西 SA34-3 (西から)



3 区画北西 SA34-4 (西から)



4 区画北西 SD423・424 (北東から)



5 区画北西 SD423 土層断面 (南から)



6 区画北西 SD423 土層断面 (北から)



7 区画北西 SX337 (南から)



8 区画北西 SX336 全景 (南から)



1 区画北西 SX336 土層断面 (東から)



2 区画北西 SX336 遺物出土状況 (東から)



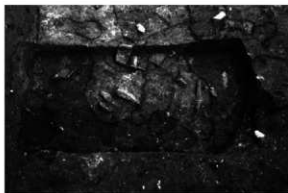
3 区画北西 SX336 全景 (南西から)



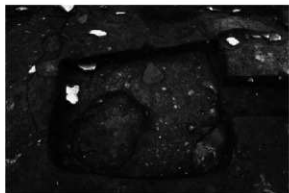
4 区画北西 SX336 土層断面 (南から)



5 区画北辺 調査区全景 (西から)



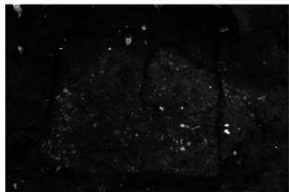
1 区画北辺 SA12-28 (西から)



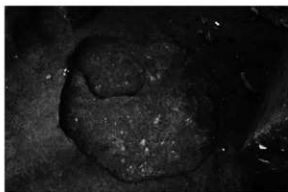
2 区画北辺 SA12-29 (南から)



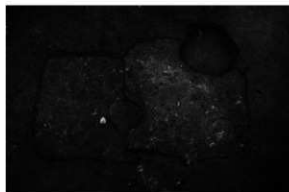
3 区画北辺 SA12-30 (南から)



4 区画北辺 SA12-31 (北から)



5 区画北辺 SX322 (南から)



6 区画北辺 SX323 (南から)



7 区画北辺 SD415 (西から)



8 区画北辺 SX333 (南から)



1 塔1 調査区全景 (左が北)



2 塔1 SB223 全景 (西から)



3 塔1 SB223 版築 旧トレンチA 東壁 (西から)



4 塔1 SB223 版築 旧トレンチA 東壁



5 塔1 SB223 基壇・掘込地栗版築
旧トレンチA 南壁 (北から)



1 塔1 SB223 石敷 (南から)



2 塔1 SB223 石敷き西端補修粘土層 (北から)



3 塔1 SB223 旧トレンチ B 北壁 (南から)



4 塔1 SB223 補修粘土層中の焼損瓦



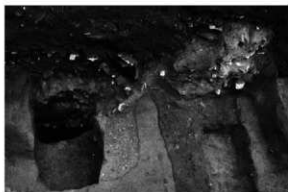
5 塔1 SB223 補修粘土層中の瓦 (北から)



1 塔1 SX310・SB223 旧トレンチA北壁(南から)



2 塔1 SB223 新規掘込地業 旧トレンチA北壁



3 塔1 SX308・SD413 (北から)



4 塔1 調査風景 (南西から)



5 塔1・塔2 全景(南から)



1 塔2 調査区全景 (南から)



2 塔2 SB224 全景 (西から)



3 塔2 SB224 全景 (東から)



1 塔2 SB224 版築 a トレンチ全景 (南から)



2 塔2 SB224 版築 a トレンチ北壁上層



3 塔2 SB224 版築 a トレンチ北壁中層



4 塔2 SB224 版築 a トレンチ北壁下層



1 塔2 SB224 版築 a トレンチ西壁 (東から)



2 塔2 SB224 A トレンチ 全景 (北西から)



3 塔2 SB224 版築 A トレンチ東壁 (西から)



4 塔2 SB224 版築 B トレンチ 西壁 (東から)



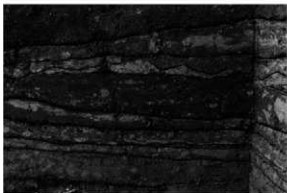
5 塔2 SB224 版築突き棒痕跡 B トレンチ東壁 (西から)



6 塔2 SB224 版築 C トレンチ南壁 (北から)



7 塔2 SB224 版築 E トレンチ西壁 (東から)



8 塔2 SB224 版築突き棒痕跡 E トレンチ西 (東から)



1 塔2 SB224 版築 Cトレンチ西壁(東から)



2 塔2 SB224 突き棒痕跡 Dトレンチ(東から)



1 塔2 SB224 版築 Dトレンチ南壁(北から)



2 塔2 SB224 Dトレンチ遺物出土状況(西から)



3 塔2 SB224 版築 Fトレンチ(南東から)



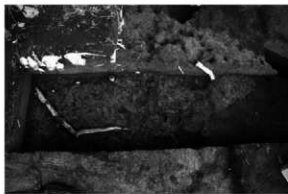
4 塔2 SB224 版築 Fトレンチ北壁(南から)



5 塔2 SB224 Gトレンチ西壁(東から)



6 塔2 SB224 Gトレンチ東壁南側(西から)



7 塔2 SB224 突き棒痕跡 Gトレンチ(西から)



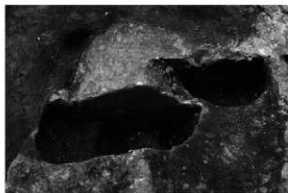
8 塔2 SB224 突き棒痕跡 Gトレンチ(西から)



1 塔 2 SB224 全景 (南から)



2 塔 2 SX285 全景 (南から)



1 塔2 SK3254 土層断面 (東から)



2 塔2 SK3255・3266 土層断面 (南から)



3 塔2 SK3256 土層断面 (北から)



4 塔2 SK3258 断割り状況 (東から)



5 塔2 SK3276 (南から)



6 塔2 SK3278 (南から)



7 塔2 SK3279 土層断面 (西から)



8 塔2 SK3277 土層断面 (東から)



1 塔2 SD3319 (東から)



2 塔2 SX269 (西から)



3 塔2 SK3260・SX282 (南から)



4 塔2 SX282 土層断面 (北から)



5 塔2 調査区北東部 SK3264・SK3281・SX268 (東から)



1 塔 2 SK3265 (南東から)



2 塔 2 SK3265 土層断面 (東から)



3 塔 2 SK3263 (北から)



4 塔 2 SK3263 土層断面 (西から)



5 塔 2 SK3279・SK3268 土層断面 (西から)



6 塔 2 SK3281・SK3268・SK3270 断割状況 (東から)



7 塔 2 SK3264 (北から)



8 塔 2 SK3264 遺物出土状況



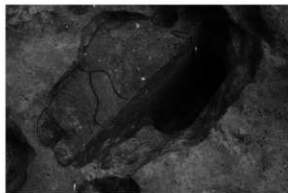
1 塔2 SX268 断割り中央 東壁 (西から)



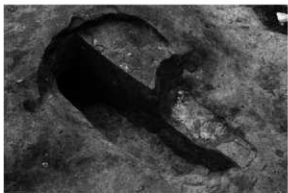
2 塔2 SX268 不明遺構 西トレンチ 東壁



3 塔2 SX283・284 幢竿遺構 全景 (東から)



4 塔2 SX284 幢竿遺構 (北西から)



5 塔2 SX283 幢竿遺構 (南西から)



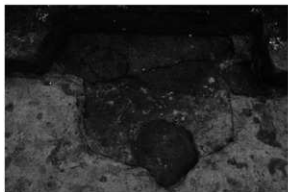
1 塔2周辺 東トレンチ全景 (東から)



2 塔2周辺 西トレンチ全景 (西から)



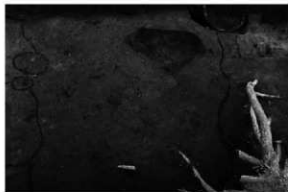
3 塔2周辺 西トレンチ拡張部 (北から)



4 塔2周辺 西トレンチ SX289・290 (南から)



5 塔2周辺 南トレンチ全景 (南から)



6 塔2周辺 南トレンチ SD23溝 (西から)



7 塔2周辺 北トレンチ南側 (北から)



1 塔2周辺 北トレンチ北側 (南から)



2 塔2 予備調査区全景 (北から)



3 塔2周辺 予備調査区全景 (北から)



4 塔2 調査風景 (南から)



1 南門地区全景（下が北）



2 南門全景（南から）



1 南門礎石据え付け掘り方 1-1 確認状況 (南から)



2 南門礎石据え付け掘り方 1-2 確認状況 (南から)



3 南門礎石据え付け掘り方 1-2 断割状況 (北から)



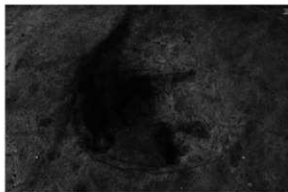
4 南門礎石据え付け掘り方 2-1 確認状況 (南から)



5 南門礎石据え付け掘り方 2-1 断割状況 (北から)



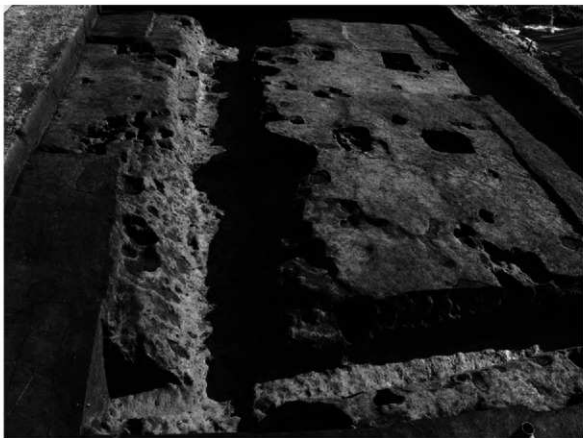
6 南門礎石据え付け掘り方 2-1 土層断面 (北から)



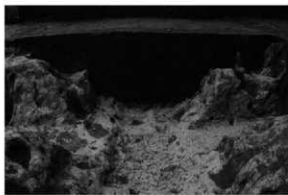
7 南門礎石据え付け掘り方確認状況 2-2 (南から)



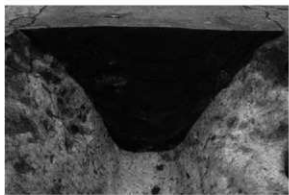
8 南門礎石据え付け掘り方 2-2 断割状況 (東から)



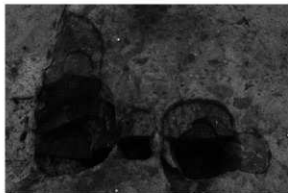
1 SD23 溝 (西から)



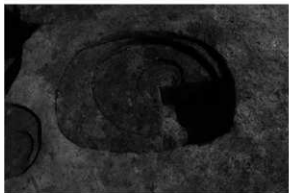
2 SD23 溝 土層断面 (東から)



3 SD410 溝 土層断面 (北から)



4 SX316 橋脚遺構 南西柱穴 (西から)



5 SX316 橋脚遺構 南東柱穴 (西から)



1 南門地区南方1区 調査区全景(南から)



2 南門地区南方2区 調査区全景(東から)



3 伽藍地外 塔地区南方 調査区全景(北から)



1 昭和31年度金堂・講堂調査 (南から)



2 昭和31年度金堂調査 (北から)



3 昭和31年度金堂調査 北面階段 (北から)



4 昭和40年度金堂調査 金堂基壇東面 (南から)



5 昭和40年度金堂調査 金堂7-4礎石 (南から)



6 昭和40年度金堂調査 金堂8-2礎石 (東から)



7 昭和40年度金堂調査 金堂8-3礎石 (南西から)



8 昭和31年度講堂調査 (南から)



1 昭和 40 年代講堂調査 (南から)



3 昭和 40 年代鐘樓調査 (南から)



4 昭和 40 年度中門調査 (西から)



6 昭和 40 年度塔 1 調査 現地見学会



2 昭和 40 年代講堂調査 創建講堂瓦積基壇外装 (北から)



5 昭和 39 年度塔 1 調査 塔 1 基壇南面 (南東から)



7 昭和 33 年度南門調査 (南西から)

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせき わさしこくぶんそうじあとはくつちょうさほうこくしょ Ⅰ								
書名	国指定史跡 武蔵国分寺僧寺跡発掘調査報告書 Ⅰ								
副書名	一史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査―〔遺構編〕								
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	中道 誠								
編集機関	国分寺市教育委員会								
所在地	〒185-0023 東京都国分寺西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL. 042-300-0073								
発行年月日	2016年3月31日								
規格／部数	A4版横組1段 48文字×40行 294頁(うち図版103頁)／300部								
資料の保存 問い合わせ先	国分寺市教育委員会 教育部 ふるさと文化財課 〒185-0023 東京都国分寺西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL. 042-300-0073 FAX 042-300-0091 E-mail bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号	○ F 跡	○ F 跡				
武蔵国分寺跡 第570次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 30" ～ 35° 41' 24"	139° 28' 19" ～ 139° 28' 20"	20031211 ～ 20040319	177.40	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第578次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 29" ～ 35° 41' 29"	139° 28' 18" ～ 139° 28' 24"	20040601 ～ 20070315	2,680.56	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第603次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 29" ～ 35° 41' 29"	139° 28' 18" ～ 139° 28' 26"	20050822 ～ 20070331	1,193.66	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第625次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 30" ～ 35° 41' 27"	139° 28' 18" ～ 139° 28' 18"	20070719 ～ 20080331	628.56	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第642次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33" ～ 35° 41' 27"	139° 28' 17" ～ 139° 28' 18"	20080613 ～ 20090331	659.04	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第650次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33" ～ 35° 41' 30"	139° 28' 18" ～ 139° 28' 17"	20090515 ～ 20100331	675.60	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第655次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 32" ～ 35° 41' 30"	139° 28' 19" ～ 139° 28' 17"	20100507 ～ 20110331	749.39	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第672次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33" ～ 35° 41' 31"	139° 28' 17" ～ 139° 28' 18"	20110715 ～ 20120330	505.17	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	
武蔵国分寺跡 第680次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33" ～ 35° 41' 30"	139° 28' 14" ～ 139° 28' 21"	20120614 ～ 20130228	313.60	史跡整備に伴う事前遺構確認調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵国分寺跡 第570次調査	寺院跡	古代	掘込地蔵(塔2)、中樞部 区画施設・区画溝	瓦、須恵器、土師器	・南門南方、塔1南方、塔1・ 塔2間、塔2、中樞部区画施設 南辺(中門東)の調査
武蔵国分寺跡 第578次調査	寺院跡	古代	掘込柱塼・築地塼・区画溝 (中樞部区画施設南辺)、塔 2、轆轤遺構(塔2東・西側)	瓦、須恵器、土師器、鉄 滓	・中樞部区画施設南辺(中 門東)、塔2全体の調査 ・中樞部区画施設南辺(中門 東)は570次調査の継続及び 調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第603次調査	寺院跡	古代	中門、掘込柱塼・築地塼・ 区画溝(中樞部区画施設南 辺)、区画溝(伽藍地南辺)	瓦、須恵器、土師器	・中門全体(市道南3号線下 含む)、塔2全体及び周辺の 調査
武蔵国分寺跡 第625次調査	寺院跡	古代	塔1、中門、轆轤遺構(塔 1西、金堂前面、金堂・中 門間)、	瓦、埴、須恵器、土師器	・塔1西側、中門全体、 金堂前面、南門の調査 ・塔1周辺西、中門全体は 603次調査の継続及び調査区 の拡張
武蔵国分寺跡 第642次調査	寺院跡	古代	南門、伽藍地区画溝(伽藍 地南辺)、橋跡、講堂、掘 込柱塼・区画溝(中樞部区 画施設北辺)	瓦、埴、須恵器、土師器、 輪形土製品	・南門、金堂前面東、講堂、 中樞部区画施設北辺の調査 ・南門は625次調査の継続及 び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第650次調査	寺院跡	古代	講堂、金堂	瓦、埴、須恵器、土師器、 宋銭、青銅製品	・講堂全体、金堂の調査 ・講堂は642次調査の継続及 び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第655次調査	寺院跡	古代	金堂、土取り遺構	瓦、埴、須恵器、土師器、 青銅製品	・金堂全体、金堂・講 堂堂間、鐘樓の調査 ・金堂は650次調査の継続及 び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第672次調査	寺院跡	古代	金堂、堂間通路、轆轤遺構 (講堂前面)、土取り遺構(講 堂前面)、整地層(経藏東)、 掘込柱塼・築地塼・区画溝 (中樞部区画施設北辺)	瓦、埴、須恵器、土師器、 銭貨、炭化物、緑釉陶器、 施釉陶器	・鐘樓全体、金堂・講 堂堂間(経藏含む)、中樞 部区画施設北辺の調査 ・鐘樓は655次調査の継続及 び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第680次調査	寺院跡	古代	金堂、掘込柱塼(中樞部区 画施設北西・南西・南東)、 築地塼(中樞部区画施設北 西)、区画溝(中樞部区画 施設北西・南西・南東)	瓦、埴、須恵器、土師器、 炭化物	・金堂(市道南2号線下 含む)、中樞部区画施設 北西・南西・南東の調査 ・中樞部区画施設北西は322 次調査区の拡張

<p>要約</p>	<p>武蔵国分寺は、武蔵国府より北に2kmに位置し、背面に国分寺崖線、東には野川をたまたた自然豊かな場所に造地されている。</p> <p>国分寺の造営は、8世紀中葉に塔を中心とした伽藍配置により開始される。古代の官道である東山道武蔵路を挟んで東に僧寺、西に尼寺が配置され、8世紀後半には主要堂宇が完成していたと考えられている。その後は、9世紀中葉から後半にかけて七重塔の再建を契機とした僧・尼寺全体の整備・拡充が図られ、武蔵国分寺の各期において最も寺観が整った最盛期を迎える。以降は大規模な建て替えも見られず、部分的な修理や溝の掘り返し等を行いつつながら国分寺の機能を保っていたが、10世紀中葉には寺院地区画溝の埋没の開始とともに寺院地内への堅穴住居の侵入が急増し、遺物の出土量の減少も認められることから、しだいに寺の機能が弱まっていったと窺える。11世紀末には講堂の基礎が壊されることから、この時期が伽藍廃絶の画期と捉えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・塔1は創建後と同じ場所で建て替えられ、再建構築土中からは被熱した瓦が認められた。基礎は乱石積基礎外装で、掘込地業を施している。 ・塔1の西方に位置する塔2は、掘込地業と整地層が確認されている。9世紀中葉の整備・拡充期に基礎地業を行っていることが判明したが、瓦の出土量も少なく、塔が建立されたか否かは断定しがたい。 ・金堂は、蓋地業を施した礎石建て建物で、その下部は総地業を行うなど堅牢な構造であった。基礎外装は乱石積基礎で、南北に階段が取りついている。整備・拡張期の大規模な建て替えはなかったが、基礎周辺は補修されて可能性がある。 ・講堂は、創建当初の建物より、整備・拡張期に金堂とほぼ同規模に大きく建て替えられた。基礎には創建・再建ともに瓦積基礎外装を設けており、南北ともに階段が取りついていた。基礎は11世紀末の遺構により壊されている。 ・金堂・講堂堂間には、金堂北面階段とほぼ同じ幅の堂間通路が認められた。金堂と講堂とのとりつきは明らかではないが、金堂北面階段の設置に伴う時期とみられる。 ・鐘楼は総地業を施した礎石建て建物である。当初の基礎外装明らかではないものの、後に河原石や瓦で基礎南面を補修を行っている。 ・経蔵は建物周辺の整地層が確認されている。鐘楼と同規模で、掘込地業を行っている可能性が想定される。 ・中門は創建時の蓋地業を施した礎石建て建物から掘立柱建物へ建て替えている。中門からは中樞部区画溝が左右に広がっている。 ・南門は礎石建ての棟門で、基礎などは未確認である。南門のすぐ北を横切る伽藍地区画溝には南門から中門へと続く場所に木橋が架けられていた。 ・区画施設は塀と溝で構成されており、塀は中門にとりつき、東西僧坊の外側を通り塔以外の主要建物を圍繞している。他の施設と同様に創建時の掘立柱塀を部分的に建て替えた後、さらに築地塀へと作り替えられている。塀に伴う区画溝は大溝が1条、小溝が1条セットで確認される地点もあるが、地点によりその様相が異なるため、双方とも同時期に中樞部を圍繞していたかは明らかではない。南辺では塀の内側にも築地塀に伴う小規模な溝が認められた。 ・その他、塔1西側、塔2東側、金堂前面、講堂前面、金堂・中門間では、轆轤遺構が認められた。
-----------	--

国指定史跡 武蔵国分僧寺発掘調査報告書 I

－史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査－

〔遺構編〕

発行日 平成 28 (2016) 年 3 月 31 日
編 集 国分寺市教育委員会
発 行 国分寺市教育委員会
〒 185-0023 東京都国分寺市西元町 1-13-10
(武蔵国分寺跡資料館内 ふるさと文化財課)
印 刷 株式会社アトミ

©Kokubunji City Board of Education 2016. Printed in Japan

表 紙	レザックつむぎ	46 判	210kg
見 返し	上質紙	46 判	90kg
本文・図面	上質紙	46 判	90kg
図 面	マットコート	46 判	110kg

令和 4 年(2022) 8 月 16 日 デジタル版作成